THE CENTRAL REVIEW

中央公論

秋期大附録號

第廿五年 第十號

明治四十三年十月一日發行（毎月一日一回發行）

關東大賣捌所

東京神田表神保町 東京堂
仝 神田裏神保町 上田屋
仝 京橋尾張町 東海堂
仝 京橋元數寄屋町 北隆館
仝 本郷本富士町 盛春堂
仝 京橋西紺屋町 良明堂
仝 日本橋本石町 至誠堂

關西大賣捌所

大阪東梅田町 盛文館
仝 京町堀 太華堂
京都佛光寺 東枝書肆

○壹冊定價 金貳拾錢外ニ郵稅金壹錢五厘（海外郵稅拾錢但淸國を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓七拾貳錢
十二冊	金貳圓參拾錢	金參圓參拾四錢
以上郵稅共		

▲但し特價號は規定以外に代金を申受くべし▼

送金注意

一郵便爲替にて御送金の場合は本郷西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京東片町局と指定せられなば途中盜取せらるゝの虞なし
一弊社振替貯金口座は東京三十四番なりこれにより御送金の方は登記料壹錢を加へらるべし然らされば御送金の內より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし
一郵券代用は必ず壹割增に送らるべし
一前金切の節は帶封に米印いたすべし次の前金を送られざれば其號限にて發送を止むべし
一領收證を出さす望まるゝ向は返信料を添へらるべし

明治四十三年九月廿七日印刷納本
明治四十三年十月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人 麻田駒之助
印刷人 大野耕一

發行所 東京市本郷區駒込西片町十番地 反省社
振替口座東京三十四番 電話下谷九一九 電信略號ハンセイ

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍第一工場

早稻田大學

政治經濟科講義

- 政治原論　法學博士　浮田和民
- 帝國憲法　法學博士　副島義一
- 行政法總論　法學博士　清水澄
- 同各論　法學博士　清水澄
- 比較市政論　講師　安部磯雄
- 自治與新論　法學博士　井上友一
- 社會政策　法學博士　桑田熊藏
- 植民論　講師　石黑定美
- 經濟原論　法學博士　井上辰九郎

- 銀行論　ドクトル、オフ、フイロソフイー　服部文四郎
- 貨幣論　法學博士　河津暹
- 財政學　マスター、オフ、アーツ　田中穗積
- 豫算論　マスター、オフ、アーツ　田中穗積
- 公債論　マスター、オフ、アーツ　田中穗積
- 會計論　法學士　工藤重義
- 交通論　ドクトル、オフ、フイロソフイー　伊藤重治郎
- 關稅論　商學士　小林行昌
- 社會學　文學博士　遠藤隆吉

- 法學通論　法學士　三潴信三
- 刑法要論　法學士　牧野英一
- 民法要論　法學士　飯島喬平
- 商法要論　法學士　柳川勝二
- 平時國際公法　法學博士　中村進午
- 戰時國際公法　法學博士　中村進午
- 簿記學　商學士　松村吉則
- 其他海外時事評論、講義錄研究法、辭解
- 各種試驗問題擬答等

第一號　十月初旬發行

法律科講義

- 法學通論　法學士　三潴信三
- 帝國憲法　法學博士　副島義一
- 行政法總論　法學博士　清水澄
- 同各論　法學博士　清水澄
- 刑法總論　法學士　牧野英一
- 同各論　法學士　牧野英一
- 民法總論　法學博士　仁井田益太郎
- 物權法（一部二部）　法學博士　橫田秀雄
- 債權總論　法學博士　橫田秀雄
- 債權各論　法學博士　橫田秀雄

- 親族法　ドクトル、ユーリス　阪本三郎
- 相續法　法學士　柳川勝二
- 商法總論　法學士　飯島喬平
- 會社法　法學士　松本烝治
- 商行爲法　法學士　須賀喜三郎
- 保險法　法學博士　粟津清亮
- 手形法　法學士　須賀喜三郎
- 海商法　法學士　市村富久
- 刑事訴訟法　法學士　豐島直通

- 民事訴訟法（第一編）　法學士　岩田一郎
- 同（第二編乃至第八編）　法學博士　仁井田益太郎
- 破産法　法學士　岩田一郎
- 平時國際公法　法學博士　中村進午
- 戰時國際公法　法學博士　中村進午
- 國際私法　法學博士　山田三良
- 講義錄研究法、辭解、判決例批判、研究資料、判檢事辯護士、高等文官試驗問題疑答其他

第一號　十月初旬發行

文學科講義

第一號　十月初旬發行

學講義錄

早稻田中學講義（貳年修了）
早稻田商業講義（壹年半修了）
高等國民教育（壹年修了）

特色

（一）**中等教育**に始り專門教育に了る整然たる學問系統あり（二）**講師**はいづれも本大學に講座を擔當し或は學界に重きを爲せる專門大家にして各自責任を以て懇切に講義す（三）**修業年限**は僅に**十八ヶ月**にして而も學問の精髓を窺ふに些の遺憾無からしむ（四）**深遠の學課**を說て平易ならしむるは通信敎育に最も至難とする所然も本大學講義錄は多年改善の結果此點に關して講習者に滿足を與ふべきを期す

※（上記三學科共來十月初旬新學年を開始し第一號を發行す）

◉**各學課表及見本**付**詳細規則書**申込次第**送呈**◉

倫理學研究　マスター、オフ、フィロソフィー　佐藤　徹
教育學　文學士　大瀬甚太郎
教授法　講師　樋口勘治郎
哲學概論　文學士　紀平正美
心理學概論　文學士　大槻快尊
近代文學論　講師　島村瀧太郎
近代之美學說　講師　島村瀧太郎
近世文學思想の源流　文學博士　坪內雄藏
歐州近代文藝思潮　講師　相馬御風

國文學史　講師　永井一孝
支那文學史談　バチエラー、オフ、ロース　松平康國
言語學　文學士　保科孝一
日本文法　文學博士　金澤庄三郎
支那文典　講師　廣池千九郎
古事記講義　文學士　千秋季隆
萬葉集選釋　文學士　岡田正美
近古文評釋　講師　松井簡治
大鏡增鏡講義　講師　種村宗八

源氏枕草紙講義　講師　永井一孝
和歌評釋　文學士　尾上八郎
俳句評釋　文學士　阪本四方太
四書小學講義　講師　牧野謙次郎
左史講義　バチエラー、オフ、ロース（內）　松平康國
唐宋文評釋　文學士　丸井圭治郎
唐詩選釋　講師　桂五十郎
評釋支那時文、泰西文壇概觀、講義錄研究
法辭解、檢定試驗問題擬答其他趣味津々

上記の三學科は本年四月新學年を開始し目下第十號迄發行此際の入學者には月謝の**分納**を許し第一號より發送す又特に速成の便法あり
●●●●●●●●詳細規則通知次第送呈●

東京牛込早稻田
振替東京一一二三番

早稻田大學出版部

東京高等商業學校教授 花輪虎太郎先生著

英語擬試驗問題及解釋

▼一冊 定價五拾錢郵税金四錢▲

各地の中學校を卒業し進んで各種高等の學校に入學せんとするも、都會に出で、親しく其準備をなし能はざる青年諸子に同情して、先生が高等商業學校教授の傍ら、東京專修學校、明治大學等の高等豫科の英語教壇に立て、親しく教授せらるゝ教材につき、和文英譯、英文和譯、文法、書取の四科目の内、日本學生の最も誤り易きもの、又は學習に難澁なるものに重きを置き、其程度を斟酌して、假りに**試驗問題**に**擬**し、別に**詳密叮嚀**なる**解釋**を附せられたるものにして、問題の數實に**七百以上**に及べり

されば、一般英語を學習するものにありても、之れを繙讀練習するときは深き興味の内に、英語の知識を得ること尠少ならざるべし

發行所 東京市本郷區駒込西片町十番地 **反省社出版部**（電話下谷九百十九番）（振替東京三十四番）

發賣所 東京堂 上田屋 東海堂 北隆館 三共社等其他

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

文學博士遠藤隆吉先生著

最新刊

硬教育

菊判三百餘頁
定價一圓十錢
郵税金十二錢

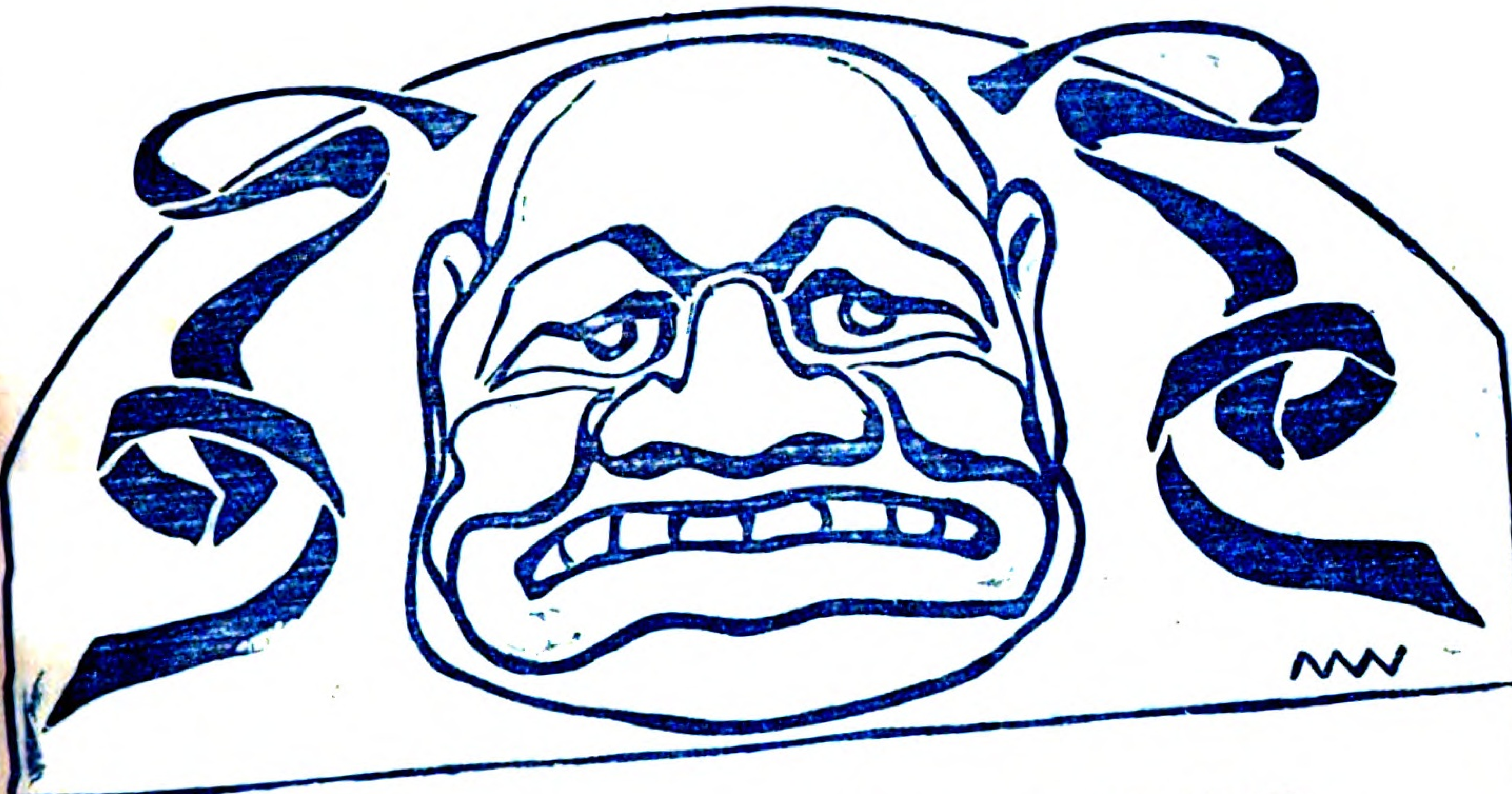
我現代の學界、教育界が最も要求するものは何ぞや。漢學と精神修養と而して特に硬教育なり。

此思想に觸ざるものは、以て現代第一流の思潮に觸れたるものといふべからず。即ち本書は此聲に應じて起れるものなり。想ふに現時の我教育は、徒らに形式の美を競ひ、手を振り眉を動かし、唯だ末技の精緻にのみ汲々たり。本書は之に慊らず之が反動として現はれたり。著者はその學、現時の學會に於て群鷄より數頭を拔き、且つその識、古今東西を睥睨し、所謂博學達識倫を絶するの人なり。本書は此學識により、三年刻苦の結果になれる成果にして、且つ著者現に之を實行しつゝあるもの。以て本書が如何に現代を裨益するかは茲に呶々を要せざるなり。

讀め！眞に時代の要求に應ぜんとするもの、又教育に從事するもの、且つ修養に志しあるものは本書を讀め！蓋本書を讀まざるものは時代の劣敗者たるべし。

東京神田裏神保町　電話本局一〇三六　振替口座五〇一一番　合資會社　冨山房

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



中央公論第廿五年第十號秋期大附録號目次



秋期大附錄

此廣告に依り御申込の方は**中央公論**に依る旨御附配を乞ふ

新ポケット講談刊

松林伯知講演
お妻八郎兵衛
▲定價金四拾錢 郵税金四錢

細川風谷講演
由井正雪
▲定價金四拾錢 郵税金四錢

伊藤痴遊講演
安政疑獄 月照薩摩落
▲定價金五拾錢 郵税金六錢

各冊讀切

◉頒美本

松林伯知講演 ▲長原止水先生裝禎

德川榮華物語

前篇 松の卷 竹の卷 梅の卷
後篇 櫻の卷 藤の卷 菊の卷
續篇 椿の卷 萩の卷 楓の卷 桐の卷

合本全三册 定價六圓五十錢 郵税三十錢
分本全十册 定價五圓 郵税六錢

發賣元 東京銀座大通り新橋際
〔電話新橋三六七七 振替貯金口座二〇〇〕
新橋堂書店

村井弦齋著 (新刊)

著者實驗 **痔疾の根治療法**

附、痔疾患者の養生法

是れは著者が例の通り親切に叮嚀に自家の實驗說を記述したものです、

定價六十五錢 郵税八錢

組合セ本箱 (最新式特製)

歐米諸國に大流行のセクショナル、ブックケースよりも數等進歩したる者にして特徵は左の如し
○材料は櫻、欅、樫、檜、等を精選し堅牢此上なし
○形狀は優美にして色彩美麗
○在來の本箱と異り硝子戸は上部へ隱沒する仕掛なれば書册及帳簿の出入に便なり
○壹組の組合本箱は積み重ねたる三ケの段函とトップ(屋根)ベース(脚底)の組合せより成る
○藏書の增加に從ひ段函の數を增加しこれを上部に積み重ね四段五段の本箱と爲すことを得
一組(總高さ三尺九寸九分奥行九寸四分間口三尺)櫻製金參拾圓欅製金貳拾八圓檜樫製金貳拾六圓(荷造費各金壹圓五十錢)地方運賃御自辨



(說明書無代進呈)

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Tosende Brandung.



Müller—Brieghel.

中央公論



第二十五年第十號
秋期大附錄號
第二百五十九號

韓國併合後の警戒

（一）

韓國併合の事は、八月廿九日を以て東京及び京城に於て發表せられたり、總て讀者既知の次第なれども、其の事後世の歷史に貽るものたるに於て、吾人は其の大要を玆に特記するの甚だ無要ならざるを覺ゆ。

併合に就ての詔書及び條約は左掲の如し。

〇詔書

朕東洋の平和を永遠に維持し帝國の安全を將來に保障するの必要なるを念ひ又常に韓國が禍亂の淵源たるに顧み曩に朕の政府をして韓國政府と協定せしめ韓國を帝國の保護の下に置き以て禍源を杜絶し平和を確保せむことを期せり

爾來時を經ること四年有餘其の間朕の政府は鋭意韓國施政の改善に努め其の成績亦見るべきものありと雖韓國の現制は尙未だ治安の保持を完するに足らず疑懼の念每に國內に充溢し民其の堵に安ぜず公共の安寧を維持し民衆の福利を增進せしむる爲には革新を現制に加ふるの避く可らざること瞭然たるに至れり

朕は韓國皇帝陛下と與に此の事態に鑑み韓國を擧て日本に併合し以て時勢の要求に應ずるの已むを得ざるものあるを念ひ茲に永久に韓國を帝國に併合することとなせり

韓國皇帝陛下及其の皇室各員は併合の後と雖相當の優遇を受くべく民衆は直接朕が綏撫の下に立ちて其の康福を增進すべく產業及貿易は治平の下に顯著なる發達を見るに至るべし而して東洋の平和は之に依りて愈々其の基礎を鞏固にすべきは朕の信じて疑はざる所なり

朕は特に朝鮮總督を置き之をして朕の命を承けて陸海軍を統率し諸般の政務を總轄せしむ百官有司克く朕の意を體して事に從ひ施設の緩急其の宜きを得て以て衆庶をして永く治平の慶に賴らしむることを期せよ

御名　御璽

明治四十三年八月廿九日

內閣總理大臣兼大藏大臣　侯爵　桂　太郎
陸軍大臣　子爵　寺內正毅
外務大臣　伯爵　小村壽太郎
海軍大臣　男爵　齋藤　實
內務大臣　法學博士男爵　平田東助
遞信大臣　男爵　後藤新平
文部大臣兼農商務大臣　小松原英太郎
司法大臣　子爵　岡部長職

○條約

朕樞密顧問の諮詢を經たる韓國併合に關する條約を裁可し茲に之を公布せしむ

御名　御璽

明治四十三年八月廿九日

內閣總理大臣　侯爵　桂　太郎
外務大臣　伯爵　小村壽太郎

條約第四號

日本國皇帝陛下及韓國皇帝陛下は兩國間の特殊にして親密なる關係を顧ひ相互の幸福を增進し東洋の平和を永久に確保せむことを欲し此の目的を達せむが爲には韓國を日本帝國に併合するに如かざることを確信し茲に兩國間に併合條約を締結することに決し之が爲日本國皇帝陛下は統監子爵寺內正毅を韓國皇帝陛下は內閣總理大臣李完用を各其の全權委員に任命せり因て右全權委員は會同

協議の上左の諸條を協定せり

第一條

韓國皇帝陛下は韓國全部に關する一切の統治權を完全且永久に日本國皇帝陛下に讓與す

第二條

日本國皇帝陛下は前條に掲けたる讓與を受諾し且全然韓國を日本帝國に併合することを承諾す

第三條

日本國皇帝陛下は韓國皇帝陛下、太皇帝陛下、皇太子殿下並其の后妃及後裔をして各其の地位に應じ相當なる尊稱、威嚴及名譽を享有せしめ且之を保持するに十分なる歲費を供給すべきことを約す

第四條

日本國皇帝陛下は前條以外の韓國皇族及其の後裔に對し各相當の名譽及待遇を享有せしめ且之を維持するに必要なる資金を供與することを約す

第五條

日本國皇帝陛下は勳功ある韓人にして特に表彰を爲すを適當なりと認めたる者に對し榮爵を授け且恩金を與ふべし

第六條

日本國政府は前記併合の結果として全然韓國の施政を擔任し同地に施行する法規を遵守する韓人の身體及財産に對し十分なる保護を與へ且其の福利の增進を圖るべし

第七條

日本國政府は誠意忠實に新制度を尊重する韓人にして相當の資格ある者を事情の許す限り韓國に於ける帝國官吏に登用すべし

第八條

本條約は日本國皇帝陛下及韓國皇帝陛下の裁可を經たるものにして公布の日より之を施行す

右證據として兩全權委員は本條約に記名調印するものなり

明治四十三年八月二十二日　統監　子爵　寺内正毅

隆熙四年八月二十二日　内閣總理大臣　李完用

此の條約の結果として同時に發表せられしもの左の如し、是れ特に當日(八月廿九日)の官報號外中より抄錄したる也。

○詔書

朕天壤無窮の丕基を弘くして國家非常の禮數を備へむと欲し前韓國皇帝を冊して王と爲し昌德宮李王と稱し嗣後此の隆錫を世襲して以て其の宗祀を奉ぜしめ皇太子及將來の世嗣を王世子とし太皇帝を太王と爲し德壽宮李太王と稱し各其の儷匹を王妃太王妃又は王世子妃とし竝に待つに皇族の禮を以てし特に殿下の敬稱を用ゐしむ世家率循の道に至りては朕は當に別に其の軌儀を定め李家の子孫をして奕葉之に賴り福履を增綏し永く休祉を享けしむべし茲に有衆に宣示し用て殊典を昭にす

御名　御璽

明治四十三年八月二十九日

宮內大臣子爵　渡邊千秋

內閣總理大臣侯爵　桂太郞

朕惟ふに李堈及李熹は李王の懿親にして令問夙に彰はれ槿域の瞻望たり宜く殊遇を加錫し其の儀稱を豐にすべし茲に特に公と爲し其の配匹を公妃とし竝に待つに皇族の禮を以てし殿下の敬稱を用ゐしめ子孫をして此の榮錫を世襲し永く寵光を享けしむ。

御名 御璽

明治四十三年八月二十九日

宮内大臣 子爵 渡邊千秋
內閣總理大臣 侯爵 桂太郎

皇室令第十四號を以て朝鮮貴族令を定め、其の爵を公、侯、伯、子、男とし、總て日本の貴族に準ずるも貴族院議員たる資格と其の選擧權とを有せず、又皇室令第十五號（朝鮮在住の貴族に限り當分朝鮮總督の審査の下に立つとの件）第十六號（叙位の件）以下二十號（華族令中改正の件）を定め、又王族及び公族の稱呼を左の通り定めらる。

昌德宮 李王殿下
德壽宮 李太王殿下
王世子 李垠殿下
李堈 公殿下
李熹 公殿下

日本政府は又從來韓國との間に條約を有し、又は韓國に於て最惠國待遇を享くることとなりし獨逸、亞米利加合衆國、墺地利匈牙利、白耳義、淸國、丁抹、佛蘭西、大不列顛、伊太利、露西亞の十ヶ國政府に對し、左の宣言を爲したり。

明治三十八年日韓協約成りてより玆に四年有餘其の間日韓兩國政府は鋭意韓國施政の改善に從事したりと雖同國現在の統治制度は

實未だ十分に公共の安寧秩序を保持するに足らず衆民疑懼の念を懐き適歸する所を知らざるの狀あり韓國の靜謐を維持し韓民の福利を增進し併せて韓國に於ける外國人の安寧を計るが爲には此の際現制度に對し根本的の改善を加ふるの必要なること瞭然たるに至れり

日韓兩國政府は前記の必要に應じて現在の事態を改良し且將來の安固に對して完全なる保障を與ふるの急務なるを認め日本國皇帝陛下及韓國皇帝陛下の承認を經兩國全權委員をして一の條約を締結せしめ全然韓國を日本帝國に併合することとなせり

該條約は八月二十九日を以て之を公布し同日より直に之を施行すべく日本帝國政府は同條約の結果朝鮮に關する統治の全部を擔當することとなれるを以て玆に左の方針に依り外國人及外國貿易に關する事項を處理すべきことを表明す

一韓國と列國との條約は當然無効に歸し日本國と列國との現行條約は其の適用し得る限朝鮮に適用せらるべし

朝鮮に在留する諸外國人は日本法權の下に於て事情の許す限日本內地に於けると同一の權利及特典を享有し且其の適法なる既得權の保護を受くべし

日本帝國政府は併合條約施行の際現に朝鮮に於ける外國領事裁判所に繫屬する事件は最終の決定に至る迄其の裁判を續行せしむることを承諾すべし

二日本帝國政府は從來の條約に關係なく今後十年間朝鮮より外國に輸出し又は外國より朝鮮に輸入する貨物及朝鮮開港に入る外國船舶に對し現在と同率の輸出入稅及噸稅を課すべし

朝鮮より日本に移出し又は日本より朝鮮に移入する貨物及朝鮮開港に入る日本船舶も亦今後十年間前項の貨物及船舶に對すると同率の課稅を受くるものとす

三日本帝國政府は今後十年間日本國との條約國の船舶に對し朝鮮開港間及朝鮮開港と日本開港間の

沿岸貿易に從事するを許すべし

四、從來の開港場は馬山浦を除くの外舊に依り之を開港となし更に新義州をも開港となし內外船舶の出入及之に依る貨物の輸出入を許すべし

日本政府は又亞爾然丁、伯剌西爾、智利、格倫比亞、西班牙、希臘、墨其哥、諾威、和蘭、秘露、葡萄牙、暹羅、瑞典及び瑞西の十四ヶ國の各政府に對し、左の宣言を爲したり。

明治四十三年八月二十二日日本國と韓國との間に締結せられたる條約に依り韓國は日本國に併合せられ本日より日本帝國の一部を成すこととなれり爾今日本國と列國との現行條約は其の適用し得る限朝鮮に適用せらるべく該現行條約を有する列國の臣民又は人民は朝鮮に於て事情の許す限り日本內地に於けると同一の權利及特典を享有すべし

勅令第三百十八號を以て「韓國の國號は之を改めて爾今朝鮮と稱す」る事、及び三百十九號（朝鮮總督府設置の件）、三百二十號（稅關官制改正の件）、三百三十一號（本國朝鮮間の移入稅に關する件）、三百三十二號（同上船舶の件）、三百三十三號（同上船舶及物件檢疫の件）、三百卅五號（特許法を朝鮮に施行する件）、三百三十六號（特許法、意匠法及び實用新案法を朝鮮に施行する件）、三百三十七號（商標法を同上）、三百三十八號（著作權同上）、三百三十九號（特許辨理士の件）等を發布されしが、此の內三百三十一號、三百三十二號、三百三十六號、三百三十七號、三百三十八號は、共に憲法第八條に依る緊急勅令なりとす

最も重要なるは、大赦及び減免租の二大事なりとす、其の詔書に曰く。

朕惟ふに統治の大權に由り玆に始て治化を朝鮮に施くは朕が蒼黎を綏撫し赤子を體卹するの意を昭示するより先なるはなし乃別に定むる所に依り朝鮮に於ける舊刑所犯の罪囚中情狀の憫諒すべき者に對して特に大赦を行ひ積年の逋租及今年の租税は之を減免し以て朕が軫念する所を知悉せしむ

御名　御璽

明治四十三年八月二十九日

內閣總理大臣 兼大藏大臣　侯爵　桂　太郎
陸軍大臣　子爵　寺內正毅
外務大臣　伯爵　小村壽太郎
海軍大臣　男爵　齋藤　實
內務大臣　法學博士 男爵　平田東助
遞信大臣　男爵　後藤新平
文部大臣 兼農商務大臣　小松原英太郎
司法大臣　子爵　岡部長職

此がため勅令第三百廿五號（大赦に關する件）及び制令第四號（減免租の件）を發布せらる、即ち減免さるべき地租税左の如し。

一　本年分地税にして平安南北及咸鏡南北の四道は第二期其の他の各道は第一期に納附すへき額の五分の一
二　隆熙二年分以前の地税にして本令施行の日迄に未納に屬するもの
三　隆熙三年法律第十四號第一條に掲ぐる缺逋金にして本令施行の日迄に未納に屬するもの

四　隆熙三年以前の貸付に係る社還米にして本令施行の日迄に還納未濟に屬するもの

尚ほ憲法第八條に依り、緊急勅令として公布されしもの左の如し。

勅令第三百二十四號（朝鮮に施行すべき法令は朝鮮總督制令として之を規定し、法律の全部又は一部を朝鮮に施行するときは勅令を以て之を定む）

勅令第三百二十九號（臨時恩賜は國債證券を以て下附する件）

勅令第三百三十號（朝鮮の豫算に關する會計の經理及び財產の管理は當分の內從前の例に依る）

又憲法第七十條に依り、韓國政府に屬する歲入歲出の豫算は當分の內從前のまゝ之を應用する事（勅令第三百二十六號）、臨時恩賜に充つる爲め三千萬圓を限り五分利附國債を發行する事（勅令第三百二十七號）、從來大藏省預金部に對し韓國政府の負擔する債務は別に規定を設くる迄一般會計の負擔に屬せしむる事（勅令第三百二十八號）を公布せらる。

之にて韓國併合の大體を盡し、其の手續の大要を終れるものとす、所謂併合の如何のものたるかは、之に由て瞭知するを得べし。

（二）

韓國併合は未定の問題に非ずして既定の事實也、然り、利弊得失を論ずるの餘地は最早寸分だもあると莫し、要は此の事實をして何處までも完全に持續せしむるに在り、換言すれば官民一致、朝鮮を支持して以て得らるべき最良の結果を收むるの外あらず。

吾人は韓國併合に由て、我が國民に促すに責任の大に加はれるを自覺せんことを以てしたりき、是れ朝鮮の將來に就て、警戒を要するもの一二にあらず、徒らに領土の大を加へたるを歡喜すべきに非ざれば也、滿幅の頌辭を呈する世に其の人あり、吾人は歡聲洋々の中獨り自から苦言を試みんとす、また國を想ふ婆心に外ならず。

（三）

朝鮮は古來獨立し得ざる國なりき、現に併合前までは皇室もありき、政府もありき、其の人民は甚だ貧弱ながらも、尚ほ國家らしき形體を具へたりき、然れども其の國土と人口とに相當する海陸軍備は殆んど全く之を有せさりき、西に淸國を控へ、北方露領に隣し、東南を隔てゝ日本に對する以上、之と抗爭して優に獨立を保つの海陸軍備を有せんとは、到底望む可らざるも、尚ほ其の國土と人口とに相應せる軍備は有るべき筈なるに、曾て是れなかりしは何ぞや。

日本の人口は五千萬也、而して戰時百萬の陸軍を出動し得、此の割合を以てすれば、人口一千萬の朝鮮は、戰時二十萬の陸軍を有すべき割合ならずや、然かも十萬は愚か、五萬の兵だも出す力なかりき、是れ其の國甚だ貧しければ也、其の國王は相當の私有財產を有する上、年々國庫より百五十萬圓の費用を納めしむるに拘らず、郡守等は人民を誅求して威福を恣にするに拘らず、其の國に相當なる軍備を立つる資金を有せざりき。

斯の如き貧國を併合し、其の防備は勿論、一切の行政司法費を負擔す、是れ豈一大責任を負へるにあ

らずして何ぞ。

凡そ國家は其の國土人口の大なる丈け其れ丈け一切の機關を整ふることを得、列強激爭の間、小國の自立し得ざる所以也、然れども其の國土人口の大なる丈け其の富力も亦素より大ならざる可らず、朝鮮を併合したるに由て我が日本の國土には素より大を加へたりと雖も、其の富は曾て加はらず、否、却つて其の富を殺ぐの掛念あらんとす、是れ國家の大を成す所以に於て斷じて樂觀す可らず、臺灣の如きは統治の初め若干の補助を要せしと雖も、富源大に拓けて、今や國用を足すと小ならず、朝鮮にして若し幸ひに斯の如くならば、洵に日本の幸慶なるも、朝鮮と臺灣とは、到底同日に語る可らず、勿論朝鮮と雖も開發宜きに適はゞ、假令全く臺灣の如き能はざるも、また相當の富源を拓き得て、我が國の利益たるも亦知るべからず、然かも前途頗ぶる遼遠の感あるを奈何ともする無き耳。

思へ、朝鮮のため我が政府が年々負擔する所、李王家への歳費百五十萬圓、臨時恩賜の公債利子百五十萬圓を始め、陸軍駐剳隊費、總督府費を始め、文武一切の費用を合計すれば、少くも一千七百萬圓より三千萬圓内外に上るべし、若し此の費額を以て十年繼續にて海軍擴張を爲すとせよ、少くも二十萬噸以上の新銳なる海軍を建造し得るにはあらずや、朝鮮併合決して廉價なりといふ可らざる也、隨つて我が國民の責任の著るしく大を加へたると言を俟たざるのみ。

（四）

我が同盟國たる英國は、曾て歐大陸にも其の領土を有したりき、同盟國が大(グレート)ブリテンと呼稱するは、

大清國、大韓國といふが如く、自から大を誇る故にはあらず、歐大陸の領土たるブリタニアと區分するため、其の本國の名に大を加へしに過ぎずして、此の緣故のため今尙ほ現名を存するのみ、而して此の歐大陸に於ける領土のため、歷代英國の苦める所少からず、之を捨つるに及びて始めて繁榮の途を拓けると、旣に史家の椽大の筆を揮つて記述せる所とす。

我が日本も三韓のため久しく勞苦したりき、特に雄略帝以後は、最も之に惱まされて、國力を消磨すると實に少からざりき、天智帝の皇太子に在せし時、丸木殿に起臥して軍事を視給へるに徵するも、列聖の勞し給へると略々推想に餘りあらずや、唐大に興り、我れ全く三韓を見捨てざるを得ざるに至て、或は涙を呑めるものありしと雖も、然かも此がため奈良朝の燦然たる文明の光輝大に揚りしとを忘る可らず。

强國をして若し朝鮮に據らしめば、我が九州の北端は常に威嚇せられ、日本海の咽喉恰かも之に强壓せられて、防備の安全得て望む可らず、乃ち半島を我に收むるは、我が兵要上最も安全の道なるべし、然れども千百年の後、四億の民衆を有する支那復活して唐宋の盛時に復するか、西伯利亞大に開けて其の力南方を壓するに至らば、而して我れ之と抗爭せざるを得ざる場合とならば、是れ正さしく英國の舊史と雄略以後の我が歷史とを繰返すにあらざらんや、假令千百年の後當然必有のことならずとするも、古に鑑みては乃ち多少の憂慮なきを得ざる也、吾人は我が官民が玆に省みて大に經綸を振ひ、一たび得たるものはまた之を失はざるの大決心を以て、早く朝鮮人を同化せしめ、以て確乎不拔の基礎を据ゑん

とを望む、徒らに大陸に國歩を立つるを以て歡喜措かざるが如きは、未だ深く思はざるの甚だしき也。

（五）

北方瘠鹵の地のみを求めて、豊肥なる南方を忘るゝは、吾人が我が經世家のために常に深愛する所也、名のために眞の殖民主義を逸し、殖民地併合の原則に反するが如きは、吾人の嘆惜に耐えざる所也。

然れども既定の事實は事實也、變ずべからず、動かすべからず、唯だ一たび得たるものは之を喪はず、其の地力を盡し、人力を極めて以て最善の効果を收むるに努むべし、徒らに歡喜して我れを忘れ、甚だしきは眞に警戒すべき所以を忘るゝが如きは、豈大國民の面目ならんや、夫れ滿は損を享け、驕泰は衰亡の元也、吾人苦言の微衷、世の君子解せりや。

桂侯の將來をトす

（一）

吾人は未だ讀心術なるものを解せず、然れども若し能く人の心事を看破し得て愆るとなくんば、極めて興味あるべしと思ふ、殊に一代の政事家として、政界注目の焦點たる人物に於て最も然りと思ふ、例せば現首相桂侯の心事を解剖し、其の將來を推測して寸分も違ふなきが如きを得ば、殆んど形容す可らざる興趣を感ずべき也。

然り、現首相桂侯の進退は、實に一世の注目する焦點たり、政界尋常の士は、侯が功名の地位に立つの如何に久しかるべきかを思ひ、又如何にして現地位を去るべきかを推測して、當さに想像百端なるべし、政權に戀着すると深き政友會員の如きに至ては、唯だ侯が退閣の速かなるべきを希ふも、然かも如何なる機會に於て辭去すべきやを想像し、想像して得る所なくば、常に煩悶に堪えざるべし、果して取て代り得べき乎、抑もまた取て代るの如何なる時乎、侯の進退は其の寤寐に於て忘れんと欲するも得ざる所ならん。

當人たる侯は悠然たり、而して又泰然たり、立談の間に韓國併合の大事を決行して大なる功名を博し、又將さに條約改正の大業を成さんとす、盛名赫々の下、內閣の基礎彌よ堅く、牢乎として幾んど拔く可らざらんとす、侯其れ悠然泰然として可ならん乎。

『見れば唯だ何の苦もなき水鳥の、あしにひまなき我が思哉』、桂侯の現地位は恰かも波上の閑鷗に似たるも、其の胸中の心機は、寧ろ太だ多忙ならざらんや、吾人未だ讀心術を解せざるも、また少しく侯の心事を解剖し視ん、中るも中らざるも、讀者に取ては蓋し多少の感興なきにあらざる可き歟。

（二）

桂侯にして若し眞に政權に戀々たらば、尙ほ數年の間內閣を持續し得べし、水害の爲めに頗ぶる人望を殞せしと雖も、且つ其の公債償還策は豫期の如く成功を收め得ず、依然として人氣沮喪し、依然として不景氣を繼續し、事業興らず財界振はずして、著るしく人望を殞せしと雖も、韓國併合に由て、一般

を歡喜せしめたるが故に、之を償ふて尙ほ人心を收むるに餘りあり、人望の點に於ては、未だ甚だしく掛念を要せずとす。

水害復舊又は治水費のため、若干の經費增大を來すや必然也、然かも在野黨は之を拒否すべき口實を有せず、殊に韓國併合に伴ふ豫算の膨脹に至ては、併合を謳歌せるもの素より一片の異論を挾む能はず、果して然らば政府假令其の財源に苦心すとも、豫算面に於て議會通過に寸毫の困難を感ぜざるや論莫けん。

在野黨の或るものは、農商務、文部、遞信の諸方面に於て一種の部分攻擊を行ふも知れず、大浦、後藤の兩相は彼等の忌憚し嫌忌する所にして、小松原文相は彼等の殊に敬重せざる所なれば也、彼等は僅かに此の部分攻擊に由て一時の快を取るに止まりて、直ちに內閣の根幹を搖き、其の死命を制するが如き勇氣と雄圖とを有せざるべし、假令勇氣あるも乘ずべき機會無きのみ、假令機會あるも乘じて以て逞ふすべき膽氣なきのみ。

衆議院は依然として政友會のもの也、然れども貴族院は亦依然として桂侯のものと稱するも不可なし、且つ若し桂侯の幕下にある猛將智者にして、一び政友會崩壞に手を着けば、彼れや到底衆議院の過半數を制するに足らじ、茲に於てか議會の形勢未だ多く憂慮するに足るものあらず、彼の國民黨の大多數の如きは、素より悅んで桂黨に投歸すべければ也、侯にして依然巧智の態度を持續し、不即不離の現狀を一變せざる限り、國民黨は容易に山を下らざるべきも、一び決然として政友會に砲彈を投せば、彼等の

多數は沛然として其の陣に門馳せ參ずべし、之と中央倶樂部及び政友會の崩壞派無所屬の一部を加へば、衆議院の形勢別に多く悲觀するの要なければ也。

條約改正の事は、惟ふに世人の想像するが如く然かく容易ならざるべし、然れども能く之を遂行せば、其の功と日韓併合の勳業とを併せて、侯の公となり、伯の侯となり、子の伯となり、男の子となる亦甚だ難からざらん乎、斯くして成功に由て益々基礎を固む、假令一び其の職を去るとありとも、捲土重來や甚だ易し、桂侯の政局に於ける運命は尙ほ頗ぶる悠久なるを疑ふ可らざる也、何ぞ況んや西園寺侯、獨力以て新內閣を組織する材料(相當の閣臣)をすら有せずして、一に援助を桂侯に請ふの外なきをや。

(三)

然らば桂侯は尙ほ永く現地位に在るべき乎、吾人を以て侯の心事を解剖せしめば、未だ俄かに然りと答ふる能はざる點あり。

侯にして永く現地位を持續せんとせば、政友會は到底久しく今日のまゝなる可らず、西園寺侯の部下及び昵近中、未だ直ちに入て閣臣たるに足るものなきの一事は、頗ぶる政友會の懊惱する所にして、彼等は何人かと提携するに非ざれば、未來の好望を認むる能はず、寺內子か、山本伯か、彼等は進んでも之を握手するを欲すべし、或は西園寺侯を伊藤公の地位に押し上げて、此の伯子を總裁とするも亦可なりとせん、或は桂侯にして總裁たらんか、彼等は履を倒にしても歡迎せん、若し或は政友會中に於て猪突猛進の勇將あり、死を期して桂侯に突貫せん乎、侯は餘儀なき一策として、國民黨を招きて其の與黨

とすべし、此の場合に於て侯が今の如く黨派に超然たる地位に立つは難し、中央倶樂部こそ大浦男の指顧に甘んずれ、犬養(?)大石等を包含せる國民黨は、到底桂侯自から統率するにあらずんば投踹せず、若し桂侯にして斷然其の黑幕を撤して自から黨首たらんか、必然の結果として、其の軍服を脱ぎサーベルを捨てざる可らず。

政事家として政黨首領たるがため、多年の縁ある軍服サーベルを脱すると、果して桂侯の能くする所なりや否や、政友會の總裁たるにせよ、國民黨其他政黨の首領たるにせよ。軍籍より除かれて純平たる政事家となり、將さに來らんとする元帥の榮位を見捨つるとは、果して桂侯の能く忍ぶ所なりや否や、吾人は智に富める桂侯が別に採るべき方途あるを思はざるを得ざる也。

（四）

最も卒直にいへば、桂侯は久しく佩び來れるサーベルを捨てず、其金紫燦爛たる軍服の大勲位を佩用して、元帥の榮號を賜はるを期待せん、桂家一門のため此の榮號を得るを以て滿足と爲し、彼の山本伯寺內子等が萬々一にも之を捨てゝ以て政黨首領と爲るが如き決心を爲さば、齊しく其の智慮なきを嗤笑すべし。

桂侯は元帥たると同時に又一種の大元老として一代に志を振ふ希望なるべし、元老なるものゝ政局に於ける勢力は桂侯の最も能く經驗したる所、其の苦味と甘味と兩つながら能く喫せるもの、世間恐らくは侯の如きはあらざるべし、侯は伊藤公の機嫌を執るがためには、殆んど身の痩するをも覺えしならん、

千計萬策全く盡きて、竟に一蹶公と苦闘せんと決心したりしに視ても、其の衷心實に察するに足る、井上侯の癇癪玉も亦侯が幾たびか頭上に浴びし處、松方侯の爲には、其の第三師團長たりし時よりの逕路ありて、折衝に勞せしと少からず、財政及び經濟の事偏へに此の諸老侯の意を迎へしの苦や名狀す可らず、而して山縣侯の赫々たる高望重威は、侯の仰ぎて驚嘆する所、随つて元老たらんとする希望の侯の胸中を占領するや言を俟たざるべし。

伊藤、山縣、井上の後繼者は必らず桂ならんとは、曾て多くの人の評せる所なりき、侯は啻だ一山縣公の繼承者たるに止まらず、財界に於ては第二の井上たり、黨界に於ては第二の伊藤たり、而して官僚の間に於いては、純乎たる第二の山縣たるべし、之を總べ兼ねて大元老たらば、政界に於ても、財界に於ても、何人も之と抗爭し得ざるべしとは、是れ桂侯の信念にして、而して平生の庶幾實に玆にあらずや。

公爵たる最も可也。侯爵たるもまた甚だ妨げず、二び日英同盟を締結し、日露の大戰役を終始して竟に日露協約を重ね、世界に於ける日本の地位を確定し、更に韓國を併合し、又條約改正を完成せば、事業功名前人豈遠く及ぶ可けんや。斯くて人臣として最高の大勳位を佩び、元帥の榮號を有して大元老となり、坐ながらにして政黨を左右し、大臣を頤使し、財界を操縱す、然かも衆怨を享くることなく、失敗の名を蒙むることなく、何等の責任をも負ふ所あらず、斯の如く便にして而して勢位の高く大なるもの、天下豈二とある可けんや、男兒の豪懷玆に盡き、大丈夫の本意玆に極まるとは、恐らくは今日桂侯の獨り心中に期待する所なるべき歟。

（五）

區々たる内閣總理大臣の如きは、最早桂侯の愛惜する所にあらず、況んや黨派の首領たるが如きをや。年既に六十三、甚だ老たりとすべからざるも、また若しともす可らず。總理大臣の如き俗にして而して責任の地位に久しく在らんと、智慮ある桂侯の敢て好まざる所なるや論莫けん。故に吾人は言ふ、少くも條約改正終了の後は、桂侯必らず退隱すべし（假令其の終了を待たざるも、機會あらば乃ち去らん）一び退隱したる後は、また必らず再び出でず、捲土重來の如き素より思ひも寄らざるのみ。

功成り名遂げて身は閑雲野鶴に伴ふといふも、元帥の職に上り、而して實は大元老として最上位に立つ、是れ桂侯の最上希望ならん、眞に赤松子に隨つて遊ぶが如き脱俗の眞趣は、未だ深く文事を解せざる桂侯の能くせざる處、若し之を能くせば、彼や實に明治第一の眞英雄也矣。

公論

朝鮮併有の方法を評す

竹越與三郎

政府は愈々韓國を併呑して郡縣とし、朝鮮の名を以て我が總督の統治の下に置くこと〻極めた、其の右に劍を提げ、左に黃金を散じ、天下の論客を教唆して喝釆せしめんとする、有樣は恰も團十郎の鱶七が、赤き顏と濃き隈取を以て舞臺に現はれ大刀を振まはすが如く、如何にも凄まじき演劇であるが、併ながらまた鱶七の劇のそれの如く如何にも時代物であつたが、政府が思ふた程に喝釆を博し得なかつた樣である。予の聞く所を以てすれば、政府は十月の初めに於て朝鮮を併呑し急轉直下の勢を以て議會に臨む積りであつたらしい、然るに水害の事、善後の處分未だ決せざるに當つて此の併呑を斷行したのは、水害に因つて人心極めて沈衰したるが爲め、此の時代的の演劇に依て之を取返へさむとしたものであると政治社會に於ては解釋せられて居ると云ふ事である。元來予は朝鮮併呑を以て尙ほ時機にあらずと考へて居つた者である。第一に財政上不得策であると考へたのであつた。何となれば我國が朝鮮の爲に年々費すところは三千二百萬圓であつて、其の內容は、統監府が昨冬英文で發表したる報告に依れば左の如くである。

統監府總經費	一百五十二萬三千百八十圓
森林費	三十萬圓

拓殖會社	三十萬圓
特許局費	四萬三千九百十五圓
鐵道費	七百六十九萬一千五百三十三圓
通信費	二百二十七萬六千六百九十五圓
陸海軍	千五百二十二萬九千一百十六圓
貸附金	五百二十五萬九千五百八十圓
合計	三千二百五十九萬四千百十九圓

元來、我國と朝鮮との貿易如何と見れば、朝鮮の我國に賣る所千二百八萬圓、我國の朝鮮に賣る所二千百八十五萬圓、日韓貿易賣買の總額は三千三百九十萬圓に過ぎぬのである、然るに我國が朝鮮の爲に年々三千二百萬圓以上の金を費して居ると云ふことは、即ち日韓兩國貿易の總額を朝鮮に注ぎ込んで居るのであつて、天下此の如き算盤の桁を外れたるやり方はあるまいと思ふ。凡そ如何なる國と雖も殖民地に對して金を注ぐには一定の桁がある。世に無限なる財嚢なき限りは、此の財嚢を開く尺度がなければならぬ。故に各國共に殖民地に注入する財本は、其の殖民地と本國との貿易を標準として、略ぼ割合を立てて居る。或は貿易の半額、或は貿易の二割、若くは五割と云ふことはあるが。我國の如く貿易の總額を注ぐ國は、古今其類少なしと言はねばならぬ。勿論草創の際に於ては、貿易の倍額の金を注ぐこともなきにしもあらずであるが、我國朝鮮を領有して以來既に久し、然るに尚ほ此の如き無算當の財本を注ぐと云ふことは、我國の破綻の基であるが故に、予は出來得べくんば現在既に投ずる所の金すらも、之を儉約せんことを望んだものであつた。然るに合邦することになれば、此金が益々殖えると云ふことになる、即ち我政府が朝鮮の王室其他に與ふる金として世間に發表せられて居る所を見れば、第一に兩班其他に秩祿公債を與へるが爲に三千萬圓の公債を發行すると云ふことである。第二に朝鮮が日本其他よりの借入れて居る公債を負擔せねばならぬことゝなつて來た、此の公債の總額は四千四百九十萬圓であつて其の目錄は左の如くである。

國庫證券	一、〇〇〇、〇〇〇

貨幣整理資金	三、〇〇〇、〇〇〇
金、資金債	一、五〇〇、〇〇〇
第一起業資金債	五、〇〇〇、〇〇〇
第二仝	一二、〇〇〇、〇〇〇
起業公債	一、〇〇〇、〇〇〇
日本借入金	一一、六八二、六二三
貨幣整理基金借越	八、八一九、四四八
合計	四四、九六五、九九一

此の新公債の發行と、舊公債の引受とを合せて七千五百萬圓の臨時負擔を日本が引受けた譯である。右は公債であるが、之に加ふるに臨時に使つた金が大分ある樣子である。即ち朝鮮に在る我兵は殆ど二師團近くである、之に要する金は臨時費である、又今後暴徒を鎭壓すると云ふやうなことの爲に、種々なる費用が要るてあらうと思ふ。又臨時費とは言つて居るが、其實我國が朝鮮を引受けるに付ては種々なる施設をなさねばならぬから、此の施設の結果として政費が膨脹して來る。聞く所に依れば統監は現在の費用より二百萬圓を減じたい積りであつたが、其の二百萬圓すらも完全に減ずることは出來ぬと云ふことが分つたさうてあるが、今年二百萬圓減ずるも、明年四百萬圓を增し、明後年四百萬圓を增すの餘儀なき所を以てすれば、三四年の後に朝鮮は、經常費にて一千萬圓以上を增加するてあらうと思ふ。今我國の朝鮮に注ぐ金は三千二百萬圓て、今後は四千二百萬圓位の經常費にならうと思ふが、何年にして朝鮮が自給になるかと言へば、恐らくは二十年の後にあらざれば財政自給の國となることは出來まいと思ふ。即ち其間に日本は八億圓の金を朝鮮に注ぎ込むのてある。八億圓に加ふるに引受けた公債の七千五百萬圓を以てすれば、朝鮮を併呑したる價も亦甚だ高しと言はねばならぬ。第二には朝鮮は殊更王室を廢せざるも、成るべく王室、貴族を利用して、彼等に朝鮮を治めしめ、我國に於ては、彼等をして我國に對して責任を取らしむると云ふ方法て足れりと思ふて居つた、併し此事は、今日之を論ずるも詮なし。第三に今日我國の最も焦眉の問題は海軍擴張てあつて、

四年の後に來るべき明治四十七年、此歳たるや日英同盟の繼續をすべきや否やを定むるの時、ニカラガが開通して、亞米利加の艦隊が全力を盡して東航し得べき時てある。此間支那大陸の形勢の變化と云ひ、各國外交の活動と云ひ、是より三四年の後に來るべき東洋の變動て想像すれば海軍擴張は一日も猶豫せしむる能はざる譯がある。故に予は總ての問題を差措いて海軍を擴張することが、國家を危急より救ふ唯一の政策と思つて居る。然れば朝鮮合邦の如き不急の事をするより、海軍擴張に金を注ぐ方が宜いと思つて居つたのであつた。然るに天下い此の議論に同意する人少なく、第一、費用は殖えるものでないと云ふ議論を以て合邦を歡迎したが、今や七千萬圓の負擔が殖えて、政費節約の如きは唯紙上の話て、二三年を經れば更に益々增加するものであると云ふことが明白になつて來る、併ながら今日合邦の是非を論ずるも、既に爲されたことてあつて、死児の齡を數ふるが如きものであるが故に、予は今日之を非難することを敢てせぬ。唯合邦の方法如何に付ては、天下の識者の冷靜なる考慮を仰がねばならぬことがある。

抑も一國を併呑すると云ふことは、國家の安全、經綸の點よりするものであるが、朝鮮は經綸及び安全の點よりして既に我國が之を握つて居るのである。故に朝鮮を併呑すると云ふことは、唯保護國を變して郡縣としたと云ふ空名に過ぎぬ。併ながら政治家は往々空名を愛して、而して大向の喝采を博せむが爲に、此の空名に全力を注ぐと云ふことなきにしもあらず、予は此の如き事を必ずしも追窮せんとせぬ。併ながら苟も輔弼の責任ある者は、此の空名の中より些少なりとも實利を引出すことを考へねばならぬが、合邦は果して日韓の間に如何なる新事實を生じて、而して如何なる新らしき利益を我國に與へたかと云へば、寸毫の新事實なく、寸毫の實利がない。例へば合邦と云ふことに伴つて、他國ならば必ず殖民地と母國との間の關稅上に、互に利することを考へるのである。即ち佛蘭西の如きはマダガスカルを併呑するや、直ちに佛蘭西の品

物は無税にしてマダカスカルに入り、マダカスカルの品物は無税に佛蘭西に入ると云ふが如く、併呑の空名を爭ふのみならず、併呑より實利を引出すことを工風して居る。然るに我國は朝鮮の大綱を握つて居つて、何等差支のない其の保護を廢して郡縣とし、而して是が爲には七千萬圓の新負擔を生じて、日本に如何なる實利を與へたかと言へば、何等の實利なく、其の關稅すらも十年間据置とするに至つては、何ぞ經綸なきの甚しきや。予は政府の無能を憫むよりは寧ろ無識を悲しむ者である。世間此事に付ては言議百端なりと雖も、合邦を悦ぶの情の爲に暫く之を抑へて居るやうである。併しながら予は世の論客が決して、此の如き事を批評するのを躊躇するを要せぬと思ふ、合邦を悦ぶは一事である。合邦に伴ふ方法の利害を論ずるは更に他の事である。決して混同することを許さぬのである。小村外務大臣は、何故に關稅を十年間其儘に据置いたかと云ふ質問に對して、帝國は經綸の上より朝鮮を併呑したものであつて、經濟上より併呑したものでないと云ふ説明を與へたさうであるが、實に驚くべき説明と言はねばならぬ。朝鮮は國際公法の上に於て既に滅びたものである。而して我國は二師團近くの兵を駐屯せしめて其の安全を保つて居る。我官吏は津々浦々にまで至らざるなき有樣である。朝鮮政府は一々統監の命を仰がずんば何事も爲し能はぬのである。此時に當つて燕雀の君臣、何事をも爲し能はざるは明白である。若し大王なる者が尙ほ陰謀をめぐらすと云ふならば、彼を捕へて東京に駐在せしめば。總ての事終るのである。此の如き情態にあつて、日本は何故に朝鮮を憂ふる必要があるか。何故に帝國經綸の上に於て三五年を爭ふの必要があるか。若し我文武の權力此の如てあつて、其の握り方が固くないと云ふことを憂ふる·ならば、天下恐らく憂ふべからざるものはないのてある。予は小村伯爵が自家の爲したる關稅を十年間据置いたと云ふ失敗を辯護するに、唯政治とか經綸とか云ふ空名を並べて、以て人の耳目を瞞過せんとする狡猾さ加減を憫れまざるを得ぬ者である。マダカスカルが

佛蘭西に併呑せらるゝや、佛蘭西は勿論經綸の上に於て併呑したのである。併ながら經綸なるものが經濟を離れてある理由はない。佛蘭西の安南、東京を併せるや、政治上より併せたのである、併ながら佛蘭西は此處にも矢張り其の關税に付て利益ある方法を執つて佛蘭西を利する方法を考へて居るのである。英吉利の埃及を領有するや、無論經綸の上よりてある、併ながら寸毫も經濟上に於て益することを怠つては居らぬのである。今や我國が朝鮮に對するや、經綸の點に於ては、既に爲し盡し、握り盡し、如何なる國と雖も、指一本指す能はざる堅固の位地にあるのである。此の朝鮮に對して併呑せねばならぬと云ふならば、其の併呑は經濟上の着眼を離れてはならぬのであるに係らず、我が政府は關税を十年間据置いて、現狀を維持すると云ふに至つては、殆ど本末を顚倒したものと言はねばならぬ。予が了解する所に依れば、英國は此點に於ては、關税を据置いて貰ひたいと云ふ考へはあつたさうてあるが、其の据置年限は極めて短き要求てあつたと思ふ。亞米利加も亦此點に付て異論があつたと思ふが、此の如き長き年限を豫想した者てはなかつたと思ふ。然るに關税を十年間据置くと云ふ贈遺を以て、各國の厚意を得ねばならぬと云ふ程な、薄弱なる外交を見るに至つては余の意外とする所てある。予は常に外交上に於て、對外硬若くは對外軟と云ふが如き文字を用ゐることを好まぬ一人てあるが、此點に付ては現内閣いかに巧妙に辯護するも、對外軟の批評は免れぬことを遺憾とする者てある。勿論我が政治上、與國に對しては其の利害に付て相當なる考慮を與へると云ふことは必要てある、併し他國よりも本國の利害を考慮するは、第一に來らねばならぬことてある。

佛蘭西の英國に於ける極めて親善なる關係を有して居るが、併しマダカスカルを占領して、其の關税を改めて、佛蘭西品を無税に輸入すると云ふ一事に付て、最も損失を被るものは英吉利の商人てあつて、兩國の間に手强き談判を取替はしたるに拘らず、佛蘭西は斷乎として、佛蘭西の關税をマダカスカルに應用するこ

とにした。又チユニス、アルゼリアの如きも、伊太利、英吉利の商人の是が爲に被る損害は極めて重大なるに拘らず、佛蘭西の政治家は『硬き笑』を以て能く其の爲さむとする所を爲した。我國は勿論朝鮮に於て列國の厚意を顧みねばならぬことは言ふまでもないが、列國は既に日本が朝鮮に於て自由に爲すべき權利を承認したのである。此の權利を行使するに付て、何の躊躇する所あるや、予は甚だ當局の心事を怪しむものである。勿論予は日韓兩國の間の關税を撤廢して、日本の國定税率を總て朝鮮に應用し、朝鮮に入る日本品は悉く無税ならしめよと主張する者ではない。朝鮮既に我が國土となつた以上は其の全土隻地も我皇の所有にあらざるなく、其の一人半人も我が臣民にあらざるはなき時に當つて、經濟上之を蹂躪するが如きことは勿論避けねばならぬことである。故に朝鮮の貿易の發達、工業の消長の爲に朝鮮特有の關税法を制定すると云ふことであるならば、予は必しも之に反對せざる者である。例へば我國は煙草を專賣とする、鹽を專賣とする、併

ながら今日朝鮮の内政上の有樣には、此の專賣法なるものは容易に行はれ得るものでなきが故に、此の專賣制度を朝鮮に應用せざるが如きは巳むを得ざることである。既に斯の如き特別の事情ある以上は、之に特別の關税法を布くと云ふことは、必しも予の反對せざる所である。佛蘭西の其の殖民地に於て爲す所如何と見れば、アルゼリアには佛蘭西の國定税率若くは協定税率を應用するのであるが、煙草はアルゼリアに專賣ならしめないのである、外國から來る煙草は、葉は一キロに付て五十サンチームの税を課し、シガー及びシガレツトには二法の税を課すと云ふやうなことをして居る、又他の品物に於ては、佛蘭西本國が課する税の三分の二位を課する品物もある、又酒の輸入税などを見るに、十五度九以上のアルコールある葡萄酒及びアルコールには佛蘭西と同じ税率を課して居る、又佛蘭西から來る葡萄酒にも税を課して居る、チユニスはどうであるかと云ふに、葡萄酒が出來る故に、此の葡萄酒を無税で佛蘭西へ輸入せしめるならば、佛蘭西の酒屋

が困ると云ふので外國品と同じやうに税を課して居るのである、マダマスカルに於ては、初めは全然佛蘭西品を無税として他國品を有税としたが、其の結果として消費税を各國の品に一樣に課することゝなつて、佛蘭西品も消費税を受けることゝなつた、而して一般に賣らるゝ品物如何と見れば、佛蘭西の織物は其の價格の三分を課税せらるゝが、他國品は一割三分を課税せらるゝことゝなつて、一時佛蘭西品は大に勢力を得たやうであるが一割の課税は以て外國品を驅逐するに足らざるが故に、更に新税目を造つて外國品に重税を課することゝなつた、又佛領印度に於て佛蘭西の爲す所如何と見れば、大體に於て國定税率を應用するが、地方の事情に鑑みて、麻布、麻の袋の如き、本國より來る機會の少なき物は無税としてある、又家畜、牛乳等は佛蘭西本國に於ては有税になつて居るが、佛領印度に於ては無税となつて居る、又本國の如く煙草の專賣がない、又佛領印度から外國へ行く品物には税を課するが、佛蘭西へ行く品物には税を課さない、但し陶器、蜂蜜、獸皮、木具等は佛蘭西に行くも他の國に行くも一樣に無税として輸出を奬勵すると云ふやうに、必しも本國の法律を應用せず、必しも畫一的に拘束せず、唯如何にして佛領印度に工業を起し、如何にして佛領印度に於て利益を圖るべきかと云ふことを主として特別の關税を作つて居るのである、又英吉利は、元來自由貿易國であつて、自由貿易の利を信じて居るに拘らず、其の埃及に於て爲す所を見れば、輸入品は總て英國より來るも各國より來るも之に八分をかけて居る、而して輸出品は英國に行くも他國に行くも一分をかけて居る、但し煙草などには特別の税率のあることは申すまでもない、又阿弗利加大陸との陸上貿易に於ては、時としては五分の税をかける物もあり、又護謨の如き重税をかけるものもあるが大體に於て右の如くてある、又印度は一般に輸入品に五分の税をかけて居る、併ながら家畜等は矢張り無税になつて居つて、米の如きものには輸出税をかけるが其他の物は多くは無税てある、と云ふやうに、自由貿易の英國必しも殖民地に

は自由貿易を採らず、劃一好きの佛蘭西必しも殖民地に於ては劃一政治を行つて居らぬ、又ギニアに於ては佛蘭西も葡萄牙も等しく輸入品には無税であつて輸出品には有税である、併し佛蘭西がギニア、ゼネガルなどを併せて一總督の下に置くやうになつてから此の税率は少しく變つたやうである、又瓜哇の如きは、一切の輸入品、一切の輸出品は、和蘭本國より來ると他國より來るとを問はず税をかけて居るが、其の課税の方法は、瓜哇の本土に於ては幾許、スマタラに於ては幾許と云ふ風に、島々の情態に依て税率を異にして居る。是等は用意周到なる政策と言はねばならぬ。

此の如く各國とも殖民地に付ては、關税政策が重大なることとてあるが爲に、最上の智慧を盡して居るに拘らず、我國は朝鮮の關税に付て、何等の考量することなく、唯之を十年間据置くと云ふ一筆を以て抹殺するに至つては、予は果して我が政府の眞に殖民政策なるものを解し得たるや否や、我國が朝鮮を領有するの意味を解し得たるや否やを疑はざるを得ぬのである。其他朝鮮領有に付ての遣方を評すれば、際限なきことてあるが、予は此の關税を十年間据置いたと云ふ一事は、實に恢復すべからざる打撃を我が商工業に及ぼしたものであつて、遺憾禁ずべからざることであると思ふ。是は宣言であるが故に之を變革することは出來ざるにあらずと雖も、我國の意思として各國に通知した以上は、之を改めるは我國の面目に關するが故に、容易に改めることは出來ぬものであるから、予は唯茲に深く政府の無智無能を遺憾とすることを表白して置くの已むを得ざると感ずるのである。

凡そ國家の政治は、壯士役者が大向の喝采を博せむとするが如き單純なる遣方を以てやられては頼る能はざるものである。苟も七千五百萬圓の新なる負擔を生じ、二十年間八億の負擔をせねばならぬと云ふことを斷行するならば、眞に國民の利害、國家の休戚を考量して、遺憾なきを期せねばならぬのである。唯水害に依て腐れた人氣を恢復せむが爲に、爲すべき事を爲さず、盡すべき手段を盡さず、未熟な方法を以て事を斷

じ恰かも壯士役者が大向の喝采を主とするが如き政策を行ふに至つては、輔弼の大臣として其術甚だ忠良を缺きたるものと云はねばならぬ。予は後の政治家が、眼前の人氣取りに依て動けば、往々にして此の如き失策があると云ふことを、深く鑑みて貰ひたいと思ふ。

人種改造と日本人種の運命

海野幸德

拙著「日本人種改造論」の公にせられし以來論評を加へしものは唯一浮田博士あるのみ。我國人は何故に然か人種改良に不熱心なるか。思ふに未だ人種改良の何たるかを知らざることがその主原因ならむ。之れに加ふるに我國人にして進化學を專攻するもの甚だ少なく、專門家の進化學書としては僅かに石川、丘兩博士の二著あるのみなれば、進化學の應用たる（醫學の應用にあらず）人種改良を論ずるもの丶少なく、一般世人の人種改造の何たるかを知らざるも怪むに足らず。されど吾人は何時迄も高臥安眠すべきにあらず。國民の運命を制すべき危難は吾人の眼前にあり。その如何なるものなりやは拙著「日本人種改造論」（富山房發賣）に詳かなり。同書を一讀すればその如何なるものなるやを知るをうると共に、予の言說の決して誇大にあらざるを知るをうべし。精細は同書に就て研究すること丶なし、玆にはたゞ人種改造の意義其理由並びにその國家的大問題たる所以を解明せむとす

人口の增加は別に根本的に論述することあるべしと雖も、象を除き動物中最も生產力微弱なる人類の激增は生存競爭の撤廢せられし故ならざるべからず。人類

の現生せし當時は他動物の如く幾多の害敵を存し、野獸の襲撃にあひ、毒蛇の害を蒙り、荆棘は體を傷け、生命を全ふするもの現時に比しはるかに少なかりしを以て淘汰作用は十全に行はれ、身心の强健なりしものを殘留し、よく人類をして一切の生物と無生物とを征服し、以て萬物の首長たる人類を現するをえたり。然るに現時に於ては淘汰作用は漸次廢滅せしを以て、人口の增加を來すのみにして、その形質は漸次破壞せられ、遂に人類の潰滅とならむとす。即ち淘汰作用撤廢の結果として人類の量は增加すれどもその質は下落す。之の害惡を防止するものは予の「人種改造論」中に主張する人爲淘汰なりとす。予は進化說に於てダルウヰン說を採用せず。されどダルウヰンが言ふが如き程度に於て自然淘汰の自然界に行はるゝを信ぜずと雖も、人爲淘汰は自然淘汰と同じからざるを以て、自然淘汰の確實ならざるより人爲淘汰も亦確實ならずと云ふをえず。

人爲淘汰に於ては任意の變異に着目し、該變異を有するものと有せざるものとを分離し、又は有するものを飼養し有せざるものを殺戮するが故に、幾代の後には遺傳作用により變異を累積增加して希望する生物を現生するをうと雖も、自然淘汰に於ては人爲淘汰に於けるが如き淘汰をなすものあるにあらざれば、人爲淘汰の場合に見るが如き分離と殺戮との實現せらるゝことなく、個體變異は他の個體變異と融合し其特質を滅失すべし。變異が進化の根本的要素なりと云ふことよりしては生物變化の進化學上不動の事實なるを設定するをえず。變異の固定せむには分離作用を要す。分離なきところには生物の變異は永續せず。又固定せず。變異の固定永續は分離を條件となす。獨逸にてはツグミは曾ては森より出て來ることなかりしが、その中人家に近く來るもの生じ現今にては森中に棲むものと人家に近くその生を送るものとの間に多少の差異を顯現し、漸次別種とならむとす。されど之れ分離より生ぜし現象にして分離なきものにありては廣く分布するものと雖も同一種として存在するを見る。人爲淘汰は完

全に分離作用を實現しうるを以て自然淘汰により生物の變化せし確證なきも、人爲淘汰によりて生物の改造せられし事實は吾人の領有するところなり。鳩、金魚、鷄、犬、馬、牛、羊、豚、大根、胡蘿蔔、櫻、梅、牽牛花等の諸多の變種を現ずるは吾人の知るところなり。されば人爲淘汰は變異を根據とし、之れによりて生物變化を現生するをうべし。生物の變異を有するは異常のことにあらずして變異は常に生物に附帶顯現するを見る。個體は流動的のものにして固定的のものにあらず。兩個體は決してその形狀大小色彩部分の關係等に於て同一ならず。必ず何等か變異を有して彼此相區別することを得。同一層中の個體の區別せられうべきは論ずるを要せず。同一種中の衆個體と雖も諸種の變異を現じて一々個體を辨別することを得。吾人には區別なしと見ゆる幾千幾萬の羊群の個々は牧羊者に於てよく彼此辨別することをえ、變異の見るべきなしと見ゆる植物中に於て植物學者はよくその相違を指示することを得。吾人が雍光煕々として春色深き頃無數の昆蟲を捕獲して彼此相比較するに於ては容易にその然るを首肯することをうべし。ケロッグ並びにベルは胡蜂科に屬する獨逸産の黄蜂及其他の昆蟲に於て色彩並に構造上の變異を指示せり。ウワーレスによれば鳳蝶科の一種にありては前翅上に於ける青色の斑點の有無、後翅上の下線に於ける褐色の部分、黄色線の形狀大小並びに全體上に於ける形狀の相違ありて幾多の變異を現じ印度馬來並にオーストラリアに分布するキテフは各所に於て幾多の變異を示し、その中多くの者は特異の種なるが如くに記載せられしと雖もこは恐らくは同一種中の變異に屬するものなるべし。西半球に於てはバッツはアマゾンに於て蝶蛾を研究したるが。その中の幾多の種は色彩、形狀、大小等に於て多樣の變異を現出し、その中あるものは二個體の相一致したることなく、色彩並びに構造上の差違を現じ翅の廣狹に於ても同じく變異あり。たゞに昆蟲類中に變異を現ずるのみならず。カーペンタアの記述するところによれば有孔蟲の如き原生動物中にありても諸多の變異を現

じたゞに種に於て變異あるのみならず、屬或はそれ以上に於ても幾多の變異を現ずるを見る。其他之れより諸多の部門に進入するも同一現象の復現せられざるなく、變異は實に生物中に遍在すと云ふを得べし。變異はかくの如く遍在す。されば若し吾人にして人爲的に希望する變異を選取するときは生物を變改しうるは明白のことなり。之の故に人爲淘汰の確實なることは否拒するをえず。

以上の理を人類に適用し人類を改造せむには人類も亦（一）變化すべきことと（二）變化は凡て遺傳すべきことと（三）優良なる形質は選取せらるべきこととの三要件を具備せざるべからず。之の中（一）はカール、ピヤソンによりて確實なることを證明せられ（二）は鐵案として受納せられ（三）はその可能なることとなりとの信念は漸次確實になれり。されば吾人が人類を改造するとせざるとは吾人の任意にして、人類肇造、人類改造は決して神の業ならず。敬神的、宗教的觀念は一切迷妄なるものにして無智半開の徒、分り居るが如くにて分り居らざる一知半解の徒の固執するところのものなり。基督教の如きは膚淺嗤ふに堪えたる人間的神を設定し、その天地を創造し、人類と動物と植物とを創造せりとなす。されど生物は自然法により、理化學則により無機物より化成せられしものにして、幽靈的神の肇造したるものにはあらず。吾人と雖も若し理化學則によるときは生物を肇造しうるものなり。されば生物體内より以外に形成しえざるものとせられし尿素は一八二八年ウエーレルによりて無機物質より人造せられ、電光石火敬神的人類の狼狽と困惑とを來せり。その後無機物質より有機物質たるアルコールは人造せられ、漸次細胞、下等生物をも人造せむとするに至れり。尿素とアルコールとを人造しえたるならば生物も亦人造しえざる理なく早晩事實となりて現はれ來るべし。之れを疑ふものは例によりて基督教者の一流ならむ。基督教の信奉する最も貴重なる信條は贖罪なりと云ふ。その道徳觀念の幼稚なる知るべき也。基督教は歐米の文明を背景とするを以て多少の勢力あり根據あるが如くなれどもその理

論の幼稚なる到底一般我國人の首肯するところとなるをえず。されば吾人はかくの如き宗教を蔑視しその宗徒を以て委く無智蒙昧の徒なりとして排斥し去るは當然の事なり特にその僧侶の無學なるは驚くべき事也。要之に生物は人造するをうるものなり。されば生物の改造しうるものなることは容易に首肯するを得べし。

然らば人類改造は事實なりやと言はゞ然りと言はざるべからず。人類は既に改造せられ又改造せられつゝあり。無意識的に改造せられ又改造しつゝあり。されども該改造たるや優良なる形質を選取し以て優良なる人種を形成する積極的方法にあらずして、劣惡なる形質を選取する破壞的なるものなり。かくして乞食と不具者と惡質者と犯罪人とは救助せられ、之れをして生產を擅にせしめ社會と國家との別莊に晏居せしめ、その生命を延長せしむ。その結果は惡質者と不具者と乞兒と犯罪人との激增となり中流人士の減少を來せり。佛蘭西の人口減少は著明なることとなるがその人口減少は中流人士の減少に基因し下等社會は之れに與からず。佛蘭西は一八九四年に四九、七六八人を增し、一八九六年には八四、六二〇、一八九七年には一〇八、〇八八、一八九八年には三三、八六〇、一八九九年には三一、三九四、一九〇一年には七二、四〇四、一九〇二年には八三、九四四、一九〇三年には七三、一〇四、一九〇四年には五七、〇二六、一九〇五年には三七、一二一、一九〇六年には二六、〇五一の增加を見たり之れによりて見れば最も增加の著大なりし一八九七年の一〇八、〇八八の增加に比し一九〇六年の二六、〇五一の增加は甚だしき減少にして增加率は四分の一以上降れりと云ふべき也。此の人口減少の原因は中流人士の制情によるものにして、二兒制又は三兒制を固守するによるものなり。中流人士は下等社會のものと異なり自家の品位を保ち、子兒を教育し、遠きを慮りて貯へをなし、且つ社會的國家的に貢献せざるべからざるを以て、下等社會のもの丶如く食物なく、衣服なく、居宅なき狀態に於ても盛に子兒を產出するが如くなる能はず。吾人は統計によりて人口の減少は國家の

脊椎骨たる中流人士にして下等社會のものは之れに與らずとの愕くべき事實を明認することをうべし。中流人士中には結婚をなさゞるもの多く又その結婚年齢は漸次上る傾向を有す。米國ミシガンの統計によれば一八九四年に於て一五—一九歳のものは平均六、七五の子兒を産せしが、二〇—二五才のものは五、三二の子兒を産せり。即ち前者と後者との差違は一、四三なり。中流人士は思慮あり發達したる道念あると共に堅固なる克己心あり。此の克己心あるが爲めによく情慾を制し二兒制三兒制を固守するをうるなり。かくの如き克己心の下等社會に存在せざるは自明のことなり。思慮と、德性と、克己とは人類社會に最も必要なるものなれども、之れあるがために著るしき人口減少を來さむとす。下流社會には多く惡質者と不具者と飲酒家と犯罪人とを包容す。之等惡質者、不具者、犯罪人、飲酒家の思慮と、克己心とを缺くは明白のことなり。飲酒家の克己なきは著明なることなり。飲酒の結果は意志の中樞を痲痺し下等中樞を刺擊するを以て情慾は旺盛となり盛むに情慾を擅にす。飲酒と折花攀柳との關係は之によりて了解するをうべし。ビルリングスは「飲酒の結果は色慾を盛ならしむ。吾人の研究の範圍に於ては飲酒をなす社會又は國に於ては生産最も顯明なり」と云へり。犯罪人の德性と克己心とを有せざるは明らかなることにして不具者、白痴、精神病者にありても克己心は多少又は全く之れを缺くは事實の證するところなり。陋屋に豚の如く雜居する貧民に克己自制の精神あらざることは一目瞭然たり。かくの如き克己自制の念慮なき惡質者は自然に任せをくもその數の激增すべきは自明のこと也。然るに更に貧救院を起し慈善病院を設け孤兒院を開き感化院を立てゝ之れを保護し益々その生産を盛ならしめむとす。その結果として殺人をなすもの、強盜窃盜をなすもの、強姦をなすもの、食を乞ふもの、惡毒を有するもの、白痴なるもの、精神病を有するもの、社會と國家とに充滿するに至るは明白のこと也。社會と國家との保護舍を卒業したるものは有ゆる害惡を社會と國家とに流布し、國家は之

れがために獄舎を設け、警察署を起し、感化院、慈善病院、貧救院、孤兒院等を設けて、巨大の出費をなし、自から種を蒔きて自から困惑しつゝあり。愚なりと云ふべし。

惡質者の增加は之れを保護する程度に比例して增加し、又其發達に適する外圍の具備するによりて增加すべし。惡質者の增加は否定すべからざることにして、現下の狀態は雜草は有用植物を掩壓す雜草は有用植物よりも急速に增加して之れを窒息枯死せしむと云ふにあり。若し氣候の快適、食物の低廉なるとき又給料の豐かなるときに於ては聾者、啞者、癲癇病者、精神病者、不具者並びに病者の增加するは常にして、時に一千人中五、四のもの一千人中一一、六に增加せしことあり。トレッヂコールドによれば普通の生產高四に對し惡質者は七、三なりと云へり。實に吾人は惡質者の增加を否定すべき根據を有せず。現下の狀態にありては益々增加し世を掩壓せむとする明徵顯然たり。ニユージーランドに於て國家又は社會團體の救助を受くるもの、一八七八年には、一、〇〇〇に付一六、八六なりしが、一九〇一年に於ては、一、〇〇〇に付二三、〇一に增加せり。聾者、啞者、盲者、癲癇、不具者を包容する惡質者割合は一八七八年には一、〇〇〇に付五、四なりしが、一八九六年には一一、四に增加し、一九〇一年には更らに一一、二九に增加せり。精神病者の數は、一八七四年には一、〇〇〇に付一、九なりしもの、一九〇一年には三、四に增加せり。ある惡質家族に於て十六人の人員を包容せしが、その中八人は盲者並びに聾者にして、その中の一人は三代間その惡質を遺傳せり。ある殺人犯の罪人ありしがその父は大酒家にして、その兄弟三人中一人は普通のものなりしが一人は飲酒家一人は犯罪人たり。その父方の伯父の中一人は殺人罪を犯し一人は白痴一人は暴惡なるものなり。の從兄弟四人中三人は白痴一人は精神病者たり。

かくの如く惡質は正確に遺傳す。社會並びに國家にして若し之れを防止することなく、何等の手段を講ぜず、國民も亦無智にして人種改良の何たるかを知ら

ず、又之れを唱導するものを遇するに冷淡を以てし、甚だしきは神聖なる國民の改良を圖るの不都合なるを鳴らすが如き狀態に於ては、生物上の法則は確實に結果を生み、ニユージーランドに於けるが如く漸次惡質者の增加となり、國家の生產力を減じ、戰鬪力を殺ぎ、產業を挫折するは勿論、遂に國家の潰滅となるべし。我國の場合に於ては二千五百餘年を通じて一系する首長を戴く誇るべき聖國も亦自然法の支配し、破壞するところとなるべき也。恐れざるべけんや。少くも愛國心あるものは膚に粟の生ずるを禁じえざるべし。

之れ理論にあらず事實なるなり。北部伊太利のアオルタ並びにアルプス地方に於てクレチインと稱する白痴者の一團あり。之の一團の者は瘰癧を生得的に遺傳するを以て特異とす。アオルタ府に於ては、白痴瘰癧者を保護するため特に保護舍を設けその蕃殖を便にしたるを以て、白痴は白痴と婚し、瘰癧病者は瘰癧病者と婚し、遂に一地方の表號として白痴瘰癧團を形成するに至れり。既に一地方にして惡質となりし以上は、一國の惡質國とならざるの理なし。恐くは之れを否むものあらざるべし。伊太利アルチナ地方に於て四千人の人口を有する豐饒なる部落あり。該部落を形成するものは殺人、竊盜、强盜罪を犯さゞるものなし。之れを以て一五五七年法王ポール第四世は之れを放逐せしが全く絕滅するに至らず、今尙ほ盛に殺人者竊盜强盜を產出す。ボーン大學ペルマン教授の調査せしところによれば不具惡質者たる一人の婦人より八三四人の子孫を產し、その系統の明らかなるもの七〇九あり。その一〇六人は結婚不能、一四一人は乞兒、六四人は他人の恩惠によりて生活し、女子の中一八一人は醜業を營めり。該家族中七六人は犯罪者にして、その中七人は殺人罪を犯せり。之の惡質家族の爲めに國費を投ずること七十五年間に二百五十萬圓に及べり。實に國民並びに國家の無智にして人種改良に冷淡なる結果は確實に敗亡を來す。我國を以て人種改良の如何に拘はらず優良なる國民と言ふ勿れ。我國は二千五百年間家族を重視し、配遇を選擇し、比較的優良なる形質を選取

し來れり。然るに現今歐米的、盲人的、慈善に浸蝕せられ又唾棄すべき戀愛神聖を唱へ、遊女と色男とは各所に起り、我聖國を破壞し去らむとするは慨すべきことなり。

惡質者と罪人と白痴と不具者とを保護するに要する巨額の金錢は下等社會之れを負擔せずして重に中流社會の負擔となる。こゝに於てか中流社會は益々制情を盛にし子兒の數を制限せざるべからず。之の勢を以て進まば中流社會のものは無兒を以て理想とするに至らざるべからず。かくの如き極端なる狀態に於ては政治家となりて一世を支配し、學者となりて一世を啓發し、軍人となりて國家を防衞し、商工人となりて國利民福を進むる階級は全滅し、殘留するものは盲人と廢疾者と精神病者と白痴と不具者と犯罪人と惡質者とのみとなるべし。中流人士の負擔は文化の進步と共に增進するが如しニユージーランドに於ては一九〇二―〇三年の一人の租稅負擔高は五十二圓餘なり。更らに之れを自力にて生計するものゝ數三四〇、二三〇に配當するときは一年一人の負擔額は實に百二十二圓五十錢餘となる。一九〇一年三月卅一日の調査によれば十五才以上にして疾病、不具、傷害の爲めに自營すること能はざるもの一、〇〇〇に付二三、〇一人あり。之の中一二、七二は疾病、傷害、一〇、二九は不具なり。疾病傷害に對する一二、七二の割合は一八七四年より一九〇一年に至るまで持續せられしも癲癇、白痴、不具、精神病を包容する一〇、二九は一八七四年には五、三二を示すのみなり。ニユージーランドに於ける獨立自營者は一九〇二年に於て三四〇、二三〇人、保護を要するものは一二、七四七なるを以て獨立自營二六に對し非獨立自營者一の割合となる。今ニユージランドが惡質者の爲めに費やすところのものを見るに、病院費百三十八萬〇二百七十圓、精神病院費八十五萬二千三百八十圓、貧民救助費九十三萬千五百八十圓、學校費二十四萬二千三百四十圓、警察費百二十三萬八千〇四十圓、監獄費三十二萬〇七百圓、刑事裁判所費十六萬八千百三十圓、養老年金二百十二萬九千六百二十圓にして總

額七百〇五萬七千五百六十圓となる。之の巨額の費用は實に三萬四千〇二百三十人の負擔するところとす。驚くべきことならずや。社會と國家とは惡質と犯罪人と不具者と乞兒と病者とを國家と社會との別莊に晏居せしむるが爲めにかくの如く中流人士を窘迫す。國家の脊梁骨たる中流人士の減少するも怪むに足らず。かくの如き結果は優良なる形質の破壞滅失となり、不良なる形質の跋扈となり横行となり、以て社會を破壞し國家を潰滅す。之れ實に人種並びに國家に取りて重大なる問題ならずや。我國人は未だ之の重大なる國家的大問題を知らず高臥安眠するが如し。而して一般に冷淡無智にして人種改造に一臂の力をかし又耳を傾くるものなし。かくの如き結果は明認するをうべし。我國民たるもの今少しく熱心に今少しく生氣の横溢したるものとならざるべからず。

惡質者の害惡は以上の如し。然るに予の慈善論を以て酷となすに至つては少しく事理を見ると淺しと言はざるべからず。浮田博士は予の人種改造論を太陽紙上に紹介し且つ論評をくはへられたるが、博士は予の慈善論を少しく過激なりとせらるゝが如し。又慈善の精神旺盛ならざる我國にありては害ありて益なしとせらるゝものゝ如し。されど惡質者を以て充溢せらるゝ社會に慈善博愛の精神の行はることは思考しうべきことにあらず。人爲的に慈善博愛の精神を鼓吹するも慈善博愛の精神を奉ずる中流人士の數は減少し、慈善博愛の何たるやを知らざる惡質者と犯罪人とは增加するを以て、畢竟慈善の精神博愛の精神は滅失すべし。されば人爲的に慈善博愛の精神を旺盛ならしむると云ふは空論にして事實に合せざることなり。之れに加ふるに慈善博愛の精神は社會的產物にして人爲的產物にはあらず。歐米の慈善博愛心を見て我國の慈善博愛心の乏しきを嘆じ、之れを以て我國民性なるが如くに言ふものあるも、その見や淺しと言はざるべからず。我國の社會心は敢て歐米の社會心に劣れるにあらず。たゞ社會心の發揮すべき外圍なきを以て素質を開發することを能はざる也。若し歐米に於けるが如き生存競爭の激烈

となり、歐米に於けるが如き社會狀態の我國に發達するに於ては、我國の社會心は歐米の社會心と同一となり、又之れに超越することをうべし。慈善博愛の精神はかくの如く社會的產物なり。多少の言論によりて左右するところならむや。慈善博愛心の形成せらるゝ根據は世の論者の言ふものよりもはるかに深きものならざるべからず。されば予の慈善論を以て過激なりとなし又は我國の社會には害ありて益なしとなすは不當の見解なりと言はざるべからず。かく言へばとて予は慈善(積極的の)を排斥し去り又その精神を破棄するにあらざるは拙著「日本人種改造論」に明らかなり。拙著一二〇頁には「予は切に我國人に告ぐ。吾等皇祖の餘德を受くる者は必ず强烈なる社會心を發揮して我が國威を宇內に照徹せざるべからず。社會心を發揮して慈善即ち消極的慈善を行ふにはあらず積極的慈善を行ひ國家の要務を遂行して愛國の精神を現はし資金を納めて國家に盡忠し學術に資金を給して學校を起し、圖書館實驗所を設け、學者を尊崇優遇して高遠なる研究を遂げしめ、黃金を散じて產業の發達を圖り、以て國利民福を進め、國家の全般に涉り積極的に進步發達せしむるにあり。殊に人種改良の研究に對し資金を給し凡ての設備を完整し、列國に先むじて國民の根本的素質を精良にし、以て雄を稱し世界を睥睨すべし」とあり。又一一一頁には「是の故に慈善の社會に及ぼす影響を攻究せむには精神的方面並びに實質的方面の兩者を並せて攻究せざるべからず」と云ひ。一一三頁には「さはあれ慈善に附帶する精神的精華は之れを確保し之れを培養すべきは無論にして角を矯めて牛を殺す如き愚擧をなさゞるを要す」と言へり。以て予の積極的慈善を排斥せしにあらざるを知るべし。予は消極的慈善(現に世人の行ひ居るものは之れ也)を捨てゝ積極的慈善に移らむことを主張す。世人の誤解なきを望む。近時東京に慈善病院を開きたる某富豪あり。かくの如き消極的慈善は予の論法に從ふときは社會を衰敗せしめ國家を破壞す。されど某富豪の學術に資金を給するが如きは積極的慈善にして社會と國家とを稗益するは明らか

なり。後者の如き美擧は續々行はるゝに至り前者の如き歐米的愚擧は漸次撤廢せらるゝに至るを望む。

以上論明せしところにより人類社會には淘汰作用實現せらると雖も、優良なる形質を選取する人種改良にあらずして、劣惡なる形質を選取する人種破壞なること明白となれり。此の狀態の永續せられむには我日本人種は衰亡し我親愛する國家は滅亡すべし。恐れざるべからざるなり。こゝに於てか予の大呼する日本人種改造は急務中の急務たるの理自から明らかなりと言ふべし。然るに我國人は未だ此の種の知識を缺くを以て改良論の振はざること夥しく、拙著「日本人種改造論」の反響は著るしからざるが如し。嘆ずべきことなりと言ふべし。平素何事にも物知り顔に社會に呼號する新聞記者の如きも予の說を重大視せず。又一臂の力をもかさゞるに至つてはその無識と冷淡とは驚かざるをえず。予は大言切語して我同胞に告ぐ。日本人種改造は國家興亡の大問題にして若し之れを等閑に付するときは遂に國家の潰滅となるべしと。我が同胞の反省を望む。

我邦土地最近の損得

新渡戸稻造

明治四十三年の八月は忘るべからざる月てある。國に大事があるとお祭騷ぎは概ね東京てやる。そして田舍に及ぼすことが稀てある。若し田舍て提灯行列てもやると、所謂田舍祭として東京人は之を輕蔑して、顧みぬものが多い。然るに此八月の洪水に至ては都會も田舍も悉く其被害を受けぬ所はない。中旬には日本の

中部に限られてゐたが、下旬になつてからは奥羽、其後九月に入つては關西、九州、皆同じ運命に遭遇した。其損害の總額は二千萬圓以上約三千萬圓に上つて居る、貧乏國にとつては實に由々しき事てある。如何に樂天主義の吾輩も、此水害の事については殆んど慰むるに道がない。或人はいふ。此水害の爲めに浚はれた土地は數百萬石乃至數千萬石てあらうがそれは主もに太平洋に落ちた。其落ちた土地は深さ三萬尺もあると稱せらるゝ彼の有名なタスカロラの海床に流れ込んて、あの海中の深溝を埋め、從來地震の淵源地と目されたあの海床がなくなるてあらう。其結果今後地震が少くなるてあらう。さすれば震害を免れて以て水害の程度を補ふといふ永遠の利益になるかも知れん。といつて居る人もある。然し之は一つの笑話に過ぎぬ。又或人はいふ。今度の洪水て陸產物が巨大な分量て海に流れたから來年の漁期には水產物の量が非常に殖えるかも知れん、さすれば今回の損害を償ふこともあり得る。といふ人もあるが、之とても殆んど人智を以て計上出來ん事てある。てあるから我々の心を慰むる譯に行かんのてある。農學者フラースが嘗て地方維持に關して三つの階級あることを說いた事がある。即ち第一は山の頂上の如く常に風雨の爲めに侵されて表土が流失し、頭の禿げる處は、之は地力が消耗するのみてある。斯くの如き現象をライオコーメンと稱し、第二は之に反して谷底の如き所て、一方には上から表土が流れ落ち、一方には折々河が溢れて土砂を沈澱し、ナイルの豁間のやうに地力が段々增す所がある。此現象をプレオコーメンと稱し、而して第三は此兩者の中間にあるもの、例へば山の中腹にある土地の如く、一方には流れ、流れた丈けは上から補ふやうな場所て地力の現狀維持の狀態、之をイソコーメンと稱して居る。農政を講ずる者は少くもイソコーメンを選んて地力減少の廢なきを計るべきと論を俟たない。農業國にとつてライオコーメン程懼ろしいものがない。然るに今回の水害ては稀にプレオコーメンの處もある。土砂沈澱して土地を改良した場所もなきにしもあらずてある。けれども其大

部分はライオコーメンの適例である。前に述べた如く、幸にして來年は鯡、鰯の漁が非常に殖えて、損失した丈けの地力を魚滓を以て補ふ事が出來たならば、これはイソコーメンになるのである。然し此見込は殆んどなからうと思ふ、然るに天、我國を空しうせず。海に流れた地力よりも遙かに以上の土壤が日本海の對岸にあつて我領土に歸したのである。

今より二十餘年前、吾輩が初めて外國から歸朝した時に、或青年が日本外交史なる著述に從事して、吾輩に其校閲を依頼した。其節、日本の古代の外交を論ずる時に、日本と朝鮮とを別々の國の如く論じたならば却て其眞相を失ひはしまいか。日本を中心としてコンパスを以てやつて御覽なさい。其徑内なるものを假りに之を大日本と稱して、其以外を外國と見て外交史を編んだならば、種々の問題が解決し易くはあるまいかと心づけた事があつた。無論東洋の歴史に甚だ不案内なる我輩の事故、此議論の亂暴なることは自分ながらも承知の上でいつた事であるが、今日に至つて此暴論の事實になつてあらはれた事は吾輩の自ら快とする所である。

試みに能登國の長手崎か輪島崎かを中心にして北方北海道の根室宗谷、南方種ヶ島に達する約二百七十里の半徑を設けて輪を畫くと、恰度其輪が鴨綠江の處へ來る。只之には樺太千島は入らぬ。琉球臺灣も此外にある。其代り浦鹽斯德は裕に此内に含まるゝ。假りに之を小學校の地理の稽古と心得て、中心點を二十里計り西に進めて經度百三十五度、緯度三十八度の處を選んで半徑三百三十里位のものでコンパスを廻はすと、樺太の南部が入るし、遼東半島も入るし、哈爾賓も威海衛も其内にある。之を第二の輪と稱して置かう。又倘地理の稽古の爲めに第二の中心より中心を僅かに五十里許り北に進めて經度は同じ百三十五度、緯度は四十度を中心として、北、樺太の日露の國境線五十度の處を堺とした半徑(此長さ殆んど三百五十里)を以て第三の輪を畫くと、此第三の輪の中には南滿洲はいふまでもなく、北滿洲も齊々哈爾も黑龍江も入つて、南の

方は、琉球も入らんけれども、北の方丈けは役にも立たぬ寒い土地が澤山に入る。子供の戯みには誠に面白い輪が出來るのである。

米國の人口調査のある毎に、人口中心「センター、オブ、ポピユレーシヨン」を移して各地方の人口調査を計る。恰度物理學者は重點を計るやうに社會學者が好んで此人口中心點を研究するが、米國は大陸であるから中心點が常に國内に止るけれども、吾輩嘗て北海道の人口の増加を調べる爲めに、明治十年頃からの北海道人口の中心を或學生に調べさせた處が、年によつては、折々室蘭の近處の海中などに落ちることがあつた。況して無形なる國力の中心を求めたならば、島國なる日本に於ては中心點が海に來ることのあるのは毫も怪むに足らない。或は新領土といひ、或は保護國といひ、或は租借地といひ、或は勢力範圍といひ、國力の及ぶ厚薄輕重は自ら度があるけれども、發展的の國の威勢は恐らくは中心も漸々動きはせぬが。今三つの輪を書いて見て自ら戯れる中には、隣國の領土を掠める所存などは無論ないが、國勢の發達する順序は或は斯くの如き方向に進みはせぬか。第三の輪の如きは、僅かにもう百里も半徑を伸ばすと、北京に達するやうになつてゐる。連日の雨に閉されて徒然の餘りに小學地理を出してコンパスを弄び、以て聊か洪水の損害を忘れたから玆に記して讀者の慰みに供するのである。（九月十三日）

我が上古に於ける韓半島の勢力を論ず

文學博士　白鳥庫吉

明治の歴史は申す迄もなく日本歴史中最も光輝あるもので、後世我々の子孫が歴史を書くに至れば明治の

時代は特に其注意する所となり、上は政治より下は百般の技藝に至る迄是に向つて多大の研究を用ふるてあらう。明治時代に至つて歐州文明を採用し、文明が大に進歩し、世界文明の大綱を覺えたのみかは、今や其文明に於ても正に世界と驅馳する勢を成して來た、之と同時に政治上に於ても嚢に日清戰爭があつて淸を破り、後に日露戰爭があつて露を挫き、今や千四五百年前よりの疑問たる韓を併呑し、其領土に於て、其人口に於て、共に稀有の膨脹を見るに至つたので、明治の歴史は如何しても日本の歴史中正に一大特筆を要するものである。後世子孫が必ず深く注意を明治の維新に集むることは今日より優に想像の出來ることてある。斯くも國運の盛大を致した所以は、明治の當局者及び國民が、拮据黽勉して外國の長所を採り、又忠君愛國の念に深く、能く一身を犧牲に供して公益を圖つたに由るものである。

けれども明治の歴史のみを讀み、現代の事實のみを知り、日本國民にして此成功のみに慣れ、外國と戰爭すれば常に勝ち、外國と交渉すれば常に成り、外國と貿易すれば常に利するとのみ見るものは、日本人には萬不能の事無しと爲す憍慢の心を生じ、其爲め或は今後更に發展すべき機會を失し、或は思慮疎忽に流るゝか或は早計に失するの傾無しと限らず、諺にも言ふ、「勝つて兜の緒をしめよ」と、日本人は今日の成功を喜ぶと同時に、大に小心翼々として後來を戒めなければならぬ、左もなくては或は不虞の恐無しとも斷じ難い、されば世人の相慶して今の成功を謳歌する際に、敢て私が我々の祖先が過去に於て國家の經營上に失敗した所以を述べるのは、最も時宜に適したものと稱すべきてある。是が玆に我上代の人々が韓國に對する施設の失敗談を爲し、世人の注意を催さうとする所以てある。

當今の日本の歴史家は此度の日韓の合併を以て是は復古てあると言ふ人が多い樣てある、此の如きは日本人が自己の成功を祝するの意て、又之によつて日本國民の自信力を附ける考もあるものとすれば、必ずしも

之に向つて彼是れ言ふの必要はなからうが、眞正な歷史家としての立場からは、其言餘りに奇矯に失して實際には合はぬ處があり、其儘には信用出來ぬと思ふ。我國の歷史を顧るに、元來勇武な國民で外國と戰つて負けた事は少い、現に神功皇后、應神天皇の時代に日本の大八州を統一され、更に朝鮮の南端に迄領土を有せられた事は一の事實であつて、我國民の上代よりして能く勇武なることを證するものである。

とはいへ、神功皇后の時に朝鮮を征伐し、土地を取つたといふ、其取つたといふ土地は何邊であるか、其地域は如何程であるか、又日本に朝貢したといふが其內容は如何、日本の勢力の及べる範圍は如何、朝鮮が盡く日本に歸服したか、中には敵意を表するものは無かつたか、此等を仔細に研究して、扨て神功皇后の韓國を經營した時代に、今日の日本が果して復歸したものであらうか、之をば更に歷史上より公平に眞面目に判斷して所見を發表する要がある。それ故順序として先づ神功皇后の三韓征伐を說かう。

日本の神典を見るに素戔嗚尊は新羅國の曾尸茂梨に行き韓國を統治したしといはれたといふ事がある、日本の古を論ずるものは多く此によつて、日本は大古より朝鮮半島を經營したと思つて居るけれども、元と是れ神典上の事であつて、之を直に歷史上に採り此の如く棒大に考ふるは宜くないと思ふ、尤も神典上の記事とて矢張り歷史の範圍であるから、其傳說に本づいて日本が韓半島に勢力を有した事だけは認め得るけれど、之に因つて直に韓半島を當時よりして統治したと認むる事は、科學的學問的には如何しても得がたい結論である。

次に支那の古記錄、日本の記錄によつて日本上代の歷史を考へ見るに、西曆三四世紀頃の間には、我國には大和朝廷が確然立つて居たに相違無いけれど、其朝廷の威力が善く及んで居たとは言へない、其命令を奉ぜぬ國が九州邊に在つたことは確然として居る、九州の方には熊襲が居つて、景行天皇より神功皇后に至る迄、代々征伐されたことは誤ないことである、それて

其如何に大和朝廷の命令を奉ぜなかつたかが分る。支那の記錄中日本の上代を記すものに魏志なるものがある、それに倭人傳なるものがあつて日本の上代の事を色々に書いて居る、日本の歷史に關する部分は現在魏の時の人が我國に來て、見聞して行つた事を書き列ねたものが多いから、我上代の歷史を知るには非常に有益な史科として見るを要する、その文に據ると、魏の時代即ち紀元三世紀頃に九州が二勢力に分たれた、其二勢力は如何なるものかといふに、先づ九州の北半、即ち肥前肥後豐前豐後筑前筑後は卑彌呼なる女王が之を治めて居り、それより以下大隅、薩摩、日向及び肥後の一部分は、更に狗奴國なるものがあり、卑弓彌呼なる王が之を支配して居つた、是である、是が兩々相對峙して互に雌雄を爭つて居た、其中女王なる卑彌呼は魏國と結び、魏國の都に使を遣つたことがあり、又朝鮮に於ける魏の領土、帶方郡樂浪郡等に使を遣はし、親魏倭王といふ封冊を貰ひ、魏國の威光を假りて九州に覇を爭ひ、南方の狗奴國と互に相鬩いだことがある、當時に於て大和朝廷は元より日本帝國全土の正當なる支配者であつたけれど、其威力は九州半島に及ばなかつた、それ故魏時代に稱して倭國といつたのは九州地方を重に指したもので、決して後世に言ふが如く大八州全躰を指したものでは無い、

然るに、茲に大和朝廷の勢力の大に發展する機會が生じた、九州の二大勢力が相爭ふ中に、卑彌呼は狗奴國との爭に負けて遂に死んで仕舞ひ、其後に相續人は立つたけれども、九州北部の統一は是よりして全く弱くなり、南方狗奴國の勢力が獨り大を加へた。魏志の所謂狗奴國は日本の所謂熊襲の事である、女王國の衰勢は狗奴國との戰敗に因るものだけれども、尙ほ其上に今一つの原因がある、それは支那國の二郡帶方郡樂浪郡が晉の時代に亡びたことである。即ち晉の時代に五胡の亂が起り、西戎北狄が支那にドシ／＼亂入して國を建て、晉は遂に黃河の流域を支配することが出來ず、後には楊子江の方建業に退いた。當時鮮卑といふ一種屬が居るが是は蒙古人である、其中に慕容氏なる

ものがあり、奮ひ起つて支那、朝鮮の間なる直隷省の北部から盛京省一帶の地に據つたから、支那と帶方樂浪二郡との聯絡は全く絶たれ、それで二郡は遂に支ふる能はずして亡びて仕舞つたのだ、此大陸に於ける政治上の大變動が、又間接に我日本國の勢力に影響し、從來支那の勢力を笠に着て來た九州北半の女王國は、遂に此支那の出店なる朝鮮の二郡の滅亡と共に其勢力を失墜したのである。即ち其頽運には此の如き二大原因が存するのである。

此の如く九州の二大勢力の或る部分に弱味が生じて來た、之を大和の朝廷が知つたに相違ない、此に於て景行天皇から仲哀天皇に至る迄ドシ／＼征伐を續け、九州の北半を他愛も無く征服した、女王國は即ち此の如くにして早々降服したけれども、獨り頑强なのは熊襲で是のみは容易に降服せぬ、けれども當時の日本の朝廷は如何かといふに、中國四國は皆我命に從ひ、九州北半も既に左樣である、此の勢からして仲哀天皇の末年より神功皇后の時に及んでは、熊襲も遂に屈伏して命を奉ぜざる譯には行かなくなつたと思ふ。日本の勢力は皇室と終始する、皇室の勢力が盛なれば必ず其餘勢が韓半島に及ぶのであるが、然らば當時の韓半島の形勢如何と顧るに、是れ亦我に甚だ好都合となつて居つた。といふのは朝鮮半島には、三國時代、晋の朝廷迄はまだ帶方樂浪の二郡が置かれた、即ち今の黃海道、京畿道、平安道は支那の出店で勢力があり、又今の咸鏡道、江原道の地には滿洲種族が居り、更に又南方、今の慶尚道、忠淸道、全羅道の方面には三韓とて、馬韓、辰韓、辨韓が各々國を建てて居る、斯くて權力の平均が取れて居た、然るに五胡の亂起つて、朝鮮にある支那の勢力が亡びたものだから、其隣境に居た滿洲の一族高勾麗は、今迄長く狙ひ切つて居た事とて忽ち手を伸ばし、鴨綠江の上流を根據として帶方郡樂浪郡の地を盡く略取し、更に滿洲人の據つた地域を盡く其治下に收め、俄に尨大なる勢力と爲つた、其爲め政事上百般の關係には大變化を生じて來た、此に於て從來態度極めて緩漫であつた三韓も晏如として落着く譯には

行かぬ、馬韓のみても五十四國といふが如く、各々幾多の小國に分裂して一致を缺いて居たことゝてあるけれども、斯くては愚圖々々すれば皆高勾麗に呑まれて仕舞ふから、勢を合せて大きくする必要ありと感じ、馬韓の中から百濟が起り、辰韓の中からは新羅が起り、そして辨韓だけは日本に歸服し、日本の勢力の下に任那の國が出來るに至つた、如何にして任那が日本の勢力に依つて出來たかといふに、神功皇后時代には日本の勢力の强かつた事それもあるけれども、同時に又彼には大混亂を窮め、任那や百濟は北方高勾麗に攻められ、東隣新羅に脅かさるゝ恐がある所から、已むなく我日本の勢力を賴んで自己の國家を維持するの必要を認めて來た、が此中最も日本に信賴して來たのは任那てあつたから、其處て純然たる國司を其國に置くことゝなり、任那府なるものが、今の金海即ち昔の加羅の地に設けられた、百濟も我に朝貢し、其結果遂に新羅も亦進んて朝貢國となるに至つた。が誠意を以て我に歸服したものは前二國て、新羅は中心背いて居るものてあるけれど、四圍の勢ひ已むを得ず我に好意を表せざる可からざるに至つたものてある。それ故其後新羅征伐が度々あつた。即ち此の如くにして我は朝鮮半島に勢力を樹立する好機會を得たのてある。

日本の韓半島に勢力を樹立した事實は以上の如くてある。それ故日本の眞の勢力といへば只一任那に在る。今の慶尙道の南部てある、即ち洛東江と知異山との間に挾られ居る三角形の地面丈けてある、是迚も其地方の役人等皆悉く歸服して居たかといふに左樣てはない、任那の中には十ケ國もあり、それにはカンキといつて皆王があるが、日本は只それ等を一統の下に總轄して居たといふ丈て、地方の政治は皆土民の手に委してあつた、此の如きの有樣に於て僅に日本の勢力範圍となつて居たのてある、百濟新羅の關係は既に前述の如くてある。以上が我上代に於て最も朝鮮に勢力ある時期てあつたのだから、之を以て現代の我朝鮮に於ける勢力とは比すべくも無い、從つてそれを指して復古とは言ひ難い、其領域の大小。其政治上の勢力。軒輊

の餘り甚だしき、此を以て彼に比する迚も釣合を得ぬのである。

古事記には見えぬけれど日本書紀に據ると、神功皇后の三韓征伐の時に、日本の勢力の强さを見て高麗なども皆降參したとあるが、之を若し歷史上の事實と見るならば、當時の日本は餘程大勢力であつた樣だ、何となれば高麗は朝鮮の北部を支配して居たものだからである。けれども日本書紀に高麗迄も日本に降參して來たとあるのは根本的誤謬である。そして是が抑も日本國民を謬らしめた唯一の記事である。

高麗といふは扶餘の一種であつて元來は滿洲人である、此滿洲人が南下して朝鮮を支配したのだから、治者は固より滿洲系統である、役人位には朝鮮人も居たであらう。此滿洲人が仲々强いもので、迚も日本紀にある樣に日本人に降參する樣なものではなかつた、それを證するには更に支那の方の記事を見るが宜い、又鴨綠江の上流に好太王の碑といふものがある、好太王は神功皇后、應神天皇時代の高麗の王である、即ち其時代に大に領域をめ擴たこの故を以て廣開土王の稱ある人だが、此碑は即ち其子の長壽王が建てたもので碑文が刻んである。それに據ると、中に、倭、海を渡り來り、任那、百濟、新羅を從へたりとあるから、此事だけは慥に事實である。けれども高麗と戰つては日本は惜い哉負けて居る、彼と戰つたのは前後二回、一度は帶方郡に於て。即ち臨津江の河口である。一度は平壤邊に於て。此戰爭の時に日本軍は散々に負かされて居る、勿論子たる長壽王が父たる廣開土王の爲に碑を建て、其偉功を後世に傳へんとするのだから、誇誤は有ろうけれども、さりながら負けたを勝つたと迄は書けぬであらう。況んや廣開土王の時の彼の勢力を頗るに、盛京省方面にも甚だ膨脹して居た位であるから、それより推しても頗る强大であつたことが知れる、從つて我國の志を得なかつたことも知れる。いやそれ處ではなく、彼は始終新羅の後押をして日本を韓半島より逐はんとして居つたことは當時の記錄に明かに見えて居る事だ。すれば神功皇后の時に彼樣な高麗なる强

國が何等の理由もなく、我軍の勢力が偉大だからとて使を軍門に遣はす事のあるべきであらうか、日本人にして健全の頭腦を有し正當なる理解を用ふる人には、到底斯る說を否定せずには居られまい。

日本の勢力が其遂に朝鮮半島に於て失墜した大原因は高麗に在りとすべきである。高麗は單に朝鮮に對してのみでは無く、日本に取つての大敵であつた、之を近代に比すれば、大小の差に於て少しは倫を失するかは知らんが先づ日露戰爭前の露西亞の位置を占むるものだ。朝鮮に於ける日本の勢力は、露西亞の勢力の強大なる間は到底十分には伸びなかつたであらうが、それと同じく當時に於ては彼の高麗の勢力をブッチめざる以上は日本の勢力は如何しても朝鮮半島に擴がるを得んのであつた。此點大に翫味すべき値がある、兎角日本人は古の事は去つた事である、去つた事は二度と戾りはせぬ事と、意に介せぬ傾がある、特に政治家を然りとするので、往々にして歷史の價値を眇視せやうとする。が同じ地域、同じ人種、同じ勢力といふ關係に於ては、歷史は大抵同じ事を繰返すものである、現今に於ける日韓の關係は、大體に於ては昔と變る處がない、即ち應神、仁德、欽明の朝に於ける高麗は恰も日露役前の露西亞の如く日本の大敵であつた、不幸にも日本にして彼の戰役に際し露西亞に負けを取つたとしたならば、恐らくは我勢力は綺麗に韓半島より洗ひ去られたことであらうと同じく、往時の日本の高麗と頡頏して叶はなかつたことが、遂に韓地に勢力を失墜した所以であつた。

兎に角當時に於ては高麗と日本とは絕えず睨み合つて居た、高麗は朝鮮併呑の野心があるが、其處には日本なるものがあつて容易に併呑が叶はぬから、謀を案じて新羅を離間し、己れ其後押しをして向ふには、汝にして我力に賴るならば、日本への朝貢を止めて宜しい、立派に獨立させてやると、新羅は此に於て、敢て高麗の力に賴つて日本に背かんとした、これが彼の當時に於て策した一大政略であつて、そして之を永く後代に至るまで繼承して來たのである。即ち今の朝鮮が

或は濟、或は露に頼つて敢て日本の勢力より免かれ樣と勉めたのは重に此政略を[illegible]述したに過ぎないもので、新羅が實に其偏を作つたのである。歷史は實に同じ事を繰返すものである。只それ明治に於ては露西亞を倒したから前には統監府を置き、後には遂に合邦といふ目出度いことゝ爲つたが、上代の歷史は之と反對に行つた、て日本は遂に高麗に對して志を逞うするを得なかつたので、北方敵國と境土を接して陰忍して居た、すると新羅は高麗の使嗾と後援とによつて絕えず我國を半島外に排斥せんとする。此新羅こそは實に朝鮮に國を建てた元祖であつて、箕氏の朝鮮の如きを擬するは當らない、彼れは只支那の殖民地で眞の朝鮮では無い、眞の朝鮮は新羅であるが、是が前にも言つた如く、能く背後に大國と結んで面前の勢力を排斥するといふ、トラヂショナルポリシーの元祖を爲したもの、後代の朝鮮が我文祿の征略に對して能く明と結んで之を防いだ如きも矢張り此政略を踏襲したものだが、斯かる政略を玉碎とする彼の事とて、實に日本書紀にも見ゆるが如く、反覆常なきの狀態、我國では大に持て餘したものだ、而かも此反覆常なき彼の實情は、我國の歷史のみに見ては薩張り分らぬ、が向ふの歷史を見れば知れる、即ち我勢力に對峙する高麗の勢力の消長が常に其樞軸となつて居た。斯くて我欽明の朝に彼は、任那を亡ぼしたが、是れ亦背後の高麗の力によるもので、應神天皇の遂に志を朝鮮に得給はなかつたのも職として高麗の爲であるとせねばならぬ。此處迄を以て我が上古に於ける勢力失墜の第一期とする。斯くして我眞正の領土は韓地には全く失はれて仕舞つたのである。

任那滅亡の外因は斯の如く高麗の勢力であるが、更に內因とすべき第二のものがある。日本人は一旦緩急あれば直に擧國一致をいふけれども、平和の時には兎角內輪同士で遺外の臣僚間にも反目嫉視をする。即ち當時に於ても彼の地の役人が國司を始め互に謀りて忠實ならず、却つて相爭ふことをした。是が我勢力を彼地に失墜せしむる一原因を亦形つたものである。

高麗は如何して此の如き勢力を得るに至つたか、當時の高麗は朝鮮の北半から吉林省の一部と盛京省の全部、即ち殆んど今の南滿鐵道の區域位の處を其領土として居るが、此の如き雄邦が如何にして成り立つに至つたかといふに、支那との關係で、彼の五胡、南北朝の亂が然らしめたものである、北朝の拓跋魏といふ蒙古人の國と南朝の宋齊梁陳と兩勢力に分れて相爭つたが爲に、支那の壓迫は遂に東方に及ばず、此機を利用して高麗は大に起り四方を併呑したのである、此れが無かつたならば彼は容易に起ることは出來なかつたであろう。兎に角彼は强國となつた、そこで南北朝の末に隋の煬帝は高麗を征伐し、四百餘州の衆を以て足らず、更に突厥蠕々の兵をも傾けて向つたけれども遂に勝てず、國勢之が爲に萎靡して自ら滅亡を招くに至つた、次いで世は唐に移り、太宗が天下を一統したので、其勢力は煬帝以上であつた、それが更に內外の兵を盡して再び高麗に迫つたけれども、是れ亦志を得るに至らずして終つた、が高麗に取つては容易ならぬ勢力が直に境を接して來たのだから決して戒心を怠ることはならぬ、此に於て彼は大に考ふる所あり、從來日本と絕つて獨り朝鮮半島を掌握せんとした政策を廢し、ガラリ態度を改めて日本と結托し、北の方恐るべき雄邦の勢力に當らうとした、此に於て今は同一利害の下に日本と高麗と、更に日本とは從來好かつた百濟とが相結ぶとゞなり、其結果反覆常なく互の間に是迄憎まれて來た新羅をば、敢て亡ぼして三國で以て山分にしやうと考へた。新羅の勢は一變して今や孤城落日四顧救なきの有樣となり、頻に煩悶に陷つて居たが、其際武人としての金庾信、政治家としての金春秋の二英傑が現はれ、春秋は大に外交的手腕を振ひ、唐に使して太宗に會ひ、之と結托して我聯合軍に當らんとした、日本では又一度欽明の朝に失つた領土の回復を策せんとして未だ其機を得ずに過ぎて居る。其後中ノ大兄皇子が首謀となり、先づ國政を整理せんとして驕傲の臣蘇我氏を殪し、大化の新政を布くに及んで、玆に又腕を海外に伸ばし一たび失墜した韓の勢力を克復せんと企

てた、今や幸に高麗、百濟皆我國に親んで居るから、進んで自ら盟首と爲り、大に唐と新羅とに當らうといふ大計畫を立てた、新羅の唐に頼るは是れ已に上來述べて來た政策に依るものである。

遂に機會は到來した。唐の太宗の子高宗の時に、唐の軍新羅の軍と連合して遂に百濟を攻め亡ぼしたから、此に於て日本は主として百濟を回復し樣と思ひ、王子豊璋を送り還すと共にそれに人數を附し、斯くて白江といふ處、即ち今の錦江の地に於て我水軍と唐の水軍とが衝突し、戰爭を開いたが、惜い哉我軍は大に敗北して仕舞つた、是は齊明天皇の時代である、斯くて百濟の回復は永久望み難くなつたと同時に、高麗も亦亡されて郡縣になる。新羅獨り半島に殘つて勢力を維持することゝなり、玆に日本の勢力は薙張り拭ひ去られて仕舞つたのである。

如上の關係を日本人は能く知つて居るか如何か、日本人は現代の歴史を見、今日の事實をのみ知つて、常に勝つものとばかり思つて居てはいけね、勝つたことを知ると同時に、又過去に於て此の如く負けた事の有る事をも知らなければならぬ。自國の長所をのみ知らしむるは、自尊心の養成には必要でもあらう、自尊心は、一國としても一個人としても常に必要なことではあるが、それにも程度がある、若しも交を過ぎて傲慢となり不遜となり向ふ見ずと爲つてはいけぬ、一個人としても自負心のみ強くては社會に圓滑に立ち行くことは出來ぬが、一國としても、所謂ショーヴィニズムと爲つては國際關係を圓滿ならしめて行くとは難い、而して之を抑ゆるには、長所を知ると共に更に短所をも併せ知るの必要がある。個人としても偉大な人間であれば決して諂諛をのみ好むものではない、胸に一個の確信あり自尊心を持つと同時に、友人若くは親戚の好意ある忠告をば十分に容るゝの雅量あるものだが、一國として亦同樣であつて欲しい、即ち自尊心のあると同時に、十分に自國の缺點をも聞き入れる雅量があつて欲しい。今日我國の實に光輝ある歴史を有する事は世界萬國に對して大に誇るべき處であるが、同時に

我々國民には如何なる缺點があるか、常に今日の如き光輝ある歴史のみを有して來たか、之を究めて之を知るのも亦必要な事である、斯くて又明治の御聖世の光輝なるものが、上代に於ける吾人の祖先の失敗と反映されて益々光輝を増すことゝ思ふ。而かも此說を爲すの要旨は茲に盡くるものではない。過去に我々の祖先が外國に於て負けたといふが、其時の狀勢と結果とは如何であつたか、即ちそれより得たる敎訓は若しも朝鮮に於て北方より來る勢力に負けると、常に我は大陸より追ひ去らるゝといふ事である。斯かる好個の適例が、之を遠く尋ぬるに及ばず、近く我上代の苦き經驗の歴史中に存在して居ることだから、其由つて來る所の理由を十分に究めて置けば、朝鮮の北より迫る敵に對しては、向後と雖も、如何なる犧牲を拂つても常に十分に戰爭すべき、其覺悟と其準備とが無くてはならぬことゝなる、それ故茲に我々の缺點を擧げ置くとは、敢て長所を發揮するに讓らざる効力あるとと信ずる。

前號に豫告したる田中王堂氏の「ルーズベルト論」は更らに新材料を手に入れられたる爲め更らに研究すべき問題を發見せられたる由にて本號に掲載する能はざりき。之を讀者に謝す

人物評論（十）

山縣公論

△公山縣有朋

三宅雪嶺



明治年間最も威權の盛なのは西郷戰死後の大久保と伊藤公薨去後の山縣公とである、大久保は實權を收めた者の、官職に於て上に三條公があり岩倉公があつた、山縣公は實權のみでなく、名義に於ても第一である、固より官制の上國務は內閣員の擔任する所である、公の現職は樞密院議長である、議長は西園寺侯もなり、

別段珍しく無い職務であるが、公に於ては殆んど關白同樣である、關白を罷めて太閤と爲るとすれば太閤同樣である、軍事に於ては最も先任の元帥である、實に武官の首領たる上に文官の首領である、二十七八年役あり、三十七八年役があつてより、文武に跨らなければ政務を綜理し難い有樣となり、現に桂侯が首相であり、之に次いで、或は寺内子が首相と爲るであろうと想像されて居る、そして是れが皆山縣公の配下である、公は强ち干渉しないにしても、隱然たる勢力は政府部内を威壓するに餘りある。

所謂維新の元勳で今日に殘つて居るのは山縣公及び板垣伯である、併し板垣伯は政權を離れて既に久しい、山縣公は維新前槍を執つて立ち、幕府の兵を退けて忠を朝廷に致したが、功勞よりすれば必ずしも大でないかも知れぬ、論功行賞の節賞典祿板垣千石山縣六百石といふを以ても推される、西郷は實に二千石であつた、併し功臣が順次墓に入つてから餘す所幾干も無い、山縣公が朝廷の御覺え目出度いのは固よりのことである、品川念佛庵の所謂長州の三尊伊藤、山縣、井上は後政府の三尊と認められる樣に爲つたが、陛下の御信任の厚いことは伊藤公を第一としたるやに傳へられる、けれど公は忠誠の人であつたにせよ、屢々咫尺し奉つたのは比較的政治上の智識に富み、特に西洋の事情に通じ憲法は如何いふもの、法律は如何いふもの、略ぼ之を理解したからであらう、山縣公は斯樣な譯に行かぬ、軍事に通じて居るが、憲法か何かに就て疑問の出る場合に困難する、從つて伊藤公の存命中或は一歩を讓らねばならぬ關係もあつた。

井上侯に至つては二公を調停する役目で、屢次之が爲に心配した事がある、けれど御信頼の厚い方で無い、曾て法律に問はるべくして、僅に免れたことの明かに知られて居るのがある、三尊とはいふものゝ、何程か重きを占めて居るのは二公に對して我儘の言へるといふ點からである、獨立しては勢力の頓に減ずるであらう。そこで政府の中心人物と認むべきは伊藤公と山縣公とであつたが、一方の伊藤公が無くなつては山縣公の一

人舞臺と爲るのは自然の順序である、井上侯は我儘が言へるにしても、要するに附屬物たるに過ぎぬ。

山縣公自らに勢力のあるのか、御信賴が厚くて勢力の現れて居るのか、何にせよ此頃の政府部内のことは公の意思に背いて成るべくも無い、別段一々指圖するても無く、人が意見を聞きに行つても六かしいことは言はぬ、知らざるを知らずとし、新時代の事は新時代の人の任ずべきことゝして居る、成るたけ人任せにして居る、穩かである、優容迫らぬ調子である、が一つ其機嫌を損ねては成る可きことも成らなくなる、兎に角伺つた後にするといふ形を備へなくてはならぬ、實際桂侯なり平田男なりが自ら目論んで行ふのであつても、全く山縣公の命を聽いて爲すかに取り扱ふ樣になつて居る、桂侯は如才がない、公に對して如何にすべきか位の事は飽く迄心得て居る、が心得て居つても飽く迄親分子分である、一の子分といふ位の處である、曩に伊藤公に屬して幅をきかした者は今頗る身じめな有樣となつた、兩屬の形で居たものは位置に安んじ居ることが出來るが、一向ら伊藤公を賴み、公は至尊の御覺え目出度、剩へ身體强壯で、これから先の政治は公に賴るに限るとして居た連中はひどく力を失つた、改めて山縣公に伺候するも遲し、桂侯を通じて僅に旨を伺ふ樣になつて居る、實に今の政府の中樞は山縣公である、其機嫌を損ねては事甚だ面倒になる、公は井上侯の樣に機嫌變へてはない、漫りに喜怒を現はしはせぬが、現れぬ間に自ら意向の仄見ゆることがある、政府部内では旨を承けてそれに副ふ樣に勉める、御機嫌伺ひ許りて高い官に居るのもある。

公を以て威權赫々といふは形容詞の當を得たもので無い、公は威權赫々を喜ぶ程に淺薄でない、もつと錆を附けて居る、見えぬ處に控へて力を外に及ぼして居る、公ほど力の深く廣く及んで居るのは多く見難からう、若し公にして識見に富み、國家の爲社會の爲に謀りて宜きを得たならば、効果の大に見るべきものあるだらふが、公も人間である、完全を望まれぬ、若し謀つて宜きを得なかつたならばそれ丈害の發る譯である、

公は或る人からは正直な人と見られ、他の或る人からは煑ても燒いても食へぬものと見られて居る、伊藤や井上は煽てに乘るが、山縣丈は致方無いと言はれる、けれども是は見様に因るのであつて、公は正直で無いといはれぬ、口にする所を守り、友人に對する情も厚い、けれど單純でない、煽てゝも何の爲に煽てるかを見透すことが出來る、善い加減の煽てに乘りはせぬが、ても自分の子分といふ如き邊からは隨分煽てられる、併しそれとても幇間におべッか言はれる様な風に心得て居つて、容易に誑されはせぬ、愈よの場合に承知せぬ、惡いことゝするのを大目に見ることがあるが、きッと睨んで居る、ても自分の爲に利益を謀り吳れるものがあれば之を謀らせる、財産も少くは無い、一の富翁てある、餘り彼れ是れ言はれぬ範圍で、利益を得る丈のことはする。世の中の事は一筋で通るものでなく、それ位のことは敢てしても差支ないと考へて居るらしい、之を乃木大將の正直といふ意味でいへば正直といはれぬ、が二枚舌を吐く様なことは愼んで居る。

公は實生流の謠を習つて居る、仕舞をも習つて居る、其學ぶや師匠の言ふ通りにして、直すべき處は直し、汲々として型を守る、が是は謠曲のみでない、凡てを通じて左様である、公は天才肌でなく、名人に爲れる方でない、が上手にはなれる。戰場に出ても神出鬼沒などは夢にも望まれぬ、きまり通りの事をして何處迄も勉強するのである、元帥として最も先任であり、戰爭の場數も踏んで居るが、特に戰略として稱すべき程の者は無い、西南戰爭は力づくめである、兵器彈藥に富んで居たが爲に勝つたとも言ふ可きである、二十七八年役に第一軍司令官として出征した、けれども平壤は野津大將に於て包圍に着手した、それを公は待てといふ、野津は待たれぬとて包圍して遂に之を陷れた、後に山縣公は雪中を行軍したが、病を推しての勉強は褒むべきであるが、軍事上の能力の現れた處は少い、三十七八年役は留守居の參謀總長である、戰場の軍人が陞爵又は授爵されたと共に公も授爵されたが、公の戰場の軍人として何れ程の働が現れるかは人之を知る

に苦む。拿破翁の如き電光石火の働の無いは勿論てあるが、モルトケの様に機械的に大軍を扱ふのも六かしい、併し威望は慥にある、其點に於て大山元帥の上てある、總司令官として大山位の事は爲し得るてあらう。或は戰略よりも戰術に長ずる方てあるかも知れぬ。元と槍を提げて奮闘した方てある、鹿鳴館の假裝舞踏に荻原鹿之助源有朋とか書き附けて、槍を提げて現れ出たことがある凡將ては無いが、戰史に何程の記錄を留めるかは之を明にし難い。

　さればといつて政治上に何等の手腕あるかも明白てない、が秩序を守り之を維持するの力は慥に有る、維新の變動からして國家は絶えず發達して來、此と共に秩序を維持するの必要があつて、公は實に此秩序を維持するの任に當つた。武と文とを兼ねたが爲に其便利も多かつた、保安條例執行の際の如きも背後の軍隊を賴んだのてある、秩序の維持は缺くべからざることてあるから、其點に於て功ありとせなければならぬが、發達は或る點に於て舊秩序に變改を加へるものてある、公は頑冥といふ程てなく、改むべきを悟れば改めもするが、どちらかと言へば秩序を維持するに專てある、變改といふ方ては伊藤、板垣、大隈等の數氏に功を讓るべきてあらう、秩序を維持するも一の大任てあるが時代の進歩に應じ發展を誤らぬのも亦一の大任てある、露國のポベドノスチェフは秩序を維持するに於て類の無い人物てあつたが、露國に利を與へたか害を與へたかは疑問てある、山縣公はそれよりも物の理に通じて居る、日本の政府の發達に伴ひ之を助けて來たのてあるのが、公の如き大なる勢力を以て今少し識見に富んて居たならば、更に功績の見るべきものがあらう。

　公は自ら一介の武辯と稱するが、政治に與つて融通の利かぬ方てない、して強ち文事の無いてもない、歌に至つては殆んど堂に入つて居る、詩と歌と漫りに比較する譯にゆかぬが、標準を古來の大家に求めるなら、公の歌は伊藤公の詩に優つて居るてあらう、公自ら之を以て天狗に爲つて居るといふ事が、一の愛嬌と見られるならば公に於て幸てある。

△山縣含雪公

松井柏軒

▲山縣公の評を一言にして盡さば『嚴明』といつて適當であろうと思ふ、其の風流韻事の外は、總て此の嚴明の二字で盡される。

▲武人としての山縣公は、今日茲にいふ限りて無かろう、併しながら其の閫外に在るや、勞を士卒と分つの誠意は有た、現に日淸戰役の初め、第一軍司令官として出征した時、獨り純白米の飯を食するに忍びず、其れを全國の兵士に分つたから、兵士等は赭色の上に斑々白粒があるといふ奇飯を喫するに至つた、又軍司令部のためにとあつて、二十幾人前の洋食材料や其の器皿まで用意したが、公は全軍の士卒にまで行渉るかと聽き、ナニ司令部のものばかりと、怪しかる事、其樣なるヿは罷成らぬぞと極め付けて、竟に一ぴも用ゐたヿが無かッたといふ、斯く上下に勞を同くはするものゝ、階級思想は極めて嚴明て、如何に將校と雖も、一點非違の處あれば、寸毫も容赦せぬといふ有樣である。制令も軍紀も軍略も皆嚴明て、精細て、過誤のない代りに又突飛な冒險的な果敢な大膽な處もなかッた、故に武人としては少しも危な氣は無いが併し又奇効を奏するといふヿもなかろう。

▲公は至尊に伏奏するに、侍從長か侍從武官長かゞ侍立の時てなければせぬ、苟くも單身て伏奏するヿがない、是は伊藤公などと全く違つた遣方て、また嚴明な主義の發露した一ッと視るべきである。

▲政事家として公の遣口は、總て局面を區分して、其の區分された局面丈けはテキパキと遣る、局面區分といッても、無論大體の大方針から割出されたものであろうけれど、例の嚴明主義だから、其の區分されたる局面丈けにはドウにかコウにか目鼻を附けるか、必らず思惑通りに遣り遂げやうとする、故に遣口に大マカな、餘韻のある、一種いふべからざる妙趣などは竟に見得るヿが出來ないけれど、其の代り萬事キリッとしヒリッとして、如何にも引締る處がある、だらしのな

い、紀綱の解弛した後などを承けて刷振し振粛するには、實に持て來いの遣方である。

▲何といつても、嚴明である、其の代りセヽコマシイ、大まかてなくて狹苦しい。

▲公を以て議員買收の開山、政界汚濁の本源だッたと惡口するものがある、何分にも初期の議會に臨んて、初めて試驗を仕たのだから、自由黨との妥協などに、一種の臭運動が有たのは蓋し勢ひの免かれぬ處てあろう、淸廉で立憲政治の本家本元のやうにいはれ、甚だしきは山縣公の發議會策を非難した伊藤公てすらも、自由黨の操縱に少からぬ黃金は用ゐたてはないか、彼の愛宕組などいはれた連中は、全く伊藤公の注いだ黃金液を浴せられたものてないか、伊藤公にして若しも初期議會に臨まば又矢張り開山とも本源ともいはれたてあろう、之を以て獨り山縣公を責むるのは公論てない。

▲といつて何も山縣公を辨護するのてはない、公は軍人だから、動もすれば勝を得さへすれば宜い、目的のためには必らずしも手段を擇ばずとも宜いといふ傾向が見へる、其れに區分されて局面、即ち斯く〳〵の區域と仕事と丈けは何としても仕上げて、テキパキさせるのは、少々位無理な手段は有てもといふ觀念も出やう、山縣式は何處までも嚴明な代りに、狹いばかりか事功を急ぐ傾向も見へる、世間動もすれば公を目して隱忍の、陰險のといふけれど、狹くて事功を急ぐものに其樣な筈はない、世間は大分に公を誤解して居るやうてある。

▲伊藤公は實に淸廉て有た、金錢に淡泊な點は、如何にも崇ぶべき程で有た、我が山縣公も亦然りて、其の自身は淸廉潔白て、苟くも其の手を汚されたとはない、買收政策などには、思ひ切て黃白を使つたものヽ、公素自から奉じながらも、伯たり、侯たり、公たる面目を傷けぬといふ、例の嚴明主義から、金錢にも亦嚴明て、苟くも曖昧な處がない、伊藤公などは豪奢放懷、能く濁水の如くに金錢を散じたものだから、若し其の收

支を明細に合計したならば、伊藤公の方が遙かに多く得て多く散じたてあらう、即ち金錢に淸廉且つ嚴明な點から言ッたら、山縣公は遙かに伊藤公の上に有てあろう。

▲今は實に山縣派の全盛の時代てある、何故に山縣派なるものが出來て、我が政局に山縣系統なるものが牢乎として拔くべからざる勢力を得たかといへば、公が能く士を愛して何處までも其面倒を見たからてある、一び之を知つて用ゆべしとした以上は、何處までも庇ふ、世話する、推輓する、例令一二の過失は有ても、苟くも明白に法律にても觸れるとか、甚だしく德義に叛するといふ方てない以上、何處までも庇ふ、世話を中止せぬ、之が山縣流儀て、多くの士の死心を得て、竟に山縣系なるものを生じた譯合てある、但し其の士を用ゆるにも、例の嚴明てはあるが、大分に見當を間違つて、所謂鷄鳴狗盜の雄たるにも足らぬヘナチョコ連も有たやうだが、今や斯る連中は淘汰せられて、立派な俊材のみ山縣系統として存在して居る。

▲地下の品川、内海、野村の諸子も山縣系のエラ物てあつた、桂侯を始め淸浦子も其れだ、今の內閣大臣の外、靑木子もある、松平男もある、波多野男もある、三島子もある、關氏もある、古澤氏もある、軍人中には無論無數て、實に濟々多士てある。

▲故品川子爵は伊山兩公と井上侯とは長州の三尊と言て居られた、が殊に山縣公に推服して幾んど師父の如くに思ふて居られた、子爵の如き人格て其れてあるから、以て公の人物を推想すべきてある。

▲山縣公が能く士を愛したとはいつても、何も之て自分の私威私勢を張るなどの念は毛頭も無かッたろう、唯だ君國のために士を愛するとか、天性の義俠て士を庇ふ位ゐのものてあつたろうが、其れが測らずも山縣系統などいつて、牢乎として拔くべからざる勢力と爲つたのてある、公に取ては寧ろ意外てあろうと思はれる。

▲政界に政友會あり、國民黨あり、中央俱樂部ある以上、山縣派が有たとて何も不思議はない、若し山縣派

なるものが政局に有害無益のものなら直ちに叩き壊すが宜い、苟くも眞面目に眞劒に考へるなら、何の手間隙が要るものか、唯だ政友會や國民黨の私のために、何とかしやうとするから面倒なばかりてある。

▲山縣公の和歌は、伊藤公の詩以上てある、頗ぶる餘韻がある、最早隱居てはあるが、其の政事家としての遺口も、此の和歌のやうに有りたかッた、ト今更ながら追想される。

▲繰返していふ公は、總てに於て嚴明てある、而して小心翼々以て萬事に接する、之が公の本領面目で、陰險とか陰忍とかいふガラては斷じて無い。

△山縣公に對して思ふ所

田川大吉郎

僕は山縣公に對して常に思ふ、何といふ影の薄い人てあらう、其往く所、立つ所に、巨人としての光芒生彩が殆んど見えないと。

殊更に謂ふ迄も無く、狂介時代の彼は、半浪人の資格に於て宛然革命の面影がある、明治の彼は寧ろ循吏傳中の人として、軍人と爲り、政治家と爲り、首相と爲り、日清日露兩大役の帷幄第一の功臣として、其生涯は變化に滿ち、事功に富み、所謂位人臣を極めて飛ぶ鳥も落さんばかりの權勢を擁し、看玉へ、今回の貴社の企てに對しても、本名を掲げて公然評論を試むる人は澤山有るまいから、其れ位ゐだのに、其の割合に聲名が江湖に嘖々たらず、それは相應に喧しいとした所て、其行住趨舍の跡が、割合に靜かて、寂しくて彼の英雄に普通に見る、晴々しい、華やかな賑かな、豪放濶達の趣が稀にしか見えない、山縣公は何となく、生氣、活氣、奇氣に乏しい人てある、世には英雄の質を以て英雄の事を行ふた人があり、又凡人の質を以て英雄の境を經た人もある、山縣公は恐らく此後者に屬する人てはあるまいか、僕は其人目を眩すべき著大なる勳業の跡に、山縣公の今人的色彩の伴はないことを意外にも奇しと思ふのてある。

三十二三年、故星亨氏が怪腕を揮つて、今の東京鐵道

當時の市街鐵道を雨敬氏等と建設しかけた時である、山縣公は首相として絶對に不許可の方針なることを其屬僚にも、又世人にも幾度か公言した、現に僕は其頃報知新聞の記者として、電車市營の意見を抱いて居たが、社長の箕浦氏は例の英國派の民業一點張の思想で僕との間がシックリ往かない、且僕は其前馬車鐵道に對する方針に就て、散々心配をかけた揚げ句だから、思ひ切り駄々を捏ねる譯にも往かない、新聞で塞がれた決路は自然に他に求めざるを得なくて、所謂電車市營の運動にも參加し、建議に、論策に種々やつて見た、其際、僕は市營派の陣中に、首相山縣侯は決して民設を許可しない、其決心は既に市營派の誰々に公然明言してあると言ひ觸らさるゝのを聞いて其れ程の次第ならばと安心したことがある、山縣公は確に民設を許可せぬ方針であつたらしい、所が遂に許可した、後にて聞けば、内務大臣西郷侯は其頃病か何かで沼津邊に隱れて居た、形勢稍迫れりと聞いて病を推して歸つて來た、次官の誰かは首相の命を啣んで途中驛に迎へて具さに其意を傳達した、西郷侯は歸つて山縣公に逢ふて是れ我が主管内の事務なり、敢て他人の容喙を受けずと謂つて素つ氣なく山縣公を刎ねつけた、而して遽々然として星亨に許したのであつた相な、僕は當時此等の消息には接しなかつたが、何にせよ、此成行には少なからず失望した、同時に山縣公を賴み甲斐の無い人だと思つた、爾來既に十年、東京市は今も尙ほ其電車問題に惱まされて居る、僕は東京市が電車問題に惱まさるゝ其都度、山縣公を思ひ出さずには居られない、嗚呼彼の當時、山縣公が今一段氣が利いて公明であつたなら、東京市は決して今日の苦しみをしない、政治家たらんものは此位ゐの遠見識慮が無くてはならないと常々に思ふ事である。

我國の憲政の機關並に其思想が萎靡して振はず、若くは腐敗を極めて居ると稱せらるゝに對しても、山縣公は深き責任がある、極言すれば山縣公は憲政の敵だ、僕は此點に於て山縣公を恨むるの念が頗る深い、一體人を恨むは淺慮の至りだ、僕は決して人を恨みてはな

らぬと再々自ら省みて窘めて見たが、どういふものか此恨みだけ未だに取り去ることが出來ない、去る二十五年の選擧干渉は、決して山縣公に直接の責任があると謂ふのでは無いが、時の内相は品川子で、次官が白根氏、共に長州の人、で且山縣系の人、其選擧干渉の不法を攻擊する者は自然に山縣公をも此攻擊の渦中に捲き込んで居る、僕の如きは旣に品川子を忘れ、白根氏を忘れて居る、然し乍ら此件に對する隨一の張本人として今尙山縣公を目指して居る、前に申した星亨氏の關係、議員に正札を附けたのは確に主として山縣公の爲した所である、其後、露西亞の下らぬ宮相の非憲政論を譯して日本の思想界にチョッカイを試たのも正しく山縣系の爲した所である、彼等は陽には憲政の澤を人民に垂れたけれど、陰には人民の憲政的自由の運動を阻害した、其奥の院の守り本尊は即ち山縣公である山縣公は我等微弱ながらも憲政の發達を希望する後進が、此意味で山縣公の態度方針を非難し、滿腹の不平を訴ふるを、必らずしも不當とは思はれまい。

其れ等の事實を抉摘するには惟日も足りないから、一切之を省くとして、偖、山縣公が眞に之を解らないのか、殊更解らない振をするのか、おかしい山縣さんだと奇怪に思ふのは、其所謂非政黨論である、彼等は板垣伯の自由黨の如く、大隈伯の改進黨の如く、若くば伊藤公の政友會の如く、公々然舞臺を開いての政黨組織をしない、然し乍ら公々然鉦太鼓を叩いて政黨を組織する者のみが獨り政黨を組織するのでは無い、隱密の間にも政黨組織は出來る、而して山縣公は隱密の間に政黨を組織した人で、今日の桂黨は即ちそれである、山縣公は即ち其總首領である、自ら首領と爲つて政黨を組織しつゝ、他の政黨を組織した者を詰る、山縣公こそは不思議の人で無いか、是何可なり、隱密の間に政黨を組織したから、從つて其集散離合を緘束すること極めて嚴密で、其黨員を視ること互に家の子郎黨の如く、他の黨派を視ること仇讎の如く、以て祥雲鬱蔥たる明治の聖代に有らうことか有るまいことか、封建時代の敵味方の爭ひを再現せしめた、左れば若し

山縣系の人て大隈派の人と逢へば忽ち内通者、或は伊藤系の人と語れば忽ち裏切者と、一々に難癖をつけて之を窮追するに反し、深く門扉を掩ふて他との交通を絕ち、世間の事には闇晤でも、獨り山縣公の門にさへ參候を怠らなければ、即ち山縣派の熱心なる忠臣として倚信し、以て山縣派と非山縣派の間にいよく\踰ゆべからざる深い溝渠を穿つて相對壘するに至つた、此淵源は皆山縣公の度量公明ならず、若くば其心の用ゐ方が齷齪にして、凡て偏執、猜忌、嫉妬、憎惡、毛嫌此等の劣情は誰にも之あるを免れ得ない人情の弱點てはあるが、將に山縣公が之を戒め制するを怠り、私情を以て天下の公事を左右した山縣公の放恣無識我儘の致す所てある、僕は此點に於て山縣公は前世紀の人てある、當世紀政治家の特色たる正大の氣象を缺いて居る人だと思ふ、言ひ換ゆれば山縣公は前世紀の黨派を解して今世紀の政黨を解せぬ人だ、即ち前世紀の黨派を組織したる心を以て今世紀の政黨を組織したる人々を詰り、其流儀違ゐの理由を以て、他流の人は皆不忠臣、非愛國、聞くも怖ろしい非難、惡罵を加へつゝある人と思ふ、無論、封建の歴史には其樣の事實は山の如く有つた、只、明治の聖世には如何にも不似合な偏狹、酷烈の詞鋒態度と思ふのである。

其れ等の話も最早永く續けぬ、又永く續くるを要すまい、兎に角其勳業の著しき割合に後光の射さない人だ、これが僕の山縣公に對する感想の總てゞある、そこに山縣公の失敗せぬ所がある、山縣公は即ち守りの堅い人だ、そこに山縣公の人氣の乏しい所がある、山縣公は所謂派手て無い人だ、これには種々の原因があらう、其一つは公の天質が他に優れて居ないことてあらう、只それ天質大いに人に優れず、これ山縣公が進んて戰ひを起さず、退いて陣を布いて襤褸を出さない工夫に腐心した所以てある、然もこれが明治の大移り變りの世に、守舊的落伍者の望みを繋ぐに絕好の資格て公の蔚然たる勢力は要するに此方面に蓄積されたのだと思ふて居る。

△山縣公と上野の山

中村彌六

山縣公に就いての感想を聞きたいとの事であるが、それに就いては定めし種々の方面より政治家なり歷史家なりの話が集まらうから、其方はそれ等の人々に讓つて、私は一つ飛び離れ、單に同公に對する逸事を話し、未だ知らざる世人に知らさうと思ふ。

私が山縣狂介の名を聞いたのは、能くは覺えぬけれど小供の時て、無論維新前後の事てある、それは朝鮮の使節が馬關に來た折に、山縣狂介その人が席上で詩を作つた、確か公の十六才の時といふことてある、如何にも秀才だとの譽高く、其詩を藩の學校て朗吟したものだが、今ても尙ほ能く記憶して居る、それは斯うてある。

赤水橋頭一樹梅、　却從瓶裏逐春開、
分明認得東君意、　要照嘉賓侑宴杯、

當時藩の學校に居つたもので、今日公の麾下に屬して居る神尾―安藤兩中將等も當時の書生だから必ず之を記憶して居るてあらう。其後維新後に藩の舊城のまはりに在る樹木賣却のとき、商人黑河内松太郞といふもの、其拂下を願ひ出て許可の辭令を得たが、其辭令の判紙に山縣狂介の名前のあるのを見て、前に覺えた詩の作家と同一人てあることを聯想した、何ても明治三、四年の事私が山縣公を知つたのは是が初めててある。

が私は永らく官海に居り又二十餘年も政界に居るものだが深く同公を知らぬ、丁度日露戰爭の時或る事に就いて公を目白の邸に訪ひ進言した事があり、其後汽車中て一二度逢つたことの有るばかりだ、只併し公の態度の謹嚴て徒に人を近づけぬといふ樣な點は、同じ長州人といつても伊藤、井上等とは頗る選を異にし居ることを認めた、が、一旦公を知つた人に就いて聞くに一人として公に心服せぬものは無く、皆死に至るまでそれが用を爲さんことを希ふ所を見れば、能く主將の法は務めて英雄の心を攬るといふ金言の秘訣を體得す

るものと思ふ。

玆に今日特に公に就いて語らうと思ふものは他では無い、實に東京市民が能く記憶して居つて公に感謝すべきことが一つあるのだ、明治初年に井上侯が大藏大輔の時である、政府の財政不如意を救はんが爲てても あつたらうか、凡ての官林等を勸誘して拂下げさせることとした、而かも其價が二束三文なのである、一二の例を擧ぐるなら、今御料地となつて居る伊豆の天城山四萬町歩の地を一萬圓で拂下をし、木曾全山をも亦十五萬圓で拂下げやうとした、之を買はうとしたのは三菱、即ち岩崎彌太郎であつて、私の父の處へ彼が其相談に來たことがあり、幼少ながらも座に侍つて居たものだから小耳に挿んで記憶して居る、此次第だから東京市中の各大小名の屋敷跡などは無殘の有樣、彼の有名な、東海道五十三次を左乍らに模した加州の庭、今の板橋の火藥庫、彼處であるが、是も樹木が伐り倒されて三年の間炭を其處で焚いたのである、賢所のある椿山にも斧斤が入り、矢張り炭を其處で焚いたといふ次第である、その他東京市の御城の周圍の堤防の上の松の樹を湯屋に總計二百圓で拂下げた、此くして遂に上野の山に迄及び、谷中迄續く總體を地面附で八百圓に賣渡すことにした。

丁度其時に佐野常民伯がヴインの博覧會から戻つて來て、非常に此事に就いて慨嘆され、數十年數百年の歳月を經て成つた樹木は一朝一夕に復た得らるべきものではない。左樣なことをすべきものでない、歐洲諸國では非常に森林を大切にする。それを拂下げるなどとは以ての外だとて當路者に切言したけれども、當路者は一向に取上げない、そこで佐野伯は已むなく之を當時威勢赫々たるパークスに語つたら、パークスは佐野伯に同情を寄せて、當路者に向つて不可を說き、歐洲邊では何處でも樹木を保護して其處に公園を作り、公衆慰樂の地とする。上野の森林の如きは人力を以て得んと欲しても容易に得ることの出來ぬものである、之を政府の手で管理して他日公園の用に供すべきであるといふ、當路者は此に至つて初めて目が覺める、山

縣公は之を聞くと直に自分の賞典祿八百圓を其儘拂下人に交付して、一旦買渡した上野の森林を悉く買ひ戻し、それを政府に寄附して仕舞つた。即ち今日迄幸にも斧鉞を免れて、二百萬の公衆が春は櫻花爛熳の時に一日を其處に遊び暮し、心を空に浮かれ廻るのも、秋は大月影を不忍の湖心に落すの時に、漫ろに杖を林間に曳いて無限の清輝を賞するのも、皆是れ公の賜と言はなければならぬ。此の點よりすれば上野公園は山縣公園と稱しても宜いのだ、此事は僕が林學の專門家として今日に至る迄公の功績とし嘆讃し居るものである、他日若し夫れ公百年の後、公の紀念像を建つる事がある場合には、東京市民は忘れずに其地を上野に卜すべきだと思ふ、之だけを談つて敢て折角の問に答へ、又以て公の公德心の如何を世人に窺はしめたいと思ふ(談)

△山縣公

早川鐵治

日露戰爭の後野村子爵と汽車を同うしたことがあつた、子爵は小田原の別莊へ、私は沼津の別莊へ行くのであつたが、其時子爵が喜んで問ふには、此度は誠に目出度いことである、實に一代の進歩驚くべきものである、我々歐羅巴も知らなくて生れて來たものが、國を開いて幾らも經たず、今日は世間に恐れられて居る露西亞と戰つて其力を挫いたとは、實に隔世の感がある、萬國にも例の無いことであらう。山縣でも今では文明風の顏をして居るが、如何して黑船の來た時には傳馬に乘つて槍を提げて、矢聲を掛けて跡追つ蒐けたものであつたが。此度の戰爭は山縣の力といはなければならん、兎に角當年の志士元勳泉下に入つたものも少くないのに、自分は生前に於て此國家の隆運に會ふことの出來たのは喜ばしい、誠に目出度い限りであるといふてホク／＼して居られた。

それを今憶ひ出したが、山縣の半世は實に武人であつたことはその如く、高杉晋作等と共に奇兵隊を率ゐ小倉から長州に乘り込んで俗論黨と戰ひ、彼等を屈伏させ、遂に藩侯に進言し、藩論を一定させて今日に至

らしめたので、其點を以ていふと伊藤、井上の功は少い、伊藤は殊に文勳だけである、明治政府の樹立される迄は伊藤の力は少いのであるが、公は當時に於て力を致したこと此の如きに止まらず、更に維新の際に於ては武人として又討幕の軍を率ゐ、諸處に轉戰して功を樹つること少くはない。

特に公の功は歴史以外に殘つて居るものが少くない夫の薩長連合して幕府に當るに至る時でも、公と西郷との力である、公が西郷とは最も親しい間柄であつた處から、自然薩長の橋渡が出來て連合といふことも成立つたのである、それ故獨り大西郷ばかりではなく弟の從道までが初中終公には兄の考で事へて居つた、左樣の關係からして維新後早々公と從道との二人が共に歐羅巴に派遣せられたこともあつた、其時である、二人が歸つて來て共に熱心に軍隊組織の改革を唱へ、徴兵制度を主張した事は、二人の彼地に行つた時は恰も好し普魯西が佛蘭西に勝ち、聲名赫々たるモルトケ將軍が參謀總長でローンが陸軍大臣であり、それにも會ふ、普魯西兵の强いことを親しく耳にし其所以をも探り得たので、痛切に徴兵制度の必要なことを考へて戻つたのだ、が當時はまだ士族の勢が強く、容易に抗すべからざるものがあるのに、彼等は又士族以外の兵士何事をか爲さんといふ樣に考へて居た、桐野利秋の如きは其位置名望共に西郷從道とは伯仲の間に居るものだが、それを聞いて、何、西郷が生意氣をいふ、日本は武士が有るから强いんだ、土百姓兵を驅り集めて何の用に立つものかといふ、此問題では政府も實に困つたのである、が公と西郷とは其改革を叫んで已まぬ、其極桐野は遂に絶叫していふ、其樣に西郷、山縣が徴兵を必要といふなら宜しい、自分は士族の兵を率ゐ、彼等は土百姓兵を率ゐ、それで一つ二重橋下で戰爭して見やう、そして陛下に高臺にまで御登臨を願つて御照覽に與り、孰れが勝つか負けるか强弱を證據の上で批判して戴かうと、斯樣な風にゴタ／＼揉めたものであつた、當時のことを私は西郷の友人から聞いたことがある。夜遲くなつて門をトン／＼敲くものがあるから

誰かと思つて開けて見たら西郷晋吾であつた、如何したと聞いたら、入るや否や溜息をついて、懐からピストルを出して下に置き、まあ酒を一杯呉れといふ。いふが儘にして酒を出したら、先づそれで舌を濕して曰ふには、今日は徴兵論の爭で今まで掛つた。漸く先づ我々の意見に定まつたから宜かつたが、實は如何してもいけぬと爲つたら、自分は國家の爲直に桐野を只一打ち、打ち倒して自分も死ぬ覺悟。それでも徴兵令施行の素志だけを貫徹したいと思つて居たのだ。先づ落着して安心したと、當年の政治家は皆此樣なもので、身體を賭してまでも國の爲には盡さうと心掛けたものである、西郷侯なども後には只圓滿な、薩張り鋒鋩の露れない人間の樣に思はれて來て居るけれども、仲々其樣なものではなかつた、兎に角徴兵問題は右の如くとして西郷と共に山縣公は大にそれに粉骨されたのである。

明治の初年には山縣公は政治には力を盡されなく、只陸軍の方にのみ肩を入れて居られたので、其内務大臣の椅子に倚られた時からして、初めて政治に關係されたのである、其時には非政黨主義を取つて現れたのだが、併し今日に見る如き地方自治の制度には、公は關係して甚だ大なる力を持つて居られる、即ち縣會の開けるのも郡會の置かれるのも町村會の設けられるのも皆公の時に於てしたものだ、私は個人として市町村制には賛成しない、國民の立憲的思想は極めて貧小で一寸も發展して居らぬ。其樣なものに市町村の自治を許した所て徒に害あるのみであるから賛成は出來ぬが山縣を以て自由を重んぜずといふ世上の說は之を以て其虛妄なることの立證が出來る。

公はそれから二度も總理大臣になられたが、其間に或は議員買收に與つて力あるなぞと非難するものもある、併し是非共地租增徴をやらねばならぬ、之をやらねば他に財源が無く、軍備の擴張が出來ぬ、軍備の擴張は今日の事態如何してもやらねばならぬといふ時に政黨は遮二無二之に反對する。其時の計を爲すもの如何しても議員買收の外は無いではないか、それが此早川

てあれば別に術がある、何、國家危安の問題の掛る場合に譯も分らぬ今日の議員原が愚圖々々いふなら、直に一隊の兵を以て議院を包圍させ、クーデターを行ふ、そして焦眉の問題の解決を手っ取り早くやって仕舞ふがそれをせぬのが公なので、公は實に民權を尊重する、尊重すればこそ左樣いふ亂暴な行動が取れず、金を以て星亨等に啗はし、議員を買收して議院との調和を謀ったのである。大隈黨は之を以て非常に非難し、公を以て議員買收の初とし、明治の憲政史に汚點を附け初めたものとするけれど、實は公が民權を尊重する精神の結果なのである。

公を以て始終保守的な非文明的な人間の樣に見るのも間違ひだ、公は常に泰西の事情に通じ、日新の智識に後れざらんことを勉めて居られるので、絕えず人を使って原書の飜譯をやらせて居る、芳川顯正の公によって用ひられたのも、最初は矢張りそれにある、即ち公の爲にロンドンタイムスか何ぞを飜譯するの勞を執ったからで、今も二宮熊次郎の如きが其樣な役を勉めて居る、まだ他にも多くあらう、海外にも必ず多くの通信者を持ち居るに相違ない、又通商局長荻原守一の如きも夫人の姻戚か何ぞで矢張り公に昵近し居るもの是等も亦左る方面の御用を足して居る事は疑はない、此の如く公は寧ろ西洋心醉家で且つ立憲的政治家である。世人は元老の中、故伊藤公、若くは大隈伯を見ては、一公一伯共に外國の文章が讀める所から、其外國文明に明るい事を許して居る樣だけれど、獨り山縣公は原書が讀めぬから泰西の事情には疎いと思って居るが間違である、公の腦裡には常に泰西の空氣が吹いて居るのである。

能く人を世話するといふことは軍人出身の人に多い軍人にして一方の大將たるものは、今日の如く器械的にデシプリンで濟む時なら格別だけれど、昔風のものであると、人をいたはるといふことは極めて大切な者だから從って又上手である、德川家康は空淚を流して衆心を歸服させ、駕御して能く忠を馬前に致させたが、山縣公の勢力を得た要素も亦此點に在る、公は能く人

の面倒を見る、冠婚葬祭何かに付けて或は喜び或は悲んで共に涙を流してやる、之で人は皆惚れ込む、澆季の世であるから死を以て報ゆるなどいふものは如何か知らぬが能く犬馬の勞を取るものは澤山出る。

私は洋行中に一寸心安くなつたのです。即ち公が内務大臣の時なので、内務大臣として二三度手紙を往復された事があつた、其後歸つてからは却つて公とは疎遠になつた、といふのは、私は一面に於て後藤、榎本大隈などいふ人達と接近して居た、ところが此三人が皆公とは仲が惡い、特に大隈は英國流の政治家で、政治の上に常に英國主義を採らうとするに對し、山縣は大陸的の政治家で、政治の上に常に獨逸主義を用ひ樣とするのであるから、意見は枘鑿の如く相交れやう樣がない、然るに私は其大隈と親しくし、其幕僚とも爲つて居たから、山縣の處へ行つて其信任を受くるならば、必ず唯さへ猜疑に滿ちたる黨僚の猜疑を一層深くする恐があつたからなので、意識しつゝ無沙汰をしたのであつた。

が公の情の厚いのに感じた事は、私が其後浪人して居る時代に、圖らずも公の馬車に坂下門の處で逢つたら、公は确と驅りたる馬車を止めさせて聲を懸けられ「如何した、食つて居るか」と問はれた、思へば彼是れもう十年も相遇はぬのである、それをまだ私の事を忘れぬのみか、「食つて居るか」の一言、平生如何に私を忘れず、浪々して生活に苦むことが無いかと案じて居て呉れられたかゞ分る、左樣思へば何となく懷かしい感の起らざるを得ない、それは先づ私の公に就いて感じ居る一端として。更に又公の人を愛するの情の厚いと思つた事は、私の妻の亡くなつた時である、山縣公から態々悔みを言つて來た。十年疎遠の公が敢て一介の士を忘れずして能く斯く迄に注意して呉れられること概ね此類である。更に又それのみではない、直接ではないが私の友人等の公の所へ行くものがあると、能く早川は如何して居ると聞かれ、馬鹿な事だ、つまらぬ大隈等に引張り廻されて今頃困つて居るだろうと話される相だ、友人としても如何にも公は難有い人であ

る。况して其門に伺候し其恩を蒙つて居る子分としたなら、敢て死を以て報ふる氣にも爲れ相てある。此點に於て大隈伯は非常に違ふ、甚だ淡泊てある、家康は三河武士の心を得て遂に天下に霸業を成就したが、彼は實に其點に於ては上手てある、山縣公は即ち家康に近い、家康の唯稍々神經過敏なものと見れば宜い。

併し之を以て只公を御上手一圖の人と見てはいかん其中に稜々犯すべからざる氣骨を持つて居られる、公は後半生に於て頗る其人格を改められたが前半生は頗る矯激なものであつて、曾て陛下の御前に於て山田顯義と論爭の極擢み合つた事がある。又薩摩の上野景範の餘りに淺薄なる歐化主義のハイカラを怒つて、霞町の賣茶亭の二階て擲り倒したことも有る。亂暴な樣てはあるが、若き熱誠ある政治家は此位の意氣は持たねばならぬ、が今日に於ては之を望むことが出來ぬ。想ひ起す。曾て私が大隈の下に政府に居つて行政整理を行つた時、品川彌二郎から一寸來いといふ、行くと品川は威丈高になつて、大隈の狸に誑されて詰らぬ行政整理をするといふ、是は私が行政整理の結果或る役所に迄手を着け是れを縮少したことが、圖らずも彼の肝癪玉に觸れたのであつた。と私は直に返事して言つた。「國家論は決して山縣、伊藤、品川などの專有てはない今日ポツと出の法學士連はいざ知らず、少くも予は其等とは選を異にして居ます、國家的觀念はチヤンと持つて居て大小の事それから皆割出して居るから御安心なさい。今日の事は一言大隈よりの指圖は受けては居らぬ、皆私の方寸からてあります」と、實に其言の如く、大隈伯は只行政整理を任された迄て、少しも指圖はされないのてあつた。品川は之を聞くと忽ち態度を改めて喜び、「宜しい、今の若い奴等は皆弱いが、其一言を聞いて自分も愉快だ、何事も言はん。」といはれた。其時品川の言はれた通り、全く今は皆弱くなつて居る。山縣公の前半生の如き意氣は當然あつて欲しい事と思ふ。

△昔の山縣公

南　鵑

春風秋雨、四拾餘の星光流れ旋りし間に、明治維新の血の舞臺に出演した俳優の多くは既に苔下の客。試に長の山縣公は、屈指土の板垣伯及び肥の大隈伯と算を加えて、生殘れる當年第一流風雲兒僅に三人の中の一人。第二流の班列を羅ね檢しても、文武を兼ねて、重きを爲す者は恐らく孤渠一人歟。

所謂明治元勳の生涯は、渠一人を除外にして、金權なり政權なり、多少民間と交渉出沒の脚色を有して居らぬもの無い。如何なる場合にも、廟堂の要鎭から退けられぬ渠は、其生を封ずる點は、決して民間に握手を需めず、久しく過去の地位と權威とを續けて行く人である。全く渠は官途の尊を誇る東洋因襲の氣を失ひ得ぬ先天的保守の人、而も權威を售らうとする暴慢の念を帶びて居無い。

人物として些の稜角なく、事業として見るべき建樹なく、渠の歴史は何の奇趣も呈せず、亦銳意して自己を顯はすに策る痕跡も認められぬが、何點となく動傳すべき貫資を具備してるやうに思はるゝ。譬はゞ一家の產を興した總本家の大隱居、一門一族崇敬の的となり、些事にも意見を訊られ、何時も上座の尊に据ゑらるゝ人であらう。

自體渠は時代の風潮に騎つて、何等の策なく、何等の媚なく、只策に現地位に精勵して、何等の要求欲望なく、自己に努力して來た俊士、自然に今日の境に達したのだ。言はゞ最も正しき道程を通行して、其生涯に寸毫の危險を冒さなかつた人である。

破壞の巨音到所の鐘樓から響き渡つた維新前、多く學ばず、廣く交らず、寡默深沈、數多の小族雄が家を忘れ、親を忘れ、妻子を捨てゝ沸騷しつる時、悠々傍觀と人稱するが、其實時勢に對し一向思想を有しなかつた渠は、日夕往來する劍の友を湊めて一團を編制した。比較的名門に生れた渠は直に推れて領袖となつた。無意味なる斯壯士團は大畏怖を以て尊敬され、其領袖

なる渠は大阿諛を浴せられて崇重された。衒名自售に些の努力を盡さなかつた渠は一擧にして一躍其功を收めた。

而も渠は其勢潮に乘じなかつた、狼狽しなかつた、騷がなかつた。進むべき道路を察知する明智なく、已を得ず因循躊躇して居た渠の態度は、意味ある靜肅として、非常の注意を以て畏怖され、近き將來に必然なる其活動の偉壯を期待されて居た。

俊英高杉晋作が奇兵隊を招募するや、渠は配下を引率して來り投合し、高杉と將座を頒つた。而して渠は驕れる壯士の勢を鎮むるに理や權や威を以てせず、其暴を逞ふせしめ、狂荒せる悍馬の轡綱を弛めて、悍馬自然の疲勞を待つた。血に叫ぶ時代の兒は此時放任なる渠に滿幅の愛を献げた。

高杉が奇兵隊を去り藩政に參與するも、而して渠を招くも、渠は頑として奇兵隊を捨てなかつた。突急に進運の梯子を攀づる勇氣なかつた渠の此態度は、熱涙を以て部下より親從され、震慄を以て外觀より畏敬された。

此間に處して、渠は長鋏を提げて單身月光を踏んで三里の夜路を長府に走り、閃々たる秋水に溫厚の老翁石川良平を脅し、艷美なる其愛娘を奪去り、小脇に抱えて吉田の屯陣に歸り、天幕裡彈莢を枕にして結婚した。或は奇兵隊の猛將山根某を斬殺して、一面時代の叫聲に應じて氣を買り、一面猜忌心强き長人の面目を發揮し、平常無言にして時に疾烈なる行動に尠からず人望を博した。

長藩に斯く重きを爲した渠は、時に選擇されて藩外に使するや、溫裕なる其風貌、雅醇なる其態度、沈着なる其言語は非常の尊敬を拂はれ、畏怖された。斯くて渠は、藩の內外に於て、實質以上に高き價値を投ぜらるゝ天下の大人物となつた。世謂ふ、渠は僥倖運の寵兒なりと。否、渠は保守自衞の餘光に生育したのである。

以後長く軍人生活を經た渠は、自然に秩序を重んじ紀律を尊び、賞罰を明にし、私情に囚れず、善く聽き

善く通じ、大將たるべき外形の要素を具備して來た。而して明治政府に有要の器材となつた。併し木戸、大久保の烱眼は渠の實價を透明に評價して、薩長の權均を秤る爲に、若くは故英雄高杉晋作の靈を慰する爲に作身の華榮として一椅子を渠に與ふるに過ぎなかつた。が、伊藤公が權を握る時代には、渠は何となく憚からるゝ人、氣を置かるゝ人となつた、何の理條なく證く其呼言が反響大なる人となつた。只生殘れる一人の藩先輩として故伊藤公井上侯から畏敬されたのであらう。

藩の先進廣澤直臣、大村永敏、木戸孝允の末路が悲慘の刺殺なるを見、其の加毒の手は總て藩の後進なるを知る渠は、自持して文の政權に遠り、武道の位地に堅き砦を守つた。参議たるも、宰相の說を吐かず、經綸の策を述べず、單に眠れる投票手であつた。狡智縱横の故伊藤公が、前には土の板垣伯に對峙して各藩出身の官吏の心を繋ぎ、後には肥の大隈伯に頡頏して政府の威力を揮ふ具に用ゐし渠は、既に武の側に於て確乎不動の要塞を築き上げて後、文の側にも根據を作り出した。是を氣附きて伊藤が周章狼狽し始めた時は既に遅れて居て、屈せず傲らず媚びず爭はず、自持澄して來た渠に却て媚びなければならぬやうになつて來た。

板垣、大隈の兩伯が民權を唱へて天下を煽動するや、藩閥の兒子は、非常の畏怖心に驅られ、奉戴して對戰すべき首領を要め、銳敏明察、執着心弱き故伊藤公を嫌ひ、猾才機略殘忍を好む井上侯を惡み、豪放倨傲、節操乏しき故後藤伯を却け、魯鈍遲緩、進取念尠き西鄕侯を去て、內部の軋轢を忘れ、薩長聯合して、山縣公に走つた。玆に所謂山縣系なる一勢力生じた。以來渠は敢勇なる部下と共に藩閥の壘に據守するのだ。斯くて老行く者の總て葬らるゝ律則に背き、設令其輝彩光燿を失ふも、渠を繋る星座は永く渠の價値を護るのだ。藩閥の餘焔存する間、渠は決して忘られぬ唯一の人である。

要するに、渠は自ら進路を拓いた人で無い、保守して大となつた人である。潮波の一去一來に海垢積層し

成る螺貝の類であらう。保守自衛の餘德には、渠の裏面に他に讓らぬ曲惡存するも、敢て醜聲を放たれぬ。

△山縣公を論ず

痛飲生

山縣を論ずるには是非とも伊藤を引合に出さなくてはならぬ、伊藤を除いて山縣を論ずるのは恰度義貞を除いて尊氏を論ずる如きものであつて、決して正當の見解は得られぬと思ふ。

何故なれば山縣の唯一の目標は伊藤に在つた。伊藤が政黨を唱ふる故に山縣は非政黨を唱へる。伊藤は磊落なる故に山縣は謹嚴を標榜する。伊藤が政黨內閣を拵へる。故に山縣は官僚主義の內閣を拵へる。伊藤が詩を作る故に山縣は歌を作る。といふ風に山縣は何時でも伊藤の向ふへ廻つて、伊藤の勢力に拮抗せんとしたのである。元老とか何とかいふけれども洗つて見れば多くは是れ私憤私鬪、甚だ噴飯に堪へざる次第である。其證據には、山縣は非政黨の本尊の如くいはれて居るが、決して初めから政黨嫌ひではないのである。即ち彼は明治二十一年自治黨なるものゝ後楯となつたことがある。自治黨は表面陸奥とか青木とかゞ騷いで出來さうとしたものだが、其實山縣がやるからやつたのである。天下は最早や政黨政治の世の中になる。然らば政黨も必要であるといふことを山縣も認めて之が後楯になつたのである。そして大隈の改進黨の向ふへ立たんと企てたのである。此黨の成敗は世人が皆知つて居る故に之を論ぜぬが、何も山縣が初めから非政黨てない事が分るではないか。處が其後時勢變遷して伊藤が政友會總裁となつたが故に彼は非政黨を唱へ出したのである。

山縣の一生は全く伊藤といふものを唯一の目標として其向ふへ廻ることばかりに骨を折つて來たのである。處が今日、もう其伊藤は死んで了つた。伊藤が死んだ後の山縣は最早や箍が弛み、殆んどボロ〳〵になりかゝつて居る。今年三月に音羽の別邸へ皇太子殿下にお成を乞ひ山縣自ら舞を舞うてお目にかけた。人臣

の光榮も是に至て極まつたのであるが、伊藤ならば殿下などと親しいから別邸にお成を乞ふといふやうな事も勸めなからうと思ふ。然しお成を乞うて之をお聽容れになるなどは山縣にして初めて能くすべきことであらう。處が其時皇太子殿下の驚かれた事は、山縣が舞を舞うた後に、一人の女が又舞を舞うた。皇太子殿下は驚かれてあれは何者ぞと仰せらるゝと、それは山縣の妾であつたのである。左右も亦愕然として驚いた。宮内省では山縣の勢威に閉息して公然之を詰責するものもないが今もつて之が問題になつてゐて、謹嚴なる山縣にあるまじき事だと憤つて居るものもある。若し伊藤をして皇太子の前に光菊をしてでも舞はしめたならば、不臣の至りとてもいつて腕をまくつて膝詰談判するものは山縣であつたらう。伊藤が死んだので山縣が氣滿ち意驕つてボケかゝつた事が之でも分る。競爭者が無くなつて謹嚴の面も剝げかゝつたのだと思ふ。

山縣は大磯に別莊を持つてゐた。此別莊は如何なる諂諛者と雖も一萬五千圓以上のものと値踏みすることが出來ないものだ。然るに之れを二十萬圓に買つた人がある。其人は三井である。三井に之を賴んだ人は皇太子の前に舞を舞うた山縣の妾である。此妾は新橋に藝者をして居たもので益田孝第二夫人と姉妹の仲である。益田は決してさういふ事を骨折る人でないが、益田の妾は益田以上のエラもので、さういふ事を重役などに賴み廻る人らしい。其結果此別莊は二十萬圓に賣れた。伊藤は嘗て伊皿子に屋敷を持つてゐた。之は五萬圓に買つたものである。或人周旋して三井に之を買はせた。三井は十五萬圓と申し出た。伊藤は笑つてそんなに儲けなくともよい。長らく利息も拂つたから七萬圓に買つて貰はうといつて七萬圓に賣つた事がある伊藤の心事眞に善きか山縣の心事眞に卑しきか外間の知り得べからざる事であるが、二人の遣り口は略ぼ之で分らうと思ふ。若し伊藤が一萬五千圓の別莊を二十萬圓で三井に賣つたならば、腕をまくらざる迄も、新聞を使嗾して伊藤を攻撃せしめたものは山縣であつたらう。而して此事謹嚴方正沈默寡言殆んど理想的とい

はるゝ山縣がするのである。譴議といふ熟字が明治年間に於て新解釋を得た事を多謝する。然しかういふ事は昔の山縣ならばせなかつたに違ひない。敵國外患なければ國即ち亡ぶて、彼が伊藤に死なれて追々ボケて來た事が之によつても分る。之と同時に、山縣は世間ていふ如きそんな窮屈な人でない事も分らうと思ふ。只境遇之を然らしめ、伊藤と攻守處を異にした爲めにあのやうな面(メン)を被つてゐたのであらうと思ふ。然しこれは單に現在の山縣のボケサ加減を水彩畫でかいなてにスケッチしたものに過ぎない。若し明治初年より今日に至るまでの彼を論ずれば極めて興味多き事であらうと思ふ。

彼は飽くまでも黨派的の人である。(6)先づ第一期は彼が陸軍大臣となる迄であるが、それ迄は彼は長州の勢力を背に負うて代表し、長を以て薩に對する長黨の首領であつた。第二期は廣き意味に於ての藩閥黨の代表者として民間黨と戰うた。第三期は自治黨を作つて朝野の俊才を集めィ大隈の進歩黨に對抗せんと企てた。第四期は明治政府の老吏長吏を集めて、伊藤の代表する民間の政黨分子と相戰はんとした。凡そ此四期を通じて彼は何時も、黨派の中に立籠つて之が黨首となつて居る。此人が黨派を嫌ひだといふのは所謂耳を掩うて鈴を偸むの類である。今日政黨を惡るいといふのは、伊藤と喧嘩の名殘りであつて、只お座なりを言うて居るのに過ぎんのである。若し伊藤が朝廷の老吏を集めて勢力を作れば、彼は無論伊藤の爲さんとする所を爲す人である。只彼の長所にして短所ともいふべきは、彼は兵家なるが故に何時も要害の地を選んで之に據り城砦を築いて其中に立籠ることである。此サイコロヂーは政治にもあらはれ、彼は決して平場の戰爭をせぬのである。即ち彼は陸軍に立籠る、憲法論に立籠る、樞密院に立籠る、何時も立籠る、伊藤の如く裸ばらになつて何時でも戰爭するは彼の爲ざる所、又爲し能はざる所である。故に其黨派は伸びない、然し堅い。之に加ふるに彼は最も人心の弱點に乘ずることを知つて居る。即ち私恩を售るのである。伊藤は官職を以て己

れの賜ふ所としないが山縣は其れをする。例へば伊藤の所へ行けば、時の名吏大官と雖も伊藤は書生の如くに附合ふ。玄關に送り出るのは山縣外二三の人しかない。山縣に至ては面會する人は悉く親しく玄關に送つて來て禮節を盡す。夫れ故に伊藤の門を去る時は皆不快の念を以て去り、山縣の門を去る時は愉快の念を以て去る、心あるものは山縣を以て所謂王莽恭謙士に下るものとして喜びもせぬが、世間虛榮の人多く、大抵山縣の仕打を感服するのである。此筆法は總てに應用せられて即ち私恩を售ることになる。世間の政治家や官吏は、口には正義正道をいふが、私恩を售らるゝと有難くなつて山縣を離れられなくなる。伊藤に至つては私恩を售らず私黨を立てない。其爲めに結束も甚だ堅くない。其代り伊藤は九州に行けば九州の兵を用ひ、東北に行けば東北の兵を用ふるといふ風に、足利尊氏の如く甚だ快なる所があつた。

以上は多く山縣と伊藤との比較であるが、今の人は人物論をするのに其人の頭の構造を論じない。山縣の頭は極めて女性的に出來て居る。昔、彼が陸軍卿として西鄕征伐に出かけた時に、時の陸軍少將曾我祐準を留守役にした。其去る時に彼は頗るドラマチカルなる封事を曾我に殘して、予去つた時に之を開いて見よとの事であつた。命令通りに開いて見ると中に陸軍卿として內地の治安を保つ心得が書いてあつた。東北諸藩最も備ふべし、庄內は昔薩摩の恩を受けたから嘔發の恐がある。又白河は云々と事細かに書いてある。其末の方には中國も亦云々とあつた、それによると天下悉く不安であるといふ事に思はれた。果して然らばドラマチカルな封事などを殘す迄もなく、唯一言の口授で足るではないか。山縣は人を見れば泥棒と思ひ、事あれば天下皆蜂起するものと考へて居る。彼の女性的なることは之によつても分る。此筆法は政治にもあらはれて、人は私恩を售らなければ皆背くもの、牢屋にブチ込まなければ皆惡事をなすもの、黨與にならなければ皆敵たなるものと考へて居る。赤心を人の腹中に布くとか、人民自治の力を信ずるとかいふ事は彼に於て見ること

が出來ぬ。

歷史上から彼の働いた事の功過を論ずれば、陸軍卿としては多少なりとも陸軍を進步せしめたといふ功は確かに認める（弊害はもとよりあるが）。又自治制度を布いたのも彼の內務大臣の時であつて、之も彼の功といつてもよい。然し善い處は之に止まる。之より先きは進步を障害し、政治に陰險暗黑の空氣を注入した罪は歷史上拭ふべからざるものである。

伊藤が死んだ時に政治に餘り關係のない人々が東京倶樂部に集つて、伊藤の死を惜み、伊藤は實に國家に功勞のあつた政治家である。山縣が死んだ時は吾々はアイス的取扱（レセフシヨン）をしやうぢやないかと一人がいふと、座に居合はせた人は皆ヒヤ〳〵といつて拍手した。彼の名は政治を解せざる人より見ても陰險暗黑の影に掩れて居ることが此一事によつても分らうと思ふ。

然し此人、割合に黄金に近かなかつた。其品行も伊藤の如く到る處婦人に戲るゝといふやうな事がなく、妾を入れ妓を養ふことあつても、秘々密々にやつて世人の耳目に觸れない。夫れだから今日まであの位の名聲を維持して來たのである。若し私行が不謹愼であつたならば意外の禍を受けたかも知れぬ。私行の謹嚴といふ事が彼の一身を維持したのである。但し此一年以來の山縣は甚だボケて來たといふ事は彼の身體の箔となつてゐた私行が紊れて來たので、彼の總てを沒せんとして居る。

一言にしていへば、彼は總ての政治家が踏むのと同じ道を踏んで來たのである。少年志を起した時は、全力を捧げて國事に奔走し、中年權力ある時は、半ば國の爲めにし半ば已れの爲めにした。一半の功は感謝すべく、一半の罪は忘れてもよい。晩年權力を專にする時は、朝廷に於ては權臣であり、國民に對しては擅權の人となつた。而して政治上に陰險暗黑の空氣を輸入した事は拭ふべからざる彼の罪である。要するに私は彼を東洋風の奸雄と思ふ。

△山縣公爵論

法學博士　戸水寛人

山縣公は非常に謹嚴な人だ。後輩が山縣公に逢ひに行つても餘程大切に取扱ふ。山縣公と話す時は、自分の好きな事を遠慮なく喋舌つても、あの貴い、經歴の多い身を以てして靜かに聽いて居らるゝ。場合によつては教を受くるものゝ如くに聞いて居らるゝ。中には作つてさうやるのだといふ人もあるが、あの人の容貌を見ては作つた者とは見えぬ。心からの如く見える。其心術の如何は他の得て知るべからざる事であるが、あの人は多分後輩に對して眞に深切な人であらうと思ふ。

又山縣公並びに其黨與のやる仕事を見ると、反對の人に對しては場合によつては陰險と見ゆる事もなきにしもあらずであるが、一旦山縣公の乾兒となると非常に可愛がる。夢市郎兵衞や幡隨院長兵衞などの乾兒を可愛がるのと同じやうだ。山縣公を俠客に比しては失禮のやうだが、乾兒を可愛がり、乾兒の爲めに骨を折る所は甚だ似て居る。又山縣公の乾兒も俠客の親分に盡すやうによく用をなす。之も亦人によつて、政略上さうするので、只見せかける丈けだ、誠心誠意さうして居るのではないといふものもあるが、私は矢張り誠心誠意公に盡すのだらうと見て居る。

私は好んで歴史を讀んだ事があるが、昔の日本の豪傑の中に、あの位乾兒を可愛がる人は澤山あるまいと思ふ、山縣公が今日の如く勢力あるは誠に故ありて、決して偶然ではない。且つ又山縣公は軍人出身てあつて何にも知らん人から見れば豪壯の人の如く想像さるゝが、實際の事をいへば臆病と見ゆる位に用心深い人だ。奇兵隊の山縣狂介といへば、鬼をも取挫く荒武者の如く思はるゝが、實際の戰爭の仕振りは非常に用心深い。何か事を一つ行ふには三度も十度も考へてやる、だからやり損ひは少い。その代り奇拔なやり方もない。奇拔なやり方がないから、知らぬ人には人好きされない。矢張り西郷とか伊藤とかの遣り口の方が人好きがする。山縣公は古今の人物中最も德川家康に似て居る。

家康はどうも人好きのせぬ人だ。當時の人にも好かれぬし、今日の人にも好かれぬ。萬事を緻密に考へて、考へた事をドシ〳〵實行し、さうして大抵成功する。此點は二人が極く似て居る。之から仕事をせようとする人は此等の點をよく玩味せば、大いに益する所あるだらうと思ふ。謹嚴にして緻密なること、蓋し何人も山縣公に敬服せざる能はざる點である。加之、あの位恭謙士に下る人は少いと思ふ。此等の點はどこまでも手本にすべきである。

けれども山縣公の缺點も亦ないではない。あの人は歐羅巴の本を餘り讀んだ事がないといふ事も一つの原因であらうが、どうも思想が古臭くて時勢に後れて居る。憲法が行はれて居る世の中に政黨が嫌ひなどいふて無暗に藩閥を立てる。憲法はもとどこの國にもないものである。それが今日ではどこの國でも憲法政治にならうとして居る。憲法の歷史は玆に述べぬが、露西亞でも波斯でも、土耳古でも皆憲法政治になり、これから支那もやらうとして居る。憲法を布いた結果は政黨は必然出て來らねばならぬ。之に斷乎として反對するなどいふ事は餘程舊式な考と思ふ。餘り舊式な考を推し通さうとするとヒドイ打擊を蒙るだらうと思ふ。堅い木は大風に逢へば存外折れ易い。今のまゝで强硬にやれば恐らくは倒れるであらう。私の最も憂ふる所は、あの藩閥が倒れる時に、萬一皇室に累を及ぼしはしないかといふ事である。餘り皇室の事に口を挾むのは不敬に亘るから、申さぬが皇室を大事と思はゞ、山縣公は今までの態度を改めて欲しいと思ふ。

又之は政治に關係の少い事であるが、山縣公は人から學問がないと思はれて居るが、不思議にも文學に趣味を持つた人だ。時々詩や歌を作つて慰んで居る。歌人とはいはれぬかも知れぬが、大分稽古しなくては、あの位の歌は作れまいと思ふ。あの人の書いた文字を見てもなか〳〵よく書いてある。餘程稽古したものであつて、書家の字などと比較して見ると、却て風韻を備へてゐてよい。英雄閑日月ありといふが、山縣公も矢張り此例に洩れないやうである。

△好運爺山縣公

無何有鄉人

山縣公といふ人について世間てはいろ〳〵にいふ。表は朴衲に見せ掛けて内は智巧であるとか、或は老猾だとか陰險だとか、いろ〳〵に評する。私はそんな事は知らない。私は唯一個の好運兒――イヤ好運爺と思ふ、といふのは其人の考ふる所や其人の爲す所を見れば大抵其人物が分るものである。嘗て明治二十年頃、伊藤内閣の時に伊藤總理の家てファンシー、ボールをやつた事がある。其時に伊藤公は伊太利の貴族の風をした。之が自ら伊藤公のヴァニチーの强かつた事をあらはして居る。陸奥は大黑天か何かの眞似をした。あの瘦せこけた陸奥が肥つた大黑天をやつた所などにも反抗的な陸奥の性格があらはれて面白い、山縣公は當時の奇兵隊の服裝をして萩原鹿之助といふ名を槍とか笠とかに附けてあらはれた。私は之が山縣公の本色であらうと思つて居る。奇兵隊長萩原鹿之助――これがあの人の持前てはないかと思ふ。公はよく一介の武辨といはるゝが、私はそれを謙遜と取らない、恐らくそれが實際てあらうと思ふ。

あの人に政治家としての經綸あるや否や私にはどうも分らない。或はあるかも知れんけれども私にはそれが見えない。あの人はいろ〳〵な政治の局に當つた。然し何があの人の經綸なるやどうもハッキリしない。明治二十三年國會開設の時に、自由黨、改進黨が勃興した。之に對して帝政黨といふものが出來た。帝政黨といふ名はどういふ意味から出たかよく分らないが、欽定憲法の下にある政黨にして殊更らに帝政といふ必要はあるまいと思ふ。日本の帝政を重んずるといふ事ならば日本人民は皆帝政黨である、殊更らに之を標榜するの要がない、そして此帝政黨といふ者を山縣さんなどが餘程政府の中て首唱したらしい。私などは之を餘り感服しない。第一議會の時は山縣さんが其當局であつた。其結末は民黨て豫算に削減を加へた。多分解散になるだらうと期待されたが妥協といふ事になつた。

第一議會だから目出度やつた方がよいといふので、反對したものを穩やかに妥協といふ事にしたらしい。其後政黨内閣が出來た。又自由黨の星亨と妥協して内密に提携した。之れ皆一時を糊塗して、よく目前の事を處理するといふ遣り方で經綸といふものがあるとは思はれない。近頃社會主義の取締りといふことが問題になつて居るが、山縣公は餘程熱心になつて居るとの事だ。これなども社會主義の極端な奴は仕方がないが、餘り騷ぐと却つて之を大きくしはすまいか、物好きや、好奇心に驅られて居る奴までも、政府が壓迫を加へれば片方は手答へがあり、さういふ譯なればよろしいといふので、却て强く廣くなりはすまいか。之なども誰がするのか私は知らないが、若し山縣公もさういふ意見ならば餘程短見といはねばならぬ。私は政治上に於ける山縣公の經綸を知らず唯一個の好運爺と思ふ。武辨〳〵といふのは狡猾だ、知らぬ顏をして口を拭いて居ると人はいふが私はさうは思はない。武辨はあの人の本色だ、只時勢に乘じて今日の地位を得たものと思ふ。

然らばどうして彼は今日の地位を得たかといふに陸軍といふ一種の治外法權の城廓に立籠り藩閥といふものに立籠つたといふ事が山縣さんをして重きをなさしめたと思ふ。陸軍の治外法權なく、藩閥なければ、山縣は奇兵隊長をして居る人だらうと思ふ。只治外法權の陸軍に於て元老となり、藩閥の中に於ても元老となつて皆から戴かれた。戴かれゝば自分もエライ積になつて政治の色々の局面にも當つて見たのである。然し其實は經綸のない一介の武辨ならんと思ふ。只其れを利用する奴がある故いろんな事に關係して世間から陰險とか狡猾とかいはるゝが、洗うて見れば一個の好運爺山縣公である。

日本にはまだ陸軍に治外法權があるでせう。又藩閥もあるでせう。其二つが今暫らくあるでせうからこの人は極く仕合せて一生を終る事が出來ませう。唯玆に考ふべきは之を利用する人が餘り山縣さんを擔ぎ過ぎて、アレも山縣がやる、コレも山縣がやるとなれば、

假令山縣さんは一介の武辨といつても、其事が世間に傳はり、其人の晩節に汚點を印するといふやうな事がなからうかと恐れる。若し眞に山縣さんの爲めを思ふならば老人を餘り利用せぬ方がよからうと思ふ。

△山縣公を論ず

池邊吉太郎

山縣公自身が自分の經歴を話して秋月新太郎といふ人に書かしたものがある。秋月といふ人は多分山縣さんが奇兵隊時代の友達――いはゞ書記役とでもいふべき人てあつたてせう。其本は懷舊記事といふ名て小さな本が五冊になつて居る。これは賣本にはないものらしいが私は之を貰つた。人にも讀ませたが自分でも讀んだ。何か維新前の事を書いて山縣公に見せたものがある。山縣公は少しも氣に入らぬ。間違ひばかりだ。それて自分の記憶して居る事を書かしたといふ序言がある。さうして自分が國事に關係した初りから恰度御維新前に薩長聯合が出來上つて京都に繰り込む所まてあつたと覺えて居る。私はよく知らぬが、山縣公が自分て經歴を書きあらはしたものは多分是れ丈けてあらうと思ふ。自分て自分を語る程比較的確かなものはないやうだが、然し存外當てにならぬ事もある。人間の弱點として、自分のやつた事や、考へた事を修飾する氣になり易い。又人間の記憶の機關も非常に確かなやうて存外薄弱なものだ。あとて之を語るといふ事は多少の不確實を免れない。考へた事は證據はとれない。けれども、爲た事については、これは事實として、あらはれたる事だから當人の外に、人も之を見て記憶して居る。其人が確かに見て語るのと自分が記憶して語るのと、齟齬することがある。どうかすると本人の記憶の方が負ける事がある。外に見て居つた人が三人あつて三人共自分の記憶と違つて居つたとすれば、自分の記憶の方を訂正する必要が起るかも知れない。そこてさういふ考を以て山縣公の懷舊記事を見なくてはならぬが、どちらかといへば山縣公は英雄てある、豪傑てあるからして自分の考へた事を人が知らぬからとて

修飾するやうな事はなからう。只記憶といふのが存外當てにならんものだから、それを注意して見なくてはならぬ。

此本によつて判斷して見ると、私は維新前の大方針となつて居る開國進取といふ事については、山縣公は先づ無關係といつてよろしからうと思ふ。私はさういふ斷定を下したい。要するに長州の人は山縣公のみならず攘夷論者が多く、攘夷は藩論であつた。之を引くり返した者は井上侯伊藤公――伊藤公井上侯ではなくて之はどうしても井上侯伊藤公の力だ。井上伊藤が開國論を唱へて藩論を飜へす場合に、長州人はなかなか其論にならない。山縣公も矢張り頑强なる反對論者の一人であつたと思ふ。私は山縣公があの時代に於て、腹の中に於てゞも、開國進取について根柢のある考を持つてゐたかどうか餘程の疑問と思ふ。又其點は本人自身の記錄にも修飾せずに有りの儘に書いてある。多分開國進取といふ事を政治の上に實際に行はうとした人は長州よりも薩州の方がずつと早い。それは島津齊彬公どいふあの時代第一の賢藩主がゐたお蔭であつてあの人は目の玉が正しく明かであつた。薩州でも攘夷をやらない事はない。櫻島で英艦をやつて朝廷から御褒美を頂いたがこれは防禦的にやつたのだ。長州の攘夷とは全て違ふ。開國進取の功績は先づ薩州に歸する。尤も開國論は其前にもいくらもある。幕府の井伊直弼などより外にもあつたかも知れんが、維新の時には長州より薩州の方が主唱名であつた。要するに山縣公は開國進取には無關係であつた。

處が明治の政府になつてからは此大方針に違ふ譯には行かぬ。之を最も大きな聲で唱へた人は山縣公ではなかつたかと思ふ。けれども唱へ初めたのは山縣公でなかつた事は確かである。

そこで山縣公其人の性格を考へて見るに、どうも開放的でない。支那の歴史家の評でいへば赤心を人の腹中に置く人でない。オッぴらいてゐない。どちらかといへば分らん所のある人だ。ダークサイド――汚點といふ程の事でないか、どことなく薄暗い分らん所のあ

る人だ。此人が初めから開國進取に關係がなかつた事は無理が無い。性格已に之をして然らしむるのである。處が其性格が何時も一生附き纒うて居る。そこで山縣公を概念して見ると、入口の狹い、奥行の深いやうな處があつて、何時も何か考へ何時も何かたくらんで、たくらんだ事はドコ〳〵までもやるといふ意地堅い人といふ風に思はれる。多分さういふ人でありませう。意地の强いといふ事は疑がない。

そこであの人を維新以後の日本の政治家中に比較を求めると山縣公自身は頗る人を褒めぬ人だ。誰にも威服したといはない。懷舊記事の中にも先輩を褒めた所はない。吉田松蔭は山縣公の師匠である。て敬語は遣つてあるが心から敬服したといふ所がない。其以下の奇兵隊の連中、又あの人の上に立つてゐた高杉晉作にも感服してゐない。尤も山縣公と高杉では性格が大變違ふが兎に角高杉にも敬服した事はない。あの人は殆んど誰にも似てゐない。只懷舊記事の結末の方に褒めて居るのは西鄕南洲である。南洲には敬服して居るらしい。それぢや敬服してゐるから性格が南洲に似て居るかといへば、ちつとも似てゐやしない。勿論木戶とも似ない。寧ろ私は大久保に似た人ではなかつたかと思ふ。どこか似た所があるやうだ。而かも大久保の門に出入したといふ事もない。亡くなつた伊藤公は一時木戶を離れて大久保の門に入つたが、山縣公は大久保と往來したといふ事はありますまい。其外誰に對しても帶紐を解かない。けれども玆に不思議な所に同一性格であつたらうかと思はれる人がある。山縣公は星亨とよく合つた。自由黨と肝膽相照した。多少同一の處があつたでせう。多分今の桂侯も餘り山縣公の氣に入りますまい。山縣公に似た所は殆んどない。あつた所で小部分だ。性格に於ては先づ似ないといふ方がよい。主義方針の上に於ては山縣公の思ふ所を山縣公以上の行つた所も大分あるでせう。からして詰る所桂侯を容れて働かせて居るのだ。ソレハは度量があるといつてもよい、が度量といふよりは寧ろ堪忍强い。意地が强いからして從て堪忍强い。

あの人が日本の爲めになつた事は大分澤山あるてせう。死んだ上に棚下しをして總勘定をしたら、日本の爲めになつた事が餘計に殘りませう。が徹頭徹尾軍人だ、桂侯は政治家の軍人てあらうが、山縣公は若し政治といへるなら、軍人の政治家てあらう。本職はどうしても軍人だ。自分て戰爭をしても隊長として立派な戰爭をすることが出來ませう。然し、あの意地強く勘忍強く辛抱强い所は矢張り將に將たる人と思ふ。いゝ軍人だと私は思ふ。生きて居る人に對していろ〳〵な事をいふのは失禮だが、あの人は陸海軍を通じて矢張り第一番の軍人てせう。いつまでも長く生きられんことを希望して居る。

△山縣公論

茜陵隱士

天恩に感泣する山縣公——身を守ること周密なる山縣公——。此天恩に感泣する山縣公は維新以前の勤王家の養成によつて出來上つた頭腦である。それから身を守るに周密なる山縣公は武藝によつて鍛錬された爲めに出來上つた頭腦である。武藝には凡そ二筋ある。德川三代將軍家光公は伊東一刀齋を呼んて武藝の事を訊ねられると、一刀齋は劒は人を切るものだと答へたそれから柳生但馬守を召して同じ事を訊ねられると、劒は身を守るものだと答へた。武藝に此兩極端の意義があつて、一は積極的に劒の働をあらはし、一は消極的に劒の効をあらはして居る。三代將軍は天下が最早や鎭定して保守の時代に入つたことを認めた爲めに、消極的の方を取られた。山縣公の維新以來やられた事を見ると、純然たる消極的の修養によられたもので、徹頭徹尾消極的武藝の奧義を以て身を固めて居る。從て其思慮の周密な事は他に眞似手がない。自己以外のものは悉く敵、自己以上には忠義も何もない。さういつた風の所が山縣公にある。然るに山縣公は演習に行て陛下から土瓶を一つ頂いても感泣する。又榮爵を受くる毎に感泣する。甚しきに至ては寢ても起きても感泣する、恐らく日本第一の泣男であらう。其點は實に

やさしげな親爺のやうに見ゆる、が公に追從しないもの、所謂山縣系統でないものが世間に多少働きをして見やうと思ふ場合には一行一事殆んど針金で縛らるゝやうな調子になつて來る。そこで御自分の畑の中、所謂家の子郎黨といふものは殆んど極端まで保護する。官省に於ても小使から給仕に至るまでも山縣系統から造るといふ組織の下に今日の山縣系の全盛を呈して居る。如何に山縣公の勢力があるかといふに貴族院に於て山縣公の推擧した議員の數が約六十人に近い。それから地方官から中央の諸種の役人、判任官共に至るまて大抵は直接のお聲掛りでなくても、チャンと其筋を引いて一絲も紊さないといふ狀態にある。それで山縣系統の勢力を維持し、若くは山縣系統の天下を維持することが一番國の爲めに幸福であるといふ事ならば、このやり方は誠に結構な事で孔子の徒が孔子を聖人といひ盗跖の徒が盗跖を偉人といふが如く、山縣公は忠厚至人といふ事になる。けれども山縣公は思慮周密にして天恩に感泣することについては何人も之を感心するが、社稷人民を眞の幸福の方面に導くといふ點については、まだどうも許されぬ點もあらうと思ふ。山縣公の消極的の身の守り方といふものは事毎にあらはれて、保守、自衞、鎖國的氣風の本家であつて、今日の言論に對する制肘、秩序に對する制肘、風俗に對する制肘の如き日本の新鎖國主義ともいふべき狀態を幻出して居る。これは山縣公の命を受けた屬僚共の仕事であらうが、矢張り山縣公の消極的精神のあらはれた結果と見なくてはならぬ。けれども公は子分共を可愛がる丈けに子分共から報いらるゝこともある。伊藤公が政治上で遣り損ひをやつた時には唯末松謙澄一人伺候したのみで、門前殆んど雀羅を織る有樣であつたが、山縣公の遣り損つた時は子分共が寄つてたかつて公を慰めたといふ事もある。

山縣公の勢力といふものは永久續くものかといふにこれは餘程覺束ない。何故かといへば世間の進歩といふものは今日以前に立てられた秩序といふものを飛び越えて進んで行くから、秩序其ものも亦自然の進歩に

伴ふ所の方法がなければならぬ。これを一定の處に置いて山縣老公が御自分の身を守らるゝ如く守られて御座る。今日の如き猛烈なる言論の取締等は却て一局に於て欝塞し、其れが潰決する時は恐るべきものだらうと思ふ。それが若し經濟狀態の潰決と一處にでもなつたら殆んど手がつけられなからうと思ふ。公爵の之に對する計畫が或は立つて居るかも知れんが、此戰爭には清露を討つた腕前とは違つて、どうも敗北に及ぶかも知れない。一體日本國民といふものは大人物に痲痺する機能がある。それで伊藤公に痲痺し山縣公に痲痺する。然し一私人たる山縣公の寢食座臥を見て居ると、實に平々凡々たるものだ。公の思慮周密にして地位を維持せんとする所は高利貸が自己の財産を維持せんとするのと殆んど變つた事がない。けれども明治初年以來要職に居つて今日まで泳ぎつけられた所の山縣公はマア、エライといはねばなるまい。

山縣公の一身を持するといふ事について、どんな事に私は感服するかといふに、あの人は極めて質素だといふ事だ。そして其質素な事を又よく子分共に移す。それが爲めに山縣公の極く親密な子分共といふものは自然と公の風采態度を眞似て自然と質素になる。一寸考へると質素と吝嗇とは隣同志で、質素なる山縣公は吝嗇であるらしいがさうでない。派手やかな人が却てケチな事を多くするやうに、質素なる山縣公はよく人の爲めに金を遣ふ。これは矢張り公の美德の一つだ。伊藤公は大磯などにゐては汚ない着物を着て平氣で歩いてゐた。これは大名の往復するやうな大隈さんに比しては優つてゐやう。然し伊藤公のは無頓着から來たので質素から來たのではない。本來は矢張り美人を擁せずしては一夕も眠ることが出來ないといふ人だ。豪奢なる伊藤公は質素なる山縣公に比して其消費した所は幾倍ともならう。又一杯機嫌で盛んな自慢話をする伊藤公、是と正反對に朴訥一遍に構へ込んでゐる山縣公、これは何れも自分の內懷を他人に示さぬといふ所から來て居るが、此點になると、山縣公の方は最も猛烈に自己を隱す。今度の朝鮮合併なども純粹の山縣式に決

行された。然し山縣式の秘密も最早や世人が大體揣摩することが出來るやうになつて來た。やがて其効力を失ふてあらう。

女に對する伊藤公と山縣公との差を見るに伊藤公は路傍の花を折つて歩るくといふ形、山縣公は自分の盆栽を座敷に上げて見るといふ調子だ。あの謹嚴な山縣公にも先年のお妾騷ぎのやうな事もあつたが、世間に吹聽された伊藤公の廣島から女を連れて上つたやうな面白い脚本を描くやうな事はない。けれども烱眼なる後世の脚本家は山縣公の隱れたる風流情事を検べて、伊藤公よりもつと面白き脚本を書き得るかも知れぬ。

書を書くことも伊藤公と同じくなか〳〵上手だ。然しこれにも二人の間に差がある。伊藤公は興に乘じて茶屋でも待合でも何處にてもノタクる。山縣公は程よく家の子郎黨に配るやうに謹嚴に書く。それて伊藤公の書は墨の濃淡印の捺し方の亂脈限りないが、山縣公のはキチンと一定して居る。それて維新前の山縣狂介は明治十年以下の山形有明とは別人だ。結局幕府といふ敵城をとつて其次に征韓論者といふ大敵を斃して、それからは見事鎖國主義の主張て今日までやつて來た。今日以後も當分鎖國主義の政略が山縣式に行はるゝてあらうと私は信ずる。

中國の印象

小田内通敏

川の廣島

夏の廣島は、町の狹いのと夕風の苦しいのとて殊に居苦しく思はれるが、一たび川岸に出ると、其の水の綺麗なのと眺の廣やかなのとて、丸て別の町にはいつ

たやうな心地がする。殊に滿潮の時には水が漫々と兩岸を浸し、太田川の流れに從つてゆるやかに、川面鏡のやうに光つて兩岸の白壁の影がゆらり／＼と落ちる。そんな時には川上から下りて來る舟は、船頭を乘せたまゝとまつてゐるやうに見ゆる。このゆたかな水面を橋の上から凝と見下すと、長さ四五寸もある名も知れぬ魚が、ヒラ／＼身をかはしながら威勢よく上り下りしてゐる。

遠く山縣の谷間から流れてくる太田川は、廣島に來ると四五本に分れるので、市内五六町にして到る處此の光景に接する事が出來る。しかし僕は最も京橋川岸の眺が趣があると思ふ。これは比治山の麓を流れるのてあるが、河幅の廣いのと麓の屋並の正しい後方に松林の多い比治山が床飾のやうにバックをなしてゐるからて、樹蔭からは寺の棟や料理屋の白壁などが隱見する。

滿干の影響の烈しい此の川は干潮の時には水が減り洲が出てゝ見る影もなくなるが、兩岸に近い泥のなかに蟹の棲家を見付くるのもおもしろい。ブツ／＼音のする方を見てゐると、五六寸宛離れて小さな穴が澤山ある、そしてそのそばには蟹が一疋宛居てブツ／＼音を出しながら一齊に兩方の鋏を動かしてゐる。川の多い廣島は娯樂の機關も備つてゐる。釣舟もあれば小さな貸ボートもあり、橋上の夕涼、橋畔の淺酌は固よりいはずもがなである。されば川の都としての廣島は、夏に於て最も其の風趣を味ふ事が出來る。

太田川はかく廣島市に無限の賜を寄與する外に、北方の山村からの重要な道路で、川に溯つて郊外の散策を試むるものは、一二丈の高さの帆をあげた舟が二隻三隻流を上り下りする事を見るてあらう。中國の郊外の特色ともいふべき竹林の蔭から、この帆船が一隻二隻と出てくるさまはどうしても繪だ。

比治山の墓地

廣島には兎角戰爭の紀念物が多い。大本營、紀念碑、比治山、殊に比治山は戰爭のために開かれたといつて

もいゝ。二十二三歳の青年に聞いても、少年時代には狐狸の巣窟で雉など捕りにいく位の場所であつたといふ。北の端には日清戰爭の時に造營された御便殿があるが、南の端には戰死者の墓地がある。

僕はわざと夕方に此の墓地に詣でた。京橋川を渡り山を上つていくと、夕立の後の事とて風は死したやうに靜かでたゞ松の木から落つる雫がポタリ／＼落つる音ばかり。四方の樹蔭はもう夜の姿を宿して、秋ならぬ虫の音さへ聞え、何となく悽惋の氣がみち／＼てゐる。上つてゆくと、忽ち樹蔭から男女の二人があらはれ、僕の姿を見て急いで山を下つたが、それから一層寂しさを感じた。坂を二三丁上ると、平坦になつて向ふに黑い家のやうなものが見える。暮色がもう萬物を呑んで百物一黑、二町ばかり辿り／＼て、家のやうなものが葬儀場な事がわかつて覺えず立止つて默禮した。そこをすぐるともう墓地で、道の左側には高さ三尺ばかりの花崗石の墓石が、何十となく列んでゐる。右の方には數こそ少ないが、一丈か二丈もある大きな石碑が四つか五つも立てられてある。墓所の後は一帶の松林で、黑い樹蔭から灰色の空が窺かれる、しばらく默つて立つてゐると、一種の冷氣が迫つてくるやうな氣もする。樹の間から一ヶ處焚火の見えるのも、場所柄何となく「鬼火」を聯想して冷い暗い感じを深くさせるばかり大道をあるいていくと、突當りには方尖形の高い石碑があるが、どうも赤十字社のであるらしい。しばらく其の邊をぶらついてゐると、喇叭の聲が崖下から響いて來る。アヽ十年の昔この營所の勇士たりし人、今日此の墓地の白骨となつてるのがあるかも知れぬ。僕は跼つて小さな墓石を一々撫でゝ見たが、もう暗くつて姓氏はわからぬ。

僕は今まで幾度か寺院の墓地に戰死者の墓地も通つたが、此の墓地に詣でた時ほど強烈な感じを得た事がない。これは廣島といふ聯想からでもあるが、ロシアの軍人の墓も多くあるといふ事を聞いておつたからだ。はじめは生前の知己の墓にでも詣でた心地で一種の親しみを感じたが、段々寂しい物悲しげな感じに變つて

たまらないからそこ〳〵墓地を出て山を下つた。余はこんな時に詣てたから、誰の墓があるかといふ事は一つもわからなかつたけれども、そのため反つて一種の平等的な感銘を得たやうに思ふ。

宇品の三時間

日のぎら〳〵する午後の三時頃、宇品の埠頭に着いて、まづ其の海岸通の道幅の廣いのに驚かされた。廣い〳〵通には處々に佗しげに客待つ車夫が二人三人車臺に凭れてゐたばかり。それと丁字形をなしてゐる宇品港の一等の街、そして唯一の街たる御幸通は、其の幅何町とかあるさうなが、ガランとした塵に滿ちたイヤな町だ。兩側の屋並はみな水害あとの家のやうにがた〳〵して、大風でも吹けば倒れさう、多いものは氷屋、安藝蕎麵屋、居酒屋などで、よく目につくものは、船員、人夫などの募集の貼板、町を通る人、店頭に立つてる人多くは勞働者風のものである。

さる人の案内で、陸軍の糧秣廠のある所を通覽したが、新しい赤瓦煉の建物舊い木造の建物など並んでゐて、其中には米や、燕麥や、枕木、船などを入れてある。夏になると一々虫干までされるさうなが、この所を見て僕は陸軍平常の用意の實に周到な事を驚くと共に、所謂軍事費に莫大の金額を費す理由を今更ながら合點した。案内者の話によれば、向ふの島々にも支廠があつて、そこにもいろ〳〵のものを準備し蓄藏しあるさうな。大仕掛な建物の續いてゐる間を、二人がポツリ〳〵あるいてゆくと、草藪のなかに硝子窓の別建の一棟がある。人氣もないから案内者に聞くと、戰爭當時の病院だとて、當時の雜沓のさま患者の悲慘な最後のさまなど、こま〳〵と話す。僕は火事跡の市街でも通つたやうな氣がして、ぼんやりと海岸の埠頭に出た。

一本の柳の蔭に二人の姿を隱してしばらく海面を見てゐたが、案内者はこゝは牡蠣の名産地だといふ。海外へ出稼人を出す日、宇那と丹那といふは何處ですか、と聞くと、あすこですと指す。北東の方を見ると、海

を隔てゝ脊毛氈をかぶせたやうな小山が二つばかり續いてゐる。その麓に白壁が所々夕陽に映つてくつきりと白く見える村が二ツある。――山勝で農作が出來ぬ所から、村民はみな漁を家業とし、朝鮮近海にゆくものも珍らしくなかつたが、段々布哇、米國などに渡航するやうになつた。今日では若者が嫁を貰ふにも、一度外へ出たものでないとよいものが來ず、若衆仲間でも幅が利かぬさうな。白壁の家は大概出稼して歸つて來たもので、子弟の敎育を重んじ村の學校など實に立派なものであると。

せめては、近い丹那村にでもいつて、布哇話やアメリカ話や聞いてみたいと思ふたが、歸る時が迫つて來たから踵を回して港の西南を圍んでゐる宇品島を一見した。島で最も僕の感興を引いた事は二つ。島を望んでまづ驚くは他の瀬戸内の島に見られぬほど樹木の茂つてをる事で、南端には大きな樟樹さへあるさうな。どうしてこゝばかりはと聞くと、漁場にさす蔭をなくさぬため、早くから縣で保安林にしたからであるといふ。アヽ、瀬戸内幾千の島々、悉く此の宇品島のやうに樹木があつたならば、いかに其の風致を増す事であつたらう。こんな話をしてゆくと、路傍に二階屋の明屋が澤山あるのに目がつく。――これは日露戰爭當時の遊廓で、此の島にある二階屋は大概その變身である。兵士の長く滯留した時などは、宇品町と宇品島連絡してある防波堤の所に碇泊する船は、大概二階屋をつくて三弦の聲晝夜の別もなかつたといふ。アヽ宇品はどうしても戰爭の港？。

宇品島を去つて宇品町にはいつた時は點燈頃、通のうち一際目に立つ二階屋の樓上電燈の光眩き處、主客相對して謠曲の聲が聞ゆる。瓦斯燈には安立とある。案内者いふ――「これは日露戰爭當時船乘でしたが。其の娘を當時の糧秣廠長某氏の外妾たらしめ、其御蔭で宇品港内運送の實權を一手に收め鉅萬の富を得たものです。戰爭前まで名ばかり呼捨にされたものが、今は安立サンで大持てです。アヽ。世はさま〴〵のもの。」と

御山上り

赤い嚴島神社に參詣し古雅な舞樂を觀た僕は、半日山上りに費した。

麓から頂まで二十八町、故伊藤公の喜捨によつて出來上つた道路は、いかな老人でもやす〳〵と登る事が出來る。町は小さな溪川に沿ふてゐるが、樹の古いのと水の淸らかなとは、人をして深山に入るの思あらしめる。

登り六丁目の處に見晴の茶亭がある。こゝからは弧形をなした嚴島の市街から名物の鳥居は勿論、對岸の中國筋の山々まではつきり見える。嚴島の山態がふつくりと樹木で飾られた中にをつて、中國の山々を見ると山といふ感じが起らぬ。山の支脈の背の處が、みな赤く禿げてゐて谷間丈が綠色となつてるのは、凡て模型でも見るやうな。連絡船の往來する瀨戶の水は、些の波も立たずに全く鏡のやう、何のためか紺碧の色に二重三重濃淡のあるのもすてがたい風情である。凝と見てゐると、自分は何時の間にか繪卷物中の人と化し去つて了ふ。

二十町も登つたかと思ふ頃少し平たい處に出た。四方を見回すとみんな一抱か二抱もある松樅の大木ばかり、晝猶暗い處に一軒の茶屋があつて、ラムネ、サイホン、林檎などを賣つてゐる。日々嚴島から背負つて來て商つてるものださうなが。此處は南側の樹の間から吹き來る靑嵐磯の香を傳へて、御山上り道第一の休息所だと吾も人も稱へてゐた。谷間に朽ち果てた老木の橫つてゐるなど、さながら深山の面影がある。

大木も少なくなつた南面の崖の上には、朱に塗つた一つの祠がある。まはりは幾千年か風雨にさらされた花崗石だ、雪達磨のやうに丸くなつて、祠の後や下に續いてある。石上に蹈んで下の方をのぞくと、切り落したやうに嶮しく雜木林の見る影もない姿だが、前は安藝の海を見渡して眺廣く、右に阿多田島、大黑神島、左に西能美島などを數ふる事が出來る。ずうと向うには大島の姿さへ認らたる。海は油を流したやうに靜かに

島は箱庭の築山も同じ姿、瀬戸内の風光の面影は、實によくあらはれてをる。何處から來るともなしに吹き入る一陣の海風に、我等は覺えず深い呼吸をするのである。

頂に上つて、磊々たる花崗石の大塊も攀ぢた眺矚の濶大は、またないものであるが、僕は頂の價値をば寧ろ鐘樓に置く。鐘樓は二三十本の松林のなかにあるが、古雅なる姿は一見たゞ物てない。海風にさらされた鐘の肌、銘の文字もさだかてないが、「平宗盛」が獻納した事丈が明かによまれた。高さ三尺ばかりのものだが實にいゝ形だ。僕は嚴島神社々殿幾百の寶物よりも此の山上の鐘樓によつて平家の榮華のいかに大なりしかを知つた。

梟刑司法卿の最後

明治政權爭奪史の一節

魏　昌　卿

一、權勢の犧牲

平和のパノラマを描くに血筆を用ゐられし明治史の首卷は、徒に權勢の犧牲となりて、悲慘の死を遂げし維新元勳の屍壘堆を爲す列序なり。其各編各章の標たる人物の變ずる每に、各自特殊の異彩を放てりと雖も、就中江藤新平の最期の如く、最も劇的記述に富みて、最も暗怪の雲に包まれたるは蓋し他に稀なり。

征韓の閣議に激越して、聯袂廟堂を退きし明治元勳の中、前參議司法卿江藤新平は、最も年少にして最も誠直最も明敏にして最も短氣なりき。情强く涙脆く、一徹狷介なる彼の性癖は、明智光秀に似て、鋭き神經的刺感に驅られ、深謀精策の慮を失し、鬱憤迸りて、

木戸、大久保、岩倉三卿の鼎持弄握せる明治政權に反抗せる最初の爆裂彈にてありしなるが、烽焰第一の陳呉は閃電の如き運命に殪れ、只眩ゆき芒射の認光を人の心に映すに過ぎざりき。

彼の憤起せるは、獵夫の挑發に巣を出て、巧なる罠に罹れる獲物なりし。彼は、壯烈男子の所懐已を得ずして起ち、深く盟約せる同志に售られ、全く不幸の犧牲となりたるなりき。朝憲紊亂の汚名に座せるは單に成敗の果のみ。彼の眞心情は、耿々憂國の至誠に政權を僭弄せる長袖者を滅却せん一事に存ぜしなるも、雄志蹉跌しては、順逆の蹤跡を愆れる譏謗を免れず。

「佐賀の亂」なる四文字に屬する表面の記述は至簡なりと雖も、闇黑なる其背景は實に百鬼跳梁の地獄なり。相噬み相屠れる明治元勳の政權爭奪史は、春秋戰國のそれに優り、佛蘭西革命時代のそれに勝りて、裏面に種々の經緯を存伏す。江藤新平を首魁とせる佐賀人の陰謀は露骨に爆發せり、斯叛亂を機として巧妙に企策されし在朝政權者の陰謀は尚ほ秘密。之を畫ける工勞者の多くは既に黄泉の人。事や傳らず永へに葬られ了らんとす。余茲に、未だ傳らざる斯秘眞相を發きて正史の缺を補はんと期す。

曾て蘇格蘭女王メーリを叙せる英國の史家謂へり慘痛なる末路に陷れる花の如き女皇を憐み弔ふの念莫きにあらねど、彼女を弑りし皇室を呪咀するに非ず、勝利者と雖も其罪惡を隱庇すべき理由無し、余は正直なる自白を公明なる世人の批判に問ふと。余も亦爾く感ず。

二、大久保伊藤の握手

征韓論の沸湧は明治元勳政權爭奪の第二幕開場を報ずる拍子木の亂打にてありき。

横井小楠、大村永敏、廣澤眞臣の暗殺を以て、政權爭奪の第一幕を終れる明治政府の演劇は、六參議拒官、薩派武官隱退を以て、興趣多き脚色を演じ來りぬ。

狡猾なる後藤象二郎は、鋭利なる陸奥宗光を參謀として、傲岸なる板垣退助と締び、鄕里の年少を率ゐ、

桂冠隱退の不平元勳と相携へ、滿天下に呼號し、慶應四年の詔勅を楯として、第二の維新を策しぬ。庶民を根基とせる彼の計畫は、機全く早く、說直に消えたりき。而も豪放なる彼を、德川幕府の餘黨に眼を點じて、更に秋波を俄に豫期の政權より却けられたる不平公卿に送り、畏怖すべき氣勢を示しぬ。西鄕、板垣、江藤、前原等が桂冠と同時に鄕里に蟄伏し、捲土重來の機を狙ひ、其勢を養ふに反し、彼は帝都に滯留して、時の政府に自己の威を示すに汲々たりき。亂離の時代に於て、最も成功すべき慨ある彼の憶面なき謀策は、毎に花々しき彩光を綴り、先づ木戸を驚魂せしめぬ。三條太政大臣は、時の政權を代表し、緣戚を結ぶ彼の藩主山内に賴りて、懇々彼を說きぬ。狡爺後藤は笑ふて諾し、直に大久保を訪ね、市藏、余の爲に準備せる匕首を渡せと、流石に冷靜なる大久保を駭かしぬ。實に今夕を以て後藤暗殺の準備供れるなりき。大久保落淚して罪を謝し異日の誓を與へて、象二郎、卿は再度余の裏を搔けり、最初京都守護の爭に於てし、今や再び、卿は實に奸に明察なりと云へぬ。斯約を履みて大久保は、西南の役、後藤が西鄕に通ぜし密書を火中にして後藤の罪禍を救ひたりし。斯くて後藤は良久時眠に就きぬ。臥床に在るも、事を好みて安んぜざる彼は、警戒の網につゝまれ、監視嚴しく、檻中の虎豹を以て目されたりし。

後藤の動かざるを物色せる政府は眸を他に轉じぬ。當時最も奸雄の資を備へし大久保は、粗笨なる後藤を欺くに淚を以てし、比較的士人の間に人望多く、德川系に深く囑待さるゝ彼を抑制すると同時に、妖策を四方に配りぬ。彼の期する所は政權を己の掌に收め、意の如く時代を料理するに存し、最も忌憚せるは、自己の力及ばざる武人の側と、己に下らざる各藩出身の同列元勳となりき。彼の意念は日夜に斯點に働きぬ。其九分は征韓論に桂冠したり。斯機乘ずべき所。一秒の弛怠なく彼は其軌に車を馳せぬ。

彼と目的を同ふする者、尙一人參議の列に在りき。其人を誰とかなす。曰く伊藤俊助博文。

伊藤は、格階を尊ぶ風自然に浸染せし幕末に於て、皂隷の間に身を起し、縦横の策を馳せて、撥亂の際に身を處せしと雖も、武人側に於て誇るべき經歷を有せざりしが故に、毎常武人の跳梁に蹙顔したりき。且つ彼は藩外の元勳より相當の待遇を受けしと雖も、長藩の先輩に對し如何にするも頭を擡げ得ざりき。當時尙ほ藩據の風餘存し、藩内士人の間に重きを爲すに非ざれば、以て廟堂上位に椅子を列して權を握るを得ざりき。彼は、如何にも此荊棘を排し、前途の進運を拓かんとしき。而して策を共にすべき者を、同藩に求めず、他藩の勢力者間に探したり。其の狙的に中れるは即ち大久保參議。

大久保參議と伊藤參議との合體は、大隈參議、木戸卿等の眼より非常の猜忌を投ざれしも、目的を共にして、强き握手を爲しぬ。野に下りては不平元勳と相締ぶ勇氣なき大隈、木戸等は輕侮の嘲笑を大久保、伊藤、より浴せられ、孺子與すべしと稱されぬ。

兩雄の聯合なるや、彼等は先づ在野元勳を物色し、中に最も悍正なる前參議江藤を激發し、巧に導き陥れたりき。

三、伊藤參議の計策

從來誠懿謹恪なりし伊藤參議は、大久保參議と握手して以來、日夜市巷の酒樓に遊び、紅裙の膝に眠りぬ。彼は維新に於ける荒亡を再び初め、所謂壯士を湊めたるなり。彼の下に投ずる者多く不逞叛犯の徒、罪を償ふに功を以てするか、或は亂を好む輩、濫に死を喜ぶ危險の分子なりし。彼等を手足の如く使役して、參議伊藤は、其中より人を撰び、嘗て荻城下に井上聞多を刺せし兒玉某を佐賀に走らし、次に贋札首坐の罪律に處され、方に死刑臺に上さるべかりし福岡藩中村某を肥薩の間に逸せしめぬ。

二人者の目的は、警戒嚴なる江藤の看破する所となり、了に達せざりき。而して波瀾は掀りぬ。

閣議の席一日、溫厚なる寺島參議の口よりして、江藤刺殺の報ある由を告げられ、其事實の誤傳ならんことを希望されぬ。大久保參議は、嘯きぬ。伊藤參議は

是れ江藤前司法卿が策を設けて在朝を陥る者、迂陋にも陥擠さるべきに非ずと托言しぬ。大木司法卿は憤怒して、江藤の爲に、我故友は斯の如き卑劣漢に非ず、彼は漫に言を爲す者に非ず、按ふに陥擠の罪は伊藤參議にあらんと、辭色厲しかりし。而して廣澤參議、大村兵部大輔を刺殺せし本尊を詰り、更に喰違に於て岩倉右大臣を刺せし匪徒の兇魁檢擧を發議しぬ。伊藤參議は蒼皇座を退きぬ。斯狂波瀾は、典雅なる三條太政大臣の斡旋により、辛く閣臣の分裂を免れぬ。

而も時勢の潮渦は愈々險惡となり來りぬ。大久保參議は、西郷系ならざる薩州兒を網羅し、主に警視隊を手馴づけ、暗に江藤前參議の動靜を探らしめぬ。大久保參議の行爲を以て尙ほ手緩しと爲せし伊藤卿は、井上參議と相結び、或は五代友厚と相托し、或は中野梧一を用ゐて、單に政府側の力を以てしてのみならず、商賈を利用して、長崎佐賀の狀況を探知しぬ。

井上參議の分擔したる部面尙ほ在り。彼は長藩々士の鎭撫に策し、山縣監軍の統ぶる三浦、三好、滋野の武人側に對しては、御用商人の金力を用ゐて、彼等の不平を絕ち、大村永敏の系統に屬する原田、小澤等をば重要の位地に登用して、一面薩派軍人を控制せしめぬ。

是時情あるも智疎く、寧ろ愚人に近く、唯好個の戰士に過ぎざりし薩藩出身の武人は、西郷、篠原、桐野等を失ふて、長藩の頤使に甘んずるの態なりし。

更に伊藤參議は、開拓使長官黑田淸隆に據りて、五稜廓の英雄榎本武揚を拉し、德川幕府餘黨に聯絡を試み誠明なる松平太郎の憤涙を沾ひ、溫順なる大久保一翁の怒を値し悍頑なる勝伯に乘せらるゝの蛹を食ふに至りたりぬ。演劇脚本の大作者伊藤俊助は、彼が一生の中、最も苦心せる著作に今や筆を染め出しぬ。彼の運命は此一擧に定りしなりき。

四、舊幕臣の雪辱機

蘇張時代の策士に敎訓されし伊藤參議は、狹量大膽なる明治元勳の弱點を克く知り、亦雪辱の義憤に勵む日本士人の特色を能く察して、魯直なる黑田參議に說

くに、各藩上司出身の元勳が權威を恣にするの非と、敢て功績讓らざる吾輩の立脚地沒せん不平とを以てして、理に據りて俠力を藉さん義を乞ひ、情　愬えて誠念を致さん涙を願ひぬ。率直單純、矯激事理に疎き、黑田參議は長人の狡計に驅られ、薩人の本領を現し、一言の下に然諾し、禮を盡して策を尋ねぬ。伊藤參議は計遂げたりと爲し、辭を卑ふして思慮する所を語りたり謙抑を裝ふ彼は、人を動すに必ず命を以てせずして情を以てし、得意傲岸なる同列を煽動して意の如く奔走せしめぬ。彼は、敵を罠穽に陷れん料に、先づ味方を罠穽に導きたりしなりし。

黑田參議の縛されし枷械は果して如何。

彼は、五稜廓の濠を挾みて、六年干戈を交せし榎本武揚に走り、因緣淺からざる情誼により、舊幕臣の奮起を從慂しぬ。義諾に勇む榎本は毫も反かざりし。彼は唯幕府側の立身の機來れるに歡喜せるなりき。

其家門高く、情操潔き松平太郎は、榎本よりは優れる智を以て、長官黑田と榎本との默契を快とせず、非常の憤怒を以て榎本を控えぬ。彼の主張は、薩長の反覆恒なきにあり、狡兎盡きて獵狗烹らるの禍を招くにありし。然も榎本は約諾を重じ、舊友と誓を斷つも、男子の言を全ふせんと云へり。松平は、諫爭容るゝなくんば、余汚名を君と共にせん、舊主君に報ひ、三河武士の氣慨に戀るゝを得ば本懷と義に投じぬ。而して榎本が現政府が佐賀の江藤參議に含む所あるを語るや松平太郎は常に準備せる懷劍を握り、背を裂き、腕を扼し、榎本を罵るに「犬」と叫び、汝恩義を知らずや、昨年余等の赦釋されし時、大久保を首とし薩長の總ては余等の斬首を主張したり、唯江藤司法卿のみ頑く說を持して余等を救助しぬ。焉ぞ刄を彼に擬し得ん。余の翼ふ點は、彼に與して、回天の擧を爲すにあり。寧ろ舊幕の士友を唱えて現政府に抗せんか。余等は、如何にするも猾賊相食むの具たるべからず、最も正しき一を扶けんのみと。

彼よりも才に勝ちし大鳥は、敢て選ばず、彼我甲乙の差何からん、江藤の恩情は江藤の策のみ、黑田の恩

欲は黑田の計のみ、計に據りて計を描かん。德川勢力再興を最後の目的とする吾黨は此際巧に薩長を利用して起んのみと。當年の策士大鳥は斯くて江戶を中心とせる諸小侯の間を斡旋せんと謀りぬ。而も事略大垣藩司の裏叛により水泡に期したり。尙ほ松平太郎は侃々諤々讓らざりき。而して彼は、慷慨の餘、之を同列島義勇に語りて、現政府の卑劣を誹れり。島は江藤を崇拜せる佐賀人、崇拜せざるも、先輩と信じ、薩長を憎み、殊に伊藤を嫌厭せる壯夫なり。直に東信を通じて江藤を奮めぬ。變露はれて、遂に松平太郎は閭巷に窮死するの巢を造り、島は佐賀の亂に與するの決意を執り、大島は長く不平に沈むの因を釀しぬ。

時に、徒に策を好む舊幕の洋學者柳川某は、水戶藩士の多數が不遇裡に呻吟するを察知し、彼地を根據として、鎭西を壓迫せんと試みしも、東北は敗北に繼ぐに蹉跌せる後なりしが故に、自奮自起して現政府と戰ふの勇なく、一人として彼に從ふなかりき。而も之れ薩長政府の好運なりし、彼の東北の不平が北陸近畿の不平と相結ばざりし一事は、獨り薩長の戒嚴鋭意なりしのみならず、各地相凌ぎ相侵相すの小心自ら致せしなりき。同時に、維新前、大村の兵學塾にて、伊藤に刺殺されんとせし手塚律三は、爾時伊藤の刄下を脫し、千葉佐倉に潜伏せしが、當時瀨脇と改性して現はれ、昨日の敵伊藤の用ふる所となり、後年榎本公使の下にポーシエットの領事に任ぜられしが、是時洋學時代の舊友と謀り、舊幕及び佐幕派の人物を厚く登用し、桂冠元勳の變に備へんとしぬ。是建議を容れしは寺島參議なりき。然れども、寺島參議以下是輩は總て學究、猪突式の勇を缺き、策遂げざりし、而も伊藤は漫に退けず、木戶を說き、大久保を欺きて、是等の黨を各省各局の飜譯課に登用しぬ。陽に是等を用ゐ、陰に學者團結の虞を斷し彼は、政治過渡期に於ける自由に委して奔放なる思想が天下に傳播せんを恐れ、名美にして實拘禁に過ぎざる制肘を加へたりしなりき。正直なる學者は滿足して伊藤を謳歌しぬ。

黑田參議を通じ、榎本に據りて、舊幕臣を籠絡せる吉

計は、松平の反抗、大鳥の狡策ありしにも拘らず、醇朴俠越なる榎本の決心にて成功しぬ。函館英雄の名は東北の士人及び舊幕臣に大勢力ありき。會津藩の勇士、米澤藩の壯夫等は沸起しぬ。因りて調所廣丈は是等諸地を遊說し、山川中佐、東條大尉、赤松少佐、矢吹少佐等を首とし、官に任じて鎮西に下りたり。彼等は、先日の恥を雪ぐに、今日の復讎を企てたるなり。其決心の度を測知すべきなり。

同時は、函館脫走の飛將人見一太郞は、變名磐柝の吏たりしが、突然伊藤を訪ね、往年彼が指揮せし幕府騎兵隊及び流浪せる新徵組の壯士を率ゐて應ぜんことを告げ、一躍縣令の官を贏ち得ぬ。船越衛、安場保和等皆劍を悅ぶの士、馳せて伊藤の下に湊りぬ。彼等主義なく目的なし、兄一世の荆軻を以て自任せしもの。理非の善惡は敢て問ふ所に非ず、勇進猛突、一時の快を庶幾せしに外ならざりし。斯くて無名の英俊は、七首を呑みて、佐賀に赴き、血を啜るの機を狙ひぬ。實に狂的激情を有せる江藤新平は、斯の如き挑發を受け、座して忍び得ず、遂に起ちて戰亂を敢てせしなりき。彼は、大久保の背後に隱れて、辣腕を揮ふ伊藤を視ず單に怨を大久保、木戶に抱きたりき。

五、隱れし作者の毒

脚本作者伊藤參議の仕組は愈々步を進め、彼は飽まて先鋒を尊信する態を執り、方に亡ぼさんと狙ふ江藤の許に使を派し、肝膽を披きて現政府の情勢を詳敘し、更に其意見を問ひぬ。之れ敵に虛を作らしめ且つ其含む所の程度を卜する寒暖計なりき。彼は緻密なる手段に露骨なる體裁を採りて巧に江藤を探偵しぬ。彼は、人を用ふるに滿足せず、自己自ら手を下すの勇を有したりき。

當時、木戶と相結びて大隈參議は桂冠元勳の危險を云出しぬ。大久保は笑ひ、伊藤は謹みて聞きぬ。而して木戶參議の憂ふるを退け、二參議を假言して彼等に顧みる時ならずと云ひぬ。既に秘密の準備を終れる大久保、伊藤は、大隈等の寧ろ放心なるを嘲り、無爲無能なるを認めたり。洵に大隈參議は、福岡孝悌が土佐

に、伊集院兼知が長門に、清岡公張が伊藤の内命を服して、微行遊說し、退鄕元勳の間を割き、相互の聯絡を沮みしを知らず、亦副島前參議、後藤前參議が、伊藤の案にて、大久保の兼議になれる岩倉大臣の說に從ひ、杉子、田中伯、由利子等に旨を齎して、近畿の不平を鎭壓したりしを察せざるなりき。井上聞多は、大隈の次官として、彼に親附するの態を示し、幼時よりの締惡の友伊藤と謀り、尙ほ大隈を欺きしなりし。

明治六年十月初旬、菊花宴に托して、大久保伊藤の向島八百善に於ける會談は、座に北垣、關、の後進を加えて、各藩權力均等保持の打破、政權統一の基礎、在野元勳の蟄屈、人民歸服の計策、華族を東京に集むる事、地方縣治の制、要するに政治上には中央集權を完全し、政權私慾には長に自己一黨の萬歲を策せるなりし。故に、彼は地方牧民の諸君を抑へ、中央政府に在りて、金權に處する途を制する術を井上に委して策せしめぬ。彼は、封建の制永く文を賤む武人の風を利し、薩長元勳同列以上には、隨意に武權を與へて、無智なる彼等を他日屈降せしめんとせり。伊藤の智や大畏憚する先輩は葬られ、猜忌する同列は却けらる。大久保は、嗚呼余も亦伊藤に售られんかと嘆じ、如何に伊藤を控制すべきかに其冷靜なる腦を擾亂しぬ。而も斯念彼に浮べる時や既に遲し、四方を顧盼するも、伊藤を離れては、一人據るべきなく、一人語るべきなし。且つ然る者を討ぬる間に、伊藤は猶豫なく吾を屠らん患あり。伊藤自身も謂へり、市藏兄、漢高は重臣を烹ん鼎を未央宮に据え、魏曹は親友を埋むべき坑を堀りたりと言は彼に淚なく桂冠元勳を珍滅せしめんと勸めしなるも、其實意や正直に自己を自白せるなりき。

滿身策に富める伊藤參議は啻に政權に憧るゝ輩を操縱し、不平に呻吟する奸亂の徒を使嗾せしのみならず、信州の破落漢に身を起し、對外商界に鬼策を弄し、一代の豪華を極め、時代の貴紳と自由の交通を爲せし吉池泰輔と聯絡して、非常の計を爲しぬ。吉池は當時築地にホテルを開業し、横山孫市、津田仙を支配人とし、商界に縱橫の妙を逞ふせり。彼は、伊藤大隈に親

昵なるに均しく、篠原桐野と相善く、東久世を通して公卿華族に交信し、内藤志摩守に倚りて大名華族の或部分に出入しぬ。彼は、巨膽を抱きて、今や伊藤の懇談に應じぬ。而して彼は、井上參議が暗に三井一家と握手するに對峙し、五代友厚と提携して、佐賀の添田を使ひ、大坂の鴻池住友と相通じ、大坂以西に屬せる金權を自由にして、西郷の黨を詐り導き、其甕に包み去りたりき。今や大に落魄し、方に其面目を失せるなるも、鷲尾伯は、尚ほ伊藤參議の請を容れ、時俗の瞻仰と政府の尊敬とを蝟めたりし公卿華族の間に策し、北面の武士を拉して、一呼の下に鎮西兵兒に對するの勇隊を組織せんと企て、兩本願寺を脅威して、北陸一向宗門の騷心を鎮抑せしめぬ。事蹟湮滅せりと雖も、豁達なる鷲尾伯が磊落なる烏丸伯と相携えて、兩本願寺を威迫せる行蹟、今日なりしならんには、各地の檢事局、警察部を騷動沸騰せしむる度、豫想外にあるなるは必せり。

伊藤の收穫は方に接近し來れり。

六、孤立に陷れし江藤

明治七年正月、前參議江藤新平叛すの飛報達するや、太政官々府は周章せり。

寺島參議は愈々ヤリましたなと輕く、大隈參議は言なく、大木參議は仕方無しと嘯き、大久保參議は鎭壓の方針を直に執らんと退廷し、木戸參議は單に怒り、岩倉大臣は嘆息し、三條太政大臣は何故に暴擧に出しなるか、不平あらば來りて說くべきにと、子を思ふ慈母の如く、江藤の身を患ひ、其心術を怪み、寧ろ飛報の虛ならんを信ずる者の如かりし。佐賀の暴發を豫想せざりし彼等は、桂冠の元勳咸く歸鄉せる目して、叛意十分、兇徒嘯集の豫備と爲せし伊藤參議の意に相違せる考念を有せしなりき。孤伊藤は江藤のみの叛起、薩長土に何の關聯なし、敢て畏怖するに足らず、前參議は實に死を急げりと嘲笑しぬ。彼は其勃發の所期以上に早かりしに稍々驚愕せしも、確信して其策の成功を期待したりき。

江藤新平起ちぬ。然れども彼は總て友に售られ約に

背かれぬ。自信せる所期は十分の結果に至らざりし。伊藤の配案せし策は八分の成功をなして、江藤の四周は獵夫の張れる羅網なりき。彼の信賴せる左右の幾分は間者なりしなり。彼は悔ひず怒らざりしも嘆じたり。盟約せる其友の背反せるに及んで、彼は天を仰ぎ慟じたりと傳えらる。土の板垣は、岩村兄弟を通ぜる林友造の策は失まられ、近き將來に參議の榮職に復する內約に甘じて、彼に應ぜず、救はず、事敗れ來り賴るも、却けて面會すら拒みたり。薩の西鄕は、吉池の計に陷れる桐野篠原の控制にて、動かざる山岳の如く、後藤象二郎は、節操なき狡策を弄して、從時從勢主義の常套を發揮して、政府を脅迫するに忙しく、長の前原は宍戶璣の制肘を受けて、外出の自由すら得ず、藩領の內に包まれし大村藩の後進は師の影を踏みて怡然たりし。江藤は狐狸に魅せられし威に囚られぬ。而も鋏を拂ひし刀の血に急走したりぬ。

斯く孤立の勢に陷り、自然自滅の境に江藤起ちしなるも、伊藤は尙ほ十分に彼を抑え、他の桂冠元勳との間を沮害しぬ。伊藤、大久保が最初に江藤を狙ひしは江藤の性情厲烈にして俠に富むを恐れ、彼西鄕、前原に遲れんか、如何なる策を施すも効なく、必ず應起せんを察し、最も勢力强き西鄕の起ざるに先ち、其手足を斷んとせしなりき。故を以て、彼等は、佐賀の變亂を鎭壓するに適當なる兵力以上の兵勢を派遣し、以上の警戒以上の注意を爲したりき。嗚呼、江藤は齒を拔かん爲に切去されし唇なるかな。

江藤前參議の運命は、設令、梟勇豪膽の島が勅使と僞稱して、地方の人心を鼓舞し、來り加はりしと雖も、旬日を出でざる悲哀のものなりし。彼は、孤壘に據りて相食む權勢の犧牲となり、當時の元勳中、最も眞面目に國家の前途を憂ひ、西鄕の如く名に走らず、前原の如く權を趁はず、後藤の如く勢を求めず、一點私を雜ふる所なき最も純潔の士なりしが、天彼に與せず、誠意酬ふるなく、機失せしか、策誤りしか、了に爲すなきに倒れたりぬ。彼の所期は、亂を擧ぐるの時、女婿江口の手僕の遞傳にて、岩倉右大臣の許に達しぬ。

岩倉卿は征韓論の餘沫、元勳をして方向を失せしむるを嘆き、今更ながら昨年木戸大久保の說議を容れて、故なく既に廟議の決を却け、彼等を慰むるなりし自己を悔ひ、長藩出身の士に似ず、誠恪なりし品川彌二郎に旨を含め、部下を解散すべきを江藤に傳へしめんとせしも、事遂に果さざりし。

七、大久保鎮撫使の强制

佐賀の賊鎮定に歸すと報ざるゝや、三條太政大臣は江藤の身何如と尋ね、彼遁竄せりと聽くや、吁幸なりし、狷狂の性身處を誤りしと雖も、身さへ全くは再び罪を償ふの時あらんと謂ひぬ。彼は、岩倉公と均しく所意なき犯行に國家の元勳を殺すに忍びざりしなりき更に寺島、大木現職の參議二人も江藤を殺さゞらんを主張し、副島等退職の元勳も彼に假すに生を以てせんことを述べ、自己の功を以て彼の罪を贖はんことを乞ひぬ。彼等は、冷刻なる大久保が自ら鎮撫使として鎮西に下りしを以て、殘忍の態度に出んを怖れ、殊に江藤を忌める彼が禮を失せんを慮りしなりし。元來彼等は江藤を目するに、罪の如何を問はず、當然其生命を釋すものと信ぜしなり。蓋し江藤の陷れる權勢爭奪の眞相を解し、彼は、大久保に抗せるも、朝廷に反せる者に非ずと爲せしなり。而も、伊藤參議は、平常の溫和似ず、辭色厲しく、江藤の死を主張し、大隈參議、井上參議も附和するの勢を呈しぬ。然れども三條卿の決斷は動すべからざる斷案を下して、彼の一命を赦すべきものと決しぬ。不快なる感に囚れたりし伊藤爭て默從せんや。直に田中不二麿に密書を携えて大久保の使に急行せしめぬ。密書の意は敢て說くの要莫し。

廟堂の議は、江藤を縛して東京に禁錮し、其命を救ふにありき。故を以て前參議を辨理すべき地位の官吏を派せず、大判事河野敏鎌、大檢事岸良兼養を遣はし唯罪跡を豫審するに止らしめぬ。殊に河野敏鎌は、江藤新平の書生にして、其恩義を深く受け、師弟の情誼渥き者、京地出發に際し、大木司法卿、岩倉右大臣より。詳精に溺りて內命を受けたり。而して大隈參議は亦彼に諭して、決して師を謬るなきを以てせり。以來

彼は大隈卿と相斷ざる緣を結びぬ。

伊藤の密書に接せし大久保參議は、開封讀下、然るかと頷きて笑ひ、直に火中に投じ了りぬ。又、日を前後して、江藤の命釋赦の旨を傳ふる岩倉卿の密使も亦達しぬ。而も、江藤新平を生擒し來れ、決して身を處せしむる勿れと逮捕の警吏に嚴命せし大久保は、伊藤の書に接するや、從前の態度を變じ、岩倉卿の使者を沮みて會せず、江藤を梟せし後、始めて引見し、嗚呼失しぬ、幾何故に早く其故を通ぜざるや、爾鈍恐、右大臣の眞意を破り、使者の任を全ふせず、余に友に背くの罪を負はしめ、天下の英雄を滅ぼさしめぬと叱咤しぬ。官用を帶はざりしが故に、早急は面會し得ざりし使者は、其罪責に任じ、恥辱と知りて自殺したりぬ。彼も亦權勢に葬られし小犧牲なりし。

前司法卿佐賀亂匪の首魁、江藤新平縲縛され、佐賀城に護送されし夜、座側に大判事河野敏鎌を呼びし大久保鎭撫使は、人を空にし、一紙片を示し明日斯の如くせよと命じぬ。紙片は江藤に對する宣告の主文なりき

河野大判事を顏色蒼白となり、大久保卿を視上げぬ。

然り、斯の如くせよ。

河野大判事、默して、切齒しぬ。

命の如くせざるか。

諾。

河野大判事は僅に斯く答へしのみ。良久時座に俯頭せしが、旋て、江藤先生は、何如にしても殺さるゝ人ならん、劒と毒とを小官の前に陳じ、其一を撰べと謂ふ大官の命、謹んで拜受せん。不肖敏鎌は、權に屈するの心なきも、師の最後を辱めざらんを希ふ。法に據るの斷を有するも、師を汚す他の力を避く。運命の極まる所、如何ともし難しと。聲涙俱に下りぬ。

八、師弟訣別の悲劇

宣告の日達しぬ。

日午ならんとす、佐賀城内寂として聲洩る事なし。城殿の玄關を假法庭とせる處、乃ち判決を受けし青年の香月某、彼は英國留學より歸來僅に一個月、先輩の恩誼に感じて、叛に與せし者、宣告は斬罪なりき。

彼は、紅顔の双頰に笑を漲溢し、獄吏に擁され、同學の友にして罪案を均ふせる青年と、英語にて何事をも語りつゝ、死を見る歸する如く、法庭を退きしが、庭の入口にて、十重に縛されて、桶の如く周圍を獄吏に繞られ、法庭に護送さるゝ江藤新平を視、叫聲を放ちて

おゝ、先生。

聲に頭を擡げし江藤は、

あッ、香月か。

二人の師弟は、相顧みて嫣笑を交はせしのみ、他を言はず、凝視數分、兩々の星眸光を射りて、監吏の眼を眩せしめぬ。監吏は二人を强ひて別たざれき。

五歩を隔てゝ、相視る二人は、尙ほ語らず、尙ほ笑はず、五分、七分、十分にして、辛く相共に首肯しぬ。

首肯して、香月は俯頭せし儘、身を飜へし歩を運びぬ。江藤は、兒の姿を視送り、微に笑を洩らし、法庭に歩をすゝめ、肩を怒らし、眼を張り、意氣軒昂として行きぬ。香月は四歩にして頭を回し、可懷げに師の後影を拜しぬ。而も江藤は顧眄せず。彼の爲に啓きたる法庭の扉は彼を嚥みぬ。師弟の眼は相通ぜざりき。

愛生の死宣告を知らざる師は、自己の覺悟を持して、梟罪の判決を受くべく、法庭に入りぬ。自己の宣告に師の死あるを信じて、弟子は屠場に往く間、師に訣別しぬ。生前再び相逢はざりし彼等は、數分の後、梟臺に英雄志に殉ぜるの頭首を駢べ、頰と頰とを相接して師弟の深き秘契を全ふしたりしなるが。

法庭に引据えられ、縛を解かれし江藤は、正面に顔色憔悴し、眼に涙を泛べて、戰慄しつる河野大判事を視、弟子を愛しむ過去の至誠に歸り、辭優しく、

敏鎌、畏怖する勿れ、屈する勿れ、

罪人判事を厲まし、折らざりし膝を屈して、荒蕪の上に座し、犯人の地に就き、師自ら摸して作法を弟子に敎ふる如し。吃訥、大聲を擧げて、大判事は、

江藤新平、其方儀

ハイと、前參議は、聲に應じ、故意に頭を低れぬ。

河野大判事は、

爾、新平、朝憲を紊亂し

と紙片を讀上げ、梟罪宣告し終るや、座に倒れ伏し、

先生

と絶叫して泣沈みぬ。河野敏鎌は、眼前死刑を宣告せる師を控え、唯先生と云へる一語の外、謝罪なかりし。彼は、全く氣絶し終えぬ、權に壓されて、師を人手に殺すの悔を除きて、法を曲げて、自己の手に葬りて彼は恩師を殺すと同時に、自己をも殺了したりぬ。江藤は忽ち眥を裂き、腕を扼し、膝をすゝめ、怒聲を擧げ、

何故か、

と。即ち犯人を罪責檢斷を經ずして、宣告するの無法なるを尤めたりしなりき。岸良大檢事も首肯きて、先生然りと云ひつゝ、河野大判事の無禮無法を口にしぬ。而も大久保鎮撫使の命を受けし獄吏は、折重りて江藤を拉し去りぬ。江藤は、法庭を去るに際し、天を仰ぎて哄笑しぬ。

斯くて、權勢爭奪の牲となりし江藤新平は、弟子に、自己の作りし法の擬律を受け、梟罪の宣告を下され、日本の商央なりとの評を蒙り、其生を封じぬ。

尙ほ權勢を爭ふて、明治元勳の相噬は酷烈となり步めり。江藤新平が梟刑司法卿の名を殘せし是活光景は只序幕に過ぎざりき。

魏昌卿謂ふ、梟刑司法卿の最後と題せる斯篇中、彼の生涯に於て最も光彩ある部分即ち捕縛より梟刑に達る間の經過、少くとも宣告より梟罪に及ぶ時際の態度を記せざるは、稍々遺憾の念あるも、明治政權爭奪變遷敍述を目的とする本篇に於て、私人記傳の實相を故に避けたり。而して斯篇に續く政權の爭奪吏相は、「岩倉右府暗殺」の條下に述べんと欲す。江藤處刑に對する廟堂の議論を起點として、荻の亂に終る記述は更に複雜なる交涉を旁午すなり。

西洋史に出でたる禪讓の先例

文學博士　坪井九馬三

支那に於ては堯舜禹の事は固より傳説で、其禪讓の事情もハッキリは分らんが、新よりこのかた宋に至るまで殆んど代々禪讓の續きて其議式手續等も明白に定まつて了つて、支那史を讀むもの丶頭で見れば全くの尋常茶飯の事で、誰も別に珍らしい感情を起すものもないのである。只悧巧な實權所有者が己れの生前には禪讓を受けんで、最後の名譽を息子に讓る場合丈けが稍々注目を惹くのである。例へば魏の曹操、北齊の高歡、北周の宇文泰などは其先例で、よく考へた人々であると思はれるのである。朝鮮に於ても新羅の終りも高麗の終りも皆禪讓であつて一向に珍らしくはない歷史事實である。歐羅巴方面若くは歐羅巴に接近したる國々の歷史に於ては存外禪讓の例はないので、國を併合する場合には大抵武力を以て兼併した事である、然し稀には平穩なる禪讓の例も全くないと申すのではないので、其場合の事情を達觀すると、大抵軍事上の必要若くは國家發展の經過の上より止むを得ざる措置となつて居るやうに見受けられる。何れとも併合せらる丶國は本國よりは遙かに小さくて、從て其武力も遙かに乏しい場合であるが、文化の程度に於ては併合さる丶國が必ずしも併合する國よりは劣つて居る次第ではない。どうせ古い事であるから詳しい事情は分らないが其稀なる例の一二を概略述べて見ませう。

第一にあらはれるのは希臘盛時のアテネである。アテネは波斯征役に於て拔群の武功を擧げて、物の見事に波斯軍を擊退したるのみならず、波斯本國までも進擊して流石の大帝國をも震駭さしたのである。此際出來上つたのは彼のアテネのデロス同盟である。此デロ

ス同盟といふのは、デロスといふ小さな島に神社があつて其神前に於て盟約をしたので名を得たのである。此同盟に加盟したものは希臘本土、小亞細亞沿岸の間に澤山に散らばつて居る島國であつて、もとより大きいのも小さいのもあるが、何れも氣候はよし、土地は肥え、人口は多く、なか〱富んだ國々であつたが、それがアテネの海軍力を依頼して國々銘々が安堵して太平の夢を見ることが出來るやうに、皆分相應の醵金をしてアテネの艦隊の維持を計つた。アテネの艦隊の維持を計る所以は卽ち波斯よりの攻擊を掩護する目的てあつて、合意上斯くの如き同盟の成立したるは當然の次第てある、が波斯帝國もやがては平和の政策を取るやうになつたし、アテネの艦隊も已に出陣の用意をするに及ばなくなつて、同盟の國々は、最早や同盟の必要を以前程痛切に感じなくなつた。從て分相應に喜んて出した醵金を終には嫌や〱に出すやうになつた然しアテネの側から見れば、アテネは商業を國本として居る國故、商船保護の必要上多大の艦隊を用意して置かねばならぬ。其上波斯の政策が變つて又ぞろ大戰を仕かけるかも知れぬ故、アテネは決して海軍の維持を忘るゝの日がない。從て海軍維持の費用の必要なるは以前も後も變つた事がない。そこで同盟の國々が嫌や〱醵金を出すので、アテネは止むを得ず艦隊を派遣して醵金を無理やり集めて廻つた。斯樣になると、同盟の國々は先づアテネに兼併されたかの如き感情を起し、アテネの方ても永年の經驗上自然同盟國にはあらずして併呑した國々であるかの如く思つて來た。斯樣な事情てデロス同盟は事實上聯邦と一變して來た。是に於てか、事實の上から推せばエーゲ海の島々に立つて居る國々は無事平穩の間に併合された姿と變つて了つた。

次の例は羅馬時代の話てあるが、小亞細亞の內地にペルガモンといふ國がある。之は亞歷山大王の宿將の一人が建てた國て左程大きくはないが、矢張り商業を國本とした國てあつた。中央亞細亞の貨物を盛んに呑吐して富を作つて、其結果學問美術を以て鳴るに至

つた國である。處で羅馬が伊太利全半島を征服してやがて手を希臘本土方面へ伸ばすやうになつて來て、希臘本土に隣つたマケドニアといふ亞歷山大王の元來の本國を終に征服に及んだ事であるが、まだ此時代には羅馬の國力も後々のやうに世界的のヱライものでないのであつて、到底も希臘本土の經營を思ふやうに取行ふといふ事は出來なかつた、そこで更らに海を渡つてシリア方面に手を附けやうなどいふ事はもと／＼困難の次第であつたが、何樣、希臘はシリアにいて來たので羅馬は之に應戰せなくては出來なくなつて來た。そこで終に思ひ切つて兵を此方面に進めて、幸に勝ちは勝つたが、何樣希臘本土は捗らない。更らに海を超して當時の大國たるシリアを抑ふるは手の廻り兼ねる次第であつたので、シリアの附近に於て藩屏を作る必要を感じた。藩屏即ち出城である。此出城として考へたものゝ一つはペルガモンで一つはロードスである。ロードスは島國であつて小亞細亞の西南岸に近くある商業國である。又海軍にも富み商賣も盛んで、艦隊も強く、學問美術も決してペルガモンに劣らない。で、小さい島國ながらなか／＼威張つてゐた。ペルガモンは內地丈けに陸軍國である。ロードスは島國であるから海軍國である。羅馬は此二ヶ國を味方にしてペルガモンの陸軍と、ロードスの海軍とを利用してシリアに當らしめやうとの計畫で、シリアの勝つた際に、割り取つた所のもとのシリアの領地を割いて其一半をペルガモンに與へ、他の一半をロードスに與へて其歡心を買ふたのである。然る所羅馬の希臘經營も段々と步を進め、今や完全に行はるゝやうになつたので、ギリシヤの名をよしてアカイアといふ隷州を置いた。斯うなると小亞細亞方面は僅かに一衣帶水を隔てた地方故最早やペルガモンなどいふものを存する必要なきのみならず、左樣な獨立國は却て目の上の瘤である。又國防上よりもペルカモンを通してシリアを伐つのは甚だ得策でないので、何がなしてペルガモンの全土を占領する必要を感じた。ロードスは離れ島だから之は別に直ちに呑む必要を見ない。左樣の譯合で終に時機到來し

て國王と協定して國王よりして主權讓渡の公文を得た斯くの如くにしてペルガモンは平穏無事に羅馬領となつて、其あとへ羅馬の政府はアジアといふ名の隷州を置いた。此二つは古代史の實例である。

中世に於ては獨逸方面の列侯等の間に於て親族關係よりして互に讓狀によつて領土を併合した事は數多實例がある。がそれは親類上の關係から、一方の男統が絶えた場合に、他の親戚筋より、いはゞ養子を取るやうな具合に國を併合したもので、餘り珍らしい事ではない。又有名な墺太利の所謂結婚政策といつて、一方の國の嫡男と一方の國の嫡女との間に婚約を結んで、其間に生れた所の嫡男をして父と母との權利を享けて當然父母の國を併合する例も二三あつて、之は決して墺太利丈けの政策ではなくて、他の國にも例を求むればない事はないのである。此等は何れも親戚關係より來る處の併合で、國家の併合たることは一つであるが手續が餘程簡單で、獨逸の列侯等の間に於ける領土併合の場合と多少趣が似て居るのである。兎に角一國の嫡男と一國の嫡女、即ちやがて其國に君臨する所の元首同志が結婚をして各々特別の政府を持つて居つて特別の國民を持つてゐながら合同するといふのは東洋には無い寸法で歐羅巴固有の遣り口と見なければならぬ何れにしても二國以上の併合の實例であるといへば皆いへるのである。其外に今、英吉利が軍事上の必要から預つて居るキプロスの例がある。(キプロスといふのは我々の間で用ひて居る島の名前であるが、英人は此島をサイプラスと呼んで居る)キプロスといふのは、地中海の東方レリチアを隔てた大きな島であつて、遙か南に蘇士運河の入口たるポートサイドを望んで居る。即ち蘇士運河の警備に必要なる島であるので、主權は土耳古にあるが英吉利で預つて居る。此島も中世の頃は獨立國であつたのであるが最後の男統の國君が當時隆々たる勢であつたヴェニチアの貴族の一家より王妃を入れた。然る所世子が生れてから間もなくキプロス王は死なれて幼稚なる世子が位についたのである。前王妃は勿論攝政である。處が此世子も僅か二年位にあ

つて夭折された。そこでヴエニチア政府は、何樣、前王妃と其外に王室の女子が居らるゝが、要するに婦人ばかしになつたのであるから、之に保護を加へて前王妃を改めて立てゝ女皇とした。而して事實上キプロスを保護國にして居つたが、國家發展の必要上、又シリア方面に於ける商業の警備上此島を占領する必要ありと認めて終に女皇に交渉してキプロスの島を上げてヴエニチアに讓らしめた。これは明白なる禪讓の例である。

近世に於て例を求むればない事もないが、現在國を建てゝ居るものに關係したものもあるから今は省いて置く。(完)

兩極の自然美　　田内通敏

右次號の本欄に掲載せらるべし

和歌

尾上柴舟選

三浦曉村

○

雨やみし夕ぐれの野のしづけさのなかに匂へる黄なる草花

殘されてひとりさびしくやるせなき身をば夕べのくらき戸によす

雨あれぬ谷の瀬の音うすぐらき濡葉のかげのしづけさをゆく

なつかしく君思ひ見ぬ小雨ふるくらき夕べの渚を歩み

たゞひとりなげき默して夕ぐれの遠き山べの青きかげ見る

そこかしこ鹽やくけむりしづかなる夕べの青き空にのぼれる

一しきりさうどきやみて黄昏の海蒼然とくれてゆくかな

何となくひかりまぶしみ夜を好み出づるさびしき癖となりぬる

つかれたる夕べのひとみうす青き燈明臺の灯をなつかしむ

さびしげに窓をばひたす山なみの青きにひとみうるむ夕ぐれ

濁りたる灯かげに吸はれゆくごとく夜半の酒場にかなしみて入る

夜は更けぬ月の光りはしら／＼と薄白う野邊にひかれり

○　天野謙二郎

おのづから木の實のおつるしづけさに涙ぐましき杜のひとゝき

たそがれの巷に黒き渦をまく群集にまじりあるがさびしき

みち足らふ心いだきて大木のかげにあかるさひるの風みる

やるせなく疲れし心夕ぐれの街のひゞきにいたくおびゆる

路ばたに瓦斯燈の灯の青きとき野をわたりゆく風のかなしさ

古びたる帽子をかぶり雜音のうちにひたりてひるの街ゆく
大いなるけもののごとくよこたはるひるの都會のくらき横顔
馬鈴薯のさびしき花は海沿ひの畠にさけり君がふるさと
靑山の麓の原に晝をさく夏大根の花のあはれさ
あからみし大麥の穗のなかにねて泣かまほしかるひるのかなしみ

〇　　飛川晶（まち）

別れ來て一人となりしさびしさよ眠れる街の電柱に倚（よ）る
待つといふ消息（せうそく）を讀むわが窓のみどりつめたき日となりにけり
野の草を片頰（かたほ）に敷きて物おもふ土のにほひの懷（なつ）かしきかな
しげしげと君を見つめてあるほどに淚冷（つめ）たくにじみ來しかな
靑澄める空の一點みまもりて野に伏してありてこゝろ虛（うつ）ろに
うるほへる瞳（ひとみ）を上げてあふぎ見つあはれ吐息（といき）す
靑き月光

〇　　下村淳

なやましきたゆきからだにこゝろよき眠りをさそふ八月のかぜ
梨の皮ちらばる中によこたはりうみし二人は默してありけり
何事ぞなつかしきこの友達と向へど心うちとけもせず
ゆるやかに夕べのしほのながれよる海峽の家に君思ひいづ
うら若きかなしみ多き身はまたも練兵場に泣きに行くかな

〇　　岩谷莫哀

すでに彼の電車の音にも悲しまる都に秋のおとづれてけり
あゝ吾も都の人となりにけり思へば何か成すべかりけり
心やゝ飢ゑをおぼえてあかつきの門司の港に連（つ）絡船（なよぶ）を待つ
わが上に秋のそらこそ澄みわたれ貨のけむりしづに溶け行く

馬のにほひ堪へかたきまで鼻を刺す馬車の窓より別れを申す

拭はざるに涙おのづとかわき行けば向ひの岸に灯ぞともりける

〇　　　　小澤紫紘

豆畑に夕日の光みち溢るこの初秋の野をなつかしむ

さわやかに朝風わたる高原の家に逃れて行かむとぞ思ふ

こゝろよく莖の延びたるをみなへし初秋の日のものゝかなしみ

紫のあけびの房にまつはれる秋のにほひを思ふもうれし

石竹の花に動ける初秋のあしたの風の冷々しさよ

色やゝに黄ばみそめにし夏帽子手にしみ〴〵ととりてながめぬ

〇　　　　保泉良弼

すずしろの花むされつゝ香を放つ六月の野にたるる大空

秋に入る風にかなしくながめけり空のあなたのあはき山なみ

空のいろかなしきまでに青みたり山ゆくわれの姿おもほゆ

草の實のはらはらとおつるゆふぐれの丘こえくれば野はひらけたり

白き花丘の日かげの黒土にちりこぼれたるさびしきまひる

〇　　　　佐野翠坡

おもふ事みないつの日か現實に來んとしおもひのびのびと生く

大方が捨てしたわれ男君なほもほむと聞く時涙はてなし

ふと我にかへりてみれば壁ごとにはや黒き夜のかげ匂ひてあり

いと甘き情の中にたゞよひてあれど折ふしいづる涙よ

〇　　　　千住湘江

なげかはし吾がたましひの行くかたを思ひなどして日をすごしゆく

かの黒き瞳とゐればいともよし心のうちのかがやきに似て

まどに倚り朝明けがたの靜けさを聞きつヽ君とものがたるよし

初秋のうらかなしさはおく露の草にうちふし君おもふ時

ふけぬれば暗き愁に抱かれてねむれる海の浪の音きく

疲れたる我れの軀はするどかる我が神經とともなはずあり

暗き戸の門おろす響にもたへがたきまで心ふるへり

○　正木哲夫

湯の街や京よりきにし若人の言(こと)すくなきをなつかしむかな

秋晴の空をながめて思ふことしみじみ多き九月となりぬ

くろかみも黑き瞳も白き顏もわれをはなれて秋立ちにけり

洪水のあとの川原の砂に石に葉月の日光(ひかり)しろじろとさす

けふもまた日の第一のどよめきか枕時計のかしましう鳴る

○　江上魚梁

君來らずあれば寂しく停車場の群集のあとを見てありしかな

うちにじむ涙の底に流れたる僅の君が若きほこりよ

紫陽花の花のかたまり灰色の空の下なる靜けさにゐぬ

音もなう豆の葉裏をかへしゆく夏の夕の風のかなしさ

○　關本梁村

草等皆いたく萎れて星あかき七月の夜の眠りを待てり

むしあつきま晝の街のどよめきに飽きたる心ゆくところなし

昨日より疲れしまヽの生活に入る苦しさの朝となりぬる

けざやけき十二時過ぎの日光に打たれて今日も酒飲みにゆく

○　水上おぼろ

ほとヽぎす雨ふり出でし高原の曉近き斷雲に啼く

馬市の後のさびしさ夕霧は雨となりけりきりぎりすなく

吸ひ殻をあまた集めて火をつけぬ友が歸へりし後のさびしさ

妹は桐の花咲く下にして言葉すくなに張物をする

○　　　乾　山　茶　花

頽れ行く己が心の刻々を煙草のけむの中に味はふ

七月の明るく晴れし大空に青く光れる夏と親しむ

初秋の乳色したる雲いくつ漂ふ空の下に歌へり

○　　　池　内　啄　耳

客去りし後のテーブル悲しげに煙草の殻とダリアとを乘す

妻はたちわれは腹這ひ暮ぎはの淡路と海と白帆とを見る

死ぶき西洋だてのその中に啄耳が家の小さきたそがれ

○　　　成　田　花　骸

山の夏朝湯上りの野歩きの青の大氣にあざやかに透く

ふと目覺め窓明るみの傍らに投げ出されし空罐を見る

やがて秋この高原の一角に取り殘さるゝ溫泉村寂しも

○　　　塚　田　眞

杳として夜のうすやみに浮びたる少女の顔の歌ひいづらく

黄ににごる夕の光枕邊の藥にながれ蜩のなく

ものみなは默して覺めず蚊のひとり啼くが悲しき夏のあけがた

○　　　狩　野　文　朔

風ならでさら／＼さらと葉ずれする楢の林の星あかりかな

あけ方のうすあかりする硝子戸に靜にうごく葉の光かな

暮方のさびしさ見せて流れ來る北上川の泡のましろき

○　　　宮　飼　榮

ふたりにてあらんこの日の喜びを悲しみにゆくまばら松原

さら〱と白楊のなく公園の夕べをひとりゆく
が悲しき

〇　鈴木風影

聖徒みな去れば老いたる婦來て電燈細め扉(ドア)閉し
などす
少女等は全こし戰書の前に來て少さき息を忙しく
吐けり(博物館にて)

〇　村崎みつ子

二十四歳まだもろ親に別るべき年にはあらじあ
ゝ父上よ
あゝやゝに冷えゆく父のみ屍を抱きながらも泣
かざりしかな
惜愛の眼鏡をはづし教へ子のすべてを見ると口
に云へども

〇　森一雄

おもひ疲れたふるゝ如く身をなげし疊の上の秋
のつめたさ
父もなし殊に母なき悲しさの夕べ涙をひくが多
かり

〇　村田長春花

河岸の窓をひらけば青蘆は雨來るごときそよぎ
送れり
しめやかに木の香流るゝ峽の底のこして風のい
たゞきを過ぐ

〇　伊藤綠水

思ひ倦み思ひ勞れて昏れなやむ窓のガラスの扉
にひとり凭る

〇　井田葉歌

初秋の河原に白く風ぞ匐ふ石はまひるの日をあ
びてあり

〇　桑田寶

靴を穿くまた一日の働きのかなしみをひくこの
重さかな

〇　大場白葉

身は青き室根の山の上にあり脫れ來し國かすか
に見ゆる

選者曰
投稿月を逐うてます〱多く、掲載しえずし
て次號に廻せるもの、殆んど三分の二にも及
べり。諒察を乞ふ。

應募和歌は東京市小石區原町百二十三尾上柴舟宛の事

俳句

秋の蚊帳

高田蝶衣選

戸によりて鶴雨よぶや秋の蚊帳　冬城
文に足るを泣事に來て秋の蚊帳　同
秘めし荷をとくに燭寄す秋の蚊帳　同
瞽者と寢て時間問はれぬ秋の蚊帳　同
碁相手に出よとの沙汰を秋の蚊帳　同
心おびゆる思出を蚊帳に別れけり　雨郎
密に運ぶ企もあり秋の蚊帳　同
蚊帳の果懶惰に過ぎし悔に居り　同
機据ゑん手狹を蚊帳と別れけり　同
雁と聽く櫓聲遙かや秋の蚊帳　へき生
臍冷えも老の寐覺めや秋の蚊帳　同
吹き變る夜明の風や秋の蚊帳　同
近々と聞ゆる鐘や秋の蚊帳　同
我蚊帳の新凉も杉の御坊筋　夢筆
夜もすがらうつらうらぶる秋の蚊帳　同

噎々たる寒蟬蚊帳に別れたり　同
暴風宿りの船出も島の蚊帳名殘　同
秋の蚊帳憂ふる事に女あり　湧漁聲
一隅に月を印しぬ秋の蚊帳　同
秋の蚊帳釣月軒のあるじ哉　同
長櫃に深く藏しぬ秋の蚊帳　同
父の留守追ひし子泊めぬ蚊帳の秋　天梅
菊月に阿嫂子產めり枕蚊帳　同
干し網と見しが浦家の別れ蚊帳　同
僧云へり死者多き年と蚊帳の秋　同
蚊帳已に芭蕉の裂くる秋となり　嵐舟
蚊帳の秋湯女も別れとなりにけり　同
九月蚊帳念なう切れし釣手かな　同
秋の蚊帳干しぬ厄日も過ぎて後　總子
磯蟲の啼くにしけ思ふ秋の蚊帳　同
關の庵秋の蚊帳干す湖晴れに　同
蚊帳の秋詩友の遺筆扁額に　月精
藥草を釣手に蚊帳の別れかな　同
蚊帳すてに展墓の旅に別れけり　同
杣訪ふや魑魅(すだま)除とて九月蚊帳　不寐庵
熱風の刷新となふ蚊帳の秋　同

天井に吊る節籠や秋の蚊帳　同
継子いぢめを我が妻に見る秋の蚊帳　無香
塞閨の秋蚊帳に聞く錢の音　同
蚊帳の秋獄中の吟書に載らず　同
敎坊にわびしく見ゆる秋の蚊帳　丈貝子
秋の日に全寮の蚊帳乾しにけり　同
出這入りに孫りじが蚊帳名殘　同
蚊帳の果志士の刑さく日なりけり　薔薇
葬のあと四五日や秋の蚊帳　同
人の親となりて淋しや秋の蚊帳　同
秋の蚊帳死屍を守るに飈やさゝん　倨人
親なきに憂は滋し秋の蚊帳　同
秋の蚊帳妻と呼ばれてたゝみけり　水竹
蚊帳釣つてわび住む秋の小石川　同
何も彼も戸棚一つや秋の蚊帳　酒涙雨
芒のびて立場の秋の蚊帳低し　同
雨休み寢放題も蚊帳の別れ哉　痩脚
放れ馬秋の蚊帳出てつなぎけり　同
山愛し住めば晝猶秋の蚊帳　卯月
碁盤田の月の名所も秋の蚊帳　同
男手に育つる兒等や秋の蚊帳　叱竹

虫つきて枯れし庭木や蚊帳の秋　同
買ひ占の西瓜の損も蚊帳の果　吾始皇
怠りぬ出臍の病蚊帳の果　同
秋の蚊帳物の怪もなくうなされせり　錦櫻
哀別の涙に濕る秋の蚊帳　同
憂き事を蚊帳に包みて別れけり　一樓
疇昔に一掬の涙あり秋の蚊帳　同
秋の蚊帳竹奴もくるめしまひけり　但翠
(泊山家)秋の蚊帳挽臼ひゞく枕元　同
脱稿に酒を呼び別るゝ蚊帳を顧慮せざる　鬼哉生
碧眼子蚊帳に別れて歸程惜む　同
亡國の宰相寢たり秋の蚊帳　蒿村
秋蚊帳に百里の旅の疲かな　同
別れ蚊帳張りて燻しぬ狸穴　白鳩子
惡疾に吊られしが燒かる蚊帳の果　同
南寮も負けじと蚊帳に別れけり　寸江
夜立客はづした蚊帳が別哉　同
緋のあせも蚊帳百夜さの果となり　人生
風鈴もとらしむ蚊帳の別れかな　同
丸めある宿直の蚊帳も秋幾日　稜々
(高崎にて)霧を吐く山見ゆ秋の蚊帳越に　同

通女の秋の蚊帳よりおこす文　江戸庵
秋の蚊帳跛の聟の寢たりけり　同
妻と婢とたゝんで蚊帳の別れ哉　水馬
妻が仕舞ふ別れの蚊帳を眺めけり　同
祖父と寢て經暗んずや秋の蚊帳　狠子
ねぎらひも湯立て申しつ秋の蚊帳　同
九星の疑懼に埋るゝ九月蚊帳　十鹽
尿近くなり增す秋の蚊帳の憂き　同
行水の名殘や蚊帳も果近し　雪骨
爐火に來しか秋吊る蚊帳に稻の蟲　同
蚊帳の秋風の事いふ屋根屋來て　不騷
退官の儀も許されて蚊帳秋や　同
隱れ人離房に蚊帳の別れかな　如星
逸樂の身に絹蚊帳も別れかな　同
わたましや荷にもあまりて秋の蚊帳　紫明
蠶忙に釣りても寢ねず秋の蚊帳　保赤
お勸めの灯を消して寢る秋の蚊帳　風車
口に酒をふくみて霧す蚊帳の秋　對山樓
寺子來て起さるゝ師や秋の蚊帳　無佛
頓雷に釣りしが蚊帳の別かな　涼眉
雪寃の詩稿更くるや蚊帳の秋　燕閣

蚊帳の別花壇の除草終えし日に　石田半醉
蚊帳捨てゝ物たらぬなり臥し心　東城
離愁とも言ふべき思蚊帳の果　天水老
秋の蚊帳添寐の君の髮淋し　牛丸
酒壺に題して蚊帳に百夜の恩を謝す　竹朗
白き蛾の飛びあへず秋の蚊帳たゝむ　舟二
秋蚊帳に增水の報切りなり　唐辛子
齟齬の事に家も外なり秋の蚊帳　五黄
秋の蚊帳子が網にすべく欲りしけり　骨舟郎
吾影のそゞろ薄さや蚊帳の秋　碌々
煽がずにつともぐり込む秋の蚊帳　天堂
藪中の離亭の涼や秋の蚊帳　美川
竹あるに秋早かりし庵の蚊帳　紫滴
舟蚊帳の別れ其夜の波しめり　江村
行燈の油かへしぬ秋の蚊帳　花雞
出水して蚊帳の別となる佗し　彗星

課題

蕎麥の花　十月十日締切
年木　十一月十日締切

規定

△應募句は淡路假屋在高田蝶衣宛
△一人三十句以下△用紙は半紙の事

評論

約一億の新負擔

韓國併合の結果、臨時恩賜金等のため新たに發行する公債三千萬圓と、韓國政府より引繼ぐべき債務四千五百萬圓との外、軍隊警察の擴張其の他の政費を合せて、約一億の負擔は確かに免がれざるべし

領土の大を悦ぶもの、亦其の甚だ廉價ならざるを解せるや

新總督

寺内統監は無論朝鮮總督たるべし、而して山縣副統監は行政長官たらんと傳ふ

寺内統監の帷幕裏に、警務總長明石陸軍少將あるを忘るべからず、彼れ參謀神の如く、眞に寺内子懷裏の利劒也

清國警む

韓國併合を以て、必至の勢ひ奈何ともす可らずとすると、清國の官民を擧て亦同じ、但だ彼等言ふ、日本は多年韓國の獨立を聲明しながら、一朝にして併呑す、其の清國保全なるもの亦奚んぞ忽焉として分割に變ぜざるを知らんや、清國の前途を想ふもの畏れて而して警めざる可らずと

清國が近時著るしく米國に賴らんとし、又獨逸の歡心を收めんとする傾向あるは、必らずしも韓國併合の影響ならざるも、日露協約、韓國併合の後、彼の國の態度急轉の觀なきにあらず、是れ最も注意を要する所とす

獨逸疑ふ

南洋の和蘭領なる群島は、獨逸當然之を手に入るべしと做すも、日本が之を爭ふなきやを掛念すること深し、即ち韓國併合の後の日本の志、果して北方の大陸にありや、抑もまた南進して南洋諸島を覗ふ乎、獨逸の外交方針は日本の態度に由て決すべく、獨逸皇太子殿下の東亞に來らるゝ、畢竟之が爲めなりと解するものあり

獨逸果して左る掛念を有するや否や、假令有するも日本の態度を視察するに別に幾多の方法あらん、何ぞ皇太子の出遊を煩はすの要あらん、解するもの蓋し誤解せる也

英國の日本關稅論

日本の關稅問題は、今や同盟國たる英國に於て重要なる一問題となりつゝあり

ランカシアイア、マンチエスタア等の英人は、日本の關稅を以て、日本に於ける英國貿易を根絶するものと爲し、英國政府は又日本政府に要請して十分に讓歩せしめざる可らずと爲せり

然るに統一黨即ち在野派の士は、小村外務大臣が議會に於て『英國は我が關稅率と協定し交換すべき何物をも有せず』といへるを捉へて、保護主義の必要なる一證と爲し、以て益々持論を主張しつゝあり

孰れにせよ、日本の關稅は英國民に取て不人望也、殊に政府及び政府筋の代辯者が、英國從來の輸入品は、不當に低廉なる從量稅なりしが故に、之を標準として新稅率を難ず可らずなどいへる議論は、最も英人の反感を招けるが如し

此の問題が、或は延きて日英同盟前途の故障たるも亦測るべからず、故に假令最惠國條欵の不便はありとも、英國品に對して多少の讓歩を爲すの外ある可らず、棉絲棉布の如きは、英國の特製品なるを以て、之を減稅するも多く累ひなかるべき乎、吾人は我が政府が懇切慇懃に英國政府と交涉して、相當の程度まで互讓せ

んことを切望す、我が國論素より當さに然るべき也

加藤大使難ぜらる

我が駐英大使加藤高明氏、日英博覽會に反對して、暗に之を誹謗せるのみならず、關稅問題にも亦冷淡不親切にして、英國官民の感情を害せしこと少からずと非難さる

冷靜にして動もすれば英人的と評されし加藤氏にして、今斯の如きは意外也、外交家は內冷靜なるべきも外愛嬌的ならざる可らず、日英同盟の前途漫りに樂觀を許さゞる時、駐英大使の任や甚だ重し、政府深く意を致さゞる可らざる也

大浦男歸朝

農相大浦男九月二日を以て歸朝す、其の歸朝するや、政黨社會華族社會震慄す、其の勢力の大なる實に意想以外とす

社會主義者一掃

長野縣明科製材所にありし社會主義者爆裂彈製造のこと發覺するや、無政府論の幸德一派、所在打盡されて、幾んど餘孽なからんとす、聞說、大審院殊に特別裁判所を構成し、秘密の間に一審を以て斷罪すべしと以て其の犯罪事項の容易ならざるを察すべきか

吾人は洵に彼等のために悲む、我が光輝ある歷史の上に、斯の如き事件の點在せんとするを惜む

南極探險の頓挫

白瀨中尉の南極探險隊は、始め八月十五日を以て帝都を出發の筈なりき、然るに十一月下旬まで延期したるも、其の實船舶を得ること能はずして、恰かも失望の體なりとは嘆惜すべし

高架鐵道の空計畫

東京市內に高架鐵道を設けて、以て電車を往返せし

めんと出願せしものあり、各區の反對囂然として起り九月十二日の市會竟に其の出願を拒否するに決して事止む

地上の軌道を走れる今の東京電車すら、正直に六分以上の配當を爲すを能はずといふに、其の布設費の幾倍幾十倍する高架鐵道を設けたりとて、到底收支の相償はざること言を俟たず、斯る架空の計畫を爲せる虚業家も虚業家なれども、其の出願を眞面目に受けし當局も當局也、其の狡や憎むべし、其の愚や到底及ぶべからず

第一回米作豫想

農商務省の發表せる今年の米作第一回豫想は、四千八百七十二萬五千五百九十七石にして、平年作（四千九百三萬八千四百一石）より六分減、昨年の實收額五千二百四十三萬七千六百六十二石に比すれば著るしき減作也

然れども關東々北の水害といひ、土用明け後の不順といひ、減收は必らずしも六分に止まらざるべき乎、吾人は不作に由て人氣益々不良とならば、内閣も亦困ぜざらんとするも能はざるべしと思ふ（以上ＸＹ生）

米國政界變動の機

米國メーン州知事選擧が民主黨員の勝利に歸したるは是抑も何の兆ぞ、一葉落ちて天下の秋を知る、共和黨の執政、年久うして、民心漸く變を思ふものにあらざる無き乎

顧みるに本年は米國諸州知事改選の年也、メイン、アルカンサス諸州は前月、ジヨルヂヤ州は本月、其他の各州は來月上旬之を擧行するの規定也、アルカンサスは民主黨多年の堅壘なれば措いて問はず、メーンに至ては四十年來共和黨の金城鐵壁たり、而して今回の變態を見たるものは何故ぞや、

蓋し民主黨員が共和黨の領分に於て知事たりし實例に至ては過去に於ても之無きにあらざる也、數年前ミネソタ州知事がジヨンソンの手に落ち、現今オハイヨ

州知事がハアモン氏によりて、インヂアナ州知事がマーシャル氏によりて占めらるゝに徴しても知る可き也然かもこは共和黨の全敗と見る可きにあらず、以上諸州の立法部は依然共和黨員の優勢を繼續せりき、今回メーン州の結果に至ては則ち然らず、知事、立法部共に民主黨に歸したり、是抑も何故ぞや

吾人は之に對して一の答を得たり、曰く一般民心も或は飽きたらん、然かも要は共和黨員自身、共和黨に飽たるか否か、內訌是事として止まざるの罪に在りと

ロオズヱルト氏の責任

思ふて玆に至る每に、吾人は共和黨の爲にロオズヱルト氏歸米後の態度を遺憾とせざるを得ず

彼や情熱の士也、戰鬪の人也、卓拔の知見なきに非ざるも、其知見も往々感情の爲めに蔽はるゝを見る、打ち明けて言へば、彼は歸米後正派共和黨對一揆派の紛爭を和らぐ可き使命を帶び居たりし也、然かも彼の行動は不幸にして一揆派の聲援者たる觀を生じぬ、共和黨の紛爭は隨つて益々激甚なるを加へたり、タフト氏が內相ベリンジャを排し、下院議長キャノンを排しあらゆる調和策を講ずるに反し彼は着々破壞手段に走らんとす、是或は彼の本意にあらざらむ、唯だ其行爲の跡をのみ檢すれば、遂に此結論をに逢着するの外なきを奈何

勝敗の岐るゝ所

共和黨にして此內訌を繼續せんか、天下は蓋し最早や共有にあらざる可し

メーン州選擧の失敗は、共和黨に對する『內訌を止めよ』との警告而已、而して其之を用ゆる否とは、勝敗二途か岐れ來る所以の關門也

ロオスヱルト氏一派は、此形勢を何とか見る

露國外相更迭說

露國外相イスウオルスキー氏、大使に轉じ、次官サソノフ氏後任たるに決すと、或は眞か、

イスウオルスキー氏は一九〇六年二月就職、爾後四年八月の間の政策は、一言以て之を蔽へば妥協政策な

りき、波斯、西藏、阿富汗斯旦に關して英國と妥協し、滿州に關して日本と妥協せるが如き蓋し其重もなるもの也、唯其政策、平和に在り、妥協に在るが爲めに、宮廷內に潛勢力ある守舊派の反抗を惹起したること一日にあらざりき、然れども氏の政針が賢明なりしは、方今日英露佛四國の無形的結合成り、世界向ふ所恐る可きもの無きを以て知る可き也

知らず、何故にか辭せんとする、說く者曰く是健康を損したる爲のみと、こは信ずるに足らざる言のみ、果して然りとせば、何故に大使に就任せんとするや、吾人は恐る、事或は獨逸黨が宮廷派と共同して、例の密謀を逞うしたるに依る無きかを、

遮莫、後任者サゾノフ氏も略ぼイ氏と外交意見を同うするの人と聞く、就中先きに久しく倫敦大使館に在り、露國の親英策亦氏の經綸に依るもの多しと傳ふ、然らば則ち更迭起ると雖も、國際關係の變動の如き、恐らくは實現せずして止む可き也、

保護主義全盛

今や保護主義全盛の世たるの觀あり、宰相ベートマン、ホルウエヒ氏は聲言して曰く、現政府は明年帝國議會總選擧に際し、其綱領の一として保護貿易主義の維持を主張す可しと、以て新進帝國獨逸の決心を見る可き也、

頃日飛報あり、和蘭關稅改革計畫成れるを傳ふ、曰く、ヒームスケルク氏の內閣、上下兩院の多數に援助せられて、關稅法に根本的修正を加へんとす、而して其主義とする所は、國庫の增收を謀り、且つ國民的事業に保護を與ふるに在り、增收額は恐らくは九千萬圓に上る可しと、吁嗟九千萬圓の增收とは和蘭現在の關稅收入を二倍するものに非ざる乎、

形勢滔々斯くの如し、誰か自由貿易の英國の裡、亦今春日、佛兩國關稅修正に刺激せられて、保護論を增加し來れるを怪むものぞや、

巴奈馬運河防備

巴奈馬運河工事大に進捗し、開通正さに四年三月の後に在り、是に於て乎米國上下の運河防備の論議起る今政府側防備委員の計畫なるを聞くに、下記の如し、大平洋側にては三箇の島に各一箇宛の砲臺を備へ、本土に一箇を備へ、大西洋側にては本土に四箇の砲臺を設く可く、武置装置は十四吋十門、六吋砲十二門、十二吋砲二十八門とし、此外水雷等の設備を要す、費用は合計一千四百萬弗(二千八百萬圓)内外なる可し

吾人は此計畫の完否を説かざる可し、將た蘇士運河が列國の保障の下に、平時戰時共、純粹に中立地たり、何物も之を襲擊するの憂ひなきと、今回米國が行はんとする專占的武備(戰時に際し敵軍に與ふるに運河を占領し若くは之に損害を加ふる權利を以てする)とが、孰れが得策なるかを論さざる可し、然かも蘇士運河が何時に於ても世界通商の爲めに開かるに反し、巴奈馬運河のみ戰時米國の私用に供せられんとするは果して公平なる措置なる可きか、

謂ふ勿れ、米國は同運河に資本を投じたりと、蘇士運河も亦埃及若くは英國の資本無くして成りたるものにあらざる也、

希土海軍競爭

希臘政府、伊國軍艦購求の協議を開始し、又新艦建造を計畫するとの說あり、亦土耳其の獨艦購入に對抗せんとするもの乎、

英獨の如き大國には大國として競爭あり、希土の如き小國は亦小國並の競爭あり、

而して此形勢を利して、胃腑を充足するものは究極の處、獨り造船會社なる可きのみ、

新王國「モンテニグロ」

モンテ、ニグロ公領、列國の承認を得て、モンテニグロ王國と成り、元首ニコラス公、ニコラス王と成る、

是實に八月二十六日也、

吾人は之に對して慶賀の念を表せざらんと欲するも得ず、何ぞや、モ國民は或意味に於て大陸に住む小日本人なれば也、モ國は海を廻らさゞる歐洲の小日本なれば也、

國土の面積三千六百三十方哩、人口二十二萬五千、洵に是東歐、最小最貧の邦國也、然かも國民の氣象不屈不撓、義を重んじて死を輕んず、新月旗と爭ふて降らざること四百年、一八七八年伯林條約に依りて遂に獨立を認めらるゝに至る、其歷史を讀て壓土耳其軍の來襲を見、思ひ出てらるゝものは、實に我が弘安年間元寇の事蹟也

遮莫、此武勇なるモンテニグロ人は、平和的發達に於て幾許の美績を擧げ得可き乎、之を答へ得るものは未來而已、果して其一大部分は新「キング」ニコラスの政治如何が、果して同國主要の產業たる農業、牧畜改善策决行の宣言に副ふや否やに依る可き也、

勞働紛議續出

獨逸造船所締出（しめだし）事件あり、大北（グレートノーザン）鐵道勞働紛議あり、南ウエール炭坑騷動あり、英國ランカシヤ紡績紛議あり、蓋し今秋は勞働問題紛糾の秋なるが如し

勞働問題紛糾は恐るゝに足らざるも、唯恐る可きは勞働同盟の訓練、規律破れんとするに在り、換言すれば勞働者が領袖株の意見を用ゐず、雇主との契約を無視せんとするに在り、獨逸造船所職工等が契約に背きたる一事の如き蓋し最も惡例也、

斯くの如くにして進まんか、誰か事業界亦政府的狀態に陷ることを無きを保せん、吾人は勞働同盟の爲めに、事業界の爲めに、同盟が久しく維持し來れる『規律』若くは『訓練』の名譽の存續せんことを望む、

南阿聯邦總選擧

九月十五日南阿聯邦創設以來第一回の下院總選擧行はる、而して首相ボタ將軍（和蘭人を根據とする黨民

黨の首領）の落選を見る、

何等の變態ぞや、然かも是將軍が情實に驅られて、人種を根據とせる政黨を造れるの罪而已、亦誰をか恨まむ。

葡萄牙形勢不穩

葡萄牙秋期陸軍演習中止となる、其理由を問へば、則ち曰く、國内不穩の形勢あれば也、

吁嗟先帝カルロス、弑害せられてより二年有半、帝政の基礎未だ堅きを成さず、僧侶は羅馬法王の威勢を恃んて、宗權を振ひ、政權を蔑ろにし、共和黨は選擧毎に議員數を增加し、屢政府に肉薄するの時、圖らざりき、又々斯くの如き不安の報道に接せんとは、

げに悲む可きは葡萄牙國の運命なり、而して殊に一掬の涙なきを得ざらしむるは弱齢の皇帝マヌエル二世の御身の上也。

飛行家の同盟休業

傳ふらく、獨逸に於て飛行家同盟罷業起らんとすと、吾人が斯くの如き奇なる罷業を耳にするもの、蓋し亦日進月歩の文明社會の恩澤也、

理由に曰く、ブランデンブルヒ市長が飛行規則を發布し、市街人家の上には飛行す可からず、又飛行は必らず三日以前に屆出を要すとせるは、是專斷なる束縛也と

然かも斯くの如き規定は、目下椿事、慘劇屢起るに照して寧ろ必要なる所以にはあらざる乎（以上懷沙隱客）

新刊批評

▲獨歩全集（前篇、後篇）

故國木田獨歩著
博文館發行

「歎かざるの記」「愛弟通信」を除くの外の獨歩の著作は殆んど網羅せられたり。即ち我文壇に一大新潮流を作るに與つて功勞ありし獨歩の小說の全部及び新體詩等は一も洩らす所なく收められたり。獨歩の眞面目及び其作物の眞評價は此書の熟讀によつて初めて得らるべき也。吾人も之を通讀して獨歩の作物全體に對する卑見を述べんと欲すれども、未だ其暇を有せざるを以て玆には只紹介に止め置くべし。吾人の讀みたる範圍に於ていへば、前篇にては矢張り「女難」「牛肉と馬鈴薯」「正直者」「第三者」「巡査」「空知川の岸邊」「酒中日記」後篇にては「疲勞」「窮死」「二老人」「都の友へB生より」等を面白しと思ふ。「竹の木戸」は獨歩の一轉化を暗示するとに於て意義あれども藝術品としては餘り價値あるものといひ難く、「號外」「泣き笑ひ」の如きは吾人には殆んど興味なし。尙後篇には「一家內の珍聞」といふ今まで一度も公にせられざる珍らしきものも載せたり吾人は此書の熟讀を熱心に江湖に勸めんと欲す。（定價各册金貳圓）

▲ロミオとジエリエット

坪內逍遙譯
富山房發行

沙翁劇の飜譯家としての逍遙氏は最早や正札附にして何人も其足元にも及はざるなり。若し强て其弊をいへば寧ろ餘りに巧過ぎる所にあるべし。時代が違ひ、風俗が違ひ、思想が違ひ、感情が違ひ、殆んど總てが違ふ此劇を殆んど飜譯と思はしめざる程のコナレたる言葉遣を以て譯し得る人は逍遙氏の外に決して之なかるべし。沙翁劇の研究者にとつては典據的のものといふべき也。只沙翁劇其物の價値に付ては吾人に疑なき能はず此篇の如き沙翁劇の最も有名なるものゝ一なるに拘らず、吾人をして感嘆せしめたる所甚だ尠し。警句に面白き節あり、結構の巧みと思はるゝ所ある外 何等の感觸を與へず。殊に道學者的口吻にて分り切つたことを說きたる箇所や、物知り顏に比喩などを並べたる所などは嫌な心地す吾人は此書を讀みて逍遙氏の譯筆の自在なるを歎ずると同時に、沙翁劇の存外價値少きものたることを感ぜずんはあらず。（定價一圓三十五錢）

▲速成應用漢學捷徑

佐藤仁之助著
東亞堂書房發行

篇を分つこと十三、「漢文概要」「儒學史」「日本儒學史」「漢字形成」「音韻」「字書」「漢文訓讀法」「漢文和譯法」「漢文諸讀法」「漢籍問題」「詩文體說要」「作詩法大體」「作文法大體」と題したり。四六判四百五十頁の册子なれば極めて概要より記しあらざるも、簡單なる割合には比較的巧に出來たり（定價一圓廿錢）

▲俳遊記

角田竹冷著
如山堂發行

政界に辣腕を揮ひつゝある角田眞平氏、一度其角の被つたやうな頭巾を頭に戴せれば竹冷宗匠と洒落れて行脚もやり俳文もやり、俳句もやる此書は即ち氏の旅行記にして、中には眞平氏と名乘つて旅したる時の記事も見ゆれど、矢張り俳味を帶びたる筆致、讀みて心地よし。收むる所「佐渡の旅」「雪の旅」「拾ひもの、記」「ひまぬす人の記」「雨の旅」「靈の秩の記」「申酉の旅十日」「麥桿帽子」「月瀨より」「笠置より」「俳諧草枕」「臺灣と南淸」「滿洲丸」「韓淸行」「高麗の松風」「秋雨日記」「峽中吟行」「紀の勝地」「水の流れの記」「凉風記」「芳野山路」にして餘り文飾を施さゞる所に却て面白味あり（定價九十錢）

▲小說五日市　後藤宙外著　春陽堂發行

一年半に亙つて「新小說」に四回に掲載せられたる小說にして蓋し著者苦心の作なるべし。著者の主張を聞けば甚しく自然主義を排斥して居るやうなれども、矢張り全體として著しく其感化を蒙れることを認むべく讀みて味ふべき節の多き小說なり。通讀したる上に批評すべし。(定價八十五錢)

▲催眠術の危險　竹內楠三著　三松堂發行

嘗て催眠術の効能を盛んに說き立てたる著者は今や鋭利なる筆鋒を揮つて其危險なる方面を說き立てたり。物の兩面を究めて初めて其眞相を知るべし。此書も亦世人に一種の警告を與ふることに於て價値ありといふべし。(定價九十錢)

▲千里眼　竹內楠三著　二松堂發行

近時大流行の千里眼を科學的に說明したるものにして時節柄重寶なりといふべし(定價五十錢)

▲英人氣質思ひ出の記　永井柳太郎著　實業之日本社發行

三年間の滯英中に、見聞したる事實について著者の感想を記せるものにして、一度「時事」にあらはれたるを集めたるもの也。殊更らに英國及び英人を辯護せず、時には皮肉もいひながら、全體に於て英國人氣質の尊敬すべきことを讀者の胸に傳ふ。筆はすら〳〵として些の澁滯なく、觀察點はなか〳〵面白く、近時最も面白く讀みたるもの丶一也、江湖に推奬す。(定價八十錢)

▲日本人種改造論　海野幸德著　富山房發行

著者の意見に大體は本號の論文を一讀する人の了解する所ならんが、此編は最も精細に人種改造の必要を說述したるものにして、何人にとつても一讀すべき價値ある本也。著者の結論には多少獨斷的なりと思はるゝ箇所もあり、又不具廢疾の劣等者人種の處分については異見を挾むの餘地もあれども、論究の事實及びプロセスには極めて眞面目なる研究ありて讀みて非常に面白し。(定價一圓三十五錢)

▲女子の淚　尼崎菊子著　金港堂發行

獨身にして浮世の風波と戰ひつゝある婦人の感想を描ける小說にして勝氣なれども又淚脆き女主人公の面目はよくあらはれたり。文章は精細とはとひ難けれども達者に書きこなされり。篇中多く著者の實際の境遇を偲ばしむる處あるは一層面白し(定價九十錢)

▲青年修養報德之實踐　服部北溟著　良明堂發行

現時大流行の二宮流の報德主義實踐の方法を說述せるものなるが、正直にいへば吾人は最早や此種の著述に讀み厭ける心地す(定價四十錢)

▲唐詩選國字解　服部南郭講述　寶文館發行

服部南郭の唐詩選國字解は字義の解釋よりも詩作の心得となるべき節々を叮嚀の講述したるものにして初學者を益する所多し。篇頭には假名交りの讀み方を書きたるは有益也(定價九十錢)

▲帝國主義論　大西猪之介著　寶文館發行

津村秀雄氏の編纂にかゝる「國民講壇叢書」の第一回として發行せられたるものにして「帝國主義發生の原因」より、佛、米、露、獨、英等の列國の帝國主義を詳說したるものにして、邦語によつて帝國主義を研究するものに取つては從來に比類なき好著といふべし。卷頭に「帝國主義研究の栞」として帝國主義研究に資すべき書籍論文等を列擧解說しあるが、中には極めて價値なきものをも載せてジョナリスチックなるは厭ふべし。文章は雄健にして明快也（定價一圓廿錢）

▲論語國字解

深井鑑一郎校訂　寶文館發行

深世尊氏の「經典餘師」を改題せるもの也。「經典餘師」は最も通俗に論語を解したるものにして、維新前甚だ廣く讀まれたるものなるは世人の知る所也、又以て本書の價値を知るべし（定價五十五錢）

▲譯註醉古堂劍掃

笹川臨風校訂　聚精堂發行

醉古堂劍掃は古來最も廣く讀まれたる書の一にして、史記漢書其他諸子百家の書より撰者の會心語を集めたる佳句集ともいふべきもの也。「菜根譚」の如く淸新の氣に富める文字尠く、又禪味も彼に比して尠きも、兩者稍々似たる所なきにあらず。臨風氏の譯註は漢學の智識少き學生にとつて便利なるべし（定價八十五錢）

▲探偵小說活人形

白水郎著　春陽堂發行

「活人形」と「やれ手紙」の二篇を集む。何れも探偵小說也。文章體に書きありて、內容とシックリ合はざる氣のせらるれど女子には興ある讀物なり（定價三十五錢）

▲由井正雪

桃川如燕著　春陽堂發行

新講談と銘打てるものにして、正雪の一生を極めて元氣よく面白く語り盡したるは流石に斯界の老手といふべし（定價三十五錢）

▲新洋行土產（下）

巖谷小波著　博文館發行

何事にも興味を見遁さぬ著者の多角形な頭腦に觸れた、米國の風物、人事、並に我渡米國の實況を輕妙な洒脫な、餘裕の多い筆に描き止めたもの、讀んで新空氣の吸收が出來ると共に又消閑の具ともなる。附錄の「米國の職工」亦看過すべからざる有用の文字だ。（定價金壹圓參拾錢）

▲和漢高僧名詩新釋

釋清潭著　丙午出版社發行

和漢高僧作中の名詩を蒐錄してそれに註釋を加へ齋家にも解し易からしめたもの、現今桑門中の一詩才淸潭氏の著であるだけに、甚だ信憑すべき好書である、我輩の最も瞩目し、其名を見んことを欲して居る詩人の見えぬのに不審を抱いて見たが、序を讀めば足利以後の近代のものは續編に收めるとあるから、今よりそれを翹足して待つて居る。（定價九拾錢）

▲死後の生活

平田元吉譯　丙午出版社發行

科學界に於けるフエヒネルの名は近代人の何人も知らざるは無き所、此フエヒネルが科學上の研究を土臺として疊み上げた哲學的思索の結果に成る死後の生活、それを譯述したものが此著である、譯文平易、志あるものの必讀を値する、（定價金五十錢）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

精神修養 一日發行

十月號　毎月一回　一日發行

◎後藤男爵處世百訓　柊木生

▲不景氣に對する修養如何（咄堂、歩佛、波哉、白星、劍虹、蓮堂）

▲國家の活動は個人の活動にあり　男爵　牧野紳顯

◎劇詩　拿破崙　平木白星

▲朝鮮三國時代の小說　李鎔齋

▲留守（小說）與謝野晶子

▲電車道德　文學士　本多高陽

▲北雷博士の奇行　徹聽學人

◎現代青年の無氣力なる所以　伯爵　大隈重信

◎手近き修養　文學博士　井上哲次郎

◎宗教と教育との二大疑問　遞信省通信局長　小松謙次郎

▲支那革命の話　代議士　松本君平

▲忘れられたる故白根男　劍虹生

▲濁流（歌）與謝野鐵幹

▲窮民の狀態　本多生

◎淺間登山記（慄然とする一年前の譚）　安藤鐵腸

▲壯烈なる志士團　九州日々主筆　小早川秀雄

▲同人雜記　咄堂、波哉、蓮堂、鐵腸、白星、冷眼生、劍虹生

◎大國民、小國民、大人物、小人物　加藤咄堂

●定價一冊拾四錢●半年分八拾錢●一年分壹圓五拾錢（郵税一錢）

東京淺草區橋場一〇一三　精神修養社　賣捌所 神田 東京堂

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

ほとゝぎす

秋期大附錄號

——十月一日發行第十四卷第一號

前號は不幸にして發賣禁止の厄に係る
本號は裝を凝し頁を增して讀者に見ゆ

◎飼犬　野上八重子
●果報な大村君　加能作次郎
◎大雨の前日　伊藤左千夫
◎高野の火　高濱虛子
◎茅ヶ崎日記　片上天弦

夏目漱石氏病狀記
◎八月廿四日の夜　坂元雪鳥
◎修善寺より　野上臼川

▲十四巻一號の首に題　某
▲趣味判斷と價値判斷　黑田鵬心
▲日本の庭園　本多江涯
▲七部集の註本に就て　荻原蘿月
▲歌舞伎座の納涼芝居　內藤鳴雪

●消炭　青々
●垣根の穴　村上鬼城
●繪盃　武田袖風
●朝顏　吉田康人
●北米漫筆　古屋夢拙

募集俳句
△地藏祭　青々選
△十六夜　鳴雪選
△新涼　露月選
△各地俳句界

●九月の評論　安倍能成
●九月の小說　魚住折蘆

◎繪畫廿五圖　柏亭、與平、百穗、芋錢、月村
◎表紙　五葉
◎裏畫　爲山

定價　本號に限り　金四拾錢　郵稅二錢

發行所　東京市麴町區五番町三　ほとゝぎす發行所
振替口座東京二二五〇

教育界の活問題

東京帝國大學文科大學教授 文學博士 井上哲次郎先生著

忽ち再版

教育と修養

本書内容目次

洋裝菊判上製
全一册紙數七百五十餘頁
正價金壹圓七拾錢
送料金拾貳錢

現代思想界支配者

ゼームス博士原著

文學士 北澤定吉先生
文學士 吉田吉治先生
西山愁先生
共譯

(新刊)

最近思潮 實際主義

原名プラグマティズム

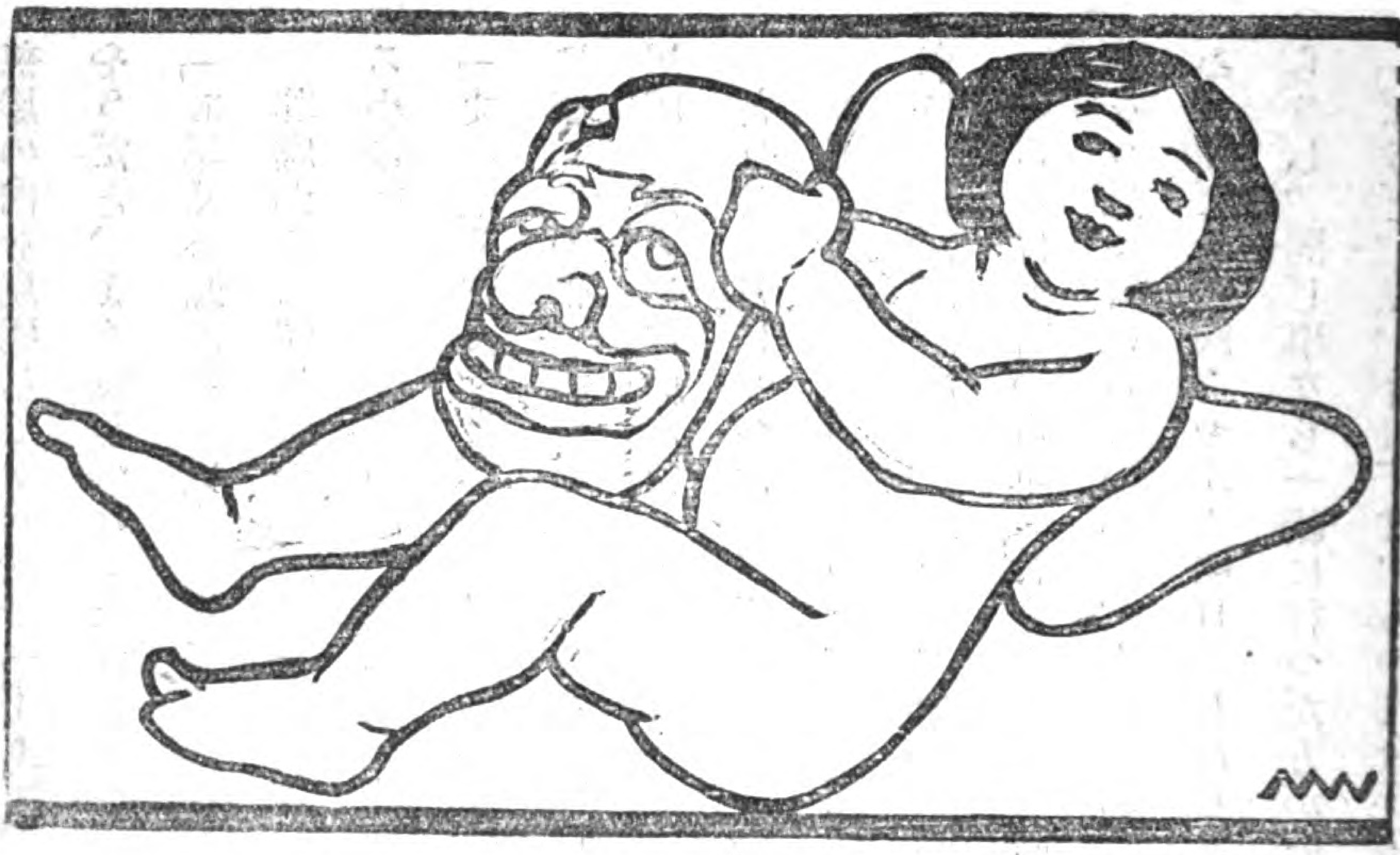
プラグマティズム(實際主義)の日本譯現はれたり

プラグマティズム(實際主義)最近歐米の思想界を流るゝ滔々たる一大思潮也現今彼の土に於て教育にまれ宗教にまれ、文學にまれ、實業にまれ、將又あらゆる科學にまれ一として此プラグマティズムの思潮の支配を受けざるなし本書一度米國出版界に現はるゝ忽ちにして十數版を重ね英、獨、佛又爭つて飜譯上梓を爲しつゝある今や日本譯は現れたり、讀め教育家、宗教家、文學者同學、哲學研究者

洋裝菊判上製
全一册紙數百餘頁天金美本
正價金壹圓五拾錢
送料金十錢

發行所 東京市神田區猿樂町 振替口座壹貳壹壹壹 弘道館

秋期大附録



微光

正宗白鳥

（一）

土用太郎――二三日降續いた涼しい雨も上つて、今日は朝から日は暑く照つた。

お國は昨夕も寢そびれて、明方からやう〳〵淺い眠についた。そして取留めのない不愉快な夢を見てゐた。目の醒めた時はもう九時に近い。急いで部屋の掃除を濟ませて風呂へ行つた。時間を氣にしながらも念入りに磨立てた。昨夕結つた銀杏返しを自分で取繕らうて、顏は臙脂白粉で色取つた。二三の秘密の手紙を机の中から取出して細かく引破つた。一度

部屋の内を見廻してから階下へ下りて、神さんに留守中の事を頼んて、若しも留守に旦那が遊びに來るやうだと、よく氣をつけて上げて下さいと、封筒に包んて五十錢銀貨をソッと手渡した。

「お早くお歸んなさい。お家へもよろしく」と、神さんは門口まて見送つた。

其處から宿俥に乘つて、道々土產物を二包も買つて、切通の坂下まて行つた。大和屋と看板の出てゐる小さい西洋菓子屋の前て、車夫を呼留め、店先て下りて、「姉さん」と聲を掛けながら、店へ上つた。

「まあ國ちやん」と、姉は仕事の手を休めて、呆れたやうに云つて、奥から妹を見詰めた。縮緬の羽織に羽二重の帶、あの縮緬のやうな着物は絽かも知れんと思ひながら、「些とも來ないのね、どうしてるの、居所も知らせないんだもの」

「どうせ來月になつたら、引越さうと思つてるから」

お國は狹い板の間を通つて、茶の間へ入つた。簞笥の上の枕時計は丁度三時を差してゐる。四時の汽車にはまだ間があると思つて、少しは心を落着けた。團扇を使いながら、

「姉さんは何時の汽車て行くの、私四時のて行くのよ、姉さんは一緒に行けないてせうね」

「そう急に行けるものかね、本所の姉さんが明日の朝の汽車て立つと云つて來たから、私もその積りてゐるんだよ。國ちやんも明日にしたらどう?、どうせお母さんの病氣も今に今危ないといふんぢやなからうし、同じ事なら一緒に行つた方がいゝよ」

「だけど、私、今日てなくちや都合が惡いの。それに本所の姉さんと一緒ぢや厭だわ」

「まだそんな事を云つてるの、お前も執念深いね」と、姉は汚點の多い顏に微笑を浮べて、「本所の姉さんも今は隨分苦勞があるらしいよ、彼處の兄さんも出世してお金が出來たものだから、道樂をして仕方がないんだつて、此頃も淺草の藝妓を受出すとか何とか云つて騷いでるさうだよ」

「だつて、そりやあの姉さんが惡いからさ、夫の不身持は大抵女房が仕向けが惡いからですよ」

と、お國は言葉強く云つて、姉の境涯を小氣味よく思つた。よくあんなに吝にしてゐられるわね、今だつてさうでせう。あれほど吝にしてて御亭主に道樂をされるなんて、姉さんも器量物だよ」と嘲つた。

二三年前に本所の姉が僅か三十圓ばかりの金を立替えて吳れなかつた爲に、自分が厭な男の妾になつて、それからますく淺間しい境遇に沈んで來たことを思ふと、今も倘口惜しくてならぬ。て、さんぐにその姉の惡口を並べたが、此處の姉は向う贔負ばかりして、些とも同意しさうでない。それに忙しく立つたり坐つたりして、落着いて話も出來にくい。三錢五錢のお客にもお世辭を云つてゐる。

「この商賣も煩いものだわね」と、お國は店の方を見て、「もつと氣の利いた商賣をしたらどう？」

「お前が資本でも貸して吳れゝば、何でも始めますよ」

「飮食店か何かだと儲けが多いてせう、洋食屋なんかいゝわねえ。……私時々さう思つてよ。どうせ私は眞面目に働く氣になれやしないんだし、かうして歲を取るばかりて、先の當てもないんだから、いつその事、吉原へでも身を賣つて、そのお金を姉さんやお母さんに上げやうと思ふことがあつてよ」

「馬鹿お云いてないよ」

「だつて、私本氣でさう思つてよ、どうせお女郎なんか私に勤まりやしないんだけど、さうしてお金だけ取つといて、直ぐに自害して死んでしまうの」

「大變な覺悟ね」姉は笑つたが、「冗談は冗談として、お前も些とは眞面目に考へなさい、姉妹でありながら、居所さへ分らないやうだと、私だつて心配だよ。今度故郷から來た端書だつて、わざ〳〵よしやまで持つてゝ、お前の所へ屆けて貰つた位だもの。お母さんもどんなに心配してるか知れやしないよ」と、親身に意見するらしかつた。

「姉さん」と、お國は改つた調子で、「その話もう止して頂戴。そんな事を云はれると、私故郷へ歸りたくなくなるから」

自分の身の上の事は、薄ぼんやりの姉さんなぞに彼此云はれたくはない。眞面目に考へてどうかなるものなら、馬鹿な私ぢやない、疾つくにどうかしてゐる。で、早く姉の側を離れたくなつて、

「私、もう出掛けなくちやならない」と、時計を見て立上つた。

「まだ早いよ、氷でも飲んでからお出でな」

「私澤山‥‥ぢや、彼地へ行つて、病氣の樣子で電報を打ちますよ」と、忙しく暇乞ひして、店先へ出ると、姉は追駈けて來て、小聲で、

「病氣が左程でなくつてもね、スグコイと電報を打つてお呉れよ。さうでないと、家を出惜くゝつて仕樣がないから」

「えゝ」

お國は首肯（うなづ）いて俥に乘つた。

（二）

上野の停車場に着くと車夫に風呂敷包を持たせ、謹ましやかに歩いて二等の待合室へ入つた。時間が早いから、手紙で打合せをして置いた河津さんはまだ來てゐないだらうと思つて、よく捜しもせず、周圍の視線を避けるやうにして、片隅に腰掛けた。そして二年前にその人と人目を忍んで、此處から大宮まで行つたことなど心に浮べて、あの時の樂しみを再び繰返したかつた。あの時は淡雪が降つてゐた。寒い風に吹かれながら相合傘で宿屋まで行つた。火鉢に翳した河津さんの手の紅く龜（かじか）んでゐるのが、可愛らしくも痛々しくもあつた。

と、お國は背に流れる汗をも、騷々しい物音をも忘れて、懷かしい思出に耽つてゐると、今まで新聞臺に身體（からだ）を曲げて、据付の新聞雜誌を讀んでゐた男が、不意に頭を持上げて、口元に微笑を湛えて側へ來た。「姉（ねえ）さんは來ないの」と柔しく聲を掛けた。

「アラ」と口の內で云つて、お國は夢から醒めて、「姉（ねえ）さんは明日（あす）に延ばすんですつて」

「ぢや、却つて都合がいゝね」

「えゝ」

「切符はまだ買はないの」

「えゝ、まだ」

「おや、僕が買つて來やう」と、男は切符口へ行つた。

お國は横から男の姿を見詰めた。此間(こなひだ)久し振に出會つて淺草公園を散歩した時には、夜だつた爲か、何となく面窶れて萎れてゐるやうに見えたが、今見ると、元のやうに凛々しくて、顔に歳は取つてゐない。薄い髯を生やしかけてゐるのも却つて愛くるしく見える。新しい麥藁帽子、絞りの兵子帶、涼しさうな浴衣姿が似合はしかつた。

男は二枚の青切符を持つたまゝ、時間表を見たり、其處等をコツ〳〵歩き廻つたりした。お國は目て男の後ばかり追うてゐた。

やがて兩毛線行の改札口が開いた。男は女から風呂敷包を取つて、先に立つてプラットホームへ出た。人氣のない室を見て乘つたが、其處へは後から老人が一人入つて來たばかりだつた。

お國は直ぐに羽織を脫いて、首筋の汗を拭ふた。汽車が動出すと、冷しい風が窓から流込んだ。

「私、やう〳〵落着いてよ」と、今まで壓えてゐた重い息を吐いた。胸は淸々(すが〳〵)しくなつた。東京が後へ〳〵消えて行くのが氣持がよかつた。かうして何時までも旅をしたいと思つた。

「僕も久振りの旅だよ、此頃は汽車に乘るのも珍らしい」と、男は向合つて窓際に腰掛けて、外を眺めながら、落付いて煙草に火を點(つ)けて、「突如(だしぬけ)にあの手紙を見て、どうしやうかと一寸考へたよ。先日(こなひだ)きりて會はん方がお互ひのためにいゝと思つて、今日は來まいかと思つたんだが、意志が弱くてとう〳〵お

伴をするやうになつちやつた」と笑つて、「どうせ姉さん達と一緒なら、他所ながら樣子を見るたけだと思つてたら、誰も來なかつたんだね。お母さんの病氣はどんなのだい、さう惡くもないんだらう」

「どうだか」と、お國はそれには冷淡に答へて、「ぢや、此間きり貴下はもう會はないつもりだつたの」と、これには力を入れて云つた。

「どうせ仕方がないんだもの。國ちやんだつて、もう浮氣は止しちやつて、その何とか云ふ人に眞心を持つてた方が身のためだよ。だから僕は會ひたくつても會はんつもりだ。それに僕も學校を出たんだから、これから職業を捜さなくちやならんし、以前のやうにしちやゐられない」

「皆な私が惡かつたんだわね、私のために卒業も一年遲れたんだから……皆んな私が惡いんだから、これから又貴下に御迷惑を掛けて、出世の邪魔をしやうとは、夢にも思つてやしないのよ。だけど、今日貴下に來て頂いたのは、この先何時お目に掛れるか分らないやうな氣がして、こんな折にても緩くり會つて置きたいと思つたからだわ。浮氣だ〳〵つて、貴下に會ふのが何故浮氣なんてせう」

お國の氣色ばむのを、男は押靜めやうとして、情愛を含んだ目を向けた。そして後の窓に肱を突いて。居眠りをしてゐる老人を憚るやうに、チラとその方を顧みた。

「昨日の貴下の手紙だけは破らないでチヤンと持つてるのよ、」と、帶の間に小さく疊み込んでゐるのを取出して廣げて、「貴下一度讀んで御覧なさい」

「自分の手紙を讀む必要はないさ」と、男は手に取らうともしないのを、

「必要があるから云ふんですよ」と、無理に推付けた。

手紙は洋紙にペンで書いてあつて、所々爪痕がついてゐる。男は半ばは眞心、半ばは戯談のつもりで、一晩掛つて書いたその手紙を讀返した。先日の淺草の散歩の樂みから、過ぎし昔の思出を、字面の美くしい文字で細かに書いてある。「本郷座の側にて一時間餘も待ちあぐみて、御身も何かの障礙にて家出もならぬことならんと諦め、失望して歸宿せんとす刹那に、御身の幽かなる聲を耳に致し候。幽かなれど、その聲は小生の一生に耳朶を去らざる聲にして、今孤燈の下鮮かに思ひ出され萬感交々至り、一滴の涙なきを得ず候。冴え渡る月光に浴して、湯島天神の境内まで、互ひに語らふ言葉もなく歩みて、其處にて一生の別れを告げ候ひしは、御身も尚お忘れならぬ事と存じ候。大宮の雪湯島の月、忘れ難き記憶は爾後屢々小生を惱ましもし慰めも致し候、」

「あの時には己が罪をやつてたよ、僕はその繪看板を見ては悲しい思ひをしてたのだ」と、男はその後暫らく生きる瀬もなく暮してゐたことを思つて、「國ちやんは十日もしたら忘れちやつたらう」と、手紙を疊んだ。

「えゝ、十日どころぢやない、二日も立つたら忘れちやつた。私、薄情だから」お國は口早に云つて、

再び手紙を開いて、「貴下よく讀んで、その爪痕の所を」

「それがどんなのだい。眞面目に將來の忠告をしてるんぢやないか」

「さう……」

お國は爪先で目印したあたりを注意して讀んだ。其處には情深い柔しい、涙を誘ふやうな文字が、濃く鮮かに浮んでゐる。――△△とかいふ親切な人を大木の蔭と頼んで、心安く日を送られるならば、小生の絶え間なき心掛りも稍々安んぜらるゝ次第なれば――なんて、

「貴下私が今氣樂に日を送つてると思つてゝ」と、涙早い目を濡らせた。

「今はそんな話は止さう」

男は湧上る感情を紛らすやうに快活に云つて、手紙をズタ〳〵に引裂いて外へ棄てた。一片二片舞戻つて車の中へ落ちた。お國は默つてシホ〳〵した目で男の顔を見てゐた。

やがて汽車が大宮に着くと、かの老人は手鞄を下げて下りて、新に小供連れの夫婦が入つて來た。急に賑かになつた。妻君は座に落付くと、先客の二人の顔を疑り深い目で見た。お國も見ぬ風で見返した。

「サイダでも買はうか」男は獨言のやうに云つて、前を通る賣子を呼留めて、サイダとお茶とを買つた。

「飲まないか」と、小さい茶碗を出したが、お國は輕く首を振つた。

汽車が動出すと、男は罎を口に當てて、生温くて酸ぱいサイダを、不味さうに飲んで、手に持つたまゝ膝の上に置いた。お國はふと前に屈んで奪ふやうに罎を取つて、「私も呑みたい」と、甘へるやうに云つて、口呑みにした。

「貴下、まだ呑んで？」

「もう澤山」

「ぢや罎を捨てよう」と、お國は立つて窓に擦寄つた。百姓家の門に立てゐる子守が此方を見た。重さうに荷物を脊負つた男が線路を傳つてゐる。稻の葉は靑々と風に戰いてゐる。異樣の雲が空の片隅に卷上つてゐる。踏切の側で汽車の過ぎるのを待つてゐる俥には、厭らしく白粉を塗つた平顏の女が乘つてゐる。

幾度か罎を振つたが、お國は氣遲れがして投棄て得なかつた。かの夫婦は笑ひながらその方を見てゐる。思切つて目を瞑つて手から離すと、線路で碎ける音が痛いやうに響いた。胸を轟せながら座に戻つて、

「物を壞すといゝ氣持ね」と、小聲で云つた。

「ぢや、その土瓶も壞すといゝ」、男はお國が白い腕を出して物を振上げた姿を、再び見たかつた。

「だつてお茶は飮みたいから……私忙しくつて晝御飯も食べないの。お土産を開けやうかしら。貴下食べたくない？」

「折角買つて來たのに手を付けちや惡いぢやないか」

「ウヽン構はない」

風呂敷包を解いて、菓子箱を開けた。五つ六つ最中を紙に包んで、側の子供にもやつた。

汽車は鐵橋を渡つた。馬を洗つてゐる農夫の赤い顏が直ぐ前に鮮かに見えた。首を振り〱男の子が二三人泳いでゐる。白壁を照らしてゐる光も最早暑苦しさうではない。

「潑洒したいゝ所だね、何といふ川だらう」と、男が訊いた。

「これが思川てせう、私、小さい時に兄さんに連れられて來たことがあつてよ。此處ては鮎が取れるの」

「ぢや、明日歸りに寄つて見ようかな、東京へは明日の晩歸ればいゝんだから」

「私も一緒に歸つてよ」

「だつて病氣見舞に行つて、さう早くも歸れんだらう」

「さうね……でもどうかして歸つてよ」と、お國は決めてしまつたが、「もう東京へも故郷へも行かないて、ズーッと遠方へ行つちまいたい」と、溜息吐いた。

日光は山にも野にも消えて、黒ずんだ森には淡い水氣が細く棚引いてゐる。夕闇の中にチラホラ火影が見えた。

「あの町らしい所が栃木だね」と、男は窓から覗いて、「廣々として景色のよさうな土地だ」

「えゝ」お國は氣のない返事をした。

停車場から俥で二人は晃陽館に向つた。大通の左右には軒毎に赤い提灯を點火して、人の往來が賑かだ。蓄音機を据ゑた店先にはいろんな人が群がつてゐる。「天王樣のお祭だらう」と、お國は思つた。

(三)

障子を取はづした風通しのよい宿屋の二階て、二人は湯上り浴衣を輕く着て、夕餐の膳に向つた。前の椽側を袴を着けた教員らしい人々が往來したが、どれも一度づゝ不遠慮に二人を見た。隣には酒盛が始まつて、調子外れのザレ唄も聞える。女中がキャッ〳〵と騷いでゐる。

「煩さいね、もつと靜かな部屋はないかい」と、男は給仕の女中に訊いた。
「本當にお氣の毒で御座いますが、何處も塞がつて居りまして」と、手首に汗を浮かせてゐる女中が答へた。
「ぢや、隣が靜まるまで、僕は町を散歩して來やう。國ちやんはもう家へ行かなくちやなるまい。どうせ今夜は看護して上げるんだらうし」と、男はこれで別れるを名殘惜しがつたが、お國は
「私、今夜は家へ行かない」と、平氣で云つた。
「病氣見舞に來たんぢやないんかい」
「だから明日になつたら、一寸行つて見るわ」
「呑氣だねえ」男は勝手な女だと思ひながら、却つてそれを喜んだ。
　女中が膳を下げるのを待つて、お國は小聲で、
「私、あの女中を一寸知つてゝよ、小さい時分に叔母の家の子守をしてたの。確かお鶴とかいふのよ」
「ぢや、向うでもお前を覺えてるだらう」
「どうだか。私は樣子が異つてるから知らないでせう、田舍にゐると何時までも同なじやうだわね」と、心で田舍者を嘲笑つて、「あの子は一度居眠りしてゝ背中の子供を落つことした事があるの。打どこが惡くつて氣絶して、そりや騷ぎだつたの」と云ひながら、その時分を朧ろに思浮べた。シク〳〵泣出したお鶴の顏や、吃驚して眞蒼になつた叔母の顏が見えた。あの時からあの子の額には傷跡の殘つてたが、

「子供の折の傷は次第に大きくなるんですつてね、歳を取るほど」と、男に訊いた。

だが、男はそんな話には氣が向かない。生返事して、「もう大分涼しいから、其處等をブラ／＼しやうぢやないか、隣が靜かになるまで」と、身を起したが、お國は知人に會ふのを厭がつて、一足も戸外へ出やうとしない。

男は一人で出て行つた。

お國は階子段まで男を見送つてから、暫らく椽側に立つて、土藏の横から斜に町の方を見た。瓦斯の光で薄明るい店先に、肥つた男が素裸で煙草を吸つてゐる。その前を白い衣服や黑い衣服が續いて通つてゐる。月琴の音が陽氣に近づいた。それを見たり聞いたりしてゐると、お國は今朝から引立つてゐた心が次第に弛んだ。この頃日增しに身體の衰えるにつれて、周圍の物の音物の色が鬱陶しくなつて來たが、チラ／＼隙見する故郷の色は一層懶く見えた。

て、部屋へ入つて、檢束なく坐つた。四年前、十六の春に踏出してから、一度も歸つても見ねば、殆んど音信にも接しなかつた故郷は、流石に懷かしくなつて、知人に他所ながら會つて見たかつた。ついぞ思出したことのない幼友達の誰彼れが、影のやうに浮んだ。父と姉とに連れられて、勇ましく東京へ行つてからの四年間も、惡い夢に魘はれてゐるやうに、取留めもなく浮んだ。

早く河津さんが歸つて來て、側にゐて呉れゝばと、身を持ちあぐんで其處へ打伏しになつて目を閉ぢた。……

店先に駄菓子を並べた中野の百姓家の璧の上を、お安が涎を垂らしながら、ヨチ〳〵歩いてゐる。本郷座の房州海岸の場では、高田の作兵衛が泣いて貰ひ子の素性を話してゐる。河合の美しい環と、着飾つて實の子を訪ねて行く自分とが一つになつた。

「お母さんが抱つこして上げよう」と、梅月で買つた最中を見せても、お安は側へ寄つて來ないて、身體に觸ると、聲を張上げて泣出した。…

お國は膨らんだ手の甲を涙て濡らした。生んだばかりの可愛らしい子供を人手に渡して、泣て縋付く自分を足蹴にした憎い〳〵鈴木の惡相が、其處へ現はれた。憎いよりも次第に恐ろしくつて溜らなくなつた。

（四）

「お前は東京へ行つて磨上げたら、何處へ出しても耻かしくない女になるよ」と、別れ際に叔母に煽てられた、お國は、十六の秋には、最早垣一つ隔てた隣の家の食客鈴木の甘い言葉に乘せられて、姉の家を飛出して身を隱した。天神下の棟割長屋に貧しい所帶を持つて、男の差圖のまゝに日を送つた。覺束ない手先て縫物をもした。男に手を執つて敎へられて讀み書をも學んだ。戀文はかう書くものだと幾度も稽古させられた。「雨の日風の夜もお前樣の面影を忘るゝ暇は御座なく候、柔しいお言葉は今尙耳に響くやうにて、心も空になり申し候」といふやうな文句を暗んじた。「戀する時と悲しみと何れか永き何れか短かき」といふ、或雜誌にあつた新體詩の一節をも說明して聞かされた。

「お前、まだそんな心持は分るまい」と、鈴木は邪氣ない顔を見て訊くと、

「私、分つてゝよ」と、お國は涼しい目を見張つた。

その頃からこれまで知らなかつた物懐かしいやうな、何か待遠しいやうな氣持が、絶えず胸に湧いてゐた。教はつた文字を集めては戀文を書いて喜んだり、「戀しき御許へ」と誰れに宛てるともなく書いて見たりした。鈴木は連れられて諸方を散歩する折にも、行違ふ若い男や女が頻りに自分の方へ目を配るやうに思はれ出した。鈴木は定つた仕事もないのに、いろ〳〵に無理算段しては香水や白粉や、女の悦しがる者を買つて御機嫌を取つてゐた。「今におれがお前にいゝ服装をさせて立派な女にさせてやるよ、も少し辛抱してお出で。おれだつて二三年の内には些とは出世するぜ、何時までも貧乏な思ひばかりさせときやしない」と、口癖に云つてゐた。そして晩酌の相手をさせては、面白可笑しく艶めいた話をしたり、淫らな事をも云つた。お國は大人しくそんな話を聞いてゐたが、次第に厭な氣がし出した。お酒に醉つて詩を吟じたり薩摩琵琶を唄つたりするのは面白いけれど、何故あんな下品なことを云ふんだらうと、屢々「お止しなさい、そんな下らない話は」と、言葉先を壓えるやうにした。

二月三月。十七の春になつて、身體付も日に〳〵子供離れして、姿や素振りも品やかになつた。木綿着て水汲をしたり用足しに行つたりするのを見て、近所の女房達が惜しい女だと噂してゐるのが、お國の耳にも入つた。坂上の麵麭屋の老爺も馴々しい口を利いたり、厭な目付で見たりする。

「あの禿爺さん、氣味の惡い奴だよ、私、もう彼處へは買ひに行かない」と、或日晩餐の食麵麭を買つ

て來て、お國は悄氣にいつて、その老爺の樣子を訴へた。

「彼奴も助平らしい面をしてやがる」と、鈴木は笑ひながら聞いてゐたが、やがて戲談らしく、「どうだ、その爺さんを騙して、ウンと絞取つちや。おれが甘い方法を敎へてやるぜ」と、勸めた。隨分溜込んでるといふ噂があるから、甘く釣寄せて捲上げるんだ。さうでもしなけりや、當分二人の生活も立ちやしない、それもおれもお前が可愛いから、もつと小瀟洒した身裝をさせて氣樂にさせて見たいんだが、此處暫らくおれの出世をするまでは駄目だからなあと、一杯機嫌で本氣で說付けた。

お國は呆れて知らん顏をしてゐたが、二日三日引續いて勸められると、終ひには恐ろしくなつて來た。情けなくてシク〳〵泣出した。同じ家にゐるのも、それから厭になり出して、鈴木の柔しい親切らしい言葉も底氣味惡くなつた。

（五）

厭になつて、酷い目にも會はされて、手向ひもした事が、今ランプの側で鬱ぎ込んでゐるお國の胸に銳く現はれた。

「どうしたんだい、目を潤ませたりして」と、河津は何時の間にか前に突立つて笑つてゐる。

「貴下、何處を歩いてゝ」と、お國は頭を上げて淋しく笑つた。頭も稍々輕くなつた。

「一通り町中歩いて來たよ、倭町の角に大きな麻問屋があるね、増田新吉といふ瀨戶物の表札が出てるが、あれかい、叔父さんの家は。」

「さう、……明日は彼處へも行かなくちやならんし、私明日が苦になつてよ、お母さんにも會ひたくなくなつた」と、焦燥した氣持を顏に現はしたが、河津が肱枕して、興ありげに女の顏を見守つて默つてゐるのを見て、「貴下後悔してるんぢやなくつて、今日此處へ來たことを」と詰つた。

「そんなことがあるものか」、河津の快活な言葉には深い情愛をも含んでゐさうだつた。

「さう、本當、後悔しない？」と、お國は念を押して、安心した。

隣の部屋では、醉倒れてゐた客も歸つて、嵐の後のやうに急にヒツソリした。女中は跡片付をして隔ての襖を開けた。三間突通して風は冷つこく流れた。煙草盆や座布團を持運んで、二人は眞中の部屋へ移つた。女中は次の間に蚊帳を釣つて引下つたが、二人は容易に寢床に就かなかつた。

「まあ、いゝ月だ」、お國は緣側に差込んで來た月影を見て、身輕に立上つて、手欄に寄つて、明るい光を浴びた。そして男を手招ぎして側へ立たせて、ウツトリ夢見るやうな目付をして、「何か面白い話を聞かせて頂戴な、哀れつぽい話を聞きたいわね」

「哀れつぽい思ひは二人でサン〳〵爲厭いたぢやないか、」

「私達の事は厭さ、私達に關係のない哀れつぽい事を聞いて泣きたい」

「よく泣きたがる人だね、剛情つ張りの癖に」

河津は手欄に身を凭らせて、女が苦しい二三年を送つた今でも、以前のやうに甘い涙を喜んでゐるのを不思議に思つた。以前鈴木の目を忍んで、上野近所で出會つた時分に、男の泣き方が少いと云つて恨

んだことをも思出して、「僕はもう大人になつたから泣かないよ」と云つて笑つた。
「へえ、學士になると泣かなくなるの、泣かなくて戀が出來て？」
「出來るとも、戀は悲觀すべきものぢやないさ」
「だけど、私そんな經驗はない、戀をして悲しくなかつたこと私一度もないのよ。貴下に會つてた時分だつて、只の一度だつて涙の出ない事はなかつた」
低い聲で止切れ〳〵に言葉少なく話してゐる間々に、互ひの心には昔の事が小說のやうに浮んだ。そして男は段落のついた物語を振返つて思出すやうだつたが、女は尙物語の中を小迷つてゐる氣でゐる。
天神下の前の家に二階借りして學校通ひしてゐた河津の制服姿は、今も目の前にあつて心を震ひ動かした。日毎にそれとなく二階を見上げては、せめてもの心遣りとしてゐたが、何が緣になるか知れぬもの、不忍池に花火があつた夜、宿の人に招かれて、二階にそれを見に行つてから、互ひに口を利くやうになつちやつた。
「私本當に不思議だと思つてよ、貴下とは切つても切れない緣があるんだわね、迷信のやうだけど、前世の約束事とか何とか云ふんぢやないかと思はれてよ」、お國は深く思込んで、さう云ひながら、男の指先に觸つた。
「さうかも知れん、一生の別れを三度もしてる癖に矢張この世でかうして會へるんだからね……しかし隨分恐ろしい目もしたよ、當分は平氣で道が步けなかつた」

「だけど、私、これからだつて、まだ幾度怖い思ひをするか分らしない」

お國は物に驚くやうに息を震はせた。鉋屑や木切の堆い路次を見下して、「私、かうして高い所から下を見てると、誰れかに後から突落されさうな氣がして、ゾッとすることがあつてよ」と、手欄に堅く摑まつて、「私西洋館の三階から飛下りやうとした事があつたの、天神様の近所に黒川といふ大きな家があるのをお貴郎知つてるでせう。彼所の書生さんがね、家の中を見せてやらうつて、私を三階まで連れて行つて、出口に錠を下して、私を追廻すの。私夢我夢中で階下へ飛下りやうとしたのよ、さうするとその書生さんが怖がつて、戯談だ／＼と云つて、出口の戸を開けて呉れたからよかつたけれど、隨分怖かつたよ」と、ドキ／＼胸騒ぎをさせた。

河津はその話を二三度聞かされてゐるが、一度は男に追廻されるのが自慢らしかつた。一度は男の厭らしさを嘲けるやうだつた。今は只物を恐れるやうに力なく話した。

「眠くなつた」と、河津は欠伸をして寢床へ入つて、廣々と手足を伸したが、お國はまだ暫らく緣側に首垂れてゐた。

（六）

翌日。昨日よりも暑さが烈しくて、見る物が乾き切つて、戸外は恐ろしく見えた。お國は化粧した。顏を汗に浸して、眩しい道を喘いで、宿屋から二町にも足らぬ自分の家へ行つた。麻問屋の前を蝙蝠傘て避けて、角を曲ると、其處に有つた筈の下駄屋は見當らなくて、駄菓子屋の側に薄汚い氷店があつた。

肌襦袢一つて、見覺えのない神さんが氷を削つてゐる。土間にゐる四五人の目が此方に注がれたので、お國は顔を背けたが、後から見詰められてゐる氣がして、歩き振りをも謹んだ。

家の軒には町名の入つた祭の提灯がブラ下つてゐる。閾を跨ぐと、襖を外した奥の座敷まで家中が見透かされた。量張つた風呂敷包を上り口に置いて、お國は眞先に上の姉の後姿に目を付けた。着物のさう美しく見えぬのが何よりも悦しかつた。

「まあ、國ちやん」、病人の枕許に座つてゐる二人の姉と叔母とが、足音を聞きつけて振返つた。

「昨日停車場でお金を落しちやつたから、今朝出直して來たの」と、姉に言譯して、「お母さんの病氣はどんなの。私、今度は永くゐるといゝんだけど、急用が出來て、正午過ぎには歸らなくちやならない」

この人達の中にゐて、煩く自分の身の上の事を訊かれたり、世帶染みた話を聞かされるのを好まないて、着くともう一刻も早く此處を離れやうとしてゐた。高い枕をして白い敷布の上に黄ろい肌を現はしてゐる母は、首を持上げて、それとは思はれぬほど大人びた娘の顔をジッと見てゐたが、やがて涙ぐんだ。

「お母さん、撫でゝ上げやうか」と、お國は指環の光つてゐる手を母の肩に當てた。そして叔母や姉が左右から、この頃の事を訊かうとすると、「私、今日はお母さんの見舞に來たんだから、私の事なんか何にも聞かないて頂戴」と、ツケ〳〵した調子て斥けた。

叔母は皆の揃つたのを喜んで、御馳走拵えに臺所の方へ行つた。母は小聲てお國の氣に障らぬやうな

事を云つてゐたが、やがて快く眠入つた。

「暑さに中つたんだよ、歳が歳だから餘程惡いんかと思つたけど、これならまあ安心だ」と、上の姉は先に立つて次の間へ退いて、一人ジッとして母の寢顏を見守つてゐるお國をも呼んだ。その室には佛壇があつて、今姉の手て捧げられた線香の煙が微かに棚引いてゐる。ほの暗く位牌が並んでゐる。お國は信心の厚い母に導かれて、少い時分から佛壇に馴染んでゐたが、今その方へ目がつくと、急に妙な氣になつて、その前に跪いた。恭しく線香を上げて、鉦を叩いた。床しい煙と香ひが流れてイラ〳〵した心を鎭めるやうだつた。珠數を爪繰つて看經をしてゐた母の姿が懷かしい。「いつそ尼さんにでもなれんものか知ら」。若い美しい尼姿はどんなに他人の目に見えるだらうと、髮を卸して袈裟を纏つた自分をウットリ思ひやつた。

「國ちやん、氷をお上んなさい」と、下の姉の聲に、お國は座に加はつた。姉は年中暇のない身體を今日一日は氣樂に休ませた悅ばしさに、歳に似はずはしやいでゐる。三人並んでゐる中て、見劣りのする顏形をも身裝をも氣に留める風はなく、商賣の掛引や出錢の高を話してゐたが、それをお國は憐憫（みじめ）に感じた。あんな厭な御亭主に何時までも連添つてて戀もしないて、何が面白いんだらうと、その氣樂さうな樣子を愚かしく思つて、默つてツンとしてゐた。

「此處にも人手が足らんのだから、私、一月も來て、介抱して上げたいんだけど、今の中はとても駄目」と、姉は氷水二杯も飮干して、浴衣に垂れた滴を拭ひながら、お國を見上げて、「お前がどうかして此處に

ゐて呉れるといゝんだがね、二人とも側にゐないやうぢやお母さんも心細いよ、どうせ先が短かいんだから誰れかゞ側にゐて孝行して上げるといゝ。叔母さんの家の世話にばかりなつて、實の子が打放つといちや、義理が立たないと思ふよ」

「さうだとも。お國もこれ迄の事は仕方がないとして、もうそろ〳〵身を堅めなくちやならんよ。何も東京で暮らす必要はない、田舍で氣樂に暮らす方がいくら増しだか分りやしないよ。さうしてお母さんと一緒にゐて上げれば、お母さんも喜ぶだらうしね、私達も安心するんだよ」と、上の姉も說き賺かした。

「さう」と、お國はその姉には横顏を見せて冷淡に答へたが、やがて、「私、お母さん一人ぐらゐ東京へ連れてゝ、立派に養つて上げるよ。死ぬるまで些とも不自由な思ひなんかさせないで世話をして上げるよ。お母さんの身體を動かしてもいゝ位になつたら彼地から迎へに來てもいゝ。その積にさへなりや、私だつて甲斐性なしぢやないんだから」と、力んだ。

「大變な元氣だねえ」と、上の姉は笑つて、「だけど、氣ばかり勝つてゝ無分別な事をおしてないよ。お前だつて何時までも若くはないんだから」と意見らしい口を利きかけたが、お國の面付の小憎らしく、說諭しても聞入れさうもないのを見て口を噤んだ。

風は吹通してゐれど生溫くて、目の前に照付けてゐる眞晝の强い光は、眠不足のお國の目を眩ますやうだつた。御輿を舁廻る聲が暑くるしく表通りに聞えた。下の姉は聞立てゝ、それを見がてら、宮詣りに行きたがつて、姉妹を誘つたが、お國は首を振つて、「二人で行つてお出でよ、私、お母さんの側につ

いてるから」

「おや、留守番して待つといて、お晝飯までに一寸お詣りして來よう」

二人は面白さうに出て行つた。叔母は甲斐々々しく臺所で胡瓜揉みを拵えたり、魚を煮付けたりしてゐたが、二人が聲を掛けて出て行くのを目を顰めて見て、「この日盛りに出歩かなくたつてよさゝうなものだに。手傳つて貰はうと思つてたのに逃げて行つちやつた」と、獨言のやうに零した。

「叔母さん手傳はうかね」、所在なげに坐つてゐたお國は立つて臺所を覗いて、「水でも汲んで來て上げやうか」

「ウヽン。お前さんは珍らしいお客樣だからジッとしてお出てよ」と、叔母はお國の臺所へ入るのを拒むやうに手を振つた。

「だけど、叔母さん、私御飯は欲しくないのよ、それにもうお暇しなくちやならないの。今夜彼地で手を外せない用事があるんですから」と云つて、呆れた顔をした叔母のくどく引留めさうなのを壓えるやうに、主人持の不自由さ忙しさを、早口に眞實しやかに述立てた。人のいゝ感じの鈍い叔母は別れを惜みながらも强いて引留めもしなかつた。

て、お國は愚圖々々してゐて、親類近所の人の目に觸れて歸りそこなはぬやうにと、身仕度をして、安心して久振りに快く寢付いた母の寢顔をソッと覗いて、心で別れを告げた。何となくこれで一生會へないんぢやないかと思はれた。母の壽命を氣遣ふよりも、自分の壽命が盡きかゝつてゐるやうな氣がしてな

らなかつた。

（七）

急いで宿へ歸ると、河津は下座敷へ引移つてゐた。ビールのコップを前に置いて、目縁を紅くして、お鶴といふ女中を相手に話をしてゐる。「お歸りなさいまし」と、女中は笑顔をして迎へて、空罎を持つて出て行つた。お國は疑ぐり深い目で見送つて、「あの女は何か私の事を話さなくつて」

「何故？……何も云つてやしない」

「さう。あの女は元からよく蔭口を利いて仕方がないの」と云ひながら、留守に自分の爲にならぬ噂をされてやしないかと、氣遣つた。そして、晝餐を食べながらも、給仕してゐるその女中と河津との顔を見ては、蔭口の跡を捜らうとした。

「暑い土地だね……こんな土地に長居をする必要はないよ、早く歸らうぢやないか。歸つて涼しい所で息を吐きたい」河津は直ぐにも立ちたい位だつたが、お國は浴衣に着替へて、グッタリ疲れた身體を疊の上に伏せて、頻りに粘い唾を吐いてゐた。

「私、東京は厭」と、子供らしく首を振つて、「せめて一晩でも知つた人のゐない土地で、ソーッと靜かに寢かして下さい、貴下の側で何にも氣に掛けないで、一日眠りたい」

「ぢや歸り途だから、大宮へでも寄るといゝんだが、僕は充分に金を持つてゐないよ」

「私、指環を質に置く、一度東京へ行つてお金を拵えて大宮まで來ていゝ」と、キッとした口調で云つ

て、お國は延と石入の指環を引拔いて、「二つて二十圓は貸して呉れてよ」と、男の前に置いた。
「だけど、それを無くしちや困るだらう、後て買つて呉れた人に言譯が立たんぢやないか」、
「いゝえ構はない。後はどうなつたつて構はないのよ、私、かうしてお互ひに暑ひ思ひや厭な思ひをして詰らなく別れたくない」男に少しても惡い記憶を殘さすのもつらかつた。出る前に樂みにしてゐたこの旅が、飽氣なく終りさうなのも口惜しかつた。
「さうさ、どうせ又何時會ふか分らんのだから、僕だつて別れ際をよくしたいよ、あの時月夜に湯島て別れたのは、後の思出のためには非常によかつたのさ。今度も大宮へ行つて何時かの部屋で松風ても聞かう。かうして田舍の宿屋て汗みどろになつたのが、一生の見收めぢや實際不愉快だからね」
河津はかう云ひながら、今度の旅をも美しく色取りたかつた。一生の別れといふのが、尙更旅に味ひをつけた。だが、お國は男が平氣で口にするその言葉を聞くと、さながら死刑の宣告ても聞くやうな氣がした。この人を離れた後の東京生活は、淋しく慵く張合のないやうな氣がして、最早一日も我慢が出來るだらうかと思はれた。そして男が自分をどんなに思つてるかと、不安心てならなかつた。默つて見てゐると、暑さにもめげぬそのキビ〳〵した顏付と樣子とは賴もしくあつたが、以前のやうに女に氣を兼ねて、その機嫌を害ねぬやうに勤めた、あの幼々しい樣子のなくなつたのが物足らなかつた。
「二年の間に外にどんな情婦が出來たか分りやしない」と、さう思ふと、このまゝ手放す氣にはなれなかつた。

「兎に角この汽車で出かけやう」旅行案内を見てゐた河津は、慌しく手を打つて勘定を急がせた。
やがて俥に乘つた二人は、町の左右に目もくれず、一圖に心を停車場の方へ向けた。

（八）

大宮の萬松樓の二階に二日ほど氣儘に遊んで、歸るともなく二人は上野の停車場に着いて、再び會ふ機會を約束して別れた。お國は別れてから澁々電車に乘つて、壽町の宿へ向つたが、自分に關係のある東京の誰れ彼れが、不斷よりも一層强く心を壓えるやうに浮んだ。

それに――大宮から金策に一人で歸つて、いゝよしやの主婦に指環の質入を頼みに行つた時、主婦が中野にゐる子供の噂を傳へて、「あの子も此頃は暑さ中りか何かで弱つてるさうだから、一度樣子を見に行つておやりよ」と勸めたことが、絶間なく胸を脅かした。「あんな實の親に懷かない子供に會つたつて仕方がない、死んだつて私もうあの子に會はない」と、あの時元氣よく答へたことも情けなく思出された。だが、「いくら自分の生んだ子だつて、懷かない者に會つてやるものか。いくら會ひたくつたつて會はない」と、直ぐに强情に自分の心を叱付けて、遣る瀬ない思ひを擾亂しもした。

燈火の見えぬ薄暗い路次を通つて、突當りの二階家の前へ來ると、お國は立留つて、雨戸の締つてゐる二階を見上げてから、玄關の戸を開けた。「只今」と聲を掛けたが返事がない。心を抉込んだランプが薄明るく、赤兒の寢顏を照らしてゐる。「情はない人達だ」と呟いて手搜りに二階へ上つて、燈火を點け雨戸を開けた。噎せるやうな溫氣を拂つて、衣服を着替えながら、部屋の樣子を見た。煙草盆には卷煙

草の吸殼が堆い。新聞が一枚廣がつてゐる。硯箱の下から一通の手紙が食出てゐたが、それには「歸り次第端書にて一報これあるべく候」と書いてあつた。今日此處で待ちあぐんで、自棄に煙草を吸つてゐた人の顏が見えるやうだ。彼地から端書の一本も出さなかつたのが、あの人の氣に障らなかつたらうか。

て、お國は氣せはしく筆を執つて、申譯やら歸京の知らせやらを書いて、ポストへ入れに行つた。そして風呂へも入つて、路次の角へ來ると、二三間離れた乾物屋の軒下に腕組みして目を凝らして此方を見てゐる男に氣がついた。屢々宿の近所に突立つて、執念深い目を向ける男だ。お國はそれと知ると身慄ひして脇目も振らず路次を通つて、家の中へ驅込んだ。戸口に男の足音がしてゐるやうな氣がする。

「どうしたの姉さん」と、今戸外から歸つて、縁側に腹匍ひになつて涼んでゐる十五六の男が、黒瞳勝の涼しい目を上げた。

「向ひの馬鹿が又追驅けて來たの」と、お國は薄暗い玄關の方を顧みて、「勝ちやん、一寸出て見て頂戴」

「アヽ、彼奴ぶん毆つてやるといゝんだ」と、勝太は拳に力を入れて跳起きて、格子戸を開けて見廻して、「誰れもゐやあしないよ」

「さう、……本當に氣味の惡い奴ね」

お國は一人ぼつちてゐるのに堪へられなくて、二階へは上らなかつた。片手を突いて斜に座つて、勝太を相手に冗談口など利いた。勝太は物耻かしさうに、お國の顏を見ながら、無邪氣に頓間な調子を合

せてゐた。先日お國に敎はつた喇叭節を、透通つた聲で唄つた。「ラブに貰うたハンカチア、紅葉の模樣とは氣にかゝる、……トコトットヽ」唄つてから極り惡さうに「僕は駄目だ、僕のやうな唄ひ方ぢや三味線に合はんでせう」

「でも勝ちやんの聲はいゝ聲だね、これから何か本式に稽古するといゝよ」

「ぢや、姉さんが敎へて呉れるといゝな。さうしたら僕習ふんだけど。」

「お安い御用だ、何時でも敎へて上げるよ」

「旦那は怒らないかい、」勝太は眞面目で訊いた。

「怒るかも知れないね、だけど怒つたつていゝさ」お國が本氣らしく云ふと、

「旦那を怒らせたら、姉さん困るだらう、旦那のお蔭でかうして生きてられんだから、御機嫌取つて氣に入る方がいゝよ」

「御機嫌なんか私、取らないよ。若しも旦那に嫌はれたら、勝ちやんどうかして呉れなくつて」と、目元に媚を含んだ。

「どうかしやうたつて、僕は駄目だなあ、お金なんか一錢もないもの」

「ぢや、一緒に死んでお呉れよ」

「あゝ」と、勝太は考へてゐたが、「僕、死んぢやつてもいゝなあ」と、口に力を入れた。

「さう、一緒に死んで呉れて。私嬉しい」

お國はさも悦しさうな顏をした。そしてその戯れの言葉を眞實にしたいやうな氣になつた。此方の死にたい時には何時でも死んでやらうと云ふ男のあるのが、何となく心を引立てた。そんな話をするだけでも心の慰めになつた。

「ぢや、勝ちやん、これからお湯を沸してお茶を入れるから、貴下お茶請けを買つて來て頂戴」

お國は「勝ちやんの好きなものを」と、銀貨を渡して、急いで買つて來させた。そして二階の長火鉢に炭を繼いで、埃のかゝつてゐる茶道具を拭ひ、勝太の歸るのを待遠しがつた。

（九）

その翌日、旦那の朝川からの手紙に、「會ひたいが、會社の用事が忙しくて、五六日行くことが出來ぬ」とあつた。怒つてゐる風のないので安心はしたものゝ、少しの小使錢もないのが不安心だつた。て、又いゝよしやの女房に頼んで縮緬の羽織を質に入れたが、最早外には質草にするやうな者が一つもない。冬物はすつかり流れてしまつたさうだ。女房に意見されて、無駄費ひを愼むやうに自分でも心付いたが、歸り途に松坂屋の前を通つて、意氣な浴衣地が目につくと、もう素通りは出來なかつた。そして買つて來た反物を仕立屋へやつて、その仕立上るのを待遠しがつた。

朝は日の差込むまで、眠るでもなく寢てゐて、起きると、四疊半の拭掃除と飯事染みた副食物拵えをするのが一日の仕事の凡てになつてゐる。譯町へ來てから滿二月、三日目五日目に朝川が遊びに來る外は、手持無沙汰に日を送つた。過ぎ去つたことを繰返し〲考へては氣を腐らせてゐた。その當座こそ、

鈴木から居所を晦まして、付纏はれなくなつたのに、稍心も輕くなつてゐたが、次第に退屈で溜らなくなつて來た。三四ヶ月前まで世話になつてゐた品川の質屋の隱居とは異つて、朝川さんは獨身ではあり、氣立も面白いけれど、その代り先々の當ては不確かでならない。歳が若いだけにお金にも不自由してゐるらしいから、何時手切れ話にならんとも限らぬ。と、折々は取越苦勞をもした。品川にゐた時分に始めた三味線の稽古をもつと續けやうかとも思つたが、何時まで此家にゐるか分らぬので、そんな氣にもなれなかつた。

半日も火の氣のない長火鉢の側に寄掛つて、音も立てずジッと座つてゐると、階下の女房が階子段の中途から「姉さん、また鬱いてるんですか、お茶でも入れますから、お話に入つしやつい」と、聲を掛けるのが極りになつてゐるが、お國はそれを煩さがつた。二度に一度は階下へ下りて、茶請を奢つて、近所合壁の噂をも聞いて、調子を合せて笑ひ興じもすれど、女房のガラ〳〵した話振りには何時も氣持を惡くした。馴々しく人を見下したやうな口振も厭だつた。

だが、女房のゐない折には、屢々勝太を二階へ呼んで、小聲で流行唄を敎へたり、冗談口も利いたりする。「勝ちやんはどんな女が好き」「私のやうなんぢや厭」などゝ云つては、勝太の耻かむのを見て悅しがつた。

或夜も胸苦しくて、頻りに苦い唾を吐いてゐると、勝太はその脊を擦つて介抱した。そしてお國が首伏になつて何時かウト〳〵してゐる間に、ツッと手を胸元に當てた。生れて初めて柔かい肌に觸れた。

「胸を押えて頂戴、其處が閊えるやうだから」と、お國は氣付いて目を醒まして云ふと、勝太は顔を背けて、指先に力を籠めた。

「勝ちやんの手は大層慄えるのね」お國は顔を上げて、冷かすやうな目を向けた。

その翌日、眞晝の暑さ盛りに、朝川が浴衣掛けて遊びに來たが、勝太はその目を避けるやうにした。

荒々しい足音をさせて二階へ上つて、朝川はいきなり、汗の流れてゐる肌を脫いて、「おれもこんなに痩せちやつた」と、浮上つた肋骨を撫でた。お國は濡手拭を絞りながら、

「私も目が窪んだでせう、病氣したから」

「女の夏痩せはいゝさ。男の夏痩は見すぼらしいけど」

「でも女だつて、痩せるのはいゝ氣持はしないわね、私、鏡を見る度に心細くなつてよ」

「歲の加減で仕方がないさ。いくらお前だつて今に艶がなくなるぜ」

「いやですよ貴下、そんな心細い事を云つて」

「だつてそれが事實だもの」

「私、そんな事實なんか聞きたくない」

「おや、お前も女だから、矢張お世辭が好きなんだね」

朝川は無雜作な口を利いたが、お國はその言葉の裏に彼れの心を讀んだ。あれでまだ私には思ひを寄せてゐるんだと思つて、心を安めたが、その人の此頃の懷工合や家の事情を竊かに搜りたくて、

「此家は北が塞がつてるから暑いでせう、風通しが惡くて。何處かもつと冷しい家へ越しちやどう？、先日よしやへ貸間を氣をつけて呉れつて頼んどいたの」と訊いた。

「さうか」と、朝川は氣乘りのしない返事をした。

「成べくなら小さい家を一軒借りた方がいゝのよ。こんな所にゐて洗濯まで人に頼むやうぢや却つて不經濟だわ」

「だけど、洗濯なんかして、その柔かい手を荒らしちや詰らないぢやないか。經濟を考へるやうな柄でもないのに」

「さうね、私、所帶持が下手だから駄目ね。どうせ人の妻になる資格はないわね」

「其處がお前の價打だよ」

「だから、ほんの一時の玩具にされるばかりなのね。……あゝ／＼詰らない」と、お國は持前の哀れげな口振で云つた。そして大儀さうに身を起して、朝川を緣側へ追ひやり、手拭を被つて、埃でザラ／＼してゐる部屋の中を拭掃除した。箒を持つた手には力が入らない。白くなつてゐる机や茶箪笥や緣側を氣の濟むまで拭ふには、幾度か手を休めて溜息を吐かなければならなかつた。

掃除が濟むと、朝川は部屋の眞中に寢そべつて、廂越しに、燃えつきさうな隣りの屋根を眺めてゐた。お國は髮を結ひに行つた。そして歸りには魚屋へ廻つて、刺身を誂えた。煙草や水桃をも買つて來た。

「今日は泊らないで歸るよ、明日早く用事があるんだから」と、朝川は座敷焜爐に火を起しかけてゐる

お國を尻目に見た。

「歸る〳〵つて、自慢さうに云はないて下さい。私聞くたんびにビク〳〵するから」

強い光は椽側から離れて、部屋の中も涼しげに見え出した。お國は珍らしく身體を働かせて、腹の空くのを覺えた。團扇て風を呼びながら、食卓の前に寛やかに座つて「一人ぽつちて御飯食べると心細くなつてよ、晩御飯だけでも毎日貴下が食べに入らつしやるといゝ」と、云つて、心でもさう思つた。

「姉さん」と、階下から勝太の呼ぶ聲がした。お國は箸を置いて、階子段から覗いたが、誰れか訪ねて來た者があるらしいので、コツソリ下りて行くと、玄關にはよしやの女房が立つてゐる。その顏が不斷とは異つて、いかにも無愛相らしいのに、胸騷ぎがされて「何か用事があつて」と、小聲て訊いた。

「今日鈴木さんが來たよ」と、早口に囁いて「居所は大抵見當がついてるから、近日乾度搜し當てるつて」

お國の胸は早鐘のやうに打つた。「そしてどんな身裝をしてゝ。襤褸を着てるてせう」

「さうてもないよ、洋服を着て新しい麥藁帽子を被つてたよ。此頃は仕事が出來て食ふにも困らないから、貴女も安心して下さいつて、私にさう云つて、氣樂さうな風だつたよ」と云ひながら、女房は帶の間から手紙を出して「次手があつたら、これをお國に渡して呉れつて、私の家て書いて行つたの」私決して居所を云はないけど、お前さんも用心して見つからんやうにおしなさい」

女房はそれだけて歸つた。お國は足が地につかぬやうてあつた。二階へ上ると、氣が遠くなつて耳が

鳴つた。

「どうしたんだ、眞蒼になつて」と朝川が驚いて訊くと、お國はホロ／＼涙を流した。

「私にはいろ／＼の秘密があるんですから……貴下(あなた)にもこれつきりお目に掛れないかも知れない」

「何故(なぜ)？惡い男でも隨(つ)いてるんかい」

「さう！貴郎(あなた)愛想が盡きたでせう」

お國は首を傾げ、頤に手を當てゝ斜に男の顏を見た。

「今日その男がどうかしたのかい、譯を話して聞かさないか」

「私、譯なんか話したくない」と、封をも切らない手紙を食卓の上に置いて、「私、自分でこの手紙を讀む氣になれないから、貴下(あなた)讀んで御覧なさい」と云つて、中にどんな事が書いてあらうと構ふものか、どうせこの人とも今日限りの緣だと自棄(やけ)に思詰めた。

青い封筒に小村お國殿と筆太く力強く書いてある。朝川は始めてその女の本名に氣付いて、暫らくお國の顏と、その封筒とを見比べて、「お春といふのは世を忍ぶ假の名か」と、目元に冷笑を湛えた。

お國は無意識に手を伸してその封筒を奪はうとしたが、もう甲斐のないのに氣付いて、「名前なんかどうだつていゝさ、時と場合で自分の勝手な名を付けますさ」

「だけど、あまり幾つも名前を持つてると、自分の名を呼ばれても他人のやうな氣がするだらう。どうも初めの間(うち)春ちやんと云つても、ぼんやりしてることがあつたよ」

朝川はそれだけでも、この女の前生も透視した氣がして、興を起した。裁判官が證據物件を調べるやうな心持て、封を切つて嵩張つた卷紙に注意の目を向けた。「御身に卒氣なく別れてより、雨の日風の夜、一日とても面影の忘らるゝ暇なく、何事も手につかず、打悄れて日を送り居り候。せめて酒でも飮んで詩を晴さんかとも存じ候へども、御身の嫌ひな酒を口にすると思へば、杯持つ手も心苦しく候。」

朝川は聲を出して一息に讀んで、「中々字が巧いね、文章だつてさう拙くはない」と云ひながら、その次の感情を誇張した數節の文句を默讀した。お國は顔を背けながら耳を澄して、折々手紙の方を竊見した。

「……小生も數日前より▲▲會社へ奉職いたし、最早衣食の費には窮せざることゝ相成り候へば、幸に安堵なさるべく候。御身には此迄さまざまの苦勞を掛け候が、今はその心配も消失せたれば、一日も早く御身と以前の如き睦じき生活に立歸ることをのみ希望いたし居候。御身と小生との關係はとても他人の窺知る所にては無之、幾度か仲違ひをして、放れ放れの境遇を經來るとも、一朝一夕に相別るゝ如き淺き縁とは覺えず候。されど小生が如何に慕へばとて、御身が小生に對して些しの情愛をも抱かざるに於ては、何とも致し方なく候へど、兎に角今一度お目に懸りて、とくと衷情を吐露し、御身の心底をも承りたく候。都合にて只の一二時間或はほんの十分間五分間にても滿足いたし候ゆへ、是非小生の切なる願を叶へて、面會被下たし。指圖通りに何處へでも罷出て相待ち申べく候。若し御身が再び小生と同居して苦樂を共にするの心毫末も無之とならば、快く別れの杯にても酌みかはして、小生は他の婦

人を娶り、御身とは兄となり妹として交際を結びたしとも思居り候。それもこれも厭はしく一切無緣の人となりたしとならば、小生も涙を呑んで諦め申すべく候。逃げ隱れして何時までも決着致さゞるやうにては、御身も絶えず心懸りとなるべく、お互ひに寢醒め惡しき次第に候。くれ〳〵も今一度面會いたさるやう願上候。よしやの妻君を面會の座に加へてもよろしく候。――心亂れて思ひの萬分一も述べがたし、只會ひたしとの一念に迫まられてかくこそ。折返して返書賜はりたく候」

「神田の▲▲會社内とあるぜ」と、朝川は手紙を巻きながら、「から云はれゝば、お前も會はない譯に行くまい」

「そんな優しさうな事を書くのが、あの男の何時もの手なんですよ」

お國は今にもその男が來るやうな氣がして、玄關の物音が絶えず耳に障つた。「ひよつと貴下に御迷惑が掛ると惡いから、早く歸つて下さい。私一人だとどうなつたて構はんから。もう貴下には一生逢へないんだ」と、さう決めてしまつて、食卓の上に首伏した。

朝川は手盛りて緩々飯を食ひながら、根堀り葉堀り訊いて見たが、碌に返事をしない。バケツに水を汲んで緣側へ持つて來た勝太は、二人の樣子を怪しんで、見返り〳〵下りて行つた。寄席の鳴物が聞え出した。晝間の風は次第に靜まつて、電車の音は際立つて喧しい。暫らく柱に凭れて、薄暗い中で煙草を吸つてゐた朝川は、身を起してランプを點けた。その光に目醒めたやうに、

「貴下、私を不人情な女だと思はないて頂戴。私誰れにても不人情な事をした覺えはないんだから」と、

お國はその青い顏を上げて「突如に云つた。激動した感情は稍々鎮めて、心細い、誰れにても縋りつきたいやうな氣になつてゐた。「貴下後で惡く思はないで頂戴」と、幾度も確めた。

「さう一人で泣いたり騷いだりしてゝも、おれには些とも分らない。兎に角當分此處にゐて、自分で方針を考へたらいゝぢやないか。おれは今の事を聞いたつて、今直ぐお前を棄てやうとは思はない」

朝川は氣拙い思ひをしてゐたが、わざと泰然として云つた。お國はそれを手頼ありげに見て、何時までもこの人を離れたくなくなつた。急に顏の亂れを直して、寂しい微笑を浮べて、「私、一寸した事で、直ぐ世の中に生きてられんやうな氣になつてしまうの。今も二度ともう貴下にお目に掛れんやうに思はれて、鈴木が怖いよりも、その方が餘程悲しいの。外に誰一人手頼りになる人が、私にはないんですからね」

「ぢや、この家でその男に見つかりさうなら、早く外へ移つたらいゝ」と、朝川は事もなげに云つて、「手紙の樣子から見ても、鈴木と云ふ奴、さう分らず屋ぢやなさゝうだ。相當に教育もある男らしいがなあ。お前の方でも弱點があるんだらう、多少不忠實な事もしてるんぢやないか」と、相手の目顏や言葉付に注意して、隱れたる意味を讀まうとした。

「貴郎、そんな女と思つてゝ。私、そりや鈴木のためには盡したのよ」と云つて、お國はその盡した一例をあれかこれかと選出さうとした、「あゝ、今思つても情けなくなる」と、胴震ひして、「私、鈴木を迎へに吉原へ行つたことがあつてよ、大晦日前で北風がヒユー／＼吹く日に、着物や羽織を質に入れてや

う／＼拵えたお金を持つて、方角さへ分らないのに、人に聞き／＼して其處まで行つたの。極りが惡いし、恐ろしいやうな氣がして、その家の前をウロ／＼してる間に、心細くなつて泣出しちやつたの。泣いてる所を其處の人に見つかつて、譯を話して二階へ上ると、花魁や叔母さんが、いろ／＼に勞はつて呉れて、可愛さうだつて、皆なして涙を零したのよ。私、その時十六だつた」

その聲音までも、十六七の小娘らしくして話した。そして朝川の心よりもお國自身の心に、幼々しい小娘が粗末な着物を着て、あの華やかな世界に男を訪ねて行く樣が哀れに浮んだ。

鈴木から質置く術も學んだ。花を引く術も學んだ。「そんな下等な事はしたくないと思つてる中に、何時の間にか覺えちやつた。だけど、私これから先生きてる間は、潔白な高尚な日を送りたい。卑しい女になり切つて死になくはないわ」

「今更高尚な女で澄ましてるよりや、いつそ高橋お傳見たいになつて、毒婦お國の墓と棺桶の上に書かれた方が面白いぢやないか。まだ人殺はしたことはないんだらう、戀しい男のために着物や指環を質に置く位が關の山だらう」朝川は意地惡さうに云つたが、「しかし、おれはお前が好きだよ、當分世話をしてやるから、ビク／＼しないで安心しといて」と、親切らしくも云つた。

お國はそれには返事をしなかつたが、稍々あつて「私、今日貴郎をお家まで送つて行く」と、屹とした顏をして云つた。不斷から夜を恐ろしがつてゐるのに似合はず、深く決心して、十時近くに朝川に隨いて戸外へ出た。三丁目の角で電車を下りて、あまり話をしないで、二人は靜かに歩んだ。涼みがてら

散步してゐる人はまだ多い。夜店もまだ並んでゐて、饌賣の高い聲が響いてゐる。薄暗い人氣疎らな所に盲人が尺八を吹いてゐる。お國はその盲人の顏を顧みて、十錢か二十錢施したい氣がした。

「千駄木まではまだ餘程の道だぜ。もう歸つた方がいゝよ」

追分の淋しい通りまで來ると、朝川は命令するやうに云つて、足早に歩き出した。

「えゝ」と云ひながら、お國は苦しい息を吐いて、遲れぬやうに足を運ばせた。壽町の宿は忌まはしくなつて、今夜は其處に宿りたくなかつた。でも知らない道ですげなく別れるのも堪へがたかつた。

次第に道は薄暗く、戶を鎖した家が多い。所々の軒燈の闇を照らすのが却つて寂しかつた。世を狹められた落人のやうに、お國は自分達の事を思つた。二人の下駄の音が耳に響いて、行違ふ人影が何となしに胸を騷がせた。

「此家がおれの家だよ」と、朝川がふと立留まつたのに吃驚して、夢から醒めたやうに其處を見詰めた。竹籔を後にした、門構の住善さゝうな音のしない家を見詰めた。「內へ入つちや惡いか知らん、誰れの目にも掛らないで、こんな家に住みたい」と思ひながら、男の氣を兼ねて、それは口に出さないでゐると、

「ぢや、お前は俥に乘つてお歸り。俥屋まで連れてゝやる」と、朝川は膠もなく云つた。そして引返して寢鎭まつてゐる俥屋に聲を掛けた。軒下には澁團扇で蚊を拂つてゐる婆さんと、肌襦袢一つの女房とが立話をしたが、その婆さんが裏口へ廻つて呼起して呉れた。

「ぢや、都合てあの家を引越してもいゝよ。鈴木の事件がどうかなつたら知らせてお呉れ」と、言放し

て、俥の仕度のまだ整はぬ間に朝川は振返りもせずに歸つてしまつた。

「何てあゝ戀を解しない人だらう」お國はグッタリ疲れた身體を俥に靠せ掛けて、さう思つた。大學の前には夜店が疎らになつて、尺八の音は消えてゐる。

（十）

二三日は玄關の物音を氣にして日を送つた。魚屋や鳥屋へも勝太に頼んて、自分は成べく外へ出ないやうにした。そして哀れを訴へるやうな手紙を苦心して書いて、居所の分つてゐる諸方の男へ送つた。品川の老人へも、河津へも、朝川へも。厭て〳〵溜らなかつた神田の通番頭（かよひばんとう）へも人懐しい手紙を遣つた。だが、待つてゐても誰れからも返事が來ない。手紙の文句の拙いのかともどかしがりもした。誰れにも顧みられぬかと思ふと、一日が徒らに長くて暮しかねた。

或日階下（した）には天理教の先生が來て、三四人近所の婆さん達をも招いて、講釋を始めた。女房（かみさん）が物知顔に先生の後について御利益を說いてゐる。お國は階子段に腰掛けて、退屈醒ましに皆なの話に耳を傾けた。教祖お光が十三の時發心して、慾も得も棄てゝ、只管人のため教のために一生を捧げたことが、爽やかな口調て述べられてゐる。

「日本の人間は皆天照らす天照皇大神様の氏子ぢやて、何よりも崇め奉らねばなりません、私の國の伊勢てはお祭にこぼれ松葉に棲折笠て踊るのぢやが、あれも鈿目（うずめ）の命が天の岩戸て踊つたのが基なのぢや。皆な大神様をお喜ばせ申さうと思ふからて、この教て踊るのもつまりは同じ道理ぢやぞな。なに事も天

の理に叶はねばなりません。人間の心の中は、それ、すつかり天の鏡に映るから隠さうたつて隠されん」と、女房も粘つこい口調で鹿爪らしく說いた。婆さん達は殊勝に相槌を打つてゐる。

お國は屈んで隙間からソッと階下を覗いて見た。羽織袴で上座に控へた男は熱さうな目をパチ〳〵させ、頻りに扇子を動かしてゐる。揃ひも揃つて薄汚い婆さんが居並んでゐる。一人の婆さんの頭の眞中がチカ〳〵光つてゐるのが、上から見下された。一人は話に感じたのか、顔で拍子を取りながら聞いてゐる。椽側には勝太が行儀よく坐つて、一座の人を見廻してゐたが、お國は竊かに彼れを手招きした。二度三度繰返した。

やう〳〵それと氣付くと、勝太は笑顔をして、足音を忍んで二階へ上つて來た。

「貴郎、天理敎好き?」お國は小聲で訊いた。

「ウヽン、僕は大嫌ひさ、あんな迷信は無敎育な奴のすることだ」

「だけど面白さうね、天理王の歌は。勝ちやんはよく知つてるんでせう。一つ其處で手踊りをやつて御覽なさい」とお國は見覺えの妙な手付をして「かうやつて踊るんでせう、私三味線を彈くから、其處で天理王の命をやつて御覽なさい」

「ぢや、僕やつて見やうか」と、勝太は階子段の方を顧みてから、母の身振りを眞似て踊りながら口の中で唄つた。階下からは厳かな拍手が聞える。お國は久振りに三味線を卸して出鱈目に彈いた。勝太は面白がつて同じ身振を繰返し〳〵したが、次第に調子に乗つて歌ふ聲も高くなつた。三味線の音にも勢

ひがついた。

お國は自分の彈くその亂れた音に惹込まれて心も同じやうに亂れた。根の盡きるまで唄つて踊つて、馬鹿騷ぎをして見たい。打つなり殺すなり勝手にしろと、誰れかに向つて啖火を切つて見たい。

「勝ちやん、お酒を飲まうか、河内屋から二三合取つて來てお呉れよ」と、撥を下に置いて云つた。

「誰れが飲むの、姉さんかい」

「あゝ、私、氣がくさ〱するから一人でお酒でも飲むんさ、いゝ子だから買つて來てお呉れよ。私に親切な男は世界に勝ちやん一人だから」

「本當に飲むの」と、勝太は怪んで目を丸くしたが、それでも否みかねて、素直に言付に從つて出て行つた。

階下の連中は何時の間にか歸つたらしく、聲も音もしない。長屋から浪花節語りの單調な眠を促すやうな稽古聲が、埃と油煙の滲んだ生温い風に吹かれて來る。お國は顏を歪めて自烈體さうに頭を振動かした。そして三味線を手にして、幽かな爪彈きで思出し〱、品川で習ひかけた端唄を口の內で唄つた。手先は覺束なくて幾度か行詰つた。上目を使つて考へ〱彈直し〱たが、思ふ壺に嵌まらない。

「……月は野末に草の露、チチンチチリンツ」と、調子外れの不快な音が響いた。で、自分に愛想を盡かして、三味線を後の方へ荒々しく推のけて、怠い身體を伸した。「何が何して何とやらあ」と、長屋てはまだ飽きもせずに、同じ事を煩さく繰返してゐる。その屋根に烏のやうな鳥の止まつてゐるのが、朧

越しに見える。何事が起つたのか、子供等の鬨の聲がして、路次の彼方へ驅行く足音が騷々しく聞えた。

「姉さん、取つて來たよお酒を」と、勝太は罎詰を前に突付けた。

「私、もう飲みたくなくなつた」と、お國は淡黄ろい酒の色を見詰めたゞけて、もう逆吐きさうな氣持になつた。「勝ちやん、其處に座つといてよ、階下へ行つちや厭」

ろくに話もしないで、二人は日暮頃まで其處にゴロ〳〵してゐた。

（十一）

二三日、折を見ては勝太を相手に自墮落な話などして日を送つたが、勝太に離れると、俄かに萎れかゝる。遣る瀬ない思ひに惱まされる。男氣を離れて、尼のやうに一生を清淨潔白に過さうかと、氣まぐれに思ふこともあつた。

ても續けざまに、二度三度朝川や河津へ手紙を出した。河津からはよしやを經て返事が來たが、これて見ると、その人は故郷の和歌山へ歸つてゐる。夏を此處で過したらば、一度東京へ上つて、それから九州の會社に奉職するかも知れぬ、緣あらば上京の際お目に懸り申べし。兎に角わが愛する御身のことなれば、日々幸福を祈らぬ日とてはなしと、情のありさうな心細いやうな事を手短かに書いてゐる。そして町名や番地は、封筒にも手紙の端にも記してゐない。

お國は幾度も繰返して、男の心を讀まうとしたが、「緣あらば」といふ言葉が、考へれば考へるほど、冷淡に感ぜられた。もう會はんつもりか知らんと思ふと、心細いよりは腹立たしい。男に厭がられるよ

りは、此方から男に愛相づかしの文句でも云つてやつた方が氣が利いてゐると思つて、筆を執つて手を震はせながら、二三行書いて見たが、書いてゐる中に、激した心が緩んでしまつて、手紙など書いてゐられなくなつた。邪慳に卷紙を丸めて口で嚙占めて、其處に俯伏しになつた。

「人を馬鹿な、厭なら勝手になさい。貴下の方で世間の口が怖かつたり、出世の邪魔になるのを心配なさるんなら、私の方でも何も追掛けはしません。貴下は大人しい奧樣でも早く貰つて長生をなさい」と、面と向つて言つてやりたくつて溜らなかつた。世間の義理に迫られて、別れともないのに別れても、互ひに心の中では忘れる暇もないほど思ひ思はれてゐればこそ、せめてもの心遣りとなるのだが、男の心に自分の影が薄くなつてゐると氣付くと、立つても坐つてもゐられぬ氣になつた。

「燈火も點けないでどうしたんだい」と、その晩朝川が出拔けに入つて來た。

「私、氣分が惡いの」と、お國は哀れげに云つて、ランプを點けて、「貴郎はもう來ないのかと思つてよ」

「でも、お前はよく辛抱出來るね、一人此處にゐて。一人で昔の事なんかを考へるのが、一番好きだと云つてたけれど、もう考へ事にも飽いたらう、勝公を連れて活動寫眞でも見に行かうか」

「いゝえ、私外へは出たくない、芝居だの活動だの些とも見たくないわ、人混みの中は恐ろしいやうで嫌ひ」

「それ程小膽でもなさゝうだが」と、朝川が笑ふと、

「私、これで秘密の多い女ですからね」と、お國は過去の自分を心の中で燦めかせて、さながら重大な

秘密でもあるらしく思過して、「だから私、外の人のやうに面白さうな浮いた氣になれないのよ、キャッ〳〵云つて笑つてる人を見ると癪に觸つてよ。」

「若い癖に妙だね」朝川はお國の神經の顔中に動くのを見た。

彼れはよしやの周旋て、何の氣なしにこの女を此處へ置くやうになつてからも、會社の歸りに氣紛れに立寄るばかりだつた。誰れといふ當もなく、不意に色町へ寄つて偶然に見た女に對すると同じやうに、この女にも對してゐたが、この二三度はさうばかりでもなくなつた。何かしら心に蟠りを殘され出した。口數の少くぼんやりしてゐた以前とは異つて、身悶えする樣のチラつくのが、彼れの心にも響いて來た。その手痛い所を針でつゝいて見たくもなつた。

「だつて鈴木さへゐなくなれば、お前は苦勞はなくなるんだらう。さうすればその男を殺すか殺されるか、何處か極りをつけたらいゝぢやないか。逃げ隱れして心配ばかりしてる中に若い盛りは過ぎてしまうぜ。」

と、朝川は煽れるやうに云つたが、お國の心には四五日前とは異つて、鈴木の恐ろしさが、大分薄らいでゐた。一刻も早く此處を逃げねばならぬ程に思つてゐない。

「たとへ鈴木がゐなくなつたつて、私もう駄目」と、投げ出すやうに云つた。

「この世に愛想が盡きたのかい」と、朝川は茶箪笥の上の罐詰に目をつけて、「酒があるやうだね」、

「貴郎飮まない？」、私、今日は少しくらゐ飮んでよ。醉つて云ひたい事がある―

お國は銅壺の中に銚子をつけた。男も女もこの部屋で酒を飲んだことがないので、食卓の上の杯洗や猪口を見ても異樣に感じた。酒の香の漂うのが、下戸の朝川の心をも惹立てた。飾のない淋しい部屋を賑かに見せた。二人の間にこれまでにない親しみをも加へた。酒の道具は品川の老人の晩酌に用ゐたもので、外の間に合せの安物の世帶道具の中では異彩を放つてゐる。猪口は深く見えて底が淺く、底には不思議な女の姿が描かれてゐる。朝川はその繪を見てから、まだ生溫い酒を一息に呑んだ。お國は顔を顰めて鼻を押えて、二三杯グイ呑みをした。苦しさうに息を吐いて、身體を崩したが、しかし顔には色が現はれない。

「强いね、僕よりや强い」と。云つて、朝川は直きに眞赤になつて肱枕で横になつた。

「男の癖に弱いのね、貴郎は甲斐性がない。私は自分で飮まなくなつて、酒呑の相手ばかりして來たんですからね、自然に傳染したのかも知れない。」

お國の音色は酒氣を帶びた。手酌で有りたけを飲んでしまつて、「貴郎、私を棄てない？」と、目を据ゑた。

「棄てたらどうするんだい」

「どうもしないさ、私、今夜直ぐ出て行くの。厭だと云はれて、何時までも喰付いてるやうな私ぢやないんですからね」

「ぢや、棄てなかつたら」

「それなら、來てないといふ證據を見せて下さい。口ばかりぢや不安心だから。」
「ぢや、證文でも書くんかい。何年何月までと期限を極めて。それに血判でも捺さうか」
「血判て血を出すの」お國は血と聞いて氣味惡がつた。
「それを怖がるやうぢや駄目だね。昔の女は小指を切つたり、血で誓紙を書いたりしたんだよ。あらゆる神樣に誓つて、若しも背いたら如何なる罰を受けて、未來は奈落の底に沈まうともと決心するんだから確かだね」朝川は調子づいて云つた。
「そんな昔風の事は厭だわ」
「ぢや、今風の起誓はないもんかね」
お國は眞面目に考込んだが、そんな者は容易に思當らなかつた。話は自から外へそれて、「私、もう誰れの云ふことも信ぜられない。貴郎の有仰ることだつて、信じちやゐませんよ」と、力を籠めて云つたが、やがて情を含んだ作り聲をして、「かう思つてよ私。戀した時には、早く二人で思切つて心中でもした方がいゝと思つてよ。何時までも生きてれば、その中に何方かゞ厭になるんだから、それよりや飽きも飽かれもしない中に、二人で仲よく死んぢやつた方が、いくらいゝか分りやしない。……貴郎さう思はない。……私、本當にさう思つてよ。あの時に死ねばよかつたのにと、今日もつく／＼さう思つたの。貴郎にこんな話するのは濟まないけれど、私、三四年前に惚れた男が一人ありました。その男も私に惚れて居りました。會つてゝはその人の身が立たないやうな破目になつたから、私の方から緣を切つて上

げることに極めて、二人で池の端を歩きながら、別れ話をしました。その時その男が別れちや生きてられんから、いつそ死んで呉れつて、私の手を握つて泣いたの」と云つて、その時の事を芝居でゞ見てゐるやうに感じた。一生に又とない見せ場は思返す度に、人に話す度に哀れさ樂しさの彌增したが、それと共に技巧も次第に加はつた。自分の心の中でも最早虛僞と眞實との差別のつかぬほどに、事實が潤色されてゐる。

朧月夜に寄りつ離れつ觀月橋を渡つた。夜汽車で人に知らない遠い山の中へ行つて、生きられるだけ生きてゐて、最後に谷川へでも身を投げやう、煩い世間の音のしない所に心のまゝの戀を樂んでから、濁り氣のない谷水に二人の死骸を沈めやうと、男が云つて、私もさうしたいのは山々だつたけれど、行先永い男を見す〳〵殺すのが痛々しくてならないから、つらい我慢をして、私一人犧牲になつて別れて上げた。

「だけど、男といふ者は、三年も立てば前の事なんか忘れちやつてるわね」

「どうだか。それからその男に會はんのかい、偶にや會つてるんだらう」

「私、此處へ來てからもその人に會つてると貴郎思つてゝ。居所さへ分らないんだわ」

「可愛さうだね」

朝川の聲は皮肉らしく聞えたので、お國は折角興に乘つてゐた話の先を折られた氣がして、

「貴郎といふ人も信用出來ない人らしいわね、私、もう誰をも信じない」と、食卓に品垂れかゝつて、

目を細く寄せた。それが馬鹿に色つぽく朝川の目に見えた。

「信ずるも信じないもないさ、かうして今夜此處にゐるんだから。明日からはどうなるか、何方だつて當てになりやしない」

「だから詰らない」お國はよろめいて、男の肱杖の側に頭を垂れて、「貴下はねえ、奥樣を早くお持ちなさい。今の中だといゝ奥樣が貰えますよ」と云つて、酒臭い息を吐いた。「私のやうな卑しい女なんかに關係しないで、いゝ所のお孃さんを貰つて仲よくお暮しなさい。人間はそれが一番幸福なんですよ……貴下さう思はない？」

「さう思はないね。男だつてお前のやうに氣儘勝手に世を渡つた方が面白いさ。その日〳〵の風次第がいゝぢやないか」

「そりや貴下がまだ夫婦の情愛を知らんからですよ。小さい家で貧乏暮しゝてゝも、世間晴れて夫婦で世帶を持つてれば、言ふに云はれない樂みがあるんだから」

お國は鬱陶しい氣持でさう云ひながら、次第に涙聲になつた。鈴木と世帶を持つてゐた昔が不思議に偲ばれた。近所の神さん達から奥樣と呼ばれてゐたのが懐かしかつた。だが、鈴木の邪慳な態度や厭らしい言葉も、其處に現はれて直ぐにそれを擾亂した。

暫らく二人の話が途切れてゐたが、不意に階子段から聲を掛けて、神さんが稻荷鮨を持つて來て、「今日はお珍らしいんですね」と、醉倒れてゐる男の顏を見た。

お國は吃驚したやうに顔を上げて、「お神さん、私、これまでお酒なんか飲んだことないわね。一度ぐらゐいゝでせう。何んにも好きで飲むんぢやないけど、お神さん察して下さい。貴女(あなた)だつて苦勞してるんでせう」と、云ひながら、神さんの方へにぢり寄つて、その足にからまつた。神さんは呆氣に取られた。

（十二）

その翌日、お國は珍らしく朝川を電車まで見送つて來て、一日重苦しい頭を煩さがつて、寢たり起きたりしてゐた。そして夕方になつて、つい假睡(うたゝね)の夢を見てゐたが、ふと目醒めると、疊の上に思掛けない朝川からの手紙が來てゐた。簡單な端書の外には、嘗て音信(たより)などあつた例(ためし)がないので、吉か凶かと、胸騒がせながら急いで開いた。「御身の事念頭に殘りて、今日一日忘れかね候」と、最先に走書きしてある。お國の顏色は軟いだ。「……僕もこれ迄とは異つて、親身になつて世話も致すべく候間、安心なさるべく候。御身の樣子を見れば、如何にも痛々(いた〴〵)しげにて氣の毒に存じ候。……明晩六時頃行く」と、卷紙の量張つてゐるのに似合はず、手短かに書いてある。

お國は悅しくもあれど、稍々飽氣なかつた。世話致すとか氣の毒に思ふとか云ふ言葉は、お國の胸を躍らすだけの力がない。河津の手紙朝川の手紙、蜜のやうな言葉や文字に飢ゑてゐるお國を滿足さすことが出來ない。何故もつと切ない戀の思ひを明ら樣に書かないんだらうと思つて、恐々(こは〴〵)鈴木の手紙を茶簞笥の引出しから取出して讀んだ。柔しい文字はその方に多い。行李に藏めてゐる古手紙の中から、河

律のを三四通搜出して見たが、あの頃のには、震ひ付きたいやうなのがある。人目を憚つてソッと手渡しする鉛筆書きの紙切れにも悅しい文句が溢れてゐる。

お國はあれから長い年月を送つたやうな氣がした。

翌日は髮を結うて化粧して待つてゐたが、朝川は約束の時間に遊びに來た。それから四五日殆んど續け樣に來た。お國は一人で淋しい懶い考へに耽ることも少くなり、食物の味もよくなつた。

「貴下此處へ越して來ちやどう？一緒に居ちやよくないの」と、或日座敷の焜爐に火を起しながら、振向いて云つた。

「來たいけど、僕にもいろ／＼事情があるから駄目だよ」

「事情といつて、貴下は貴下だけで勝手にどうにでもなるんでせう。私、これで一軒家を持てばさう不經濟の事はしなくつてよ。臺所にだつて、無駄な費えはしないわ、隨分貧乏世帶の經驗もしたんだから。――二階借なんかしてゝ、洗濯まで人に賴むのは本當に勿體ないと思つてよ。」

「さうだね、まあその中考へとかう」と、朝川は立つた話を避けて、「お前はそんな所帶染みた話はしない方が値打があるよ、男の話でもしてる方が似合つてらあ」と笑つた。

「そんな浮氣者に見えるか知ら」と、お國は襷を掛けた自分の姿を見廻した。

「何處か身體が弛んでるさ、もう元のやうにやならないよ」

「私、さう云はれるとゾッとしてよ。貴下だつて、ほんの一時の玩弄物にする積りなんでせう。皆んな

さうだ」と云ひながら、あの人もあの人も、河津さんだつて、今から思へば、矢張そのつもりだつたのだと、これは心で思つた。

「玩弄物にされたと思はないて、玩弄物にしたと思へばいゝ。僕なんか女に玩弄物にして貰ひたいものだね」

「そんな輕薄な事、私思つても厭だわ」お國はさも厭さうな風をして氣取つた。

八月一杯はかうして日が送れた。お國は頬が稍々肥えて艶も少しはよくなつた。これ迄厭がつてゐた出歩きもするやうになつて、勝太を誘つて活動寫眞を見にも行つた。朝川に連れられて宮戸座の夜芝居をも見た。一番目の妖術遣ひや立廻りは、芝居馴れぬ目には、譯が分らなくて馬鹿々々しい氣がしたが、中幕の實錄千代萩は見てゐる中に、涙ぐまれる程感に打たれた。自分の實の子に別れるといふことが、人間の哀れの極みと思はれた。

「私、昔の芝居はどれも時代おくれのやうて、見たいとは思はなかつたけれど、この芝居には人情が籠つてる」と、半巾で涙を拭ひながら、舞臺の役者の臺詞や仕草にも一圖に感心した。そして翌日は勝太を連れて、その幕だけ立見をした。

（十三）

三日續けて見て、その芝居にも泣飽いた時分、よしやから使を寄起して、直ぐに來て呉れと云つた。河津にしても鈴木にしても、親姉妹にしても、よしやの關所を經てのみ、お國と消息を通ずるので、お

國も自分に關係の深い世間を見るには、その家の閾を跨がねばならぬのである。

暫らくウカ〳〵して忘れてゐた世間を思出して、よかれ惡しかれ樣子を知りたくなつた。

「お前さん、此頃はちつとも來ないね、いゝ事があると見えて」と、其家の神さんは、お國を見ると直ぐ冷かすやうに云つて、「お前さんが三月も一つ所で辛抱するのは不思議だよ。そんなに仲がいゝんかい」

フヽンとお國は鼻の先て笑つて、何とも答へなかつた。

「私、又國さんが厭になる時分だらうと思つて、いゝ口を捜しといたんだよ。急に見付けて呉れつたつて、さうあるもんぢやないからね」

「さう？」と、お國は神さんの垂れた餌に目を向けさうでもなく、「私、もうあの人きりで止さうと思つてるの。あの人と切れたら女中奉公してもいゝから、妾なんかになりたくない」と、手強く云つた。

「あれになるの此れになるのと、お前さんも隨分よく氣が變るね。だけど中野の方へももつと仕送りをしなくちや惡いよ、あの子が可愛さうだ。」

「いくら可愛さうだつて、親に懷かない子は仕方がないわ」

「だからお前さんは人情がないと云ふんだよ」と、神さんは笑ひながら「この人は好きな男さへ側にゐれば、外の事にや頓着しないんだから」

「ぢやどうすればいゝの」と、お國はムッとして、さも手向ひするやうに、「私、これから外の事に頓着するから、お神さん敎へて頂戴。私何にも知らないんだから」

「氣が短かくなつたね、お前さんも。もう怒つたのかい」

神さんは冷かしてしまつた。そしてお國の身装を見ながら、朝川から碌に手當もないんだらうと察して、「凉しくなつても大丈夫なの」と訊いた。此頃入れるばかりで出したことのない質物は通帳に珠數繋ぎになつてゐる。二三年苦勞していろんな男に拵えて貰つた者を、ムザ〳〵流してしまうのは勿體ないぢやないかと意見した。

「着物なんか何時だつて出來るさ」と、お國は例になく冷淡に答へた。そして今夜或男に一寸顏を見せてやつて呉れ、近くの洋食屋へ來る筈だから、會ふだけ會つて洋食の御馳走になればいゝと、神さんに頼まれるのを、素氣なく斷はつて、聞きたかつた世間の噂をも聞かないで、サッサと歸つた。

「よしやのお神さん、まだ私を利用しやうと思つてるんだよ」と、憎さげに云つて、朝川に向つて有のまゝにその譯を話した。同情を求めるやうに訴へた。

だが、朝川の耳には、それが打明けた親しい言葉としてのみ聞えなかつた。重荷を肩に懸けられるやうな氣もした。神さんの勸めを斥けて機嫌をそ害ねて、自分にのみ手頼らうとするお國の心議しを喜ぶよりも、こんな女の一身を引受けるのが煩さく思はれた。それにこんな女の云ふ事が當てになるものか、何か企んで男の氣を引いて見るのかも知れんと疑はれもした。が、表面にはそれと顯はさないで、

「だけど、よしやを怒らさない方がいゝよ。あの神さんは、お前を實の娘のやうに可愛がつてるんだし、いろんなお前の秘密もあの人にだけは分つてるんだから」と、柔しく諭した。

「さう思へばこそ、私も隨分あの人の御機嫌を取つて來たんだわ、あの人だつて私のためには餘程利益してるのよ。この上利用ばかりされてちや切りがない」

「だけど、意地惡く出てお前を利用しやうと思へば、あの神さんどんな事をするか知れないぜ、親切さうだけど當てになりやしない。お前の事をおれに吹聽した時だつて、そりや口先が甘かつたからね」

「凡てがさうよ」と、お國は同意したが、さう思ふと、よしやに自分の生死の鍵を握つてゐられるやうな氣がして恐くなるので、「だけど、あのお神さん、さう惡い人ぢやないの」と、自分の迷ひを打消さうとした。

その夜お國は落付いて眠られなかつたが、目醒時計を枕許に据ゑて、不斷より早い朝川の出勤時刻に遲れぬやうに、早くから起きて甲斐々々しく朝飯の仕度をした。そして止められるのに強いて電車まで見送つた。朝風は浴衣一枚の肌に薄寒く浸みた。正午時分からは小雨さへ降出して羽織でも引掛けたいほどで、假寢の足の先は今迄に覺えない冷たさを覺えた。もう秋になつたのだ。秋といへば着物の事が、何よりも先づお國の心を奪つた。古物で間に合すにしても、今の中に質屋から出さなければ、洗張りにやるにも手遲れがする。

「急に涼しくなつて心細く候」と、その夜朝川へ宛てて、手紙の後へ添書した。

朝川は何の氣なしに讀んで、「涼しくなつてその二階も住みよくなるだらう。障子を締める時候とならば、油煙の吹込まぬだけでもいゝ。お前の怖がる隣の馬鹿男に見られぬだけでもいゝ。家の庭には萩が

花を着けた。今度の日曜には百花園へでも行かう」と返事を書いた。

「何を着て百花園へ行くんだらう」と、お國は思つた。

(十四)

冷しい一日が心細い秋を知らせて、その翌日から又暑さが盛返した。二三日濁つた西風が吹きまくつて、息をするにも苦しかつた。晴れた空も黄ろくて、何處を見ても埃が立迷うてゐる。二階は折々風に揺られた。お國は二階にジッとしてゐられなくて、階下へ下りて、不斷嫌つてゐる神さんのがさつな話の相手になつた。「私事、この頃の時候に息のつまるやう覺えられ候が、御許樣には御無事にや、今日にも御出あるやう御待申候」と、亂れた文字で朝川へも書送つた。だが、朝川からは音信がない。遊びにも來ない。待遠しがつて追かけて二度も手紙を出した。「幾日も一人でこんな所にゐて日が送れると思はれますか、私にはそんな辛抱氣はありません。階下の神さんの氣の利かない伊勢訛ばかり聞かされてゐるので、頭が痛くなりました。あの馬鹿が今日も二階へ小石を投げつけました。よしやは怒つてるのか、あれから音信がない。あゝ私は淋しくて仕方がありません」と、二度とも同じやうな事を書いた。

「僕は社用にて多忙を極め居れば、當分其處へは行くことかなはず候」朝川の返事は端書て簡單だ。

お國はそれを一目見たばかりで、一圖に欺かれたやうに思込んで、顏色も蒼くなつた。忙しいたつて、此間まではあれほどせつせと來てゐたものを、一寸も立寄れないほどに毎日用事のあらう筈がない。と、直ぐに、「男には忙しいといふ事が、どんな口實にもなるから結構ですね。女にはそんな調法な言譯の道

がないから不便ですよ。忙しいあなたは何時までもお入らつしやらなくてもよろしい、御勝手になさい」と、ツケ〳〵書いた。そして夢中てポストへ馳付けてそれを投入れたが、手紙がポストの底へ落ちる幽かな音が強く胸に響いた。もう取返しのつかぬことをしちやつた、よくも考へなかつたから、どんなはしたない文句を書いたかも知れない。と歸る途々案ぜられた。

二三日掃除を怠けてゐたので、部屋の中は荒れてゐる。外から歸つて見ると、汚れ目が著しく目立つた。だが、お國は身體を使つて其處等を整頓したり雜巾掛をしたりする氣になれなかつた。暫らくザラ〳〵する疊の上に身を横へながら、勢のない目て荒れた部屋を見てゐた。

赤い達磨の模様のついた湯呑が茶簞笥に伏せてあるが、あの出雲燒は河津さんが下宿屋て使つてゐたものだ。紅い柿の實が青い葉に抱かれゐる相馬燒の土瓶は、初めてよしやの世話て操を賣つた男の買つて來たものだ。その茶簞笥も用簞笥も鏡臺も、それ〳〵の由來を持つてゐる。

淺黄の袋に包まれた三味線は、別けて今お國の心を惹いた。母から下の姉に讓られたのを、三味線など手にする暇もない姉から更に貰受けたのてある。姉は少い時から音曲が好きて、母に手ほどきされて近所の師匠へも通つた。常盤津の稽古本が机の高さぐらゐあつた。「容色がお國さんほどだつたら、藝者になるといゝ」と、米屋の伯父さんが、姉の三味線を聽きながら、竊かに誰れかに話してゐたこともある。

「姉さんほど三味線のお稽古しとけばよかつた」と、お國はふとそれを思出した。

（十五）

その日正午過ぎに、よしやの神さんが訪ねて來た。何時ものやうな柔しいニコ〳〵した顔付して、機嫌を害ねてゐる風は見えない。お國が悦しさうに迎へて、「明日あたりお神さんの家へ行かうと思つてたの」と、お世辭を云ふのを耳にも留めず、「お前さんにも驚いたね、そんなに身體を臺なしにして。顔だつて頭だつて見つともないよ」と、坐るが早いか、押かぶせるやうに云つた。「今からさう色氣がなくなつちや頼もしくないね」

「私、そんなに汚くなつて」と、お國は頭に手を當てた。

「此頃は磨きが足りないから、前の國ちやんとは思へんやうになつたよ。本當に氣をおつけな。今からくすんでた日にや、どの位損だか知りやしない。」

「私、品川にゐた時分は、毎日のやうに髪結さんへ通つてたけど、此頃は煩さくつて」と、お國は言譯しながら、鏡臺に向つてつく〴〵自分の顔を見た。さう醜くなつたとは思はれない。でも氣に懸つてならぬので、

「これから髪を結つてお湯に入つて來やうかねえ、何だか氣持が惡くなつたから。……お神さん、今夜活動へでも行つちやどう？」と、ふと心を浮つかせて、「私、お神さんに話したいこともあるんだから」と云つたが、自分でも何を話さうとするのやら、まだハッキリ極らなかつた。

「今日は愚圖々々しちやゐられないの」と、神さんはもう立ちかゝつて、「今夜でも都合で遊びにお出で

よ。旦那は今日來ないの」

「來ないでせう」

その何氣ないお國の音色が、神さんの耳には不審を起させて、「どうかしたのかい、どちらかに厭な事でもあつたのかい」と問返した。

「さうでもないわ」と、お國は曖昧に答へて、「私、今夜行つてよ貴女の家へ」

そして神さんの歸つた後で、髮を結つて湯に入つて、久振りに念入りに化粧した。少しは元氣もついた。部屋の汚れてゐるのが今更のやうに目についた。足袋だけ買立ての新しいのを穿いて、爪立足して階下へ下りた。後でざつと掃除しといて呉れと勝太に頼んで置いて、久振りに俥に乘つてよしやへ行つた。

「珍らしいね、島田に結つて。よく似合ふよその方が」と、神さんは側へ寄つて、横からも後からも見た

「私、これでまだ價打があつて。お神さんは一目見たゞけて女の相場が分るでせう」と、お國はお目見えに來たやうに氣取つて坐つた。

「さうねえ」神さんは長煙管に煙草を詰めながら、横目で見て、「まあ小間使さはりとても云つた所だらうね、一寸身體が崩れてるけど、少し氣を付けてりや、處女で通れるんだよ。」と、戲談のつもりで云つた。

「だけど、そんな窮屈な思ひはしたくない」と、お國は飽くまで眞面目に考へて、「それに私、どうしても惡擦れがしないから、幾ら利益になつたつて、口先で厭な人の御機嫌を取れないのよ。さう薄情な眞似は出來ないしね」

「何時まで立つても腕がないね」と、神さんは笑ひながら、「だけど、本當はそんな腕なんかない方がいゝんさ。お前さんはもういゝ加減で堅氣になつた方がいゝんだよ、私は何時もさう思つてるんだけど、お前さんは直ぐに自棄を起すからよくない。」

お國は誰れでもそんな事を云ふと一口にけなした。一時凌ぎだと思へばこそ、どんな男とでも一緒になつてゐられるものゝ、戀ひしくもない男と、何で一生の縁を結ばれやうぞと、不斷の信仰を力強く述べた。神さんは輕く聞流して、

「ぢや、朝川さんはどちらの方なの。一時凌ぎの方かい、それとも一生の縁の方なのかい」と冷かした。

「どちらでもないわ、あの人は」お國は明ら樣には言兼ねた。神さんに心の中を見透かされたくもない。

「だけど、あの人もいろ〳〵家の事情があつて、何時まであゝしてもゐられないんでせう。此間もそんな話をしてたから、私氣の毒になつてよ、多少でも世話になつた人に迷惑を掛けたくないからね。それに私、壽町のあの家はつく〴〵厭になつたわ、全く壽命が縮まるやうだわ」

「ぢや、どうするの」

神さんはわざと澄ましてゐる。お國はその目顏に注意しながら、何とか云つて吳れるのを心待ちにし

て默つてゐたが、やがて堪へかねて、「どうしたらいゝと思つて、お神さんは」と、答へを促した。

「私にもいゝ智慧はないよ、お前さんも隨分我儘だからね」

「我儘かねえ私。これでも隨分並の女よりや苦勞も辛抱もして來たんだけど」、

お國は神さんの言葉が皮肉に聞えたので、それを跳付けるやうにかう云つたが、俄かに手頼りなくなつて、どうにでもなれと云ふ氣になつて、「いつそ身を賣つちまはうか知ら、私は操を立てる男がこの世界に一人だつてあるんぢやなし、好きでもない男一人に喰付いてるのも、もう懲々したし」と、情なさうに云つた。

「それ程に覺悟してるんなら、私もどうかして上げるよ」

「覺悟するもしないも、私には外に仕方がないんだから……私、お安が可愛いゝ。あの子にさもしい思ひをさせたくない」と、お國は獨言のやうに云つた。

その夜は壽町の荒れた宿へ歸りたくもなくて、グズ〳〵してゐる中に夜が更けたので、ついに一夜をいゝよしやて送つた。故鄉や姉の噂も朧ろに聞いた。鈴木が此處へ二三度索りに來たことも聞いた。しかし其等の噂は不斷ほど面白くも恐ろしくもない。「勝手にしろ」と毒口をも利いた。

（十六）

「ぢや、私に一切任せときなさい。心當りもあるから、明日の二時頃までに兎に角此處まで來てお呉れ。時間を間違へないやうに、屹度だよ」と、翌朝神さんに念を押されて、お國は堅く約束した。

暫らく一所に滯つて、汚れて腐りかけてる水の流出すやうな氣持になつて家へ歸つた。よかれ惡しかれ、この狹苦しい部屋を出て何處かへ行くのだと思ふと、だらけてゐた心の稍々引立つた。そして雨戸を開けながら、掃除の手傳ひに來た勝太に向つて、「勝ちやん、私近い中に此家を越すかも知れないよ。勝ちやんのやうな人、私好きなんだから、別れたくはないけれどね」と、名殘惜しさうに云つた。

「何處へ行くの」と、勝太は驚いて、詳しい譯を知りたかつたが、それを糺すのも憚かられて、散て尋ねもしなかつた。

「人間は情ないものね。貴下さう思はない?」と、お國は障子に片手を掛け、稍々首を傾げて、人懐つこい目付して、「一生會へなくても私の事を忘れないで頂戴。折角懇意になつたんだから」と云つて、勝太が萎れて箒持つ手も力なげなのを見てゐた。

誰れにも忘られたくない。どの男にも惡く思はれたくない。お國は此處を出る時に勝太から紀念に文鎮を貰つて行く約束をした。

「あなたはちつとも來て下さらない。私も困つて居りますけれど、あなたも御迷惑の事があるのだらうと察せられます。あなたが明ら樣に仰有らないのをいゝ事にして、何時までもかうしてゐるのは心苦しく候へば、近日分別をきめやうと思居り候。私は如何ほど悲しい目に會つても好きな人に迷惑を掛けたくはありません、あゝ私ほど不運な者が又とありませうか、好きな人と末長く添ひとげる資格はないのですよ。何卒お察し下されて、惡く思はないやうに偏にお願ひ申し候。書いてゐる中にも涙が留め度な

く出て、筆も運びかね候」と、實際涙を流しながら朝川への手紙を書いた。

そしてその一日はそは〳〵して暮した。よしやの神さんの心當りといふのは何の事だかと、多少氣掛りでもあつた。自分で夕餐の仕度をするのも懶くて、近所の五錢均一の洋食を取寄せた。

「姉さん、近くにお引越しなさるんですか」と、階下の神さんが階子段から半身を出した。

「さう極まつた譯でもないんです」と、お國はくどく話込まれぬやうに卒氣なく答へて、退屈醒ましに借りて讀んでゐる「をしへ」といふ天理敎の經典を返した。神さんはそれを頂いて受取つた。お國は用事ありげに背を向けて、茶箪笥のあたりを索つてゐたが、神さんが階下へ下りると、つと立つて障子際へ寄つて、薄暗い屋根から屋根を眺めた。眺めてゐると氣が遠くなつて來る。隣の庭から例の馬鹿の喉を鳴らす聲のみ聞えた。お國はその夜ランプを點けたまゝ床に就いた。

翌朝は階下の者も寢過してゐたが、氣立たましい郵便の聲にお國は眞先に目を醒まして、玄關へ下りて行つた。朝川からの手紙で、今日午前中に行くから待つて居れと云ふのである。

「矢張會へるのだ」。と思つて、俄かに自分といふ者に强味が出來た。長火鉢に火を起して鐵瓶に湯を沸かして、枕時計に絶えず目を注いでゐた。よしやへ行く時間の迫るのを氣遣ふ心は次第に薄らいで、朝川の足音ばかりが待たれ出した。勝太は折さへあれば二階へ上つて來ては、話を仕掛けやうとしたが、お國は碌に取合はないで、現はに不愛想な風を見せた。「約束を違へる人ぢやなかつたのに」と、自分が侮られたやうな氣がして、時計の針の動く度に疑ひを增した。正午が過ぎて一時となり、二時近くもな

つて、よしやへ行く時間の來たのに氣はつきながら、身拵えもしないでゐた。

朝川が何の氣もなく入つて來た時は、もう二時を過ぎてゐる。お國は何時もの笑顔をも見せないで、わざと澄まして目を外の方へ向けた。

「お前の分別といふのはどんな事なのだい」、朝川はいきなりから云つて、部屋の樣子に何の異狀もないのを、稍々不審がつた。

お國は暫らく返事もしない。朝川は自分で茶を入れて飮みながら、此間來た時よりこの部屋の中も住みよくなつたと思つた。西窓に差した日影も快くなつた。目の下の屋根の照返しに顏を火照(ほて)らしてゴロ〱してゐたあの時とは、僅かの間に時節は著るく移變つた。

「もうセルでも着なくちやならんね、おれのと一緒に拵えやうか」と、朝川は御機嫌を取るやうに云つた。

お國は尚暫らく默つてゐたが、やがて横へ向いたまゝで、「貴郎(あなた)、此間の私の手紙讀んだでせう、隨分貴郎(あなた)にも御迷惑を懸けたわねえ」と、言葉付がよそ〱しかつた。

「ぢや、今日から迷惑を懸けないつもりかい。何かいゝ事が見つかつたのか」

「いゝ事のあらう筈はないわ、私のやうな性質では」

「ぢや、どうするんだ」朝川は手荒く問詰めた。

「聞かないで置いて下さいその事は。」と、お國は首垂れて溜息吐いて、「私、貴郎(あなた)にもう一生會へないん

ですからね」

「一人でさう極めてたつて譯が分らんぢやないか、僕は此間のお前の手紙を冗談だと思つて讀んでた。僕の方でさう不實な事もしないのに、出拔けにあんな事を云へる筈がないから。お爲ごかしで何か企んでるんだらう」

「私、そんな女と見えて」と、お國は顏を上げて正面に男を見た。

「どうだかなあ」と、朝川は空呆けてゐたが、やがて「女といふ者は當てにならんものだ、昨日と今日とて直ぐ氣が變つちまうから」と、獨言のやうに云つて、詰らなさゝうに後に倒れた。兩手を組んでそれに頭を載せて、目を瞑つて考込んだ。

お國はぢつと見てゐる中に痛々しくなつた。別れともなさゝうな男の素振を憐れむの心が起つた。「あゝ貴郎が可愛さうだ」と、眞心から云つて、好きな女に別れる男の切なさを思遣つた。

「私、一寸したことでも一圖に思込んでしまう性質ですからね、貴郎との關係だつて、ひよつともう駄目だと思込んぢやつたから、ぢつとしてゐられなくなつたの。貴郎の風を見てると、何だか心配がありさうだし、此頃は滅多に入らつしやりもしないから、それで一人で考へて、いつそ、よしやへも相談に行つたの。どうせ誰れかの世話になるかどうかしなければ、生きてゐられんのですから」

「ぢや、その方は極つたのかい」

「いゝえ、どうだか分りやしない……貴郎これからどうして？」

「どうするつて、お前の方て出て行つちまうんなら仕方がないさ。おれは又千駄木のあの寂しい家に一人てくすんてるさ」

「ぢや、私よしやの方を斷はつちまう、決して好きて行くんぢやないんだから」お國はもう涙聲になつて、「貴郎だつてあの家に一人てゐては寂しいでせう、私だつてこんな家に一人てゐたくはない」

「だから、計劃通りに何處へても行くさ。僕はお前の幸福の邪魔をしたくはないよ」

「何が幸福なの」お國は自分の境涯を假りにも幸福と思はれるのが厭だつた。「貴郎がそんな事云ふのなら、尚更よしやへは行かれないわ。貴郎の仰有る通りにするから、どうにてもして下さい。いくら苦痛な目に會つても構はないのよ」

だが、朝川は進んて將來の指圖もしなければ、頼もしい口を利きもしない。呑氣らしく煙草のみ吹かしてゐる。時計の針は三時を過ぎた、お國は落着いてゐられなかつた。

「私、もう駄目だ」と、凡ての望みの絕えたやうな氣になつて、「今度又時間を遲くしちやもう駄目。これて二度も三度も約束を違へたんだから、よしやても愛想を盡してしまう」

「ぢや早くお出てよ、僕も電車まて一緒に行かう。用事を繰合はして來たんだから、愚圖々々しちやゐられない」と、朝川は思切りのよさゝうに立上つて、素早く帽子をも被つた。そして、「この部屋もこれて見收めかねえ」と云ひながら、部屋の中を步廻つた。

お國の耳には「見收め」といふ言葉が淋しくも哀れにも響いた。明るい部屋の中も陰氣に見え出した。

其處を歩いてゐる男の顏にも鬱陶しい色が見えた。て、自分の心も滅入込みさうだつだが、強いて氣を張つて、「まあ此處へお坐んなさい、眞面目にお話したいことがあるから」と、朝川を引据ゑるやうにして坐らせて、「私、もう何處へも行きたくないわ、貴郎きりもう外の男には會ひたくない。貴下だつて私に別れるのは厭なんでせう。それならいつそ一思ひに死んで呉れなくつて」と、言葉は落付いてゐた。

「馬鹿に死急ぎをする人だね、死なゝくちやならん場合が來たら、その時に死ぬるさ。その覺悟さへありや少々苦くつたつて生きてられんことはないよ」

「いゝえ、そんな事駄目よ。貴郎はまだ經驗がないから、さう思ふんだけど、死にたいと思つた時に直ぐ死なゝくちや、とても死ねるものぢやないのよ。」

「だけど、も少し辛抱して居れ、おれも餓死はさゝないから」

「えゝ」と、生返事をして、お國は目を伏せてゐたが、明日から先此處に寢起する怖さがしみ〴〵胸に染んだ。「貴郎も五日か七日に一度ぐらゐしか來られないんでせう」

「あゝ、當分それ位しか來られないね」

「ぢや、私どうして後の日を送るんでせう」と、今更のやうに自分の日々の生活がありありと目に見えた。

「まあ、も少し今のやうにして居れ。別れるなら別れるて、一日田舍の景色のいゝ所へ行つて、快く別れやう。お互ひに惡い思ひを殘したくないからね」

「だつてこんな服裝では何處へも行かれないわ、女は男とは違ふんですからね」

朝川は女の言葉に恨みがましい調子の際立つたのを認めて、自分がろくに世話をもしなかつたのを耻しめられた氣がしたが、口では「さつきに死ぬなんて云つた人が、服裝を氣にするのは可笑しいね」と笑つた。

「私、死ぬる時だつて、見つともない風なんかしたくないわ、思切り好い着物を着て死んでよ」と、お國は知れ切つた事をといはぬばかりに答へた。

朝川は歸りかけては腰を卸して、不斷のやうな穩やかな平凡な話に耽つてゐる間、西窓も薄暗くなりかけた。「鳥でも燒いて食べるにいゝ時候になつたね」と、夕餐の仕度を彼此と云つてゐた。お國は氣の進まぬらしく、直ぐには買物にも出掛けやうとしなかつたが、其處へ玄關から威勢のいゝ聲が聞えた。いゝ、よしやからと云つて、お國の名を呼んだ。

お國は我知らず立上つて辷るやうに階子段を下りた。神さんの甥が自轉車に乘つて來てゐる。「今直ぐ來て呉れ」と用向を傳へた。直ぐ後からと、お國は手短かに答へて、胸騷ぎをさせながら階へ上つた。善し惡しを考へる餘裕は心になかつた。

「兎に角行つて來てよ」と云つて、イソ／＼身仕度をした。ザッと白粉や臙脂をもつけた。

「ぢや、僕は歸るよ」と、朝川は立上つたが、お國は惶てゝてそれを押留めて、

「私、二三時間で歸つて來るから、それまで待つてゝ頂戴。向ふの樣子もお話したいし、このまゝ別れるのは厭だから」と繰返しながら、顧み／＼階下へ下りた。

俥の上では空想が火花のやうに散つた。いゝ、よしやでは何が待つてるんだらう?。

(完)



ごみ溜（禁無斷興行）

松本苦味

人々

馬鹿鐵　職を失つた鐵工場の職工。

お梅　その情婦。

原田權七　木賃宿の亭主。

お孝　牛飯屋の主婦。

お竹　そこの女中。

ガラ清　ペンキ職――半博徒。

上州　立ン坊――前科四犯。

名古屋　無職。

吉公　立ン坊。

八五郎　土方。

喜三郎。　車夫。
田中新吉　石鹸の行商——子爵の庶子。
石井正雄　町を賣つて歩く麵麭屋。
金子實　苦學生——牛乳配達夫。
お作　瞽女。
西野常吉　脚氣に罹つた車力。
健三　その息子——十一歳。
お千代　娘——七歳。
お松　娘——五歳。
角刈の兄哥
他に五六人の名も知れぬ浮浪漢と女。三人の巡査。そして通行人。

（上）

薄暗い牛めし屋の店——眞中に細長い飯臺を置いてある。飯臺の周圍には行儀好く醬油樽が列び、下は土間だ。左壁は老ひ朽ちて、處々雨漏のした大な染が着いてゐる。欠けた硝子の入つた小窓が、壁の上の方に付いてゐる。右は、臺所の入口。屋臺の様な闇ひの内に、主婦のお孝は我精に働いてゐる。——牛飯の煮立つ大鍋は眞中、周圍の棚には幾個となく皿小鉢が見える。

夕方の、褪めた蒼白い光線は、壁の小窓から忍び込んで、飯臺の一番どん尻に、默つて腕組をして考へてゐる名古屋の皺だらけな頸に落ちた。

五六人の醉拂つた浮浪漢と勞働者は、飯臺の周圍を取卷いてゐる。——立ン坊の上州と吉公は何方も廿七八。洗ひ晒しの印半纏て、素足に草鞋を履いてゐる。土方の八五郎は襤褸になつたメリヤスの股引に襯衣、赤い腹卷をしてゐる。名古屋の隣りに腰掛けた車屋の喜三郎は、六十を越してゐるらしく、ショボ〳〵とした眼をして、背を圓くして坐つてゐる。各自に都々逸を唸るのもあれば管を捲いてゐるのもある。室の中は騷しい。

秋の黄昏の、澱んだ様な日の光は、「牛めし」と朱と黒で書いた後手の障子へ、斜に差してゐる。戸外の縄暖簾の影が障子に寫つてゐるが、風が戰ぐ度にゆら〳〵と慄えた。

暖簾の外で、先刻から頻に瞽女が三味線を引いてゐた。八五郎は片足を持上げ、獨酌でチビリ〳〵と飮つていたが、血走つた濁りした眼を暖簾の方へ据えた。

八五郎。オ、オ、姐や……お竹ちやん！　濟ねえが、彼女を呼んで呉れ……

お竹。一寸掛けてお盆を持つた十六七の女中、壁に凭り懸つてゐたが、

ら」あれつて？——

八五郎。「フラ〳〵した手て指差し」ア彼女をよ・・瞽女を・・・・

お竹はツンとして、返事も碌素法せすに默つて立つて行つた。

お竹。「後の障子を明け、戸外に首を出して」鳥渡、入つて謡つて頂戴つてさ！

瞽女。ヘエ・・・ヘエ・・・ヘエ・・・

手拭を被つて、赤い腰巻を出した十八九の瞽女が、三味線を引抱へて入つて來た。頬邊が赤くて、肥満つてゐる。皆の視線は、急に其方を向いた。と誰かゞ隅の方で呂律の廻らぬ舌で『ヨ別嬪！』と怒鳴つた。言ひ合せた様にドッと笑つた。

瞽女。エヘ・・・什麽有難う御座います——

八五郎。「ニタ〳〵と薄氣味惡く顔中笑ひにして」ヨウ姐さん！ウハ・・・お前は中々の別嬪だね！「腹巻の丼から一錢銅貨三ッ摑み出し」おい・・・己が・・・今、三百遣るからな・・・何か謡つてつて吳んねえ・・・。エッ・・・。ウハ・・・・

瞽女。「三味線を抱へて直立つたまゝ」ハア有難う御座います・・・。何謡りませうかね？

八五郎。「へゞレケになつて」何でも好いよ。お前の知つてるだけ其處へ打行けて行きねえ——

上州は、急に横相から『鈴木主水やれッ』と怒鳴つた。凄い眼をギヨロ〳〵させてゐる。瞽女は、突立つたまゝ暫くモジ〳〵してゐたが、車屋の喜三郎が椅を吳れたので、幾度もお辭儀をして、無様に腰を掛けた。そして、暫く乾いた唇を舌舐擦してゐた。

喜三郎。ヲイ如何したい姐さん？——

瞽女は、へ・・・と鼻の上へ皺を寄せて笑つた。と振り絞つた様な聲で『虎青山百人町よ・・・』と謡ひ出した。無理に壓し出された様な乾枯びた聲は、濁つた室の空氣に衝突つて、戰々と顫えた。『旨いッ！』と吉公は口を一杯に明いて怒鳴つた。モジャ〳〵と生へ擴つた口髯の間から、列の好い白い歯がチラリと見えた。

『・・・鈴木主水といふ士は・・・』と又瞽女は謡ひ續ける。『女房持ちにて小供の二人・・・二人小供のあるその中で・・・』と後は慄えて長く絶え〳〵に、此の世の悲しみと、遣瀬ない思ひとが、混絡つて上へ上へと立ち昇らうと、悶々と足搔いてゐる様だ。『今日も明日もと女郎買ひばかり・・・』と今度はグッと細つた哀れな聲が、掠れて段々と絲の様に細つて行く。その末は、もう耳に入らぬばかりの幽妙な音に消えて、聴手は次第に暗い穴にでも引張り込まれる様な心持になる。皆は靜然として、鳴を靜めて聽いてゐた。

八五郎も、先刻から默つて聽いてゐたが、急に飛び上つて矢鱈に手を振り廻した。

八五郎。姐や！　そそ其樣な聲を出すなア止して呉れ！　己もう堪らねえッ……。

と言葉が咽喉佛に閊へたので足をジタバタと踏んだ。

上州。何故よ？――

と上州は眼を瞠つた。瞽女も吃驚して、謠ふのを止めて了つたが、三味線は未だ引き續けてゐた。

八五郎。何故だつて、彼樣な變手古な聲を出しやがると、淋しくなつて陰氣で堪らねえッ。「首を傾げながら」斯う……何だか口には言はれねえ樣に悲しくなつて來やがるんだ！

上州。「横を向いて」へッ好い所出してゐやがるぢやねえか！

八五郎。何？――

上州。好い所出してるつて事よ。……

八五郎。「ドッカと元の欄に坐り込み、呂律の廻らぬ句調で、說法する樣に」馬鹿ッ！　手前は、それだから行けねえ……。女房も……好いかい！……餓鬼も……何にも無え野郎は……物が可哀さうだとか、悲殘だとか……そんな事ア鳥渡も考へねえけんど其奴ア駄目だ！

上州。ヘン箆棒めい！　可哀さうつて面ア、もう三寸長えや！　そんな事ア猶お上品な方の仰有る事だよ。

八五郎。お上品？　お上品で無くつても、可哀さうは可哀さうだ。

上州。ぢやお前は偉いよ！「他方を向く」――

八五郎。「喜三郎に」ネ喜三さん！――己は什麼彼樣な歌を聽くと妙に悲しくなつて堪らねえね。嫌アな心持がするね。――「瞽女の方を向いて手を振り」好いよ。好いつてばよ、彈かなくつても――

喜三郎。「靜に猪口を置きながら」ム、そりや全くだ。歌謠の文句にも、隨分悲しい事ア澤山あるからね。「上州の方を向き」上州見度えに斯う矢鱈に我無娑羅でも仕樣がねえなア……。

上州。如何して？

喜三郎。お前見度えに、何でも脛一本、魔羅一本て壓して歩ける積りて、一人て强がつて世界にやア哀れ

なものや可哀さうなもなア無えつてな面をしてゐるけれど、そりや行けないよ……。なツ悲しい歌を聽いても身につまされるつて事が無く、哀れな話を聽いても何とも思はねえ野郎は、そりや精神が反對してゐるんだ！

上州。　チエ精神が反對してゐるとよ！　好い加減に人を馬鹿にしてゐやがらア——

喜三郎。「眼を瞠つて」左樣よ！　そんな事言つて、第一お前病患したら如何する？

上州。　己死んぢまはア——

喜三郎。　死ぬまでよ、如何する？——同然他人樣の厄介に成らなきやアなるめえ？　同然他人樣の情つてものを受けなくちやなるめえ？——

上州。「肩を動搖つて」否ならねえ！　獨で我慢すらア——

——

入五郎。「愚弄する樣に笑ひながら」お前それ出來ると思ふかい？

上州。「凄い眼をして」出來なくつてよ箆棒めえ！　己心臟に罹つた時、誰の厄介にもならなかつたぜ。世話のして呉れ手が無えから仕方がねえから「指先で鍵形を造へ」れこてもつて護送れてから監獄のお醫者樣に癒して貰つた。

喜三郎。　お前それで善い事したと思ふかい？

上州。「ムツとして」善い事？——己ア善い事たア思はねえさ。だけど當り前だ。——惡い事ちア無えぢやねえか！「呂律の廻らぬ舌で」己、病氣で誰も看病して呉れる人が無くつて。見て呉れる御親切な方がゐなくつて、剩けに喰ふ事が出來なくつて泥棒したよ！　それて入獄たよ！　監獄のお醫者は癒してくれたよ！——皆不思議は無えぢやねえか！　己ア何時でも左樣思つてら。一身より他身方は無えつて。だから己ア他人の厄介にならねえや。その變り他人が斃りやがつたつて平氣なもんだ。可哀さうだなんて思やしねえや！

入五郎。　だけど、お前はお政府の——

上州。「怒鳴る樣に」五月蠅えな！　箆棒めい此方位ア其

様な者には用は無えんだ。己達見度いな文無しと來やがるとヘッ犬見度えに待遇やがるんだらう……それて……

名古屋。「低い聲で、宥める様に」そりや上州、お前の言ふなア最だ。お政府の眼からは、我徒等ア犬だ。それだから、鳥渡やそつと惡い事を爲たり、喰え込むつてのも、是れも仕方がねえさ。お互に病氣になつて二ッち三ッちも行かねえとか、長え雨を喰つて顋が乾上つちまふとか、左様なりやア什麽仕方が無えさ喰ふと喰はねえの境なら、仕方がねえ。——だけど上州！

上州。何を？——

名古屋。意張るな好い、他人の厄介を懸けねえッつてのも結構だけど「小指を出し」これは謹みな！ お前は此の間又電氣ブラン引掛けた晩、三ッ目の横町で他所のお上さんに噛り付いたといふぢやねえか！——相談づくの色事なら仕方がねえが、無理は止しなよ。最早四年も入獄て來て、澤山ぢやねえか？

上州。「苦笑ひをして」什麽阿父さんに會つちやア堪らねえな。扱き剝るんだからな——

頭を抱へ凋れて默つて了つた。皆は、その形が可笑しいといふんで笑ひ壊れた。お孝も、先刻から臺所で見てゐたが、大な聲で一緒に笑つた。そして、瞽女の方を熟々と見た。

お孝。だが、全くお前さんは旨いもんだね。——名は何ていふの？

瞽女。エヘ……お作てんです。

お孝。お作さんての、左様……。郷國は？

瞽女。ハア葛西のね在です——

吉公。ム、どうりで肥料（聲）が好いと思つた。

と吉公は他人の話を引受けて透さず洒落れたので、皆は又ドッと笑つた。瞽女は、何で皆が笑つたんだか譯が解らず、三味線を抱へてポカンとしてゐた。

お孝。お前さん。此處にゐると危いよ。斯様いふ人の惡い連中がゐるんだから——

吉公。笑談言つちやア行けねえ。己達アより人が好い積りだよ。

お孝。『積り』なんてせう？

吉公。ウハヽ……
皆の話したり笑つたりしてゐる間、八五郎は欠伸を一つして獨語の樣に《雨の降る日は天氣が惡い、親父や己より脚が上かれ……》とほざいたが、名古屋ゝ陽氣になつて、《何せ藻掻いても……なる樣にしきやア……ならぬ。ならぬ此の身が……恨敷い……》と低聲に都々逸を唸つてゐた。

上州。「素疾を聽き付け」そりや行けねえ阿父さん！　そんな《ならぬ此の身が恨敷い……》なんて滅法界縁起の惡い奴ア駄目だ！　《見捨てさんすな》好いかい！　《枯木てさへも、二度の花咲く海苔の粗朶》てんだ。
女中と主婦さんは笑つた。

名古屋。「頭をツルりと撫て、寂しげに低く笑ひながら」だけど……我徒等ア御前達たア違はア。片足が棺桶へ入つてるんだあの――

お孝。「臺所から大な聲をして笑ひながら」だけど阿父さん、未だ左樣でも無いだらう！　阿父さんの元氣なら一人や二人若い娘の情婦を持てらアね。アハ……
皆な面白さうに笑つた。

名古屋。「無性に手を振り廻し」否、駄目だゝゝ！　是れても昔ア……

吉公。ホーラ阿父さんの千住が始つた！

名古屋。「寂しく笑ひ」……お前はんてなくつちやア成らねえつて言はれた事もあるんだけれど……今日ぢや膚の白い、ぼつちやりとした新造を向ふへ廻したつて、れこが言ふ事を許かねえや……。人間が乾枯びちやつたんだね。勇氣が起らねえ――
皆は又ドッと笑つた。瞽女は、その内『有難う御座い』を幾度ら言つて出て行つた。
ガラ清と馬鹿鐵と後の障子を明けて入つて來た。ガラ清は、赤ら顔の卅中場の男。ペンキだらけの印半纏に、皮並の股引を穿いてゐる。馬鹿鐵は、五尺六七寸ある。巖丈な男だ。處々油の滲むだ脊廣を着て、色の褪めた中折を被つてゐる。育體中筋が弛むだ樣て締りが無い。

ガラ清。「入りながら四圍をギヨロヽヽ見廻し」ホッ店ん中ア恐ろしく暗えなア！　未だ戸外は左程ても無えけれどなア。
と言ひながら、上州の脇の明いた椅に坐り込んだ。

お孝。「氣が付いて獨語の樣に」ア、左樣々々、最早燈を點け

なくつちやア

喜三郎。「馬鹿鐵を發見け、吃驚して」ヨウ鐵さん！

お孝。「臺所から三分心の釣洋燈と自在を持つて出て來て」マア鐵さんお珍しい！　好くお歸んなすつたね。何時？

馬鹿鐵。「茫乎と突立つたまゝ」エヽ……今朝。

お孝。左樣ですか。マアお懸けなさいまし……。「洋燈を點けて臺所へ行く。

喜三郎。鐵さん、此方へ坐んねえ！

自分の横の空樽を指差す。馬鹿鐵は默つて喜三郎と名古屋の間へ坐り込むだ。

名古屋。「顏を覗き込むで」如何だい鐵さん。阿母さんは？

――

馬鹿鐵。「低い進まぬ聲で」到頭徒勞だつた――

名古屋。「急に眉を引側め」エ徒勞？――ぢや臨終には？

馬鹿鐵。「頭を振つて」ウム、臨終にも――

名古屋。「憂悒に滿ちた眼をして」間に合はなかつたかい？

馬鹿鐵。……丁度私が着いた前の晩の十二時に、永眠つて了つたつて……。阿母は、何でも死ぬ前二三日ていふものは、『鐵に會ひ度い。一遍鐵の顏を見てから死に度い／＼』つて言ひ通したさうだけれど、到頭私の行くのが間に合はなかつた。――

力の薄い眼付をしてゐる。

お孝。「痛々しげに」……マアお氣の毒な……。態々二百里からある郷國まで入らしつて、それで親御さんの死目にお會ひなさる事が出來ないなんて、マア……何て御不幸な……

喜三郎。……本當に……何かの因縁だね。

ガラ清。「小聲で女中に向ひ」竹ちやん。燒酎持つて來てお呉んな。それに鍋を一つ……。

お竹は返事をして、直にガラ清の前に燒酎と鍋を持つて來た。彼はチビリ／＼と獨酌で飲り始めた。馬鹿鐵は、坐つたが、何時までも茫乎と考へてゐる。

お孝。鐵さん、お酒でもつけませうか？

名古屋。左樣さ。鐵さんマア一杯飲るが好い――

馬鹿鐵。「氣の浮かぬ調子で」エヽ――

名古屋。左樣して、少と氣を晴しねえ。「聲を密めて」而し

鄕國て少とは仕事が出來たかい？

馬鹿鐵。否、鳥渡も——

名古屋。ぢや持つてつた金は使つたばかりて、取り返せなかつたかい？

馬鹿鐵。否、それ處ぢやなくつて、歸りの汽車賃がカスくさ「寂しく笑ふ。」

喜三郎。間の惡い時にア惡いもんだなア什麼——

馬鹿鐵。「沈んで」だから、全然吐き出して了つたから如何する事も出來ないさ。それに、歸つても、元の工場ぢや入れて呉れねえつてから——

八五郎。鐵さん！ 今年しや餘程顯德が惡いね。——

馬鹿鐵。「無理に笑ひ」エヘツヘ……全く……。

ガラ淸。「何氣なく口を滑らし」可愛い丶情婦は奪られるしか——

馬鹿鐵はギヨツとして、ガラ淸の顏を見た。名古屋も亦他の者も、ガラ淸が不味い事を言つたなと眼を見合せて顏を蹙めた。

馬鹿鐵。「急に不安の滿ちた眼をして」何だつて？

ガラ淸。「五茶魔化す樣な笑方をして」……何でもないのさ……。だけどよ、オイ鐵さん！ 用心しなくつちや、行けえねつて事よ。『町內て知らぬは亭主ばかりなり』つてな事が出來するよ……。「皮肉な笑方をする。」

馬鹿鐵。「驅し出した樣な不愉快な苦笑をして」……如何してよ？——

ガラ淸。お前昨晩歸つてお梅ちやんに會つたかい？

馬鹿鐵。「猶不愉快な笑を續けて」否、會はねえ——

ガラ淸。ホーラ見ねえ！ 其處がだ——

馬鹿鐵。「苦い顏をして」其邊が如何したい？

ガラ淸。——怪しいつて事よ！

馬鹿鐵。「笑は何時しか顏から去つて、憂惧の色が湧いて來た。」エ何故？……何故？……如何して？

皆は、ガラ淸が惡い事を言い出したものだと嫌な顏をしてゐる。

ガラ淸。「醉が廻つて、徐々眼が据つて來た。」お前は、木賃の親爺から出發時に錢を借りやアしなかつたかい？

馬鹿鐵。權さんからか？——

ガラ淸。ムヽ——

馬鹿鐵。借りたさ——

ガラ清。　幾程借りたい？

馬鹿鐵。　「氣の進まぬ聲て」　二十兩ばかりよ——

ガラ清。　それてお梅ちやんは如何したい？

馬鹿鐵。　己は證文を書いて、抵當と云つて別にねえから、彼女を郷國に行つてる間預るとして置いたよ。——

ガラ清。　「待儲けた樣に」　ソそれがだ、惡いつて事よ鐵さん！

馬鹿鐵。　「眼に不安が滿ちて」　如何して？

ガラ清。　權七のあの斃りぞくねえ奴！　お前がゐる間から年中お梅ちやんを見てやがつただらう。そいつをよ、お前が調度阿母が病氣て郷國へ歸るつて言ひ出したんで、親切ごかしに旅費は己が如何かして遣らう、お梅ちやんは留守の間預つて遣らうてな旨い事を言やがつて、到頭、口說き落しちまやがつたんだ！　ウワハ……

周圍にゐる人は低く笑つた。馬鹿鐵の顏色は、見る〳〵内に變つて來た。

ガラ清。　お前が立つた直ぐその翌日からよ、狸老爺奴い、い、ぢよびたらにお梅ちやんの側に行つてやがつてよ、それから段々と嫌る女を口說に懸りやがつた。……お梅ちやんだつて、お前、これが意氣な兄哥なら又つて事も有るけれど、あの狸老爺の鬚もぢやい、ぢやアて感心しねえと見えて最初の内は振つて〳〵、振り拔いたのよ。すると、老爺奴、最初此りや到底も唯事ぢやあ徒勞だと見やがつたもんだから、到頭お梅ちやんの鼻ッ先へ、紙幣をチラい、付かせやがつた。……ヘッ話ア解りが好いもんて、それから三日過たねえ内に、お梅ちやんの方から、い、ぢやら……ぢやら……い、ぢやらと戲ら付き出したぢやアねえか！

クス〳〵と低い笑聲が聞えた。馬鹿鐵の顏は、薄い洋燈の光に、病人の樣に蒼かつた。

ガラ清。　「女の嬌態をする眞似をして」　今ぢや『馬渡貴夫や……』なんて乙な御詫を列べてらア……。親爺は又……

八五郎。　「焦燥と懊い眼をして」　から清！　最早止せつてばよ。手前餘計な事を喰喋つて好くねえッ！

ガラ清。「ケイと癪に觸って」何が好くねえんだい？ 餘計な事つて、己は剰けを件けて話しや爲ねえよ。嘘八百を列べた譯ぢやねえよ！

八五郎。 嘘八百でなくつても、他人に炊き付ける樣な事を言ふのは好くねえッ。

ガラ清。 炊き付ける？――何時炊き付けたい？ 己は好いかい、鐵さんがお梅ちやんに男をとられて、それて、町内で知らぬは鐵さんばかりなりぢや可哀さうだと思ふから親切に敎へて遣るんだ。何も炊き付けたり、餘計な事を喰喋つたんぢや無えんだ！

八五郎。「横を向いて」何しろ餘計なおべんちやらはいらねえ。

ガラ清。「鋭い眼をして」おべんちやらだ？――箆棒めいおべんちやらつてな何處の國の言葉だか知らねえけれど、其樣な物ア我徒等ア言つた事アねえんだ。餘計な事な拔かしやがるねえ！

八五郎。「突立ち上り」何ッ！

名古屋。「倉惶てに」ママ……待ちねえッて事よ八さん！清さんも好くねえッ。兩人とも穩かでねえよ。――ママ己が預るから此處ん處顏を立てゝ默つてゝ與んねえ。エ？

ガラ清。「足を持上げ、尻を捲って」箆棒めえ――

名古屋。「手て制して」ママ預つてゝ！――

兩人とも稍靜になる。

名古屋。「馬鹿鐵に向ひ、沈むだ少な聲で」今、清さんの言つたのは、本當の樣でもあるし、又嘘の樣でもあるんだから、ママそんなに心配しないが好い。な、何か紛騷が持上つたら、惡い樣にやしねえから……

馬鹿鐵。「凝と土間に視線を投げながら」而し阿父さん、己が行つてる留守に本當にお梅が……

名古屋。「言ひにくそうに」それがよ。あつた樣な無い樣な話だから、如何とも解らねえ。だけど……若し本當としても族々と短氣なんか起すんぢやねえよ。――

馬鹿鐵。「何時までも一處を視詰めてゐたが、急に立ち上りながら」――己ア行つて來やう――

喜三郎。「吃驚して、馬鹿鐵の手を握り」オツト待ちねえ。何處へ行く？

馬鹿鐵。――未だ原田の親爺さんにも會はねえから、鳥渡行つて行き來つて來るさ――

喜三郎。權七にか？

馬鹿鐵。「不安と怒と嫉妬とに」そんで好く話を定めて來てえと思つてね……お梅には未だ朝から會はねえから――

喜三郎。「茫乎と手を放し」――左樣か！　行つて來るんなら行つて來ねえ。だけど……短氣は謹みなよ。それでねえと――

馬鹿鐵。「戸口に歩み寄りながら」ム、――

馬鹿鐵は倉惶と荒く戸を締めて出て行つた。

吉公。「欠伸をしながら、大く伸をして突立ち」ア――ア！何だ詰らねえ、猶澤山炊き付けて遣りやア好かつたのに――

名古屋。「寢ろ樣に睨み付け」馬鹿言ふもんぢやねえ！お前達ア若えから其樣な馬鹿ア言つてられるんだ。本當に我徒等にやア無鐵砲で見ちやゐられねえ。

吉公。エヘ……主婦幾程だい？

お孝。六錢頂戴致します。

吉公。ヲイ「と錢を飯臺の上に投り出す」

お竹。へイ有難う御座います――

吉公。「ハヽヽ、ニタリ〳〵と大股に出て行ながら、急にお竹を太い腕で抱き締め」お竹ちやん。お前は好い娘だな！

お竹。「仰山な金切り聲を出して藻掻きながら」否だよ吉さん放してつてば！

吉公。アハ……否か？――何故否だ？

お竹。吉さん見度いな面つ集り――

吉公。「笑ひながら」何だと斯ん畜生！「手を緩め、ソツと放しながら頤の下を擽り」でもな、鬼も十七で可愛いやな！「鼻歌を謡ひながら出て行く。

お竹。「背中を見詰めながら口惜しさうに」本當に生け好かない吉公だよ！

上州。ヲイ生け好かない吉公だとよ！

吉公。「出て行きながら、鳥渡顧み、ニタリとして」馬鹿ッ！

皆はドッと笑つた。

喜三郎。「眉に深い皺を寄せて」――而し鐵さんは返す〴〵も氣の毒だなア――

名古屋。ム、……「凝と考へ」だが淸さんは彼樣な事言つて呉れなかつたら好かつたのになア――不味い事を言つて呉れたなア――

ガラ淸。「疳に觸り」何を？――己何が惡い事言つたかい？

名古屋。否さ、何も惡い事とは言はないけれど、常人の煩悶してる時に彼樣事言ふと――！

ガラ淸。「鋭い眼をして」言ふも、言はねえも、己の勝手ぢやねえか！「彌蔵を遣へてブラリと突立ち」ヲイ嚊ア濟まねえが今夜己借りとくよ――「厭な笑方をした。

お孝。「臺所から大な聲をして」アラ淸さん行けませんよ！又てすか――

ガラ淸。好いぢやねえか嚊ア……又都合の好い時に……な入合を付けるから……

お孝。「臺所から出て來て困つた樣な顔をして」だつて……お前さん、それて最早四度目てすよ。什麼何時も左樣〳〵――

ガラ淸。――ナ其處だ〳〵つてば嚊ア！何時でもつていふけれど、己の借りたのは此れて唯四度目――好いかい！その前にも借りた事があるにはあるけれど……

お孝。「疳癪を起し」あるにはあるけれどぢやアないぢやありませんか！今月に入つてから、四度目てすよ。その前にも幾程踏倒されてるか解りやしない！……

ガラ淸。マ嚊ア其樣な癪を言はずに……ね今夜だけは貸しといてお呉れ……

お孝。「ツンとした」行けませんよ。お前さんに貸すと際限が有りやしない。何處まで行つたら踏止なんだか譯が解りやしないんだから――

ガラ淸。「血走つた凄い眼をして」コウ嚊ア憚りながら己アお前に貸して呉れとは言つてるんだけれど、何も踏倒す氣てゐるんぢやア無えんだよ――

お孝。「態と笑ひ」そりや左樣でせうさ。貴郎は踏倒す樣なお方ぢやないんですから……。だけど妾の方も實に困るぢやァありませんか？　貴郎は滿更知らない顔でもないから——

ガラ清。——左樣よ。年中目と鼻の先にゐて朝夕見知り越しだ——

お孝。——だから、何も因強な事ァ言ひ度かァありませんが、左樣々々はね。妾の方でも毎日仕入れして商つてゐるんですから、そう矢鱈に借りられた日にやァ立ちませんからね——

ガラ清。「吃つて」だ、だからよ。何も遣らねつてんぢやねえッ。な、己だつて、采轉の振り樣一つて、三兩や五兩儲らねえとも限らねえ。だが、今は持合せがねえから、此處ん處少々待つて貰えてえつて言ふんだ。嗚ァ！　よ、後生だから因強な事を言はねえで——

お孝。「首を振つて」行けませんよ。

ガラ清。行けねえつて？——

お孝。エ、さう毎度々々は困りますよ——

ガラ清。「血相變へて」行けなきやァ如何するんだい？

お孝。「平氣で」如何するつて、拂つてお貰ひ申すのさ——

ガラ清。拂へつたつて、無え袖は振れねえぢやねえか！

お孝。ぢや振れないで濟むんですか？——それで好いと思ふんですか？——

ガラ清。だからよ。貸して呉れつて言ふんで。

お孝。「厳として」否、行けません！

ガラ清。行けなきァ如何でも爲ろいッ！　へゝ、ちやもくれ奴！

お孝。「眞赤になり」ぢや如何も爲て好いんですか？

ガラ清。エ、コー箆棒めえ、我徒等ァ憚んながら一貫や二貫の錢を踏倒す樣なお兄哥さんぢやねえんだ！——な、此れでも東京府へ二度出た事があるんだ！　サァ如何でも爲るたァ面白へや！　切るとも、張るとも、殺すとも勝手にしやがれッ！

喜三郎。コーラ兄哥、清さん！ お前は醉つてる。醉ふと、何時でも其れだから行けねえ。マ靜に〳〵！

ガラ清。「猶猛り立つて」否、己ア引かねえ、此ん處一寸も動かねえ。サア爲るんなら如何とも爲てくれ！ 此の糸瓜！ 懶惰阿魔奴！

　ガラ清は俄然自分の前にあつた德利を引掴んで足元へ打ち付けた。德利は大な音を立てゝ粉々になつた。そして、猶手當り次第拳骨を振り廻し、盃が壞す、皿が壞す。往來には人が立つて、障子の穴やら細目に明いた處から澤山覗いてゐた。

ガラ清。サア如何ても爲やがれ！ 「拳骨は飛んでお孝の胸に當つた。

お孝。「金切聲を出して」ア痛タ……何爲やがるんだ畜生ッ！……お竹！お竹！ お巡查さんを……疾く……：

　お竹は急いで後の障子を明け、近所の交番へ驅けて行つた。明いた障子の間から、通り懸りの小僧やら、職人やら、裏店の嚊アやらが面白さうに顏を出して眺めてゐた。

　內では上へ下への混雜で、怒鳴る、仲裁する、お孝は怒る。喜三郎はガラ清の背後から搦り付いたが振りもぎられて了つた。

ガラ清。巡查さんだ？――此の阿魔！

　いきなりお孝の髮を引掴んで引張り寄せ背中を一つ毆打した。

八五郎、「突立ち上り」野郎何亂暴しやがるんだい獸物奴ッ！

　飛び懸り樣にガラ清の橫面を張り擲した。

八五郎。女打つッて野郎が何處にゐるい、土左衞門!!

ガラ清。野郎打つたな！

　ガラ清は、ヽヽムッと八五郎の半纏の襟を掴んだが、片手でヒシヤリと毆り返した。二人は組み合つたまゝ、床の上でゴロ〳〵と掴み合つた。と、ガラ清は如何した機か八五郎の上に馬乘りに跨つて上から二突三突鼻柱を突いた。鮮血がパッと散つた。――八五郎の顏は血塗になつた。猛り狂ふガラ清は、又、皿の破片を拾ひ、更に一擊を振り下さうと手を振り上げたが、その瞬間、皆はアッと手に汗を握つた。名古屋の『危いッ』といふ嗄れた聲は電光の樣に叫んだ。

　上州は、急にガラ清に驅り寄つた。そして、物をも言はずガラ清の持つてゐる皿の破片を引奪つたが、力の籠つた彼の手は、ガラ清を振り廻して、土間の隅へ突き飛した。

上州。野郎ッ、戲けやがると命ア無えぞ！

軒の外でワヤ／＼と人聲がした。見物は倉惶て散つた。二人の、外套を着た巡査が急ぎ足で入つて來た。その後からお竹が入つた。

一人の巡査。「内を見廻し、それからお竹を顧み」その暴行しとる奴は？――

お孝。「倉惶て側により」旦那什麽毎度濟みませんで御座います。……又只今そのう……彼處にゐます……あれが……

ガラ淸。「半分起き上つたまゝ、呂律の廻らぬ舌で」サ篦棒めえ如何でもしてくれッ！　なア百人寄つて來やうが、千人束になつて來やがらうが、喫驚とも爲るお兄哥さんぢやねえんだ！

お孝。……散々飲食をしました上句、金が無いつて言ふんで御座いますよ。それで、妾か兎や斯う申しますと、什麽手も付けられない程な亂暴で……それで、御親切に止めて下すつた八さんを擲つて鼻血を出すやら……マア本當に什麽々々氣違ひの樣で到底も側へもよられないんで御座いますよ

一人の巡査。「皆まで聽かず、ツカ／＼とガラ淸の側へ寄り、肩を引摑み」コラ貴樣立てッ！

他の巡査。「八五郎と上州の方を向き横柄に」お前達は如何したんだ、エ、？――

八五郎。「手拭で鼻血を拭きながら」ヘエ私が仲裁に立ちましたら、野郎が鼻柱を打擲りやがつてね……ヘエ。

上州。――旦那ア野郎は什麽何時でも醉拂やがると、彼樣で、實に手扱におえねえんです什麽――

他の巡査。「横柄に」ム、――

ガラ淸。「巡査の顏を熟々と見て」お前も己を――

一人の巡査。「焦燥して」『お前』た何だ！　馬鹿ッ。何でも好いから立て！

他の巡査。「ガラ淸の方に歩み寄り」貴樣の名前は？――「返事が無いので上州の方を顧る」

上州。　野郎ですかい？――野郎は……

ガラ淸。「朦朧げな眼をして」淸さんてんだ！――本所區新花町廿二番地木賃宿紀の國屋方――

一人の巡査。「他の巡査に低聲で」君、什麽亂暴れさうだから踏縛つて了はうか？

ガラ清。何ッ踏縛る？　箆んめえ！」ど如何して、踏
縛るんだい？
他の巡査。「點頭きながら」好し！
用捨なく、暴れ藻掻くガラ清を縛り『立てッ—』と荒々しく言つ
た。それでも動かないので、長靴の先で強く尻を蹴つた。
ガラ清。サア殺すんなら尻邊なんて蹴らねえて、一思
ひに殺して呉れッ！
一人の巡査。「荒々しく」何でも好い！「お孝の方を向き」お前
とそれから他に關係した者は鳥渡一緒に來て呉れ！
お孝。ヘエ……。
暴れ狂ふガラ清を、二人の巡査は無理やりに戸外へ壓し出した。
入五郎と、上州とお孝とは、後から從いて行く。室の中は、暴風
雨の後の樣に靜になつた。
名古屋。「茫臘と」何て事だい什麽！　野郎は本當に獸
物だな……。「茫乎してゐるお竹を見て」オイお竹ちやん、
マ危えから其邊等の壞れ物を掃除しねえ——
お竹。「我に歸り」マア本當に恐い！　妾アお上さんが
髻を摑まれた瞬間、慄然としたわ！

喜三郎。全くだ。己達ア最早齡を取ると、彼樣なもな
ア危くつて見ちやゐられないね。——
障子の間から、色の黑い、眼ばかりぐりぐりとした痩せた顏が覗
いた。
名古屋。「眼疾く其れを發見け」ヨウ石井さんぢやありませ
んか？　此れはお珍しい。マ御入んなさい！——
石井と言はれた男は、監々入つて來た。四十の齡を聞いたらしく
營養の足りない、土氣色の顏色をして、黃色い汚い齒をしてゐる。
痩せたヒヨロヒヨロとした身體は、鯱張つて、脊の骨は、老人の樣
に彎曲つてゐる。着てゐる草色のモーニング・コートは何時とな
く褪色けて、その色は餘程黑ずんでゐた。筋張つた、埃に塗れた
手に手風琴を持つて、肩から斜に麵麭の入つた鐵葉の箱を下
げてゐる。
石井。「疲れたらしく椽の一つに腰掛けて」阿父さん、什麽
暫くでしたね……。その後は？
名古屋。否有難う！……段々齡を取つてね、最早駄目
てさア！
石井。——左樣てないてせう。阿父さん何さア老いて
益す〈——

名古屋。處がさ、それが益す〳〵死ぬ方へ近付いて行くんだから心細いや――

石井。アハ‥‥。

と氣の無い寂しい笑方をして、其れなり默つて了つた。

名古屋。「喜三郎に向ひ」これが麵麭屋さんの石井さんて――

喜三郎。「改まつて」ア左樣ですか――

名古屋。石井さん、これは車夫の喜三郎さんて、私の極く懇意にしてゐる方なんて――

石井。ハア――

喜三郎。「石井の顏を穩やかな眼で見詰め」――兼々貴君のお話は名古屋の阿父さんから聽いて居りますよ。什麽お氣の毒な事で――

石井。エヘヽ‥‥。

名古屋。――時に石井さん。此頃は、お身體の方は？

石井。「沈んで、足下を眺めながら」同前好けませんよ、不相變て‥‥。時々急に起るんてすからね‥‥

喜三郎。「氣の毒げに」あの‥‥たしか肺て御座んしたかい？

石井。否、癲癇です――

喜三郎。「眉に皺を寄せ」癲癇？――フーム、それは〳〵御氣の毒な！

名古屋。「熟々と石井の顏を見て」――貴君に別れてから五年目位ひになりますかね。

石井。エヽ左樣なりませうな‥‥

名古屋。その間‥‥貴君は？

石井。色々な事を行つて見ましたよ。だけどね、何時ても病氣に邪魔されてね皆徒勞です。一處に落ち付いてゐやうと思ふと、急に病氣が起きましてね、使つて吳れる人が皆驚いて直ぐ暇を出して了ふんてす――

名古屋。「痛しげに」ウーム成程。

石井。――一度なんか木挽町のラムネ屋に行つた事があるんてすよ。ある日の事ね。このう‥‥ラムネを運んてゐますと、急に病氣が發つたんてす。――私は、その當場の事は好く覺えてゐないんてすが、後

から他人の話を聽くと――丁度私が製造場からラムネを運んで往來に出た處で、急にその‥倒れて了つたんださうです。私が往來に轉るや否や、ラムネは投り出されて、凄い音をして破裂する。私は口から泡を吹きながら往來の眞中をのた打ち廻つたんださうです――

喜三郎。「身慄ひ感じて」ホーヲ危い、マア！――隨分お怪我なすつたでせう？

石井。エヽ顏から、手から、足まで、身體中何處と云ふ事なく硝子の片で大怪我をしました。而し、何しろ、私ののた打ち廻るのが餘り劇しいので、誰も手を付ける事が出來なかつたさうです。「寂しげに笑ひ」一時は、黑山の樣な人集りで、荷車や、郵便馬車まで止つて了つたさうです。

名古屋。ウムム‥‥什麼危い事ですね――

石井。それから、氣が付いてから病院へ擔ぎ込まれる。暫くして、好い按排に癒りまして、それから私は又何卒使つて呉れろと賴んだんですが、先方ぢやア最早到底もお前の樣な病氣を持つてる者は、破裂物を扱ふ商賣ぢや使へないつて、斷られて了ひました。

名古屋。「痛々しげに」ウムム‥それは！

石井。マアそれ以來色々な處へ奉公をしましたが、皆徒勞です。私の樣な病氣を持つてるとね、誰も使つちやア呉れないんですよ。――エヘヽで斯樣な商賣を始めたんです――

名古屋。「石井の持つてゐる手風琴を見詰め」――だけど石井さんは、書生さんをしてゐる時分から、それがお好きだつたんでせう？――

石井。「眼の內をギラ〳〵と燦らして、心持好ささうに」これですか？――エヽ。マ好きつてんぢや無いんですが、私は、これが無くつちやアゐられないんです。これを斯う彈きませう、什麼何とも言はれない心持ちでしてね。その瞬間は、心が段々安らかになつて、何時か此の身も一緒に恍惚になる樣な氣持ちがするんですよ――

喜三郎。ハヽ‥‥

名古屋。否でも、結構々々。無事な樂でさア‥‥。

石井。「又、元の不安な、潤んだ樣な眼差しになつて」――けれどね、これァ商賣にして、一日ブウ〱〱町から町と歩き廻つて、頭腦も身體も綿の樣に疲れちまうと、打ち捨てちまひ度くなりますよ。早く死んぢまつて、此樣な事ア切上げて了つた方が好いなんて思ひまして。‥‥「溜息を吐いて思ひ返した樣に」否、而し私は毎日斯うして疲れてゐるのが好いんです――

名古屋。如何して？

石井。――奇體な事にはね、私は斯う綿の樣に、節々が痛む程疲れてゐると決して病氣は起らないのですよ。ですけれどね、これが物の一週間も身體に樂をさせると、忽ちやつて來るんです――

名古屋も喜三郎も、如何答へて好いのやら解らず、氣の毒げに默つてゐた。

石井。ハハ‥‥因果な事です‥‥。「臺所の柱時計を見て喫驚立上り」ヤ最早直き八時か！‥‥どりや行かう！

名古屋。石井さん、未だ御飯前ぢや‥‥？

石井。否最早喰べました。今夜は此れから松井町まで行かなくつちやア――

名古屋。如何して？

石井。エヘ‥‥烏渡舊い友達の家へ行つて金の無心をね――

名古屋。左樣ですか――

石井。ぢや阿父さん左樣なら！　お身體をお大事に、又何時かお目に懸りませう――

名古屋。今何邊に？

石井。アハ‥‥不相變‥‥定つてをりません‥‥。ぢや左樣なら！

名古屋と喜三郎は默禮をした。石井は來た時の樣に、不安な煩しげな顔付をして出て行つた。

名古屋。「後を見送り、染々と」アヽ彼ア最早死ぬね。

喜三郎。「深い沈思に落ち」ム、――

名古屋。「溜息と一緒に」可哀さうな事た！　だけど、人間は生れ落ちると一緒に、大概は彼樣なもんだね。只苦勞が多いか少えので、苦しみは同じ事だ。

喜三郎。左樣……さね……。

名古屋。「思ひ詰めた樣に」己ア時々、彼樣なのを見ると、己も早くお迎が來れば好いと思ふよ！――

名古屋はそれなり茫乎と、牡蠣の樣な眼を据ゑて土間を見詰めてゐた。喜三郎は、足を組合して、脊を圓め、何時までも深い沈思に落ちた。

――時計の振子が眠たげにチックタックと響く。女中は、先刻から、臺所の柱に凭つ懸つて、いゝいくコクリ々と居眠りをしてゐた。

（中）

木賃宿の二階。十疊の室。曾て褐色であつたらしい壁は鈍黑く變つて、所々に明いた鼠穴には、古新聞や、石版摺の美人畫で張り詰められてある。その上の帽子掛には、狐色になつた麥藁帽子が一つ、色の褪めた中折と、山高と、縁無しの帽子とが垂ら下つてゐる。壁の左よりに、三尺の障子が一枚はまつてゐる。――次の間との境だ。後も、ズツと壁になつて、左壁と同じ樣に汚い。右は襖。その外は梯子段だ。

室の疊には燒跡もあれば、引掻いた所もあり、濕々と濕つてゐる。屑屋の籠、被皮、笠、股引、雨具、色々な物が處嫌はず取散してある。右の隅に、布團を一枚引つ被つて、車力の常吉は殺轉んでゐる。――惡性の脚氣に罹り、心臓まで侵されて、ゲツソリと痩せ拔け、肋骨が見える程だ。

室の眞中に五分心の釣洋燈が暗然點いてゐる。――四邊は靜だ。

馬鹿鐵は、不安の包み切れぬ蒼白い顔をして、趺座をかいてゐる。

その前に、廿四五の、圓顔で、眼の凉しい、何處か堅氣でないらしい女が坐つてゐる。――彼女の顔には、媚嫋にあり勝ちな、冷やかな、人を小馬鹿にした樣な色がある。

馬鹿鐵。――お梅！だつて、皆が左樣言つたぞ！

お梅。「平氣で白を切つて」そりやア淸さんばかりだらう

馬鹿鐵。――否、そりや淸さんは言つた。だけんど、ガラ淸ばかしぢや無え。皆は口で言はなくつても、眼顔でちやアんと言つた。

お梅。ヘエ……眼顔で物を言つたの？

馬鹿鐵。左樣よ。他人の顔見りや解る。「焦燥して」手前はな、くつつく位ゐ行り兼ない女だ！

お梅。「片頰に笑み浮べ」貴夫好く知つてるのね――

馬鹿鐵。何を？――

お梅。――妾が必とくつつくつて！

馬鹿鐵。「焦燥して」知つてるさ！　手前は誠に不常から尻が輕いッ！　直きに己の眼は盗みやがつて、彼方へベツタリ、此方へベツタリ、誰でも御座れてゐやがる—

お梅。誰でも御座れだつて？——

馬鹿鐵。左樣よ！——

お梅は片頰に笑を浮べて默つてゐる。

馬鹿鐵。「齒を喰ひ縛つて」お梅ッ！　手前は……

手が戰々と顫ひてゐる。

お梅。「冷やかに」何も其樣に怒らなくつても好いぢやないか！——お前さんだつて女郎買に行つたり何か爲るぢやないかア……。

馬鹿鐵。男が女郎買に行くなア當り前だ！　貴樣達の知つた事ぢや無えッ。

お梅。「益々平氣で」——ぢや女だつて當り前だわ！

馬鹿鐵。何が？——

お梅。何がつて……オホ……。

馬鹿鐵は憤怒に身を震はして、俄然お梅に飛び懸り、咽喉を片手でギユッと絞め、片手で力まかせに毆らうとした。寢てゐる常吉は、半身起き上つて、『お止しなさい〳〵』と言つたが、動悸が劇しいので聲は切々で思ふ樣に出なかつた。お梅は馬鹿鐵の腕を引掻いて、ヤツ〳〵振りもぎつた。そして、『旦那來て下さいッ』と金切聲で叫んだ。馬鹿鐵は、更に咽喉を覘つて飛び懸つたが、お梅は室の内を小鳥の樣に疾く逃げた。

——梯子段を駈け上る音がした。頭の眞中の禿げた嚴丈な、亭主の權七は倉皇、襖を明けて入つて來た。

權七。「馬鹿鐵の前に立ち塞がつて」危えッ〳〵、何するんだ鐵さん！

馬鹿鐵。「血相を變へ」何しても好えッ、己が情婦己が勝手に爲るんだ！

權七。己が情婦？……己が勝手にする？……「聞き直つて」そりやア鐵さん少と理不盡ぢやねえかい？　理窟が違つてやしねえかい？

馬鹿鐵。何がよ？

權七。オイ鐵さん。此女アお前の情婦でゐて、お前の儘になる情婦ぢやアねえよ！

馬鹿鐵。何ッ？——

權七。 何ちねえ。お前は己に何ていふ證文を入れたい？ 金をお返しするまでは、お梅をお預け申すつて言やアしなかつたかい？――己が預つてゐる內ア、己が護るつて義務があるんだ。他人に指一本でも差させねえ！

馬鹿鐵。 何獸物ッ！ 己ァお梅の身體までとは言はねえ。

權七。 當り前よ。誰が手前の情婦を抱ら寢為たい？ 好いかい、己は親切であつて、お前の為にも、又唯一人殘されて行くお梅さんの為にも――

馬鹿鐵。 好い加減なおべんちやら止しにして貰はう！ お前が抱寢したといふものがあるから仕方がねえ――

――

權七。 「嘲笑を浮べ」マ馬鹿は休み々に言つて貰はう……。なッ文句は言はねえで金を持つて來な。左樣したら、己は默つて證文を破いて、お前の情婦をお返し申すから……。それから毆るとも、殺すとも勝手に為るが好いや――

馬鹿鐵。 「怒に戰々に戰え」必とか！

權七。 當り前よ！

馬鹿鐵は、何と思つたか、帽子を引掴んで、默つて梯子段を駈け下りた。

權七。 「呆けに取られて」――ウップあれだ。馬鹿と狂人に付ける藥が無つて言はア――

お梅。 「凭り添つて」あゝ驚いた！

權七。 「肩を柔しく抱へて」如何したい、彼の馬鹿は？

お梅。 だつて、マア……妾の咽喉をギユッと絞めるんですもの――

權七。 アハ……人を馬鹿にしてやがんなア。サ行かう

――

二人は階下へ降りて行つた。室の內は、ガランとして靜てあつたと暫くすると、《都々逸ア……野暮で……も……》と階下で美い聲が聞えたが、トン々々と二階へ上つて來る足音がした。そして又『チイ早く入つて來ねえかよ』と言ふ聲が聞えた。二十五六の角刈の兄哥が先て、六七人の浮浪漢がドヤ〳〵と入つて來た。吉公と上州はその間に見えた。

角刈の兄哥。 「一聲を徐めて、皆に向ひ」好いかいヲイ！ 此處

は直き手が入り安いんだから、その積りで靜に行つて貰はなくつちやア行けねえよ！

五六人の中の一人が點頭いて見せたが、皆は座蒲團を眞中に置いて、その周圍に車座になつた。そして、釆と壺とを持ち出した。切めは密々と穏やかであつたが、勝負が進むに連れ、皆の眼は鋭く凄くなつて、聲も段々荒々しくなつた。『己ア半だ』とか『長だ！』とかいふ聲は騒しくなつた。

二つの釆は年中活躍いてゐた。長方が勝つて半方が負け、半方が勝つて長方が負けた。時々堂取の『ケ三の長！』『四さうの半！』『一六の半』『四の二』『四ッチ！』『三道の半！』と底光のする強い聲がした。

常吉。「掠れた微な聲で」……何卒濟みませんが……お靜に……什麽……頭に響けまして……

浮浪人の一人。「凄い眼をして」何ッ？

常吉。何卒……お靜に一つ……

浮浪人の一人。「粗氣に」五月蠅ッ默つてろい、饒りぞくねえ奴！

常吉は厭な顔をして默つた。

他の浮浪人。「蛇の様な眼をして、憎々しく」野郎ッ贅澤言かねえて饒つちまへ！

皆は、病人に見向きも爲ないで博奕を爲續けてゐた。——暫くすると、下の廊下を驅けて、急いで二階へ驅け上つて來る足音がした。

皆は言ひ合した様に愕然と眼を見合して聽耳を立つたが、堂取をしてゐる角刈の兄哥は、急いで釆と壺とを自分の腹掛の丼に突つ込んだ。

亭主は倉惶て入つて來た。

權七。「セカ〳〵しながら、嗄聲で」疾く、疾く逃げねえ！角袖の巡査が——

皆は、血相變へて我先きに左の障子を明け、次の間へ飛び出た。と間も無く、一人の平服の巡査がノッソリと室に入つて來た。

權七。「丁寧に辭儀を爲ながら、常吉を指差し」ヘエ、此處にをりますのが、その……西野常吉と申しますもので御座いますヘエ。

巡査。「輕く會釋して」ア左樣か！「寢てゐる常吉の方を向お前か、その西野常吉といふのは？——

常吉。「漸く半身起き上り、喫驚した眼をして」ヘエ……

巡査。ム、……。「權七に」ア有難う、お前は最早宜敷い

……。

權七は、何が起つたかと聽きたさうであつたけれど、仕方なく悄々と出て行つた。

巡査。ア、私はね、本所署の巡査だがね、お前に鳥渡聽き度い事がある。

常吉。「氣使しげに」へエ……。

巡査。お前の妻は？……名前は？……

常吉。「猶氣遣しげに」へエ鳴アの野郎で御坐りますか？——彼女は、お絲と申します——

巡査。フム……。小供は？

常吉。餓鬼は三人で……。惣領の野郎が十一になりまして、下の二人は女で御座います……へエ……。

巡査。「首を傾け、凝と常吉の顏を視入り」お前は餘程貧困の樣だが……。それに身體が好くないさうだが……

常吉。へエ最早餘程前からドッと寢付きまして……今日で何でも一月の餘になりますで御座います——へエ。

巡査。病氣は？——

常吉。最初は、永樂病院で見て頂きました時には、脚氣だつたさうで御座いますが、今日ぢや大分心臟が惡う御坐います——へエ。

巡査。左樣か。「鹿爪らしく凝と考へた後」お前の妻は、少し面長の淺黑い方で、左の眼の下に大な黑子がありやしないか？

常吉。「如何して知つてるかと怪訝な面持で」へエ仰有る通りで御座いますが——

巡査……ぢやお絲と云ふのは、あれはお前の女房に相違ないのか？

常吉。へエ——。「巡査の顏をソッと見上げ、恐怖に滿ちた面持で次の話を待つてゐた。」

巡査。實はね。その……お前の妻が、署の方へ上げられてゐるんだがね……。

常吉「愕然として」お……お……お絲が貴下の方へ？

巡査。ム、——

常吉。「心臟の呼動が劇しくて、言葉の間々に氣息切れがして」ど……如何して……自體……上る樣な事に……な

りましたんて……ございませうか？

巡査。「靜に」淫賣のね現行犯だ。——

常吉。げ——！

巡査。現行犯といふのはね、行つて居る處を捕つた犯罪なのだ。何ても富川町の旅宿て客を取つてゐたさうだ。——

巡査。常吉の顔は、強い電光にても打たれた刹那の様に、唇の色が變つた。身體は宛然知覺を失つた様てあつた。「靜に」——而し當人を段々訊問をして見ると、餘程な事情があつて爲た事らしい、とマア思へたんだ。我儕は、永い經驗て、此女が莫連女だか、未だ初心だかは、一目て解るが……お前の妻を見ると、署長始め他の係吏も、什麽餘程深い事情があるらしく推察されるんだね。——それに、色々な話を聽くと、全くの嘘ても無いらしい……。

常吉。「聲を顫はし」へ最早實に——

巡査。て、署の内ても、或る者は詐僞女だから、ドシ〳〵拘留にしちまへつて言ふ說も有るんだけれど、署長が、別に思ふ所があるもんて、私を鳥渡下調べによこした解なんだ。——

常吉。「ボロ〳〵と涙を落し、男泣に綴泣をしながら」旦那、旦那、全くて！嬶アが其様な事を爲ましたのも、實は行り切れ無え事情がらなんて御座います——

巡査。ム、——

常吉。こ……これが、私の身體さへ丈夫なら、何嬶アや餓鬼を路頭に迷はせる様な事は決して御座いません。假令骨がしやりになつても、勞働いて稼へて、女房子にやア饑い思ひなんざアさせや致しません。てすけれども、何しろ身體は全々をやして了ひまし、それに少と蓄めた小金は何時の間にか消えちまひまして、今ぢやア如何する事も出來ないんて御座います。稼手をもがれちまつた處ぢやなく、その肝腎の稼手が、返つて家中の厄介者になつちまふ様な始末て——

巡査。フーム……。而し醫者は？

常吉。——醫者に懸る程なら別に紛騷は御座いません

が、その醫者處の騷ぢやア御座いませんのです——。此處に居ります宿料は溜つちまひます。その上句の果に米を買ふ錢も無くつて、藥どころか、碌々飯も食ふ事が出來ねえ樣な始末で御座います……。へエ。

巡査。「凝と視詰め」フム……。

常吉。マア此の私は手前の强がつくばつてゐるんだ、何も運扶天扶だと斷念めますが、未だ頑是無い物の解らねえ子供に、『阿母ちやん、お腹が空つたからお飯お呉れよう……』と泣かれると、それを聽いてるこの私や、嚊アが、實に……胸を……搔き毟られるより辛う御座います……。旦那！ 嚊アの野郞が出て行きましたなア實は最早やり切れないからなんで御座います……へエ。

何卒頑是無い餓鬼共が哀れだと思し召しになりましたら、嚊アの野郞を一刻も疾く返して遣つてお呉んないまし……。で無えと、脾弱え餓鬼等が如何なに……不自由を爲るだらうと思ひまして——

その後は、唯唇を顫かせ、面を蹙め、胸を波立たせて泣くまいと身を慄はすばかり、聲も碌々立て得なかつた。

巡査。「哀れげな眼で見て」ア好し好し！ そのう……お前の困つて居る事を好く署長にも話し、何とか旨く話が付く樣にしてやらう……。

常吉。「丁寧に辭儀をして」へエ……什麽有難う御坐います——

巡査。でな、若し何だつたら、お前は病氣の癒るまで養育院の方へ送る樣な手續をして遣つても好い——

常吉。へエ什麽有難う御座います。——

巡査。ぢや、マ大事にして、上さんは何とかして遣るから——

常吉。へエ——

巡査は出て行つた。常吉は、床の上に起き返つて、孤然と取り留めもなく色々な事を考へてゐたが、その顏色は宛然死人の樣に惡かつた。

暫くして、少な足音がパタ〳〵と聞えた。小供が三人入つて來た。男の子は十一。女の子は七歲に五歲。惣領の顏は、面憔悴がして、唇も薄く血の氣がなく、小供のやうにもなく、その眼は物思はしげであつた。

常吉。「無理に厭し出して様に笑いながら」健三あつたの？

健三。「突立つたまゝ、足を踏み延して、吃驚した眼で」オヤ阿父さん起きてるの？——ウ、ン鳥渡も無いつて！

お松。「指を舐りながら、兄貴の眞似をして」——阿父さん無いつて！

途中で泣き〳〵歩つて來たらしく、眼の邊は眞赤に泣き腫してゐる。

常吉。無いつて？——

常吉の顔には、深い痛苦が浮び出たなり、引込むのを忘れた樣であつた。彼は亦、深い沈思に落ちた。三人は、茫乎としてゐたが、親父の四圍に默つて座つた。

健三。——ねえ阿父さん！　マッチ屋の主婦さんはねエ、此の頃非常い不景氣だから、外へ内職を出す程仕事がないつて——

親父は默つて考へたなり、返事を爲なかつた。

健三。何ても隨分不景氣なんだつで……「妹を顧み」ねえ千代ちやん！

お千代。「首を立に振つて」エ、何業でもカス〳〵だつて言つたわ——

話が暫く途斷れる。一番末のお松は、内所でシク〳〵、啜泣を始めた。

健三。「柔しげに、眼に當つてゐる妹の手を取つて、そして顔を覗き込んで」——アラ又泣く！　お松ちやん最早泣くのお止しつてば！　歸つて來る路々でも澤山泣たんぢやないかア！

常吉。如何して泣いたのかい？——

健三。ねえ、歩いてゐてね、お腹が空つた〳〵つて、いゝぢぶ〳〵つて仕樣がないの！　てね、最早歩くの嫌だつて言ふんだもの——

お松は、最初はシク〳〵と啜泣をしてゐたが、次第々々に泣募つて、吃逆り上げ〳〵妙にオ……と後を長く絶え〴〵に、直泣きに泣き出した。

健三。——歩けないんなら、千代ちやんに下駄を持つて貰つて、私が脊被して遣らうつてのに、『否だ〳〵』つて泣くんだもの……如何したら好いか解りやしない！

常吉。「眼に涙を一杯蓄め」お腹が空つた？——お松、サ其樣に泣かずに阿父ちやんの方へ來な！　なッ。そうして、阿父ちやんに抱こして、少との間寢んねして

な。――さうしたら、直きにお飯を食べさして上げるからな……な……。

と親父はお松を抱き寄せて乳を飲ませる時の樣に、抱へたが、お松は猶火の付く樣に泣き續けた。泣く間、時々「阿母アち……や……ん」といふ聲と、「お飯……ア」といふ聲と、掠れ々に聞えたが、後は兩手で面を掩して、親父の胸にヒッタリ壓し付けてゐるので、好くは聞き取れなかた。

お千代。「フト氣が付いて」オヤ……阿母さん未だ歸らないの？――

常吉。・阿母さんか？――

健三。「心配さうに」何處へ行つたの？――

常吉。「言ひ淀むで」阿母さんか？――

お千代。隨分遲いわねえ……も先刻出て行つたんでせう？

常吉。――阿母さんはね……急に巡査さんに連れられて、本所の警察に行つてるよ――

健三。「眼を瞠つて」――如何したの？

お千代。「恐怖に襲はれて」――如何して？

常吉。「涙を見せまいと顏を素向け」お前達にね、お飯を喰させ樣と思つてツイ惡い事を爲たんだよ。……だから、此れから警察の方へお前達して上つて、何卒阿母さんを返してお呉んなさいましつて、御願ひ申して來な……な什麼……さう爲るより仕方が無え……

健三は、呆けに取られた樣な顏をして、ポカンとしてゐたが、女の子の氣の弱さに、お千代は堪らず啜泣をしてゐた。

常吉。なッ、だから警察へ上つたら――好いか健三！――巡査さんや警部さんの前へ出ても、恐惶しねえて、確りお願え申すんだぞ！……今……親父の野郎は、身體が惡くつて身動も出來ません……て阿母さんを返して下さいませんと、……私共此處にをります此の三人が、明日から御飯を頂く事も出來ず、難澁致しますつて……好いか！何卒御返し下さいましつて……。「トロ〳〵と寢込んだお松の顏を見て」この……一番下の妹などは、朝からお飯を喰る事が出來ませんから……泣いて、泣いて……泣き通しに泣いて居りますつて！――好く巡査さんの前で言ひなよ！

健三。 ウン——

常吉。 お千代、お前も泣くんぢやねえッ。お前は姉さんだから、お松の手を引いて、兄さんと一緒に好く欺し〴〵連れて行くんだよ——

お千代は默つて、首を立に動して見せた。

常吉。 健三、お前警察知つてるな？——

健三。 アヽ・・・・ホラ彼處を曲つて、電車通路眞直に行くんだらう？

常吉。 左樣だ〳〵。「お松を抱き起し」サお松！ お松！兄ちやんと一緒にお使ひに行つてお出て！——

お松は、急に起されたので、眼を擦りながら寢呆けてメソ〳〵と泣き出した。

常吉。 又！ 泣くんぢやないよ。——兄ちやんと一緒に戸外へお使ひに行つてお出て・・・ 兄ちやんはパンを買つて上げるとさ——「眼で健三に知らせる」。

健三。 「引取つて」ア麵麭を買つて上げるよ、澤山ね！

「手を引き、顏を覗き込むて」サ行から・・・・ねり。

お松は泣き止んて幾度も合點々々をした。片手は兄に引かれ、片手は自分の口の内へ突込むで、舐りながら立ち上つた。お千代は、氣遣はしげに妹の顏を覗いたがソッと柔しく肩に手を置いた。

——三人は、一緒になつて出て行つた。

常吉。 「後を見送り」氣を付けて行きなよ・・・・氣を付けて・・・・電車に轢れない樣にね・・・・。

階子段の中段て、健三が『アヽ』と返事をした。室は闃然として何の音も無かつた。何邊やらて、微な尺八の音がしたが、それは近所では無いらしい。常吉は、沈默を聽く樣に、眼を据ゑて、何時までも凝と考へてゐた。

と、急に熱い泪をハラ〳〵と膝の上へ落した。そして、思ひ詰めた樣に幾度も立ち上らうとしたが、膝がガク〳〵してゐるんて、思ふ樣には立てなかつた。焦燥として身の四周の物を見廻した。床の横の疊の上に、自分の褌があつたので、彼はそれを慌惶て拾ひ上げ、フラ〳〵とした手で漸く眞中の梁へ投げ懸けた。そして、それを賴りに立ち上つて、その先を堅く結むだ。

彼は、それを賴りに、何處へ行くのかと思つたら、何邊へ行くのでも無かつた。自分の枕を足て擦り寄せて、それを脚繼に延び上つたが、褌へ首を吊すと仝時に、輕く枕を蹴つた。

始めの内はグーと言つて、眼を白黒と苦しげに動してゐたが、病者の事だから永くはなかつた。・・・・

室の洋燈の光は暗く曇りとして、その物淒げな光線は、煤けた壁と襖とに幽閉められて、凝と薄錆の様に沈んでゐた。遠くに聞えた尺八の音はパッタリと消えて、人の耳語すらしなかつた。

――夜は益々靜であつた。

（下）

其翌る朝。同じ木賃宿の、階下の六疊の室。後は壁になり、その上に細長い磨硝子の入つた小窓が切つてある。左の方に、亭主の常住になつてゐる四疊が見える。――拭き込んだ長火鉢と、茶簞笥が置いてある。そして、壁には、鬱金の衣に包んだ三味線が一挺垂ら下つてゐる。亭主とお梅は、膳を眞中に、向ひ合つて酒を飲むでゐる。お梅の脇には、三味線が横になつてゐる。時々、甘つたるい笑聲がする。

左右は二枚の唐紙。左よりが戸外への出口。右は二階へ上る口だ。

名古屋は無袖袢纏を着て、足袋の裏を繕いてゐる。

苦學生の金子と、石鹼賣の田中新吉とは、室の眞中に趺坐をかいて、頻に話し合つてゐる。戸外には小歇なく劇しい雨の音。

田中。「眼鏡を掛けた、頭の眞中のツルッと禿げた、人品の好い四十格好の男」――マ誰も知らなかつたといふのは實に不思議さね。――「烏渡首を捻つて」だけど、氣の付かなかつた事も、付かなかつたんだなア――

金子。「厳丈な横廣な青年。制服の上から袢纏を羽被つてゐる」而し、知らんていふのは迂濶極る話だね。

田中。否、それがね、仕方のない話があるんだよ――

金子。如何して？

田中。何でもその前に巡査が一人訪ねて來たんださうだ。すると、丁度奴さんの室で、皆で博奕をしてゐたもんだから、それ手が入つたと思つて、我勝ちに隣りの室から逃げて了つたんださうだ。て、恐怖が付いて誰もちよつくら室へ歸らなかつたんだつて！……サそれが惡かつたんだね。巡査は烏渡奴さんと話をして歸つたんだから、直ぐその後で誰か室へ歸りやア好かつたのに、未だゐるだらうと思つて歸らなかつた。――暫く過つてさ、最早好い時間だらうて歸つて見ると、奴さんがブラーリ！ それから上へ下への大騒ぎ……。「首を捻つて」如何してマ巡査が來たのかね。それから又、首を吊つたのも原因が烏

渡解らない！——

権七。「隣りの室から大な聲をして」何お前さん、あの巡査の來たのはね、何でも女房が淫賣をして拘引れたからださうですよ。——

田中。淫賣を？　如何してマア？——

権七。何ね……亭主にや病み付かれる、小供にやア朝から「お飯々」て乞られるから仕方なしにね——

金子。而し内職でも——

権七。それがさ、今、不景氣のどん底だからね、自體索しても無いやね。爲手が多くつて、仕事が少えんだから——

名古屋。「針仕事の手を休め、一寸頭を持上げて」全く爲手が多くつて、仕事が少えね。何でも當今は機械々々て、人間の手は少とも入らなくなつて了やがつたから、此方徒等貧乏人は益々困るばかりだ、……此の分で行きア終局にや飯の喰ひ上げだね……

田中。ム、全く……

名古屋。……マア常さんなんざア本當に貧乏鬮を引いたんだね。あの若さで、死病に取付かれるなんて！……三人の小供を殘して、さぞ死に心地が惡かつたらうなア……。嚊アは嚊アで又、常さんの病氣を癒さう、小供も饑死に爲まいと思ふから、仕方なしに亭主持ちて居ながら淫賣に出たんだらうけれど、此女も亦悲慘なもんさね……。

権七。——可哀さうは可哀さうさ。だけど——

名古屋。「他人の言ふ事は構はずに」……皺の寄つた顔は、お前、お白粉で誤魔化せらア。唇は紅粉を差しア奇麗にならアな。だけど、心の苦しみ……ねッ……心に密着いた染つて奴ア何を塗つたつて中々誤魔化せるもんぢやねえからね、そこが可哀さうさ……。

田中。「煙草をスパリと一つ吸つて、ポンと灰吹を打き」——隨分當人の胸の内は苦しいだらうね……。

名古屋。左樣さ。そりやお前何の位苦しいか解りやしねえだらうよ。……

皆は暫く默つた。と急に先刻から沈思に耽つてゐた金子は、思ひ詰めた樣に、「あゝ徒勞だ！」と投げ出して言つた。

名古屋。「吃驚した眼をして」何が徒勞だい？——

金子。僕等も、一つ運惡く蹟くと、常さんの樣に首を縊らなくつちやならなくなるかも知れないね‥‥。絕望だ！ 此樣な處に何時までもグズ〱してゐちやア‥‥。

田中。「寥しげに」誰だつて左樣さ。左樣思ふけれど中々自由にア行かないよ。一度此處へ來ると、匐ひ上らうつたつて最早容易にや匐ひ上れないさ。

名古屋。「合點々々をして」マア穴だ。‥‥自體見ねえ‥‥己ア廿年此の方、木賃宿生活は爲てゐるけれど、一匹も此處から匐ひ上つた奴は見た事ァねえや。

金子。「沈んで」左樣かねえ‥‥

名古屋。此樣な風儀の惡い土地にゐて、學問爲やうたつて無理ぢやねえか、エ金子さん！ ね、泥醉學、買春婦學、長半學‥‥此樣な學問の修業は出來るかも知れねえけれど、眞正の學問は石部金吉だつて出來つこねえよ。

金子。「苦笑して」フヽン‥‥。

名古屋。フヽンぢやねえ、眞實だ！ 此處に少と長くゐると、最早直にお太陽樣は無くつても、酒は無しぢやゐられねえつて樣になるんだ。‥‥ 間夫は朝飯前ぐれえにね。

金子。「急に頷いて」左樣だ、お親爺さんの言ふ通りだ。‥‥だが僕だつてね、最初は此樣な所へ來やうとは思はなかつたんだよ。だけどね‥‥

名古屋。左樣だらう‥‥

金子。‥‥だけどね、東京へ來たつて身寄り賴りの有るんぢやなし、懷中にやア一錢の錢があるんぢやないから、何時の間にか、此樣な處へ來る樣になつちやつたんだよ。‥‥

名古屋。その『何時の間にか』が惡いや！ 何故猶早くなア‥‥。お前さんなんざア未だ白い絲だ。何にでも染めてえ色に染められる年齡だ。‥‥惜いもんだなア。‥‥

金子。何しろ、初めて新橋の停車場に着いた時なんざア心細かつたね。右を見ても左を見ても、知つてる

者つて云つたら一人も居ないだらう。腹は空つて來る、行き處はない。そこで仕方がないから停車場の周圍を彼方へハッ〳〵、此方へハッ〳〵してゐたんだよ。

するとね、彼處にゐた車夫の親方が僕を發見けて、色々と訊いて吳れたんだよ。て、到頭行き處が無いと聞いたもんだから、親切にね、僕をその親方の家へ連れて行つて吳れて、マ二三日居ろと云ふ譯なんだ。

名古屋と田中。　ム、……。

金子。　居る間、風呂炊をさせられたり、雜用をさせられたりしたさ。而し、さう何時まで厄介になつてゐる譯にやア行かないから、何か喰ふ道を索さなくつちやならない。そこで、親方に又、頼んで見たんだ。處が、親方の言ふには、今之といふ奉公口もないけれど……ぢやア……　己の兄弟分が、築地の小田原町で土木の請負をしてゐるから、其方へ廻して遣らう……つてな事になつたんだ。

名古屋と田中。　フム……。

金子。　東京へ來て一週間から土方さ！　丁度その時は、このう…　今の宮城前の凱旋道路ね……あれの造へ最中だつたんだ。

田中。　凱旋道路のかい？

金子。　ム、彼道さ！……て朝から、日のトップリと宮城の後に沈んで了ふまで、襯衣と褌一本で泥運搬を行つたのさ。僕ア今でも彼の時の事は忘れられないね。

田中と名古屋は笑つた。

金子。　郷里を出る時ア、東京へ行きやアマア如何にかなる、直に苦學位出來ると夢を見てゐたけれど、まさか、土運搬を行らうとは思はなかつたね。

田中と名古屋は又笑つた。

金子。「眞面目に沈んだ顏付をして」何しろ、畚に山盛り一杯泥を乘つけて、それを太い丸太ン棒で擔ぐんだらう。それは〳〵骨身に答へて、死ぬ程苦しいや！最初の晩、室に歸つたら、飯も食へず、一晩床ん中

て呻つちやつた。

名古屋。 始ぢや左様だらうなア……

金子。 その翌る日も亦同じ勞役さ……。人間の食はない樣な塵だらけな辨當飯を喰つて、泥にまみれて勞役を爲るんだ。僕はその時、最早餘程死んで了はふと思つたね。

名古屋と田中。「兩人とも眉に深い皺を寄せて」フーム、……。

金子。 丁度三日目のお茶請の時さ。疲れちやつて、落膽と、自分の運んだ泥の上に腰掛けて、考へ込んで了つたんだ。眼の前にはね、廣々とした宮城前の廣場が擴つてゐて、濃い綠色をした松の林は鬱蒼と遠くに見えるんだよ。――そして、處々その間から、昔風の城の屋根と白壁とが顏を出して居てね……

兩人とも聽き惚れてゐる。

金子。 ……四邊は靜かで、只廣々として、何の音もしやしない。他の土方等ア最早一團塊になつて長半を行つてゐやがる。僕は孤然として、獨りて暫く考へてゐたが、思はずボロボロと淚を翻しちやつた。……

名古屋。「力を入れ」ム、!

金子。 ……唇を堅く嚙み締めて、手をギユツと握り絞めて、泣くまいと思ふけれど、淚は後から後から煩邊を傳つて、停度なく出て來やがるんだ。……僕はその時さう思つたね、『あゝ己は今、泥を擔いでゐる。泥を擔いて、道路を埋めてゐる。而し、己は何時の日か、二頭立の馬車で、威張つて此道を通行つて見せる!……』と思つたね。

田中思はず苦笑する。

金子。「熱して」僕は東京へ出て來る時にア、傳染病學の研究を爲やうと思つて出て來たんだ。而し、その時から、傳染病の研究なんて、そんなまどろつこしい學問なんか打捨つちやつたんだ。

田中頷いて見せる。

金子。 僕は必となる。何時か必とさうなる。見てゐ給へ!

名古屋。 何時つて何時だい?

金子。何時かさ！　アハ……

話は途断れた。そして、皆は妙に默り込んだ。二階の室からは、絶えず月琴の音、法界節、義太夫、人の話聲やら笑が漏れた。

金子。「大儀さうに立上りながら」どりや一つ出掛け樣かな――

田中。何處へ？

金子。エ？――今日は勘定取り――

田中。ア、十五日か！

金子去る。

名古屋。「後を見送り、出て了つてから」先生は中々偉者だね

田中。「苦笑して」何しろ若い盛りだからね。……

名古屋。「暫く沈默した上句」……此の頃は？……商賣は？

田中。「首を横に振つて」全然――

名古屋。――好くないの？

田中。何だつてお話にならないね。最早、此の東京中は幾程グル〳〵足が棒になる程歩いたつて徒勞だから、近頃ぢやア近在へ出掛けるのさ……。だけど、近在も餘り面白くないねえ――

名古屋。而し、石鹼屋なんざア口から出まかせな駄法螺て吹きッ飛しちまへば好いんだらうがね――

田中。「苦笑ひしながら」それがさ、左樣行かないんだよ。そりやア君の言ふ通り、石鹼屋は、それこそ二錢の品を持つていて、十五錢にも廿錢にも賣り付けなくつちや喰つて行けないんだけれど、それは僕には……實に此う……自分の良心で奴に恥ぢてね――

名古屋。そんな事言つてちやアだめだなア……。

田中。――それがさ、實行て見ると實に辛いもんだよ。マ在方へなんぞ賣込みに行くだらう。左樣すると、此頃ぢやア粗造品の石鹼屋に懲りてゐるから、全然相手にして吳れない。……其奴を、生搾れの若農夫共に馬鹿にされつゝ商賣して行くなア實に厭だよ。それも、澤山儲けがあるんなら又何とか我慢も爲るけれど、一日歩いてやつと十五錢か廿錢て事があるんだらう。元價を引かうもんなら全て幾程も手の内に殘りやアしない。……

名古屋。「低く笑つて」エヘ……石鹼屋さん未だ新米だから

ら困るなア……。お前さん儲け度いと思つたら、何ても旨く嘘を吐かなくつちや行けねえ！　此りやアマア別の話だけれど、己ア一邊御寺の方丈さんに訊いた事があるんだよ。如何したら、此の……旨く儲けられて、樂が出來ませうつてね、すると、その坊さん暫く考えてゐたがね、『何でも此の世の中で樂を爲やうと思つたら、旨く嘘を吐け。嘘の吐き樣一つて如何にでもなる』つて……

田中。フウン……。變つた坊主だね。……

名古屋。『凡そ、耶蘇で言ふ天國ても、佛樣の方の彌陀淨土ても、ありやア皆好い加減な空言て、世の中の愚者や慾張りに、眞實の事を言つて聽かせたつて解らないから、彼樣いふ假令をして見せたんだ。處が、その嘘が旨い拍子に當つて、大な宗旨を興す樣になつたんだ』つて……。旨え事を言ふ方丈さんだね。己ア此の老齢になつて、未だ此樣な偉え大した坊さんに會つた事アねえね。賜け出して言ふ處が實に豪氣なもんだ！

田中。ム、面白い事を言ふね。——そりやアそれに違ひないさ……。

名古屋。て、その坊さんは猶面白い事を言つたよ。それはね、此の世の中には嘘と言ふものもなければ、眞實といふものもねえつて！……唯『生きてる』といふ事ばかりがあるんだつて。だから、暮し好い樣に、嘘ても眞實ても勝手に言へつて！

田中。フーム……。乙な事を言ふね。

名古屋。——石鹸屋さんが嘘を吐く位當り前だアな！いゝ、どし〳〵行つたら好いぢやねえか！

田中。「苦笑を洩して」ウフヽ……左樣も行かないさ。……

田中はそれなり默つて了つた。二階の罵聲は猶手に取る樣に聞えて來た。

名古屋。「耳を澄して」二階て大分騒いでやがるな、誰だらう太十なんて唸つてる奴は？……ア上州らしいな！

田中。ム、「伸を一つして」あヽあヽ、今朝は雨が降つて

るせいか、何だか氣が重くつて仕樣がない。阿父さん、二階へ行かないか？

名古屋。ウム……マ鳥渡待つてお呉れよ。「性急しながら」今鳥渡待針を打つて置くから……。

名古屋は、縫ひ片けの足袋を持つて、チヨコ〳〵と細く手を動かしてゐたが、それを片付けて、二人は二階へ上つて行つた。

暫くして左の唐紙が明いた。

昨晩と同じ洋服を着て、馬鹿鐵はノツソリと入つて來た。六疊の眞中に突立つたまゝ、茫乎としてゐたが、權七とお梅を見た眼は、妙に鋭かつた。

馬鹿鐵。「鳥渡辭儀をして」お早う、酷く降りますね。權さん濟みませんが一寸……。

權七。ヤお早う。……何か用？

馬鹿鐵。「坐り込み」エ、鳥渡——濟みませんが、顔を借してお呉んなさい——

權七。「馬鹿鐵の脇に坐り」——何だね？

馬鹿鐵。實は、昨晩歸つてから市村の親方の處へ行つてね——

權七。「相手の顔を凝と見て」アヽ——

馬鹿鐵。——金をマア……工面して貰ひました。——

權七。「嫌な顔をして」アヽ左樣かい。そりやア好かつた。

馬鹿鐵。て實ア今朝、お梅をお返しを願つて、それから證文も卷いて頂かうと思つてね……。

權七。ア左樣。それは大層好い都合に行つたね。——

馬鹿鐵。「胴卷の丼から新聞に大事さうに包んだ紙幣を出し」エヽ有難う御座います。マ市村の親方も、大變心配して下すつてね。——

權七。「意地の惡い眼をして」ムーム。

馬鹿鐵。ぢやマア此處に廿兩ありますから、宜敷く願ひます。——

權七。「暫く凝と疊の上に置かれた紙幣を眺めてゐたが、返事もしなければ手を出さうともしなかつた。」——鐵さん！

馬鹿鐵。エ？——

權七。廿兩だけで濟むのかい？

馬鹿鐵。「傲然として」だつて廿兩お借り申したんだから——

權七。「嘲弄する様な笑方をして」チエ馬鹿にしちやア行けねえ。幾程お前が甘いつたつて、廿兩の金を他人から二月も借りて置いて、へエ廿兩お返し申すおちや濟まねえぢやねえか！

馬鹿鐵。如何して？

權七。如何してつて奴があるかいオイ！　金を借りりやア金利といふものがあるんだ。エヽ金利と云つてな、利子を拂はなければならねえんだ。

馬鹿鐵。利子？——だつてお前さん己に錢を貸す時何て言つた、エヽ？　永い馴染だ、何も利子なんて其様な水臭い事は言はねえから、安心してお梅を殘して行きなよつて言つたてねえか！

權七。「鼻の先で笑ひ」フン蟲の好い事言ひなさんな。證文を見ねえ、エ證文を！　ねえ、いヽイザつて時に己ア間違が起ると行けねえと思つて、ちやんと證文で歌つて置いた。ね、利子の處は一錢日分だつて——

馬鹿鐵。利子がか？——

權七。左様よ。一圓に對して日に一錢、廿圓て日に廿錢、——ねッ。そこをお前が調度六十一日間借りたから、計算して見ると、十二圓廿錢んて物ア此處ん處拂つて貰はなくつちやア困らア——

馬鹿鐵。「眞蒼になつて」十二圓廿錢？——廿兩死ぬ苦しみをして借りて來たものを、如何して十二兩からの利子が拂へるい？　權さん、其様な無理な事を言はねえて……。第一最初の約束がそんな詐僞……

權七。何が詐僞だい？——

馬鹿鐵。「氣を損ずまいと恰惶て」否、最初お前さんが言つた事とは大分違ふて無えか？

權七。「紙入の間から證文を出して」最初にも後にも物を言ふなア證文だよ。「鼻の先へ突き付け」コウ詐僞てな人を誑る事たよ。己ア他人様を誑つたり、ペテンに懸けたりする様な惡黨ぢやねえッだ！　大概に他人を瞞着すんないッ！

馬鹿鐵。「血相を變へ」己何もお前を瞞着しねえッ。「四邊の方か見て」お梅！　己ん所へ來う！　一緒に行いから！

権七。一緒に行く？　箆棒めい彼女ア手前の情婦ぢやねえや。連れて行かうつたつて己が承知しねえッ！

馬鹿鐵。「戰々と拳を震はし」……ど何の件をもつて……お前は……其樣な……

権七。何の件もへつたくれもあるかいッ！　ナ其樣に可愛い女なら、三十二兩と二貫の錢をちやアんと耳を揃えて持つて來な……。

お梅。「四疊に横坐に坐つてゐながら、醉拂つて、甘つたれた聲で」妾嫌だわ、お前さんと一緒に行くの！　商賣が無くつて、散々苦しむ上句へ持つて來て……何時てもしつこいんだもの……

馬鹿鐵は、勃然として立上つたが、その蒼白の顔からは、憂悒の色は何時か消えて、一種殘忍な野性が現はれてゐた。

馬鹿鐵。お前達兩人して、好くも陰謀むだな！

権七。フン！　陰謀まれる手前が痴鈍なんだい！

権七の、ギロリとした凄い眼は、馬鹿鐵の殘忍な眼と會つた。女を奪はれた男の眼、女を奪ひ返されまいとする男の眼、――此の二つの視線は衝突つて、宛然憎惡の焔に燃え立つてゐる樣であつた。

馬鹿鐵は、急に、とある猛獸が餌物に飛び懸ろその前の瞬間の樣に、ソッと呼吸を殺して身を構へたが、低い唸りと一緒に権七を張り倒した。

権七は、毆つた馬鹿鐵の手をムッと掴んだ。その顔は忿怒に赤かつた。

二人は組み合つたまゝ、上へ下へと轉々と組ず解れつ物狂はしく掴み合つた。上になつた馬鹿鐵は、力まかせに相手の咽喉を絞めた。が、それも漸ち跳ね飛されて、今度は彼が下になる。『野郎ッ』と猛り狂ふ聲がする。馬鹿鐵の顔は、鋭い爪で引掻かれて、處々紫色に血が煮染んだ。

お梅は、唯恐しく、聲も碌々立て得ずに、眞蒼になつたまゝ、立つたり居たりしてゐた。

二人は、疊の上を散々轉げ廻つた。強い忿怒と疲勞とに、喚く聲も出なかつた。――苦しげに、喘ぐ氣息のみ時々聞えた。

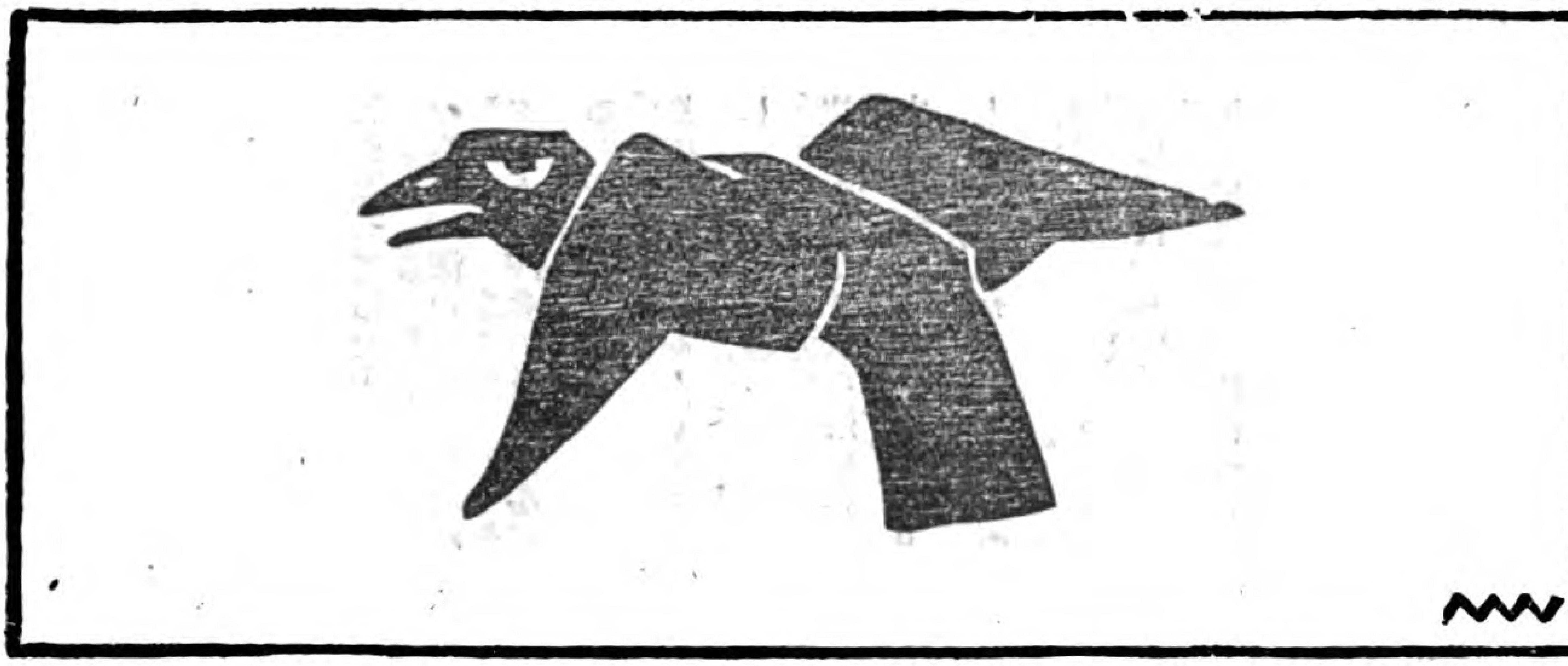
と、馬鹿鐵は、急にキャッとなつて、相手から捥ぎ離れた。そして飛鳥の樣に跳ね起きたが、戰々と震える手先で邪見に自分の内懐に手を突込んだ。

と、その瞬間、何やらギラリと銀色に光つた細長い物が、彼の右手に閃いたが、彼は相手に飛び付き樣、ヅブリと肩先へ突込んだ。

と又、拔く手も見せず二度横腹へ刺した。

「アッ」と微な絶え〴〵な聲が續いてしたが、権七はブル〳〵と震

えて仁王立に突立つた。そして、ドンと仰向に後へ倒れた。
馬鹿鐵は、濃い粘々とした、血の滴る短刀を右手に下げてスッタと立上つた。
彼の顔には、憎悪と、憤激と、復讐とが一時に押し寄せて、處々紫色に腫れ上つた、引裂かれた頬には、何處やらか滿足氣な赤い笑が漂つてゐた。
お梅は、深い恐怖に襲はれて、聲も碌々立て得なかつた。ヒッタリと、四疊の壁に身を寄せて、戰慄く瞳を馬鹿鐵の方に向けてゐた。
馬鹿鐵は、ヌル〳〵とする短刀を逆手に持ち變へたが、身を躍らして、又、お梅の方へ馳り寄つた。
空氣を震はす女の叫喚が、高く物狂はしげに響いた。お梅は、室中叫びながら逃げ廻つた。――
――二階でガヤ〳〵と人の騒ぐ聲がした。階子段を驅け下る音がした。
馬鹿鐵は、お梅を六疊の眞中まで追ひ驅けて來たが、刹那に女を抱く樣にして、脇腹へ盲突に短刀を突込んだ。そして又一刳グイと刳つた。
お梅は、最早叫ぶ事も出來なかつた。アンと口を大く明いて、苦しげに虚空を幾度も掴んだが、ドッシリと、上から下へ顚び落ちる樣に、前へ突顚つた。痙攣つた指の先で、バリ〳〵と疊を掻き毮つた。
馬鹿鐵は、全身血に塗つたまゝ、足を踏み延して室の眞中に突上つたが、彼の頭腦は火の樣に炎えて、物狂はしげな赤い絲と、青い絲とがチラ〳〵と眼の前にチラ付いて見えた。彼には、室の中が段々と暗くなつて行く樣に思はれて、深い、永劫に浮ぶ事の出來ぬ底ない穴にでも陷ち行く樣な心持がした。
四邊に人の耳語がした。唐紙が明いた。幾人もの浮浪漢が、飛び込まうとしたが、皆は俄然雷霆にでも打たれた樣に、色を變へて誰も入らうと爲る者は無かつた。後の小窓からも、恐怖に滿ちた男女の顔が、恐々中を覗いてゐたが、餘りの事に、聲も立て得なかつた。
疊の上一面、生々しい眞赤な血が流れてゐた。右の唐紙には、霧の樣な血の垂吹が懸つてゐたが、壁にも幾個もの血だらけな手の跡があつた。
馬鹿鐵は、凝と突立つたまゝ身動もせず、自分の前の死骸を凝詰めてゐた。……秒一秒と過つて行つた。
――默然とした室の内には、不思議な恐怖が入込んで來た。若い底知れぬ深淵を覗き込んだ刹那の恐怖、死の樣な沈默に對する恐怖、――その恐怖のそれだ。
彼の握つた短刀の尖端からは、未だぽたり〳〵と赤黒い血が滴つてゐた。



鷄

田山花袋

一人の同僚が私に言つた。

『貴方の宅では鷄を召上りませんか、召上るなら、其中一羽持つて行きますが』

同僚の家では、かへした鷄が雄ばかりなので持餘して居た。『雄でも此方で買ふとなると、中々高いことを言ひますけれど、賣るとなると、つぶしの値なんですから』

私は好んで鷄を食ふとも言はなかつた。またこれまでにも自分で緊めて食つたことなどもなかつた。私は同僚と養鷄の話や鷄の種類の話や鷄卵の話などをしながら、いつもの路の角に來て別れた。

私は其時きり其話を忘れて居た。

處が、ある日の夕暮に、玄關に訪ねて來た人があつた。丁度細君も娘も外出して居なかつたので、私が出て見ると、同僚は鷄冠の大きい一羽の雄鷄を抱えて莞爾しながら立つて居た。

『やあ……、まア上り給へ』

『いゝえ、今日はこんなものを持つて來ましたから、またいづれ……』かう言つて、『却つて御迷惑でしたかも知れません。けれど肥えてますから、食べちや旨いかも知れません』

て、肥つた、鷄冠の見事な、烏のやうに黑い羽をした雄鷄を私に渡した。雄鷄は飛ばうとして羽搏をしたが、私が腹の處を矼りと兩手て押へたので、其儘コケコケと聲を立てゝ鳴いた。

暫くして、婢は歸つて來たが、建仁寺垣を取廻した庭の中に、見馴れない雄鷄か一羽、さびしさうに餌をあさつて居るのを見て、『鷄が居ますのねえ』と言ひながら入つて來た。

『お前、鷄をひねつたことがあるかえ?』

私がかう言つて訊くと、

『いゝえ……』

『でもお前、鷄の世話をしたことがあるツて言ふぢやないか』

『えゝ世話はしましたけれど……』

と笑つて居る。

『こんなものを貰つて、却つて仕末に困つて了つた。……ぢや、お前、拵へることを知つてるかえ』

「え、拵へりャ出來ないことはない。ですけれど‥‥」

「ひねるだけなら、己がひねつて遣るかなア」

こんなことを私達は話し合つた。鳥屋へ持つて行つて解して貰へば譯はないけれど、それも鳥渡臆刧だし、さうかと言つてかうして放つて置く譯にも行かず、いつそ地主にでも遣らうかなどゝも言つて見た。

※

婢は私の家に來る前、田舍の親の家で、十二の頃から澤山の鷄の世話をした。冬の寒い朝などは雛兒の出し入れをして遣るのが隨分大變であつた。婢の後を雛兒は常にぞろぞろと跟いて歩いた。ある時などは雛兒を知らずに一羽踏つぶして、母親に烈しく叱られたこともあつた。「それは鷄は育てゝ見れば可愛いものですけれど‥‥世話が燒けて‥‥面倒で」前にもこんな話を婢はしたことがある。

其處に子供達が歸つて來た。

「ヤア、鷄が居るア」

「父さん、何うしたの？　家の、此鷄？」

總領の娘の兒は、

「父さん、此鷄、鷄卵産むの？」

かう言つて、皆なめづらしがつた。七歳になる男の兒は、鷄が庭の隅に行つて草の芽を啄いたり、頭を傾けて何か物を考へるやうな風をしたりするを傍離れず飽かずに見て居た。「ヤア、鷄が糞をひつた

！」やがてこんなことを言つた。

娘の兒は、

「父さん、この鷄、家に飼うの？……え、殺して食つて了ふの？　可哀相だわ。お止しなさいよ、殺して了ふのは。飼つて置けば、鷄卵を産むぢやないの、……田川さんなど、それは澤山居て、毎日鷄卵を五箇も六箇も産んでよ。得だわ、鷄は鷄卵を産むから」

やがて歸つて來た妻も、それを聞いて、すぐ庭の緣側に出て見て、「好い鷄ね、飼へれば飼つて置く方が好いけれど」かう言つて、座敷に入つて來て、其處らに散ばしてある衣服を疊んだ。

私達夫婦は生物に就いて餘り多くの好みを持つて居なかつた。猫も犬も見るのも厭だといふのが妻の平生の態度である。それに、子供の世話だけでも手が廻り兼ねると言ふやうな私の生活では、婢にしても、此上鷄の世話までさせるのも氣の毒であつた。

「誰も世話が出來なければ、ひねつて了ふさ！」

私はかう言つた。

しかし翌日になつても、その雄鷄は矢張垣の中の庭でさびしさうに遊んで居た。昨夜は婢が日が暮れてもう眼が見えなくなつた時分に物置の中に抱いて入れて遣つた。今朝は其の勇ましい鳴聲で人々は眼を覺した。

姉はトウトウトウトウと呼んで挽割麥をまいて遣つた。

其日は午後から雨が降つた。梧桐の葉からはらはらはらと雨滴が落ちて、子供の植ゑた鳳仙花が赤く白く濡れて見えた。學校から子供等が歸つて來る時分には、鷄は雨に濕れそぼちて、縁側の傍に小さくなつて居た。

夕飯の時に、『自然にまかせて、少し放つて置いて見るのも好いさ。自分で殺すのも厭だし、自分が殺さないまでも、地主に遣れば、不用な雄鷄だから、何うせ殺して食はれて了ふんだし、さうかと言つて飼ふ氣にもなれなければ、仕方がないから、此儘にして措くさ。その内何處かに行くだらう。それとも何處かに遣つて來るか』かう私は言つた。しかし矢張捨てゝも置かれなかつた。

二羽位なら、そんなに手數もかゝりはすまい。一羽雌を買はう。とうとう遂にはさういふことになつた。

餘り遠くない處に養鷄場があつた。同僚は『それは一つ聞いて見ませう。飼つて下さるんなら、それは嬉しい。好い相手を一つ見附けて上げませう』かう言つて、その養鷄場に話して呉れた。

養鷄場の男はやがて牝鷄を一羽抱えて遣つて來た。それはもう鷄卵を生んで居る鷄であつた。『何うもお安く御座んせんけれど、もう明日からでも鷄卵を生むんですから』かう言つて一圓五十錢を請求した。

雄鷄は其時表の庭の樹の下の日影のチラチラする處で遊んで居た。股引に腹がけをした養鷄場の男

が、牝鷄を抱えて、其處に行つて、それを地上に放つと、それを見た雄雞は、コケコケといかにも喜ばしさうな鳴聲を立てゝ、其まゝ其傍に寄つて行つた。

『牝鷄が來た？ 母さん？』

子供等は大騒ぎをして、其處に飛んで遣つて來て、槍や山茶花の青葉の蔭にじつと身を隱すやうにして居る牝鷄を珍らしさうに見た。

かうなると、餌も買つてやらなければならなかつた。寢る處も拵へて遣らなければならなかつた。『お宅は庭がお廣いから、これなら出して置いても大丈夫でせう。……寢床は物置の中に、私が明日でも來て造つて上げませう。何に譯はありません』養鷄場の男は手輕く受合つて歸つて行つた。

翌日私が社から歸つて來た時には、物置の中の鷄の寢床はもうちやんと出來て居た。板を七八枚近所の材木屋から買つて來て、それを彼方此方に打付けて、横木を一本眞中に渡して、其處に鷄が上つて寢るやうに拵へてあつた。妻はまた妻て、めづらしさうに眞白な鷄卵を一個出して見せて『これが今日生んだんですよ。綺麗な好い鷄卵ぢやありませんか。今は鷄卵は高いから、買うと、どうしても四錢はしますよ』かう言つて、今日午前の十時頃に養鷄場の男の窠宿を造へて居る傍に生んであつたといふことを話して聞かせた。

『かうして毎日生んて呉れさへすりや、一圓五十錢位ぢきに元を取かへして了ひますねえ。面白いもん

てすね」妻はにこにこして居た。

「どれ、母(かあ)さん、見せて?」

總領の娘の見がかう言つて、その傍に行くと、他(よそ)の子供達も、「僕にも」「僕にも見せて」と皆な其處に寄つて來た。

馴れないので、鷄はまだ獨りで窠宿の中に入つて行かなかつた。それを入れて寢かして遣るのが少くとも婢の一仕事であつた。垣の外に出たのを漸く門の中に入れるのも容易でなかつた。『だから、私、鷄の世話大嫌ひサ』こんなことを終には婢も言つた。

何んな風にして居るかと思つて、一度閉めた物置の戸を私が明けて見ると、それでも横木の上にちやんと留つて、向むきになつた雄鷄と此方を向いて居る牝鷄とはぴつたり體を合せて居た。

緊めて食はれて了ふ運命を持つて來た雄鷄は、今度は自由と勝利を得たかのやうに、牝鷄を連れて、綺麗な鷄冠を朝日に輝しながら庭を歩いた。勇ましく時をつくる聲は四邊に高く響いて聞えた。

コヽコヽと牝鷄が忙しく鳴いた。それは鷄卵を生む時期の近い徴であつた。窠宿の中には四角な箱が入れられてあつた。牝鷄はやがて其處に入つて、蹲踞つて、可愛い小さい眼をかゞやかして居た。コヽコヽと絶えず鳴いて居た。

子供達はそれをめづらしがつて、學校の遲くなるのも知らずに見て居る朝などもあつた。日曜日には、子供達の顏が三つ其處に並んだ。『何うしたんでせうねえ。いつまでも生まないのねえ』。總領の娘の見

は終には倦きて、丁度其處に誘ひに來た女の兒と戸外に遊びに行つて了つた。やがてコ、コヽコケッココと聲を立てた。といふ聲が聞えたと思ふと、向ふの庭で餌を拾つて居た雄鷄は、急いで其處に驅つて來て、矢張コケッコと聲を立てた。牝鷄の巣から出た跡には白い、綺麗な鷄卵が一箇生み落されてあつた。それを、今まで見て居た男の兒の兄の方が逸早く取つて、座敷で裁縫して居る母親の前に得意さうに持つて行つてつきつけて見せた。

弟の方は『僕に取らせない、僕に取らせない』と言つて聲を擧げて泣いた。

處がある日雄鷄は何處にか行つて居なくなつた。さういふ事は其前にも一二度あつた。一度は前の家の庭にまぐれ込んで居た。一度は一町ほど隔つた大きな家の養鷄場の金網の窠宿の外に行つて居つたのを、其家の爺が連れて來て呉れた。『何うしたッて、ちやんと入れて置く金網を拵へて置かなくては駄目ですよ。何處の家だッて拵へて置くんですもの』かういふ婢の言葉の陰には、『生物だから、何處に行くか解りやしない』といふ意味が含んで居た。婢に取つても、何處に行つたか解らないものを、彼方此方と探して歩くのは大抵ではなかつた。

最後の時は午後の三時頃から其姿が見えなかつた。犬に逐はれたかのやうに、コケッコオ、コケッコオと常に無い鳴聲を立てたのを妻は聞いて知つて居た。外から歸つて來た男の兒は、先程向ふの家の垣の處で家の雄鷄が遊んで居るのを見たと言つた。私は社から歸つて來ると其儘、彼方此方を探して歩い

た。しかし何處にも居なかつた。遠くまで探しに行つた婢も手を空うして歸つて來た。

「忙しいたッて何だッて、注意して見て居なくつては仕方がないぢやないか。犬に逐はれたと思つた時、出て見なかつたお前も惡い。生物だから仕方がないッて言つたッて、それは申譯にも何にもなりやしない」。

こんなことを私は言ッた。しかし何の甲斐もなかつた。

私はそれでも其中何處からか伴れて來て吳れるだらうといふやうな微かな期待を持つて居た。緊めて食つて了ふ人もまさかにあるまい。また默つて留めて自分の家に飼つて置くやうなものもないだらう。私はかう思つて見た。私は人の家の鷄を盜んで商賣にして歩く男のあることなどは知らなかつた。

勇ましい鳴聲の無い朝はさびしかつた。雨が蕭々と降つてゐた。今度はしつかりと木戶を閉めた庭を牝鷄がさびしさうに餌を拾つて歩いて居るのを見ると、私の胸には何となく可哀さうなやうな佗しいやうな心地が起つた。子供等も元氣の無いやうな顏をして居た。

「何處に行つたんでせうねえ、本當に家の雄鷄は?」

總領の女の兒は庭に居る牝鷄を見てかう言つた。

一日經つた。

矢張雄鷄は歸つて來なかつた。

「初めから、緊めて食つて了つた方が好かつたんだ。可哀相だなどといふ氣を起したから惡いんだ」。こ

んなことを言つた私はいろいろなことを考へさせられた。

牝鷄の產んだ鷄卵に妻はめづらしさうに番號をつけて置いた。雄鷄が居なくなつてからも矢張鷄卵を生んで居るので、數は丁度十一になつて居る。

『何うだ、今一羽雄鷄を買はうか』

私は妻にかう言つて見た。

『さうねえ』

妻も煮え切らない返事をした。

『いつそ、しめて、食つて了つて、小屋の窠宿を壞して了はうか』

『さうねえ』

矢張煮え切らない返事であつた。

もう初めのやうに簡單に問題を解決して了ふ譯には行かなくなつて居るのを私達は發見した。兎にも角にも窠宿をつくる値と牝鷄一羽の値とを私達は出して居た。

しかし一方ではかういふことに捉はれて居ては際限がないといふ事も考へられた。何羽買つても鷄は皆な居なくなつて了ふかも知れない。皆な逃けて行つて了ふかも知れない。それを拒ぐことは出來ない。金網の立派な窠宿を造れば好いかも知れないが、それとてある程度まて其危險を防ぐだけて、絕對に鷄の自由と利益とを占有することが出來る譯てもない。金網の細い目を破つて遁けて行かないまても、病

氣に罹つて死んで了はないとも限らない。私はこんなことまで考へるほど神經が細かくなつて居た。

「鷄一羽でも、世話をするとなると、かう難かしいんだからなア」

慨嘆するやうに私は言つた。

牝鷄は相變らず佗しさうな風をして、芝草の上を歩いて居た。雄鷄と幷んで青い草や紅い花の間を元氣よく遊んで居るのを見ると、一種庭の裝飾ともなつて心持の好いものだが、一羽ぽつねんとさびしさうにして居るのは餘り好ましいものでもなかつた。それにこの牝鷄は鷄冠も少さく、毛の色も灰色の交つた黑色で、一層見すぼらしく私には思はれた。

鷄卵を生み落した時には、相變らず、コケコケと喜ばしさうな聲を立てるが、それを聞いて驅けて來て同じ喜びの聲を立てる雄鷄もなかつた。

鷄卵を産む度に、妻は氣遣はしさうに、『よく産みますねえ、雄が居なくつても……。早く一羽何うかしなくつては、鷄卵を産まなくなつて了ひますねえ』

て、今一羽雄鷄を買ふことになつた。

「矢張、金網でしつかりした窠宿を拵へて遣らなくつては駄目ですね』。同僚は私の話を聞いて言つた。

すぐ言葉をついて、『それに、矢張惡い奴がありましてね。……金網でも、天井がないと竿の先に肉を

つけて、人の居ない時を見すまして、鷄を釣つて行く奴などがあるさうですからね。ひどいことをする奴があるものですよ。それに、惡い犬もありましてね、何うかすると、咬へて行つて了ふことなどがあるさうですよ」

費用がかゝつても仕方がなかつた。私は鷄の爲めに金網の塒をつくつて遣ることに决心した。しかし、養鷄場では、承知して置きながら、容易にそれを拵へて呉れやうとはしなかつた。勿論其處の家にも手はなかつた。金網も四ッ谷まで行つて豫め注文して置かなかければ丈夫な廉いのは得られなかつた。

同僚はかう言つた。

「私の處でもさうでしたよ。造へるッて言つて中々遣つて呉れませんでした」

仕方がないので、それの出來るまで、私は二羽の鷄を表庭に入れて置くことにした。其處は建仁寺垣で圍まれてあつて、木戸を閉めて置きさへすれば、何處にも出て行かれないやうになつて居た。犬も入つて來られなかつた。

朝、小屋から出すと、すぐそれを其處に追入れて、夕は眼の見えなくなる頃を相圖に塒の中に伴れて來るやうにした。鷄は終日長くヒバの陰や椿の根元などで退屈さうに遊んで居た。

敷石の上には、子供の古い玩具の小さなバケッに水が滿されてあつて、それに鷄は代る〳〵來ては嘴を入れた。婢は色の褪せた紺絣に赤い襷を十文字に綾取つて、小脇に大きい罐を抱へて來て、トウトウ

と呼んで餌を撒いた。

戸袋の側に厚い葉の深く繁つた青木が二三本あつた。日盛などには、鷄は大抵其涼しい陰に行つて、さゝやかなる爪音を立てゝ土を搔いて居たりなどした。時には、戸袋の下の柔かい土を掘つて、其處に半身を埋めるやうにして居ることなどもあつた。午になると、牡鷄は鷄冠を立てゝ、嘴を明けて、コケッコオと勇しい高い聲を立てゝ時をつくつた。やがて近所の工場の汽笛が鳴つた。

二三日は無事に過ぎた。朝夕の出し入れと鷄卵を生む時の世話の面倒なのと、それ以外には別に變つたこともなかつた。唯、處構はず糞を放つて歩くのには閉口した。それに、硝子戸を明けて置くと、流石に一どころに倦んで居ると見えて、緣側から、バサバサと人の居ない座敷に上つて來て、一番幼ない兒の涼しい風に吹かれてスヤスヤ眠つて居る傍を通つて、此方の庭から向ふの庭へと通拔けて行つた。

『あれ、母さん、鷄が』

子供達はそれを見てよく聲を立てた。

一週間を過ぎても、養鷄場の男はまだ金網の塒を拵へて呉れなかつた。每日生む鷄卵はその中にも段々殖えて、一番新しいのには二十六といふ數字が書いてある。『二十六？それぢやもう今少して、一羽の元は取れて了ふねえ』私はこんなとを言つて笑つた。

それにづけても金網の塒の出來るのが待たれた。出來たら、牝一羽では勿體ないから、少くとも三羽位にはしやうなど〻話し合ふことなどもあつた。早く拵へて呉れなければ、出入の植木屋を呼んで造らせやうかなど〻言つた。しかし妻は此間途中でその養鷄場の男に逢つた時には『何うも申譯がありません。金網はもう出來ましたから、明日か明後日は屹度行つて拵へて上げます』と言つてゐたといふので、それほどまてしたのを斷はるのも氣の毒と思つて、それを待つことにしてゐた。

ある日の夕暮のことであつた。私は書齋に居た。と、妻が遣つて來て、牝鷄が何處に行つたか見えないといふ。先程子供が開放にした木戸から出て行つて、井戸の側で遊んで居るのを私も見て知つて居た。それで一體何うしたのかと私が聞くと、今少し前、犬に追懸けられてけたゝましい鳴聲を立てたが、其時から居なくなつたとのことてあつた。『屹度、其處等に隱れて居るんでせうがねえ』かう言つて妻は探しに行つた。

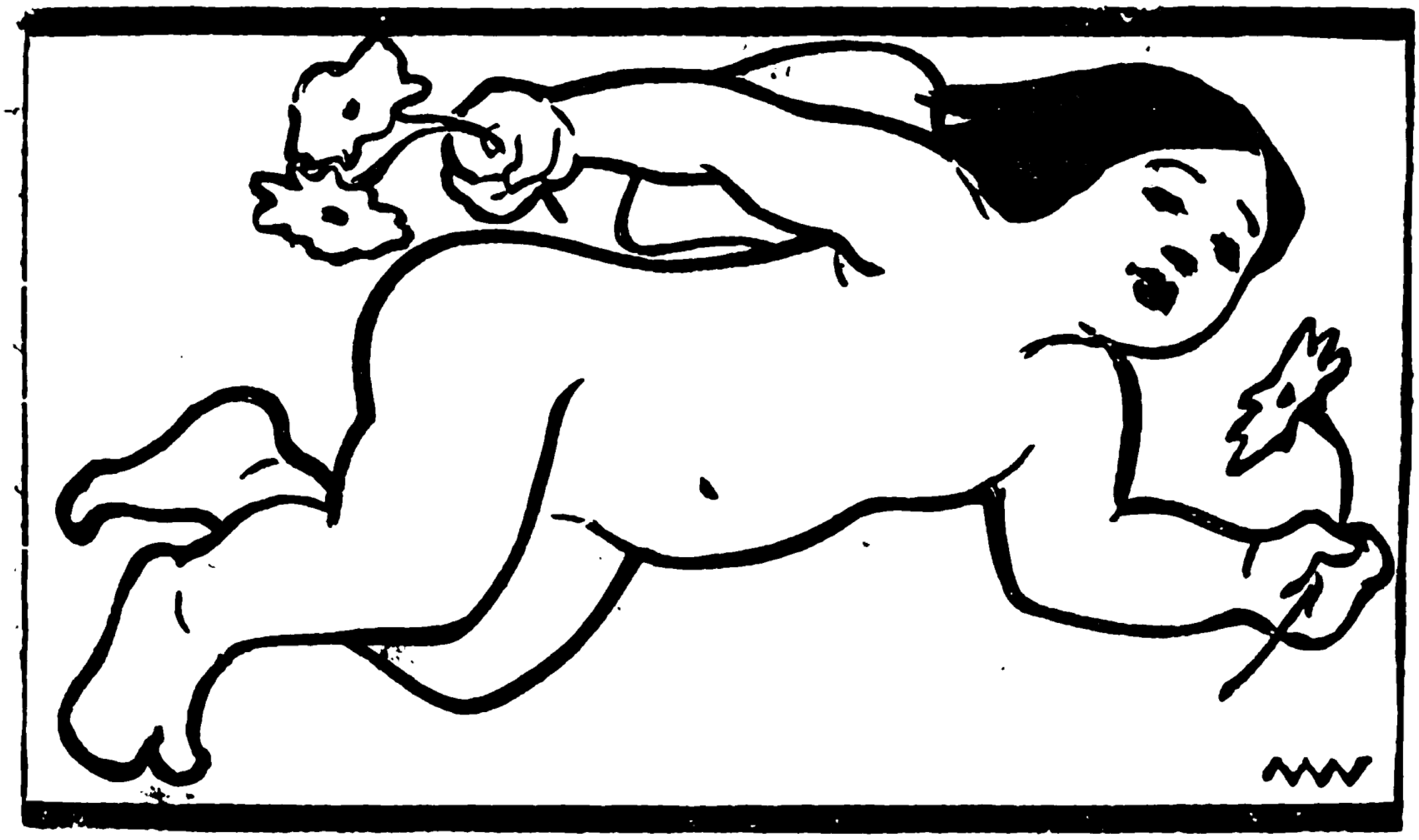
婢は勝手元の用事に忙しかつたが、私はそれをもやめて探しに行かせた。馬鹿！　といふやうな苛々した氣が私の胸を衝いて起つた。私も外に出て見た。

不圖コケコケといふ聲が聞えると思ふと、隣の畠から驅けて來る牝鷄の後を追つて、茶色の逞しい一疋の犬が一目散に私の眼の前を通つて行つた。あれと言ふ間に、牝鷄の尻の處に嚙み附いて、烈しく鷄の羽搏するのにも頓着せず、しつかりとその獲物を咬へたまゝ垣根の外へと出て行つて了つた。後から

追懸けて行つた私は、唯遠く其の犬の後影を見たばかりてあつた。

私は怒ることも笑ふことも出來なかつた。『馬鹿！』と罵つて見たが、それは誰に向つて言つたのか自分にも解らなかつた。

私は殘つた一羽の牡鷄を眺めて、暫くの間默つて庭に立つてゐた。



病血

波山不規夫

一

私が中學へ入つてから第四年目の暑中休暇のことである。

町の下宿から歸宅して間もなく、中學の教師になつて奥州へ行つて居る兄さんから手紙が來た。

「英雄(ひで)、兄さんも歸つて來るぞ！」と、お父さんは手紙を見てニコ〳〵しながら私に言つた。それから家の中は兄さんと嫂さんの歸りの話で持ち切つた、茶呑話に嫂さんの噂が出ると、小さい弟等は腹を大きくして家の人達を笑はせた。お母さんは姉と二人て蒲團を藏から出して干した、〆切つて置いた奥の座敷も奇麗に掃除された。

いよ／＼歸つて來るといふ日の二日も前から、弟や私は兄さんと嫂さんを停車場へ迎に行く車を賴みに步いた。

直ぐに喜ばしい夏の朝が明けた。最う車夫が來て居た、二つの車が物置の前に並べてあつた。私は急いて物置へ行つて、ひよつこの入れてある箱の口を開けてやつた、一夜狹い箱の中に封じ込まれたひよつこの群はバタ／＼羽を打ち鳴しながら、露つぽい庭草の中へ飛び散つた。

『それぢや氣を付けてナ、間を取つても大切に引いて來て呉れないては困るぞ』とお父さんやお母さんから交る／＼注意されるのを橫に肥つた虎公と脊の高い龜松が輕く受合ひながら出て行つた。

其からお母さんは姉と下女のお松を相手に御馳走の仕度に取りかゝつた、お母さんは手づから兄さんの好物のツバを打つた。私はお父さんと鷄を料理した。

『これは正巳が熱いだらう』といふ聲が座敷や臺所から、まぶしいほど烈しく照り付ける夏らしい日に向つて話された。

午後の三時頃、『兄さん來た／＼』と庭の方からあわてゝ弟等が家の中へ駈け込んで來た、直ぐに車の音が門から屋敷の中へ響いた。

兄さんの後から、嫂さんは耻かしさうに腹に手を當てながら家の中へ入つた。車夫は鞄や土產物をお母さんの前に置いた。

兄さんは直ぐに洋服を脫いて、裸になつて井戸端へ行つた。

「ゆッくりして居て涼しくなつてから來ると善かつたのに」お母さんが嫂さんと挨拶をしてから、兄さんの着物を取りに立つた。嫂さんは側に居るお父さんにも亦同じやうに挨拶をした。

此度は姉と『御機嫌さま』をはじめた、姉の無作法な手付、私はそれを蔑んで見た。言ひ塞つて何時までも頭を下げて居る！

『オヤ英雄さん、御機嫌さま』最う逃げられなくなつた、私は默つて疊の上へ手を突いた。

『私等は禮儀も何も知らない家に生れたのだ！』斯う思つて深く私は心に魄ぢた。

弟等が土産物を貰つて食堂の方へ行つて爭つて居る。

『英雄、早く來ないとやらないぞ』

弟等は私の名を呼棄にするのだ。

土産物などは欲しくない、私は弟らしく兄さんの方へ歩いて行つた。

『兄さん、今日何時に彼方立つたの？』

が兄さんは私を相手にしない。眉の迫つた鋭い眼の、兄弟の情愛のなさゝうな兄さんの素氣ない顔に私は直ぐに彈かれてしまつた。

『家では皆お倫のことを心配してたよ、汽車の中で若しものことがありもしたらと』

お母さんは嫂さんから旅の話を聞いた。お父さんは書間の涼しいところへ寢ころんで高々と新聞を讀みはじめる、兄さんは別に話もせずに奥座敷の方へ行つしてまつた。

私は何となく張合がなかつた。

姉は饅頭を頬張りながら大きい口を開いて車夫とペチャ〳〵臺所で話して居る「馬鹿!」私は心に斯う叫んだ。

門の前や庭に村の子供等がガヤ〳〵集まつて來た。私は其のまゝ裏の林の方へ出て行つた。

夕方に近所の家や分家に土産物を持つて行くことを兄さんから頼まれた、けれど私は其をしてやらなかつた。

私は人の家へ顏を出すのが厭だつた。

二

翌朝、分家になつた一番目の叔父が來て午まで遊んで行つた。一番目の叔父は三百代言のやうなことをして出先から出先を渡り歩いて居た、一月、時には二月も家へ歸つて來ないやうなことがあつた。

お父さんは『家名を汚す』と言つて叔父を快く思つて居ない。

叔父が何時までも詰らないことをベラ〳〵饒舌つたり、またいろ〳〵な事を五月蠅く問ひ掛けるので、兄さんは始終厭な顏をして居た。

叔父の豚のやうに食ひ肥つた身(からだ)や、毛の硬いバリ〳〵した八字髭や、扁平(ひらび)つたい肉の粗い顏や、鼻から出る圖太い聲や、薄いメロ〳〵した着物を見ると、『お前のやうな奴が親族にあるので己らまで肩身が狹いのだ!』と言つて、私は顏へ唾を吐きかけてやりたかつた

一番目の叔父が歸つて行くと、入れ代りに、同じ村中へ養子に行つた二番目の叔父がやつて來た。二番目の叔父は徴兵に出るのが厭て、村の飮食店の女許りの家族の中へ寄寓した、そして其り間に其處の娘と馴合つて養子に入つて了つた。家計は餘り豊かてないが、眉毛の長い、色の白い禰々しい顔て一番目の叔父とは似付もしない心の優しい人だ。

一番目の叔父だと飯時ても食べて行けと言ひ澁るが、二番目の叔父だとお母さんは何か作らへても食べさせる。

午飯が濟んてから、兄さんは彼方から買つて來た土産の菓子てお茶を入れながら、茶の間の椽側て二番目の叔父と話した。私は二番目の叔父の邪氣のない快濶な聲を聞いて居ると涙がこぼれさうになる程嬉しかつた。が兄さんには別段嬉し相な風も見えなかつた。

『眼の色が怪しくないか?』と突然、斯んなことを叔父に向て尋ねた。

『正巳は馬鹿だから始終そんなことを言つて居る』とお母さんが側て其を笑つた。

『矢張り自分の家へ來ると氣が樂になるだらう』

叔父は笑ひながら話した。

が兄さんは多く話さなかつた、たゞモシャ〳〵に生やした髮の毛を手て捲つて居た。

三

お母さんは兄さんが手て髮の毛を捲るのを甚く氣にして、『まるて馬鹿か氣違のやうだ』と言ひ過ぎて

咎めることもあつた。『剪んで來い〳〵』と始終氣にされるので、兄さんは私を連れて役場の側にある理髪店へ行つた。

理髪店には鏡が一ツしかない、其も顔を扁平つたくして見せる奴だ。凸凹のある土間に据えた古椅子は腰を掛けるとグラ〳〵動く、其に流溜から來る厭な臭が風通しの悪い薄暗い店に淀んで居て息が塞るやうだ。警察から怒られて穢い痰壺が土間の隅に置いてある、私は世の中といふものゝ馬鹿らしさを憤らずに居られなかつた。――亭主が最う厭らしい痰を土間へ吐いて其を草履でこすつて居るぢやないか――

兄さんが『坊主にしてくれ』と頼むと、理髪店は美い髪だとか、惜しいとか、獨言のやうなお世辭を並べた。暫くしてから亭主は單衣の上に垢染みた白の仕事着を引掛けて、また煙草を吸つて、やつとバリカンを取つた。

ジャキ〳〵二三度髪を切り落すと、『痛ッ』と言つて兄さんが首を縮めた。『狂つてるのかなア』と、理髪店の亭主はバリカンを取り壊して、フウ〳〵塵を吹きながら油を其に引いた。

間もなくして、理髪店の嚊が赤坊のおしめを洗濯して來た手で私の顔を剃りはじめた、指の太い厭に熱ぼつたい掌で顔を抑へられるので、穢くつて息もつけやしない。――眠くなつてだん〳〵頭が下つて來ると、其の指の太い手で抜けるほど首を引伸してさも〳〵不平らしく頸窩を頭掛の上に据えつけやうとしやがる、私は直ぐに最う自分の生れた村までも呪ふ氣になつた。

兄さんの頭はクッ〳〵と綺麗に出來上つた、額丈が際だつて白くなつて見える。兄さんは何度も自分の顔を鏡に映して見た、そして指の先て臉を抑へながら眼を鏡の側へ持つて行つた。理髪店から出てからも兄さんは眼の色をひどく氣にするらしかつた。

歸りには小學校の方を通つた。校舍の白壁はところ〴〵崩れ落ちて粗壁が出て居た、泥の着いた跡もあつた。最う土用休になつて居るので、校舍の周圍は寂として物音すら聞えなかつた、破れた塀には蔦が絡み、夏の綠が恣まゝに涼しい蔭を作つた。片側の畑には百姓の姿も見られなかつた。

兄さんは茫んやり其處らを見廻して居た。暫くして私は兄さんと學校の後ろにあるお寺の杉森の中へ入つた、杉森の中には村の墓地があつて、其處には菊地先生の墓がある、――先生は頤に長い鬚を生やした優しい人であつた、酒が好きて私の家へは好く呑みに來た、私も兄さんも敎はつた、私の村の土になるのだと常に其を誇りにして居た、其が三年許り前に下敎員の爲に不幸な最後を遂げさせられた、下敎員は少しは氣も變な人だつた、凶事の前に菊地先生に娘を貰はうとして刎ねられたことがあつた、が凶事の込み入つた事情に就いては誰も知るものがなかつた。

菊地生先の遺族の爲に私のお父さんは義捐金を集め、またいろ〳〵獨りて世話をした。中學のある町て古い長屋作りの家を借りて其處て下宿屋をやらせたこともあつた。直ぐに下宿屋を止めて村へ歸ると、此度は少し許りの資本て菓子とか筆墨紙のやうなものを商(あきな)はせた。其から間もなく、私はお父さんが菊地先生の娘と關係して居るといふ厭な噂を耳にした、其の爲にお母さんがお父さんと爭つて居るところ

も見た、お父さんは時々家へ歸つて來ないやうなこともあつた。お母さんは獨言を言つて先生の遺族やお父さんを罵つた。町の下宿から家へ歸つて來た夜に、私は陰の室でさういふ聞きづらいお母さんの獨言を聞くことがあつた。

また彌兵衛爺さんの墓もある。
爺さんの家は私の家の屋敷を越した直ぐ隣家にあつた、媼さんと二人で、おしんといふ一人娘を相手に寂しく住んで居た。爺さんは極く器用人で何かに調法がられるにつけ、私の家へは早くから出入して居つた。

其の頃私が生れた。
そして、おしんが私の守に頼まれた。其からおしんは私の家へ來ることになつたが、何しろ爺さん媼さんの可愛い一人娘なので、小兒を負つては毎日、日課のやうに自分の家へ歸つて行つた、斯うして小さい家と大きい家の間を往來して居る間に小兒の心は自然と小さい家の方に行つて居つた、一人で歩くやうになつてからも、其の荒屋を『爺が家』『媼が家』と言つて老夫婦の側を離れなかつた。若し大きい家の方から迎が來ると、小兒は何處かへ逃げ隱れてしまつた、たま〳〵騙して連れて行かれても、其の甘言さへ成されゝば、何時の間にか老夫婦の側へ戻つて居た。遂には家の人も持餘してしまつて、小兒は思通り老夫婦に預けられることになつた。

あゝ、此の小さい荒屋の下て、小兒は何んなに樂しい幸福な生活を送つたらう！爺さんは臺所の隅へ小さいヘッツイを築いて呉れた、小兒は米桶から一つかみづゝ米を取り出して小さい土釜て飯を炊いたこともある。『爺が椀だなくつたァ厭だ』と駄々を捏ねては、よく縁の缺けた大きい黑ずんだ飯椀を爺さんの手から奪ひ取つた。小兒は『酢ッぱい香物』が好きて古い澤庵漬を小さく采目に媼さんに刻ませた。また『媼ァ一錢くろ』と何時もの極りを貰つて前の鹽物屋の爺さんのところへ鹽引の切を買に行つた。

毎年時節が來ると小兒の目覺には裏の流端の側に赤い茘枝の實がぶら下つた。爺さんは西爪や瓜を畑に作つたので、夏になると小兒は毎日西瓜の水て腹が脹れて居た。小兒はまた爺さんと骨蓬の咲いて居る夏の小川へやまべを釣りに行つた。

が其の『爺ら家』は今は屋敷も共に隣家の所有になつて居る。裏へ小さい小舍を作つて爺さんは媼さんと其處へ隱居した、爺さんは筵を作らへて其を職業にして居た。そして長い間重い病氣を煩つて昨年の暮に死んだ。其に私は病氣見舞に一つ行かなかつた、葬式にも顏を出さなかつた、そして『爺ら家』の側を通る時には逃げるやうにして走り過ぎるのだ。

媼さんも今は身が弱つて仕事が出來ないて居る。私を守したおしんは自分の子供等を媼さんに預けて片眼の薄鈍な亭主と毎日日傭取をして一家を養つて居る。髮の毛の薄くなつた瘦れた病人のやうなおしんの顏を私は忘れることが出來ない。

私は兄さんと菊地先生の墓にお參りをした。が私は爺さんの墓へもお參りをしなければならないのではないか、先生の墓から五六歩離れて其處に爺さんの墓があるではないか！　がたゞ哀れな石を見るだけて私は矢張り爺さんの墓にお參りすることが出來なかつた。

兄さんは菊地先生の石碑を建てゝやりたいと何度も私に話した、私は爺さんの石碑を建てゝ、そして婆さんやおしんを世話してやらなければならないのだ！

薄暗い寺の森から出ると、筑波山が村の北の方の森の上に小さく頭を出して居る。

「兄さん、筑波へ生れると善かつたなア」

私は筑波山の方を見ながら言つた、が兄さんは默つて居た。

「兄さん、已れも兄さんの方の中學へ行きたいなア」とまた斯う言つても、兄さんは矢張り其に答へなかつた。

門から家の庭へ入つた時に、兄さんは門の側の物置を訝かしさうに見る樣子だつた、其は此の春、村の助六の家がすツかり破產したので借金の代りに取り壞されて私の家へ持ち込まれたのだ。

兄さんは首を垂れて家の中へ入つた。

四

兄さんの口からは書物を讀む聲も聞かれなくなつた、サンダーの鐵啞鈴を振り廻す掛聲も聞かれなく

なつた、井戸端で冷水摩擦をする姿も見られなくなつた。

口も碌に聞かない、私が側へ言つて何か言ふと眞赤になつて怒ることがある。お母さんがまた默つて居れば善いのに、菊地先生の娘とお父さんを惡く言つて兄さんに話す。

お父さんもお母さんも——兄さんはだん／＼氣が沈んで行く許りだ。

「己ら學問などするのでは無かつた」

二番目の叔父さへ來ると、兄さんは子供のやうに斯んなことを言つた。

「他人の眞似も出來ねえことして居て其んな馬鹿なことを言ふものぢやない」

と叔父に誡められても、

「いやさうぢやない、學問の祟りだ」と、同じやうなこと許り言つた。

「其れが土臺善くねえと己れが言ふんだ、お前のおやぢを見ろ、學問など碌に出來なくてもあれて結構と長年村長て通して來て居る。正巳のやうな弱いことを言つた日には何だつて仕事は出來やしない、人間は少しはずう／＼しくなくつては駄目だ」

「困つた／＼」と兄さんは絶えず落ち着かない眼をして座敷の中を見廻した。

「また帶を緊く結ぶ！」と不意に嫂さんを怒り付けたりする。

兄さんはだん／＼人の顔を避けるやうになつた。

姉の馬鹿！　脊の低いコロ〳〵した様て、弟など相手にキャッ〳〵騒ぎだつてゐる、いくつだと思ふ、嫁に行く身して、まるて男だ、見ろ、お松にまて笑はれる、――だらしのない姉の恰好を見ると私は情けなくなつて何とか言つてやりたかつた。

私は可愛い妹が一人欲しかつた、手紙の往復の出來るやうな、手を握つて睦しく語り合ひながら散歩の出來るやうな妹を一人欲しいと思つた、――其の妹をお父さんは‥‥不自然に死んだ赤坊が其の妹てはなかつたかと私は始終思つた。

「默つて許り居ないて英雄も少し元氣を出して騒いて見るものだ」

とお母さんが言ふと、

「彌兵衞爺さまが死んだんて英雄は威勢惡いんだ」

「屁ッぴり彌兵衞の子なんど己ら家に居んナ」

弟等が私をからかひやがる。

お父さんは何か考へるやうな風をしながら火鉢の側て煙草を吸つて居る。最う兄さんは嫂さんを連れて自分の室へ行つて寢てしまつた。

「さア來い、臑押をやらう」弟等が力み出すと、「ランプが危い」とお母さんに言はれたので、「サア英雄、其處退け」と私は弟等の尻て傍へ去らされた。

二度とも大きい弟が負けた、そして小さい弟に囃され、皆んなから馬鹿にされたので、とう〳〵泣き

出してしまつた。

姉がまた轉げ廻つて笑ふ、その無様な恰好を嫁に貰ふ家の人に見せてやりたいと思ふほど私は情けなくなつた。

大きい欠伸をしながら兄さんが起きて來た、其の血走つた顔が默つてランプの下へ現はれたので、騷ぎはぴッたり止んでしまつた。

『不眠症だ、何うしても眠れない、斯んなに指の先がヂキ／＼する』

とお父さんの顔を見ながら手を出した。お父さんは兄さんの顫へて居る指に觸つて見ながら、『何そなものか、神經だ！』と直ぐに其を笑つてしまつた。お父さんの笑ひ、其は怖いほど寂しい苦い笑だつた。

お父さんは幼い折に實の母に別れて、其れからは毎日繼母の手で訶められながら育つた。そして其の上、十六の年にお父さんにも死なれてしまつた。

お祖父さんは或る夜、親戚から酒に酔つて歸途、道の上に倒れたまゝ自分で持つて居た提灯の火で身を燒いた、通行人か幸ひ其を見つけて私の家へ知らせて呉れたので、お父さんは跣て其處へ走つて行つた、お祖父さんは死にさうになつて唸いて居た、お父さんは其の死にさうになつて唸いて居るお祖父さんの身を家まで負つて來て其のまゝ死なれてしまつた。

六

其から家がゴタ／＼揉め出した、とう／＼お繼祖母さんがお父さんの弟を連れて別家することになつた。

フワ〳〵綿のやうな雲が空に漂ふて居ると、私は飛んで行つて顔を撫でゝ貰い度いと思つた、夏の木立の間を親雀が巣を出た許りの子雀を連れて蟲を捕ふることを教へて居るのを私は一時間も凝として見て居ることが出來た、最う筑波山へ四度上つた、近くに筑波山があつたら百度も上つて居た、私は毎日朝夕野へ出て筑波山を見ないと何うしても氣が濟まなかつた。

何うしたつて私は文學に適當して居るんだ、其に「百姓になれ」と迫る、兄さんの方が解らないんだ。「英雄ら中學を卒へたら百姓になると善い」或る夜夕飯を食べてからまた兄さんの「百姓になれ」がはじまつた。

「己れは文學をやるんだ」私は世の中で一番美しい貴いものを文學だと思つて居た。

「學問は駄目だ」

兄さんは私の考へを知らないんだ。

「己れは一生學問をするのだ、百姓になれなんて其は蟲になれと云ふと同じことだ」

私は芭蕉が笠と杖で旅したやうに、國々の山水に深く分け入つて其處に小鳥の聲や谷水の音を聞きたいと思つて居た。

「文學等やらせない」と兄さんは何處までも「百姓を」言張る

「己れは構はない、家でやらせなければ獨學をする」私は學校を習ふ金で方々を旅行しながら他國の自然に接したり、さま〳〵な人情風俗を觀たり、雨や風にさらされたいと思つて居た。

「止めろ、こら正巳、何をしてるんだ、大きいなりして」お母さんが茶の間の方から怒鳴る、「己ら家の奴等は皆んな悪い性分だ」とまた愚痴がはじまつた。

「英雄ら駄目だ！」と兄さんは顔色を變へた。

「御用新聞に買はれたと言ふんて、弟の小説家は兄さんと絶交した、己れも家から追ひ出される！」私は其の頃或る人から聞いて知つて居ることとて、二人が其の性格の相違から物質の人間と精神の人間とを明らかに示した某兄弟を考へながら、斯う言つて兄さんを罵ると、兄さんはいきなり私の頭をピシャリ叩いた。

憤として私は軒端にあつた草履を突掛けて門の方へ出た。

人の家ではカンテラを椽側へ出して樂しげに話して居るのだ、澁團扇を使ふ音まで聞える。私は貧乏家に生れると善かつたのだ、さうすれば何んにも要らない、親子皆んなして樂しく働くことが出來るのだ。

「オー、湯明いたど、誰だ此度入えんのア」

風呂場から子供の聲がする。

「番來い〳〵」と他の子供が庭で呼んで居る。

私は泣きながらブラ〳〵村の通りを歩いて居た。

「お君さんか？」と不意に頬被が顔をのぞく。私なので男は驚いてバタ〳〵走つて行つた。

――兄さん何うしただらう、あゝ惡いことをした、言はなけれや善かつたのだ、默つて耐へて居さへすれば何でもなかつたのだ、急に私は兄さんのことが心配になつて來た。

フト見ると提灯がフラ〱此方へ動いて來る、己れのことを見つけに來たのだらう、兄さんが何うかしたのだらう、私はまた惡いことをしたと思つた。

草履の音が洞のやうな森の下にバサ〱とした、――弟と姉だ。

『英雄何處さ行つた、英雄何處さ行つた、ち言つて兄さんが偉ら心配してるから見ろ』

私は姉と弟の後ろについて歸つた。

兄さんはブラ〱座敷を歩いて居た、私が姉と弟の後から臺所に入つて行くと、『來た〱』と言つて、兄さんはさも〱安心して疲れたやうにランプの下へぴつたり坐つた。

――お母さんの甥は發狂して死んだ。

あの竹馬鹿が私の家へ遊びに來て、よく裸になつて庭を駈廻ることがあつた。見えるやうに脟を出して歩くので、竹馬鹿は學校の子供等によく馬鹿にされて土を投られた。

周圍に欅の森の繁つた、ガサ〱竹藪の生えた、晝間でも薄暗い、夜になると欅のうつろから梟が出て鳴く、其處の古い草屋根の下からお母さんは嫁に來た。

七

村はづれの野へ出ると狹い田圃を越した直ぐ向へにお母さんの來た家の其の暗い森が見える。

「さう言ふ法ッちやねえ、親に身を貰つた許りでも第一に有り難えんだ、其に正巳が此家の總領に生れたんだ、何不足があるもんでねえ、教員をするのが厭なら、百姓なり、林巡なり、家に居て好きなことして遊んで食つて行かれる身てねえか」

「さうだともよ、何でも怪しな氣を持つもんでねえ」

「本當に外つた子供等だ、親が一生懸命に働いたつて何の糞にもなりやしねえ、――英雄がまたあゝした口も碌に聞かねえやうな奴だし」

かう言ふ話聲を私は時折り陰の室で聞いた。

私は筑波へ遊びに行つてしまはふかと思つた。

八

私は小さい時分から心臟が惡かつた爲か、夢でなく覺めて居る時でもいろ〳〵な怖ろしい幻を見て苦しめられることがあつた。閻魔様のやうな大きい掌で胸を抑へられることがあつた、さう言ふ時には繩でゝもグル〳〵縛り付けられたやうに些とも身を動かすことが出來ない、そして重い掌は「馬鹿〳〵」と私を罵りながらだん〳〵強く壓付けて來る、いくら反抗しても其の重い掌は私の胸から取り去られない、呼吸も出來ないほど私は苦しい、側に寢て居るお母さんを呼び起さうとするが其の聲が出ない、――やつと腕が動くと今迄板になるほど重く私の胸を壓付けて居た力がブク〳〵泡立つやうに一時に崩れ上る、と此度は急に身が輕くなつて天井へ浮されさうになる、私はあはてゝ蒲團と枕にしがみ着いた。ま

た蚊帳が暗い波のやうにフワ〳〵動いたり、地が割れて家や自分の身が其の中へ呑み込まれてしまふやうな怖ろしい幻に襲はれることもあつた。また蒲團へ顔を埋めて居ると梟の眼球が見えたり、卍の字が見えたりすることもあつた。また不意に自分の頭が稀薄になつて夜の闇の中へ消え失せてしまふやうな氣持になることもあつた。

私と言ひ爭ひをした晩から間もなく、兄さんが癲癇のやうな不意な病氣に襲はれて感覺を失つた夜も、私は絶えず上のやうな怖ろしい幻に苦しめられた。私は遂に堪らなくなつてお母さんに手燭をつけて貰つて、其を持つて便所へ起きた。蚊帳から出ると外に居た蚊の群がワヤ〳〵私の後を追つて來た、氣味惡く椽側がミシ〳〵する、私は何か見ては驚いた。

奥座敷で話聲がして居た、兄さんの呻くやうな聲が微かに聞えた、私はまた兄さんが食物に中てられたのだらうと思ひながら廊下の突當にある便所へ入つた。

便所は屋敷の中にある墓場に近かつた。

スッ〳〵と窓から風が吹き込んだ、蠟燭の焔がヘロ〳〵搖れ上るかと思ふと、チッーと音して消えさうになる。黒ずんだ壁がムク〳〵動くやうに見えた。また蠟燭の焔がヘロ〳〵搖れ上る。

「馬鹿〳〵」私はまた何かに罵られはじめた。最う堪らなくなつて壓出されるやうに便所から出た。

弟等は裸で死んだやうになつて眠つて居る。お父さんが私の手から手燭を取つて中へ入つた蚊を取りはじめた、時々危いほど蚊帳の近くへ手燭を持つて行つた。

「善いか、消すと」

手燭が消えた。赤い火の點が下にある。私は蒲團を引被つた。又私は幻に襲はれた。怖ろしくなつてお母さんを呼び起さうとすると、不意にけたゝましい兄さんの呻聲が奥座敷の方から聞えた。直ぐに狽狽た嫂さんの聲が其に續いて聞えた。お父さんとお母さんが飛起きて行つた、私も其の後から飛起きた。

お父さんは兄さんの身を抱き起して後から抱いた。青ざめた顔、だらりとした腕、かすかな呼吸、兄さんは殆ど最う生きた人のやうに見えなかつた。

「駄目かも知れない、脈が五ッ位しかしない」

「情無え理窟だ、こら正巳！」

お母さんとお父さんは叫びながら兄さんに力をつけた。蚊帳の外に居る姉と私は隣家の茂七を醫者へ頼みに行つた。歸つて來ると最う兄さんは氣がついて居た、『己れはこれで死ぬかも知れないから』と言つて、硯と紙を求めた。嫂さんは兄さんの顔をぼんやり見詰めながらたゞオロ〳〵して居る。

兄さんは自分の中學へ辭職願を書きはじめたが、直ぐに筆を投つてしまつた。そして青ざめた顔で、力のない眼で、皆んなを見廻した。

お松が眼を擦りながら、起きて來た、さん〳〵お母さんに怒られながら、姉と一所に臺所の方へ行つた。

間もなく臺所の方でゴタ〳〵話聲がはじまつた。時々子供の泣聲がする。また飯を食に來やがつたの

だ！　私の出て行つた顏を見て隣家の嚊は驚いたやうな挨拶をした、そして厚い唇を薄氣味惡く笑はせる。お松は臺所の隅へ薄暗い豆ランプをつけて、薬盤をトン〳〵叩きはじめた。茶釜の下へ火を焚きながら姉はまだ隣家の嚊と話を止めない。

「馬鹿、何を饒舌つてるんだ！」

私は其のまゝ外へ出た。

暗い裏の杉森は眠つたやうに靜かに、其の上をスーッと星が流れた。私はたゞ悲しい思に充された。ガサ〳〵垣根の中を潜つて來てまるが私の身へ飛び付いた、畑でも駈けて歩いて來たのか、毛がびッしより濡れて居る、尾を振りながらペロ〳〵私の手を舐める。――私は直ぐに『犬が家の前で遠吠の聲を出すと其の家の者の中に死人がある』と言ふ諺を思ひ出した、忽ち怖ろしい考へが私の身を震はした。

「吠えるナ、吠えるナ」と言ひながら私はまるの頭を撫でた。

と、まるは不意に私の足下から起き上つて、身の露を拂ひながらキョト〳〵落着かない樣子をする。私は無理にまるの身を其處へ捩伏せて兩手で其の口を抑へた。

夜明近くに醫者が來た、病氣は神經の興奮から來たのだらうと言ふ丈で醫者にも善くは解らなかつた。兄さんは疲れて床に就いて居たが、話にも便所へ行くにも別に差支はなかつた、たゞ樣子が妙にソハ〳〵して、何となく眼の色が怪しく氣になつた。最う誰の眼にも其が解るやうになつた。

「夜一ッも眠れないが何うしたらいゝだらう」
と兄さんは沈んだ聲で醫者に相談した。
「モルヒネを上げてもいゝが――」と醫者が言ふと、お父さんが側から其に反對したので、
「さう、モルヒネは一度やると癖になるし、また遂には少量では利目がなくなるから」と言ひ足した。
「モルヒネを呑みたい」
と兄さんは半ば迫るやうに言つた。
「困つたなア、最う三夜許り一ッモ眠れないのだ」
「一ッも眠らないと言ふことは無い筈です、一週間も睡眠を取らなければ人間は死ぬ筈になつて居るのですから、自分では眠らないと思つて居つても一時間か二時間は知らぬ間に眠つて居ます、必ず」
と醫者は兄さんから眼を外しながらお父さんと顔を見合はせて輕く笑つた。
「ほんに正巳ら弱蟲だから」
とお母さんが側から愚痴を入れた。
が兄さんが不眠症を心配するのはだん〳〵氣の怪しくなつて行く心配であつたのだ。學動と言ひ、眼の色と言ひ、最う何うしたつて普通ではなかつた。
「また雑巾がけをはじめやがつた」
少時でも嫂さんが側に居ないと斯う言つて兄さんは怒つた。病室へ入つて行くと誰のことでも其の怖

い眼でギョロリ睨み付ける。

『今誰は來なかつたか？』『誰だ、今來て話して居るのは？』『馬鹿親父を連れて來い、言ふことがある』

兄さんはとう／＼發狂してしまつた。

お父さんが化病を使つて、兄さんの寢て居る側へ寢ころんで見せると、

『お前のお蔭でお父さんまで病氣になつてしまつた』とから言つてお母さんが兄さんに訴へた。兄さんはたゞ横の方を向いて嘲笑ふばかりだ。お父さんが身を跪いて苦しさうに唸いて見せると、

『皆んなに心配をかけないで早く直るやうにするのだ』とお母さんがまた兄さんに迫る。

『ハヽハヽヽ』と兄さんはまたそれを嘲笑つてしまつた。

私は毎日村の林の奥にチラ／＼する筑波山へ逃げて行きたいと思つた。

九

兄さんは間もなく床から起きた。

そして庭等をブラ／＼歩いて居る。お母さんの眼もお父さんの眼も嫂さんの眼も其の後をついて歩いた。

お母さんは勝手下にあつた刃物をすッかり片附けて、其を物置の炭俵の中へ入れて隱した、お松は臺所の隅でこつそり庖丁を使つた。お父さんは役場の方を休んだ。

ピストル、ピストル、と兄さんは始終嫂さんをいびつた。お父さんがピストルの嚢だけ取つて預ける

と兄さんは其を腰に釣して、體操のやうな眞似をしながら座敷の中をブラ〱歩き廻つた。

『お前ばかりだ、お前まで兄（あれ）のやうになつたら、世間から氣違の血統だと言はれなくつちやならない』

私はかう言つてお母さんから戒められた。

家の中はマス〱暗くなつた。

外をブラ〱歩いて來て床へ入る時には、其を引き止めるやうなすいゝとの聲が庭の繁みや垣根のあたりて泣いた。最う何時の間にか麥搗の時節になつた。ズヽン〱地へ響て來る臼の音や、唄や、賑やかな囃て眼を覺まされる。夜明方に見廻す私の家の中は怯（おび）えるやうに暗かつた。

『明日は己ら家でも麥を搗くべえと思つてるところぜ』

『だがお前さんの家ではお天氣の定つたところだから大當だ』

野を歩いて居ると、私は村の人の勢よい話聲を聞いて悲しくなつた。また籠を背負つた女達が畑の隅てヒソ〱話をして居るところ等を見ると、私は冷たい水を襟下から背中へ流し込まれるやうな氣持がした。

其の頃の夕方になると、曲るほど、どつさり大豆幹を積んで車が勢よく野から村の通りを通つて走つた。子供等は玉蜀黍を抱へて畑から家の方へ歸つた。私は最う情けなくなつて、其のまゝ野から林をぶらついて家へ歸つて行くまいと思ふことすらあつた。

早く休暇が終つて中學のある町の下宿へ歸りたいと思つた。

兄さんの顔の色は何だか急に馬鹿になつて見えるやうになつた、其だけ擧動の方はだん〳〵沈んで來た。

「時節が來れば直るだらう」

とお父さんやお母さんは話し合つた。

そしてお父さんは役場の方へ出るやうになつた。

がかうやつて家の人が氣を許して居る間に、兄さんの自殺を企てた惡い日が不意に、殆ど電光(いなづま)のやうに私の家を襲ふた。

その日は朝から黑い雲が湧いた。

お父さんは早くから役場の方へ行つた。姉とお松は畑へ行つた。

「己れも後から行く」と言つてお母さんは先にお松と姉を畑へ遣つた。

「お松ら畑へガサ數作えても、あゝづう〳〵しく平氣なんだ」とお母さんはお松と姉の出て行つた後で、座敷の仕事をしながらブツ〳〵小言を言つて居た。

「雜巾掛一ッ方法にする奴等無えんだ」

座敷の掃除をしてしまふとお母さんは跣で臺所へ下りて、隅の方にある押込に卵を生まずに暖めて居る雌鷄を追ひ出しながら、仕事着に着かへて、そしてまた何か小言を言ひながら物置の方へ行つた。

お母さんが居なくなると、臺所に居た鷄が直ぐに食堂へ飛上つて、あわてゝ猫の飯椀を突つきはじめる、お母さんが籠を下げてまた臺所へ入つて來ると、鷄が食堂へ上つてガタン〳〵騷いて居るので、地だんだをして其を追ひ飛ばした。

『英雄ら其處に居て鷄奴一ッ追ふこともさ出來ねえんだ』そしてお母さんは何か獨言を言ひながら、籠を背負つて前栽畑へ行つた。

私は裏の椽側へ行つて柱に身を凭せた。

光りがパッと當るかと思ふと庭が急に陰つて來て、其の座室の中が明るくなり暗くなつた。兄さんは何か物でも搜すやうに敷座をソワ〳〵歩いて居た。庭の草が怖ろしく靑く輝いて見えた。

朝の飯がまだ腹にあつて私は何となく氣持が惡かつた。

『英雄さん、身の加減が善くないんですか』

と嫂さんが側へ來て心配さうに尋ねて呉れた、『大變顏の色が惡いやうですから』私は嫂さんの持つて來て呉れた寶丹を呑んで惡いものを吐き出してしまつた。嫂さんは私の背中を打つて呉れて居た。

私は其のまゝ其處へ寢そべつた。

暫くして怖い夢を見て眼が覺めた、と同時に、內庭の方で不意にピストルの音がしたので、愕いて私は飛起きた、續いてまた！ 兄さんは內庭の合歡木の下に血に染んで立つて居る。嫂さんが庭へ駈け下りて兄さんの身を後ろから抱いて支へながら、ピストルを血だらけの手から奪ひ取つた。

其の時お母さんが畑から驅けて戻つて來た。
私はいきなり庭へ飛び下りて一目算に役場へ走つた。
『何て？』誰かゞ聞く、
『大變だ〳〵』私は夢中で走つた。
私が息を切つて役場へ驅けつけたので、皆んなと話しながらお茶を呑んで居たお父さんが驚いて椅子から立ち上つた。書記も其の他の人も皆驚いて私の方を見た。
『お父さん、兄さんが――』
と言つて胸の上に手を當てると、お父さんは直ぐ其れと思ひ當つた。
『醫者へ走らせろ』と書記に言ひながら、お父さんは其のまゝ跣で庭へ飛び下りて私と一所に家へ走つて行つた。途中でお父さんを迎に來る村の人に出會つた。
家の臺所はゴタ〳〵して一パイになつて居る。村の人はお父さんの顏を見てポク〳〵頭を下げて見舞を述べた、お父さんは默つて其の間を通り拔けて座敷へ上つた。
兄さんは最う蒲團に寢かされてあつた、急いで入つて來たお父さんの沈んだ土のやうな顏を見ると、兄さんは急に顏色を變へて口を動かしながら、
『惡いことをした』と微かに一語言つて、お父さんに罪を詫びるかのやうに胸の傷の上に手を置いた。
『何故あゝ村の人をゴタ〳〵さして置いて歸さないんだ！』

お父さんは額の筋をピク〳〵させながら室を出た、お父さんの影のやうに私も其の後から出た。

「何か使つて下さい」

と村の人達がお父さんの顔を見て口口に言つた。

「用事のある時は頼みにやるから歸つて居て貰はう」とお父さんが追退けるやうに其を斷はつたので、村の人はドヤ〳〵歸つて行つた。

私は呪はれるやうな村の人の嘲笑を聞いた。

醫者や親戚へ使に行つた人達が歸つて來て臺所て汗を拭いて居ると、お母さんが座敷から出て來て其を勞らつた。

「何うしました?」と皆んなが兄さんのことを尋ねる。

「なアに己れさ居れば斯んなことにやならなかつたんて――」

とお母さんは後ろに居る私を睨みながら、

「英雄と二人て居て本當に何といふ理窟なんだか――」私は嫂さんを可哀さうだと思つた。

「己れがまた今日に限つて畑さなど出て行くんだし、最う斯うした約束なんだらうよ」

弟等が畑から玉蜀黍を捥ぎつて抱へて來て、臺所へ其を下して皮を剝きはじめた、お母さんが其を見て臺所の人と呟き合つた。

『英雄も剝け、食はせないど』
　私は弟等の聲にまでビク〳〵した。
『英雄！』とお父さんが後ろから大きな聲で私を呼んだので、今頭から怒鳴りつけられるかとハラ〳〵して居ると、
『善し〳〵』と何だか解らないことを言つて、其のまゝ座敷へ入つてしまつた。
　醫人が三人來た。外科で評判な片野醫者は他へ行く約束を斷はつて、有丈の外科用具を大きな箱へ詰めて持つて來た、片野醫者を賴みに行つた茂七が歸つて來て其を得意さうに私の家の人や他の者に話した。
　其から漢法醫をして居る嫂さんのお父さんも車を飛ばして來た。代る〳〵診察した、外科醫が胸の傷に觸る時、兄さんは堪へ難いやうな聲を出して身を動かした、幸ひ丸は心臟にも肺にもかゝらなかつた、が何の醫者も九分九厘までは今夜だらうと言つた。お父さんが胸の中へ入つた丸を外科醫に取らせやうとすると、嫂さんのお父さんが何處までも其に反對した。外科醫も手術を窃かに怖れて居るらしいので結局嫂さんのお父さんの言ふことに從つて、外部からの治療だけにした。
　家の人は最う殆と斷念した、そして今は刻々苦悶の增し行く病人の呻唸の聲を聞きながら、たゞ其の死ぬのを待つて居る許りだ。親戚の人の來る每に病室は騷がしくなつた、泣いたり、歎いたり、餘り騷々しくなると、お父さんに額の筋を動かして顏を顰めた、そして二番目の叔父が其を止めた。

間もなく病室にランプがついた、兄さんの顏の色は一層青ざめて見えた。熱の出た爲か、呼吸がだん〳〵急はしくなつて、堪へ難い呻唸の聲は絕えず人の心を痛めた。

天井を見詰めて居る怖ろしい眼を兄さんは時々人々の方へ向けた。

私が怖くなつて病室から出て來ると、暗い寢所の中でお父さんの聲がする。

「最うお前も斷念めるんだ、仕方がない、皆んな因緣だ」

「私が意氣地なかつた許りて……」

「誰のせいもない、最う看護だけしてやる外はない」

お父さんは直ぐに茶の間へ出て來て、お母さんや親戚の人の前で、嫂さんの度胸のいゝことを賞めて話した。

其處へ分家の繼祖母さんが急々と走つて來て、お母さんにまだ一番目の叔父の歸らないことを話した、お父さんは繼祖母さんの顏を見ると直ぐまた奧座敷へ行つてしまつた。

分家のおばあさんは私達に對しては優しい善い人だ、信心者て每月近村のお寺參りや神詣りに行かないことはない、そして其の日の夕方には私達は必ずおばあさんから菓子か饅頭を貰つた。お母さんはおばあさんとは別段仲が善い、產の時に世話になつたからと言つて、お母さんはおばあさんの死ぬ時自分が看病して恩返をするのだと、おばあさんを喜ばせることがあつた。おばあさんは葬式を立派にして貰ひたいと言つて利得金を溜めて居る。おばあさんの魚も食はないて働くのを、お父さんは信心と一所に

馬鹿だと言つて嘲笑つた。

おばあさんは其から提灯をつけて、姉を連れて大神宮樣へお詣りに行つた。

私は絕えず怖ろしい幻に着纏はれた。其の夜は人の中に挾まれて寢た。

十一

「英雄」お父さんの呼ぶ聲がする。

「英雄、起きて成田の不動樣へ行つて來るか？」眼を開いて見るとお父さんが蚊帳の中へ入つて私の枕下に居る。最う明るくなつて居て、誰も蚊帳の中には寢て居ない。奧座敷の方から兄さんの苦しい呻聲が聞えた。

「起きて行つて來るか？」

私は默つて居た、私はまだ獨りで汽車に乘ることを知らなかつた、切符を買ふことや、乘車することや、乘替をすることを思ふと、汽車に乘るのが怖ろしいものになつた。

「さうなア――」と言つて私が默つて居ると、お父さんも其のまゝ默つて蚊帳を出て行つた。

成田へは行かなかつた。

兄さんの胸の上に置く氷は熱の爲に直ぐに水になつてしまふ、室が蒸すので障子を外して白い幕を張つた。

昨日の騷ぎに引かへて家の中はまるで水を打つたやうに靜かだ、時折り臺所の方で見舞を言ふ人の聲

がする許りて、人々は濕やかに病人の荒い呼吸と、かすれた呻唸の聲に胸を痛めた。
分家から人が來て、物置の中に積み重ねてあつた大豆幹を車へ積んで持つて行つた。
やう〳〵物置の後ろの材木の間から釣竿を見つけ出して、絲や鈎をつけ直して私はやまべを釣りに小川へ行つた。

土手をぶら〳〵歩いて居ても人と出會ふのが怖しかつた。

座敷が込むので私は溜部屋の方へ來て寢た、外に二三人寢て居る。お松も側へ來て寢ころんだ。直ぐに鼾が起つた。

私も幾時間か眠つた、フト眼を覺ますと家の中は怖ろしいほど寂として居る。また私は幻に苦しめられた、何かてポンと一つ叩かれると、其の靜かな夜の闇の中へ頭が消えて失くなりさうだ。お松が私の方へ乘せかけて置いた足を引いて、そして身を伸ばしながら微かな鼾をした。私は身が浮されさうな、頭が消えて失くなりさうな、變な氣持になつて、何か觸るものが欲しくなつたので、おづ〳〵お松の方へ手を出した。

「馬が來た！」と言ふお母さんの聲に私は驚かされた。氷を買に行つた馬が歸つて來たのだ。お松は大きな欠伸をしながら起きて行つた。お松は目が覺めて居たんだ、『昨夜、英雄さんは――』などゝ誰かに話されると大變だ、私は何處かへ逃げ出したい位又其れを心配した。キーッと門が開いた、そして爺の

音が庭へ入つた。直ぐに臺所が騷がしくなつた、其の中から氷を碎く音が聞えた。

兄さんがまた呻き出した。

十二

瘦せ衰へた兄さんの身は床の上に仰のけに寢たまゝ少しも動かすことが出來なかつた、たゞ氣だけがマス〳〵狂つて行つた。頰のこけた靑ざめた顏に眼ばかりギヨロ〳〵光つた。

苦り切つたお父さんの顏を睨んでは、

『慶喜? 將軍樣の名前だ、百姓は傳吉で澤山だ、ハヽ、ハヽ、慶喜! 慶喜!』兄さんは病氣の前にもお父さんの改名を善く思つて居なかつた。お父さんは家へ仕事に來る村の人を呼ぶのに『佐平』『伊之公』と誰ても語尾に輕蔑の口調をつけて呼棄にする、兄さんや私は其の大風なお父さんの態度を嫌つて『佐平さん』『伊之さん』と優しく言つた。『あんな犬見たいな奴等に』とお父さんはまた私等の態度を喜ばなかつた。『人間は誰だつて同じだ!』と兄さんは何時も口惜がつてお父さんに反對した。

一番目の叔父はやつぱりづう〳〵しく太い鼻がかつた聲て、好い加減の詫を言ひながらノソ〳〵病室へ入つて來た。叔父の顏を見ると兄さんは急に顏の色を變へて、口をモグ〳〵させ手足を動かし、遂には何と言つても制し切れないほど亂暴に惡口や罵詈を浴びせかけた。

『氣の沈むまで向ふへ行つて居れ』と分家の叔父はお父さんに病室から出された。

『馬鹿野郎!』と其の後から言つて、兄さんは高々と笑つた。

『死ね！　死ね！』『殺せ！』

敎育界の墮落を罵倒する、政界の腐敗を攻撃する、と直ぐにまた鋒がお父さんの上に來て、『郡會議員！』と冷やかす。赤十字の徽章を得意になつて下げて步く人を謗る。また木杯や銀杯を罵つた。

其から枕下に看護して居る嫂さんの靑い瘦れた顏をヂッと見て居るかと思ふと、『腹を引裂く、嬰兒が血だらけになつて跳ね出す』と叫びながら蒲團でも引破るやうな手付をする、——胸の傷から赤い血が流れ出るかと危ぶまれた。

さうかと思ふとメソ〳〵と沈んでしまつて、自分の居た中學のことや、辭職願のことや、福島へ置いて來た荷物のことや、福島へ轉任する前に宮城の下宿へ置いて來た本箱のこと等を彼れ是れ騷ぎ立てゝ、遂に荷物！　本箱！　と其れ許り氣にして居る。

『宮城から誰か取りに來る！』

かう言つて福島へ置いて來た荷物に甚しく氣を痛める。何うにも其を心配して兄さんの氣が沈まらないので、一番目の叔父が宮城へも廻つて轉任前の樣子を聞いて來る筈で福島へ荷物を取りに行つた。

嫂さんの話によると、兄さんは宮城から福島へ轉任して來て非常に失望した、——學校の生徒からは餘り人望がなかつたらしかつた、其から福島は肺病患者が多いと言つて、兄さんは每日宮城の方の空を戀しがつた。

『僅か五圓の增俸に騙された――』と言つて轉任したことを口惜しがつた。ことに轉任後間もなく宮城の中學に學生騷動が起きてから猶更兄さんは氣を揉んで心配した。

――丁度其處へ小野久（宮城中學の秀才だと言つて兄さんが其の人の書いた文章をよく私に見せ〳〵した）と言ふ人から手紙が來た、お父さんが其を讀むことを私に言ひつけた、私は其の手紙を懷ろへ入れて裏の林へ行つた。熱の迸つた筆で慷慨的に走り書いた長い〳〵文章の中には、教育界の罵倒や、社會の腐敗を憤つた言葉や、學校騷動と退校處分に遭つたこと、恩師（兄さん）に對する熱心な崇拜、其から自分の抱負責任まで大きな字で黑々と染めてあつた。

其を歸つてお父さんに話すと、『弱いからだ！』と私のことでも怒り付けるやうに、たゞ一言、あとは何も言はなかつた。

お父さんは誰よりも打ち沈んだ。ほとんど口も利かなかつた。

お母さんの小言や溜息は病室でも茶の間でも臺所でも絕える間がなかつた、『側について居て何といふ理窟なんだか』始終斯んな小言を繰返した、私は嫂さんが可愛さうになつて家の中に其を聞いて居られなかつた。

十三

茫々と生え伸びた庭草の中に、桔梗や萩は最う何時の間にか咲いて居た。

私はお松や姉と裏の森の中にある墓道を掃除した、十三日の午後には弟等が野原へ盆花を取りに行つ

た。

其の間私は小さい時分に世話になつた爺さん媼さんを忘れることが出來なかつた、お寺の森へ行つて爺さんの墓へ花を上げてやりたいと許り思つて居た、媼さんは病氣で寢て居るのだ。

『英雄らさうして居ないで、媼が惡いといふから行つて見て來るものだ』お母さんが度々私にさう言つて呉れた。

『英雄ら爺が墓へ行つて花でも上げてやるものだ』と姉からも言はれた。

私は爺さん媼さんを忘れて飯さへ食ふことが出來なかつた、『媼さんが病氣で寢て居る』『自分て許りうまいものを食べて居る』頭の上からワャ〳〵囃されるので、私は箸を投つて薄暗い食堂を逃げ出すこともあつた。

十三日の晩に分家のおばあさんが來て、姉と弟を連れて、弟は赤い提灯を持つて墓場へ佛様を迎に行つた。

お父さんは別段沈んて居た。

私は早く休暇が終へて町の下宿へ歸つて行きたかつた。

十四

不吉な日が二度私の家を見舞つた、此度は私が赤痢になつた、耻と苦痛とて私の家はまるで搖ぐやうな思てあつた。

驟雨(よつかけあめ)の來る頃で、私は濕つぽい風に吹かれて、病氣になつた其の日、午から小川の方へ遊びに行つた。其の日も何となく私は氣分が惡かつた。ぶら〳〵土手を歩いて行くと、村の少年が二人川狩(かんがり)をして居た、私は土手の草の上へ坐つて暫く其を見て居た。が奴等最うへト〳〵に疲れて桶も何も動きやしない、時々私に助を求めるやうに土手の方を見あげる。私は餘ッ程川へ入つて水を汲んでやらうと思つた、が最う二三日すると町の下宿へ歸つて行かなければならないので、泥水へ入つて手足を汚すのを怖れた。

二人は最う絶望したやうに桶を投つてしまつた、

『英雄(ひで)さん、これからでもいゝから仲間へ入えねえか』と二人でがつかりしたやうに堰の所へ膝を折つて私に加勢を求める。

が私は躊躇(ためら)つた。

『詰らねえ、己ら最う止すべえ』奴等桶を取る元氣すらない、そして口惜しがつて呟きながら堰を切らうとした、が底の見えるほど淺くなつた所で雜魚(ざこ)がペチヤ〳〵やつて居るのを見ると、急に二人は元氣を出してまた桶を取つて水を汲みはじめた。がまた直ぐ元氣がなくなつて『駄目だ、止すべえ』と此度は笑ひながら溜息をついて、雜魚のペチヤ〳〵する方を見る。

私は何の氣なしに助けてやる氣になつて、直ぐ着物を其處へ脱ぎ棄てゝ中へ入つた。私が入つたので二人は急に元氣づいて、其から三人して水を汲み出した。私は最う直ぐへト〳〵になつてしまつた。驟雨の雲が晴れたので、西へ廻つた太陽はヂリ〳〵背中へ照りつけた。汗がぼた〳〵流れる、舌がひッつ

くほど口の中が渇いて來るので、私は何遍も近くにある突拔井(つきぬきゐど)へ行つて水を呑んだ。

其ても我慢して汲み干してやつた。

二人は存外魚の居なかつたのを零(こぼ)しながら、桶や唐鋤を洗つて土手へ上げ、褌を脫いで其の水で身を洗つた。そして喧嘩をしながら魚(さかな)を分けて歸つて行つた。私には小ッぽけな鯰を一ぴき置いて行つた。

何だか急に氣分が惡くなつたので、其のまゝ暫く土手の上に寢そべつて居た、日に照されて暑いのに妙に寒氣がして身がざわ／＼慄へる、そして腹がチク／＼痛んで來た。そして甚く氣分が惡くなつた。私は無理に元氣を出して起き上つた。口を開いて干からびた鯰を稻の葉で鰓から釣した。時々眩暈(めまひ)がして足がよろ／＼する。

傘もさゝずに日に燒けて赤くなつた顏を西日に晒しながら家へ歸つて行つたので、打たれるほどお父さんに怒られた。鯰は猫にやつてしまつた。

お母さんが大きな梨をくれた。

私は其のまゝ座敷へ行つて寢そべつた。まるで冷水でも掛けられるやうに、背中がゾク／＼惡寒する、頭もだん／＼烈しく痛んで來た。立つと目が眩んで倒れさうになる。

私の樣態が急に惡くなつたので、兄さんの病室に居た醫者が來て診察した。

私は吐いた、夕方近くから下痢した。

カナ／＼が鳴止んで軒端に蚊の聲の怖ろしく聞える頃、私は人の背中に負はれて長屋の養蠶部屋へ連

れて行かれた、私は最う直ぐ怖ろしい病氣を豫想した。

新聞紙を貼り付けた壁、鼠の來ないやうに天井板の隅々に挿込んだ杉の枯葉、古い平繭、蜘蛛の巣、この人氣のない板敷の上に疲れた私の身はドシンと倒れた。

其の夜は養蠶部屋に姉と二人て寢た。

私はほとんど眠れないほと度々起きた、兄さんの呻唸聲が母屋の方から聞えて來るやうて、私は絶えず夢魔のやうに怖ろしい幻に惱された。幾度も側に寢て居る姉を呼び覺ました。

朝早く醫者が來て身を診察した、そして丁寧に便をしらべて行つた。お父さんやお母さんが代る〴〵私の身を見に來た。私は其の度辱かしい思をしなければならなかつた。だん〴〵苦しくなつた。

夕方になつた。

「一寸彼方さ行つて來つと」姉が枕下から遠ざかる。

「最う己れを置去りにして母屋の方へ行つちまアのか？」

「直き來るよ」

「虚だ〳〵、醫者の野郎己れを赤痢だつて言つたんだ」

「さうだね、己れ一寸兄さんを見て來るのだ」

「虚だ〳〵、最う門さ繩張られたツペ？」

「馬鹿野郎、そんなことあるか！」

「行けく、己ら最う一人でいゝから——」

姉が居なくなると、其の代りに白い着物を着た見知らぬ女が何時の間にか來て枕下に居る。一ッ二ッ私に言葉をかけて、其から熱を計つたり便器を掃除したり、藥を呑ませたりする。私の身からはあぶら汗がだらく流れた。

毎日赤い血が下る。

どろくした油藥を呑ませられる。

巡査と役場の人が來て汚れたものを燒いて行つた。が遂には最う耻かしいと言ふよりも、私はたゞ苦痛と衰弱を訴へたかつた。

病勢が烈しくなつて私はほとんど夢中になつた、が私の身は墓穴のやうな冷たい暗い場所を切りに捜し求めた。裏の杉森を見ながら飛び起きやうとするので、誰かゞしつかり私の身を抑へ付けて居る。看護婦の白い着物や、醫者の洋服や、お母さんとお父さんの顏が、幻のやうにチラくした。呟く聲と、高く私を呼んで居る聲が、時々風の遠鳴ても聞くやうに耳の中でゴソくした。

枕下が甚く騷がしくなることもあつた。

（この譫言は病氣が直つてからお母さんから聞いた）

「見ろ、見ろ、若い姐樣がゾロ〳〵屋根の下を通る、奇麗だこと、あれ〳〵皆んなしてニコ〳〵笑つて居る。お母さん、咽喉が怖い、桐の木で首絞められる。

あゝ一錢の銅貨が己れの手から飛んで行つてしまつた、お母さん、桝！」

そしてお母さんから桝を何うすると聞かれた時に「其の中へ入るんだ」と私は言つた。

「英雄、しつかりしろ！　お前が此の家の後を繼ぐんだぞ」

夢中で譫言をしやべつて居る中にも、お父さんの口から出た此の言葉だけは深く〳〵私の心に印象した。

「ム」と私は僅かに言つたが、私は光を怖れるもぐらもちのやうにたゞ暗い物の中へ入りたかつた。

其から四五日して病氣はすつかり全快した。看護婦が歸つて行くと、急に秋風のやうなすが〳〵しい氣持が私の腹の中へ流れ込んだ。そして私の家へ仕事に來る親分が泊りに來た。長屋の養蠶部屋へ寢るのも最う今夜限りだ。湯を浴びてから病後の疲れた身が、グタリと新らしい床の上に横になつて居ると、枕下に天女の笑のやうな月光が流れ込んだ、親分が寢て居るまゝ私の床を窓際へ引きずつた。

時折り木から木へ飛び移る蟬の聲がチーッと聞えた。

私は痩せた力のない手を月の光りの中へ出して指や爪を弄んだ。

病氣の苦しかつたことを親分に話すと、親分は自分のことのやうに同情して聞いてくれた。

「外分惡かないなア、親分」
「なに外分惡いもんか、名前えこそ赤痢だねえが、下る病氣は己らも何度もやつたもんだ」
盆踊の太鼓が露濕つた空から遠々と響いて來た。
「己れはいまに醫者になるかなア」
こんなことまで、親分と夜の更けるのも知らずに話した。いろ〳〵な虫が絶えず鳴いて居た。

十五

久し振りで母屋へ歸つた。
井戸端に米を漸いて居たお松が私の顏を見て苦やり笑つた。まる〳〵が不意に横合から飛んで來て、まるで狂ひ出したやうに私の身へとび付いて嬉しがる。姉も、お父さんも、お母さんも、皆私の病氣の直つたのを喜んだ。
弟等は學校へ行つて居なかつた
『お母さん、兄さんは?』私は言ひやうがなくて斯うお母さんに尋ねた、最う私の眼は涙で一パイになつて居る。
「快くはなつたが、あの馬鹿だから仕方がない」とお母さんは兄さんの怒鳴る聲を聞きながら寂しく笑つた。
私は直ぐに兄さんの病室へ入つて行つた。兄さんは忽ち其の怖ろしい眼を私の方へ移してギロリ眺み

付けた、そして『赤痢か！』と言ひながら吹き出すやうに笑つた。

押入の襖を開けて書物を捜して居ると、私は貫かれるやうな怖ろしい兄さんの聲を背中から浴びせられた。

『死ぬ！　死ぬ！』『紐を遣せ、紐！』『鋏！　鋏！』『馬鹿奴等！』『アハヽ、ハヽ』『何故生てる何故？』

腕は細く動かす力もないほどに痩せた。肋骨の出た胸、左の乳の下の傷の上にはまだ氷嚢を置いた。看護の女が柔かいフランの切を火で暖めては代る〳〵病人の冷えた足を其て包んだ。嫂さんは別の人のやうに面やつれがした、如何にも力のなさゝうな手で茶椀から卵を匙て兄さんに啜らせた。

十六

私の病氣になつた時は九月の學期がはじまつて居た、私は醫者の診斷書を添へて欠席屆を出して置いたので、病氣が直ると直ぐに下宿へ歸つて行つた。

下宿の亭主は私の歸つたのを見て非常に喜んだ、が私には何だか馬鹿にされたやうな氣がして、下女の顏も友だちの顏も、ことごとくこそツぱかつた。二階の自分の室へ上つて行くと、破れた障子、インキを零した疊の汚點、反り曲つた柱、是等は凡て安堵の思を私の室から奪り去つた。

私は町の裏道を通つて學校へ行つた。

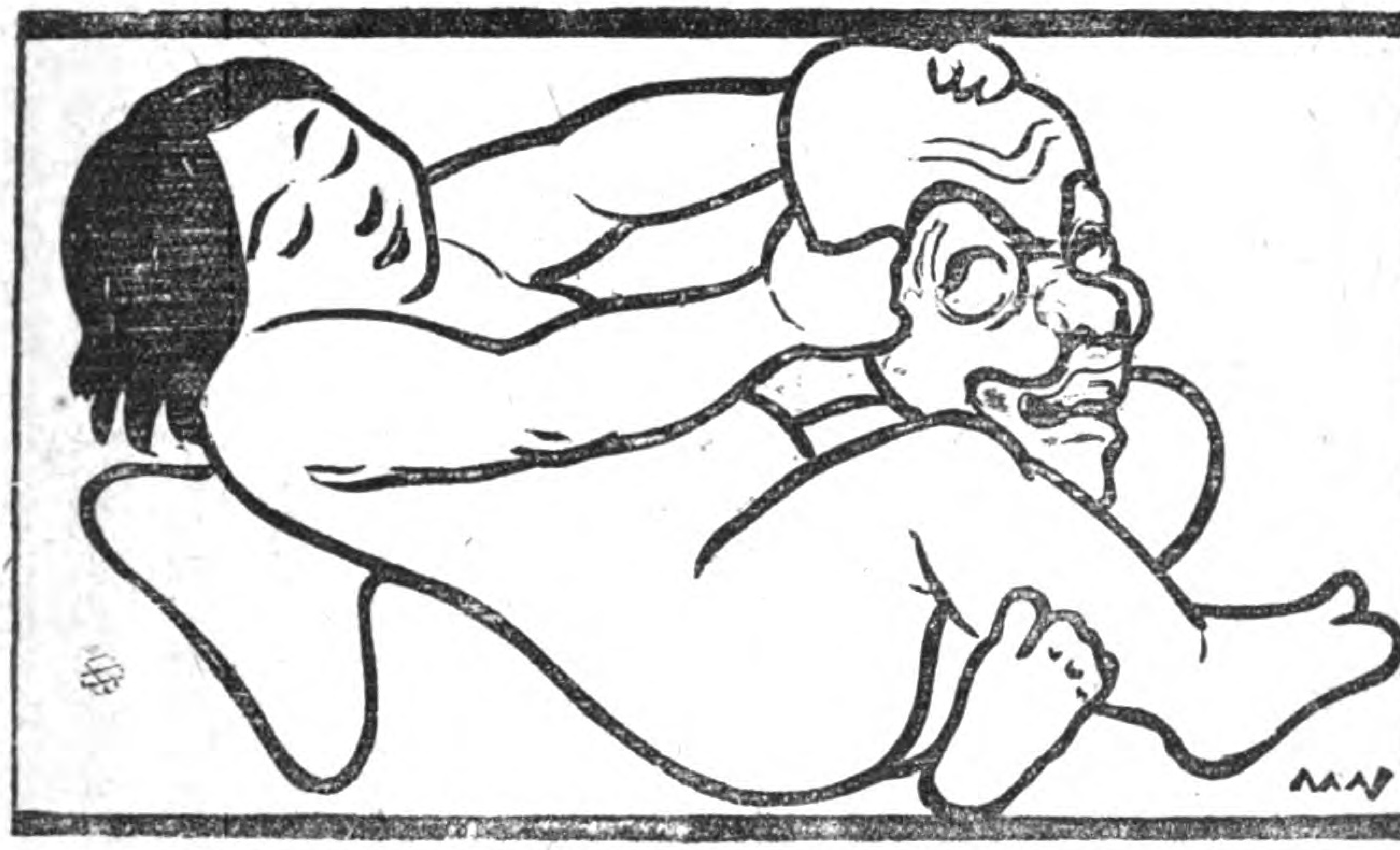
出會ふ生徒が皆私の顏を見てクス〳〵笑つた。學校の門をくゞる時身がゾツとした、窓から首を出して居た先生が私を見て笑つた。冷々しながら控所へ入つて行くと多くの生徒の顏が思合はしたやうに一

時に笑つた。

敎場では恥かしい病氣のことを先生が平氣で私に尋ねた、私は口惜しいと思ひながら其の厭な問に答へなければならなかつた、敎場全體が口ごもる私の聲を聞いてクス／＼笑つた。私は急に家が戀しくなつた。お父さんやお母さんの所へ歸り度いと思つた。

二時間許り敎はつて授業の中途から下宿へ歸つた。歩いて居ながら其のまゝ地びたへ倒れて寢ころびたくと思ふほど身の疲勞を覺えた、自分の室へ入ると直ぐに私は押入から蒲團を出して敷いた、ポチ／＼白い汚點、上敷は行李の底に丸めたまゝ入れてある。私は立ち上つて障子を閉めた、そして蒲團の上をゴシ／＼こすつた。

（完）



日暮前

眞山青果

一

宿直醫員の診察するところでは、格別心配するほどでも無かつた。熱があるのは蛔虫のためかも知れないとて、藍紙に包んだ粉藥を寄來した。けれども、作太郎は初ッから年若い醫者と見くびッて居て、ロクな挨拶一つ云ふ氣にはなれなかつた。

午後の病院の靜かな中庭には、これから十二三日も降りつゞけると云ふ彼岸前の雨がシト〳〵降つて居た。

院長が居なくては爲方が無い、最初からそれは決つてる。それでは直ぐ濱病院へ連れて行つて、濱學士に診て貰ふの

だと、作太郎は獨りて無闇に急り立てゝ居た。拇指のふくれた足袋を穿いた、田舍臭い女房は唯もう良人の後ばかりにオド〳〵して居て、何うかすると病氣の小兒にさへ心がお留守になり勝ちであつた。それは頸筋の細長い、虫氣のありさうな目付した男の兒であつた。檢溫器を腋窩に狹まれたまゝ、穩和しく目を明いて診察臺の上から見て居た。

小兒は時々臆病さうに、小さい乾いた咳嗽をした。

「それ、見てやらないのか、何んだ。」

作太郎は醫者の前でも誰の前でも遠慮なく、齒痒ゆさうに舌打しては斯う女房を叱り付けて居た。三つも年上の女房――おとくは最う人の目を隱せないほどの醜い大儀さうな身體になつて居た。

廣い式臺のある玄關前には、前足を縛つた荷馬が降り通ほす雨に濡れて居た。鬣を鼻まで被つた、頸の下がりたがる牝馬であつた。入院中に用のある品物類は、燒き沙魚、豆粉の紙袋、一切そんなものまて荷にして三里の道を擔けて來た。

イラ〳〵した作太郎の呼び聲に呼び立てられて、愚鈍さうな顏付した作男が、これも肩から濡れて車寄せの木の下から出て來た。

「多利、馬鹿、その馬の背中を見ろ、何んだ馬鹿。」

頭から嚙付くやうに云はれても、作男は別に驚きもしない。重吹のやうな細かな雨に頭の毛を濡らして、主人の顏を見て立つて居る。「常の時とは違ふぞ、馬鹿。馬鹿」。

待たせて置いた二臺の車に乘つてからも、作太郎は幌の中から頸を突き出して喧ましく斯う呶鳴つて居た。

雨に濕つて夕方のやうに薄暗らい午後であつた。作男はビシャ〳〵撥ね上がる泥濘の道を、手綱を長く取つて車の後から跟いて行つた。濱病院の診察もそれほど變つては居なかつた。却つて沈着きなくキヨト〳〵して居る作太郎を不審さうに見て居た。それでも如才ない開業醫者は、三日か四日、病氣の經過を見る間ならば、兎に角入院さして見るも好いと云つた。母親に抱かせた小兒の胸に聽診器をあてゝ居る間も、作太郎は煩さく目を瞬いて、短かい頸の汗を絶えず拭いて居た。院長の前では聞かれもしないことまで、調子付いていろ〳〵喋つた。

「無理もないよね、この上を二人も奪られなすッちや。私も去年小さいのを亡くなして覺えがある。ナアに辛つと百幾日と云ふんだがね、それでも矢張り當座は不可ないものだッたよ。」

頭に白い毛の交つて來た醫學士は、抱くやうに長がい膝を組み上げながら斯う云つた。

「何しろ昨晩の熱の鹽梅なぞ、この上の兒の時にソックラなんです。こりや不可ないと然う思つた位でした。」

「慌てるからな、然うなると。誰でも同じだよ。——そして何うするね、附添に居る人は。」

「それも何れ樣子を見ての上でゞが、なるべくならば此者。」と、隅の倚子に窮屈さうにして居る女房を指して、「これ一人にまかせて置きたいと思ふんです。實は先月の末から本宅の普請を初めましてな、

私はその些いと手を放せないと云ふ妾なんです。」

「が、奥さんも大抵ぢやないぜ。何しろ、その身體ではな。」

院長は快濶さうに笑つた。それを拍子に膝をほぐして立つた。何所か繋ぎ目か判らないやうな雨の夕暮が、次第にガラス窓の内から外へ重くなつて來た。院長に代つて、白い上着を脱いだ細ッこい筒袖の看護婦が上草履を鳴らして入つて來た。

病室は廣い廊下を突き當つて、その隅にあつた。生憎特等室が滿員して居て、或る外科患者と同室することになつた。

無花果の葉が片方の窓一杯にふたがつて居て、朝が遲さうな部屋であつた。「何うせ錢だけのことしか無い。」作太郎は部屋へ入るなり獨語のやうにそんな事を云つた。然し、おとくは室に不平らしい顔付も無く、然も草臥れ切つたと云ふ風て、角巻ショウルに纏るんだ四つにもなる小兒を抱いて來た。そして、そこにベッタリ坐つたまゝ晩飯も欲しくないと云つた。素湯ばかり旨さうに飲んで居た。

「そんな事ぢや不可ないよ、持つて來た葛粉があつた筈だ。」

作太郎は斯うすゝめて、自分で葛湯など拵へた。おとくは一匙ごとに同室の患者を憚るやうにして、その葛湯を飲んで居た。

作男の多利はもう暗くなつたから、病院の提灯を借りて、三里の夜道を濡れながら歸つて行つた。

五

その晩は好く眠らなかつた。弱り切つた蚊の一つが一晩中耳の周圍を細く離れなかつた。考へてると心付かないで何時の間にか考へて居る事が多かつた。父の事、弟の事、また默つて死んだ繼母の事。忘れて居たやうな事ばかり不思議に思出された。夜中に幾度も起き上つて小兒の樣子を見た。弛んだ口から息を吸入れて、頽れたやうに眠つて居る妻の傍に、小兒は手足を引き縮めて海老のやうになつて眠つて居た。細々と顫えて居る夜深けの電燈の光で見ると、額から眉のあたりが妙に皺んでるやうに見えた。

偶と、これも奪られる顏だと、然う考へた。六人產んで四人奪られた。自分の前途が暗いやうにも思はれた。四十三と云ふ自分の年も遂ひ思はずには居られなかつた。

雨は何時の間にか上つた。日は洩れないが白い雲が高かい空に光かつて、何所となく秋晴の氣組みを見せる朝が來た。窓に覆さつた無果花の葉を枝から搖るがせて、秋らしい朝風が靜かに流れて來た。それと共に、辛味を持つた煙りの臭ひが何所からともなく目に滲みて來る。作太郎は窓の縁に兩手をもたせて咽頭の底か後頭の底の邊りに未だ睡氣の殘つて居る目で、心持よく澄み上つた中にも何所悲しみのあるこの朝を眺めて居た。

同室の外科患者は、睡むいだけ睡つたと云ふ風で、快く起きると大きなタホルを下げて顏を洗ひに行

つた。髪の毛の短かく剛い、目の强つい、見たところ若い裁判官でもあるかと思はれるやうな人てあつた。頭に厚いフランネルの濕布を卷いて居る外には、何所も病氣らしいところが見えなかつた。

「辛つと天氣てすな、好い鹽梅だ。」

窓の前にボンヤリ立つて居る作太郎に斯う聲を掛けて、挨拶も聞かずにサッサと出て行くのてあつた。

昨夜、看護婦に賴んて、通知を二十枚からの端書て出した。その端書を見て、午後から見舞ひに來る人が多くあつた。

米屋町に仲買店を出して居る先妻の伯父、辯護士の伊上、醫學校の書生を相手に金貸のやうな事をして居る守屋、その又手代換りになつて居る頰髯の長がい士族上りの新妻翁さん、名前だけ寄席亭の主人になつた仁作、別に仕事と云ふものが無くても兎に角紋付の羽織を着て暮らす岡下、昔遊んだ時に目を掛けて置いた藝人上りの江戸文の主人、こんな人達が入代り立代り巖丈な鑄物火鉢の傍に寄り集つて、賑かに、然し下卑た笑聲を聞かせた。大抵は作太郎が麴屋の息子と云はれて、押し廻した頃の遊び友達てあつた。

「よ、こりや珍らしい。何うだね、昨今のところ。」

「駄目だよ、何事も昔の事さ。」

「あれ以來だね、その癖、公證人役場へ行つちや始終あの先生から噂を聞いてるのさ。」

斯う云つた挨拶が互に取換されて、年もない考ひもないやうな話ばかりに時間を忘れて話し込んで居る。またこの間に居て二人片隅へ寄つて、何かヒソ／＼貸借上の相談をして居る者もあつた。これだけ集つてこの儘になるまい、何うだこれからと話を持出す者もあつた。けれども、作太郎は高々と西日の射し付ける別の窓の方に寄つて居て、この仲間の話へは餘り觸らないやうにして居た。自分が聞くよりもこんな取外した話を看護婦や同室の人に聞かせるのが嫌であつた。

中學校の歸りに學校包みを下げて寄つた長男の東一は窓と窓の間を行つたり來たりしながら、宿題に出された數學の公式を切りに暗誦して居た。二年級になつた時作つてやつた制服の寸が窮つて、ズボンの裾に二寸から繼布をするやうな上背も出來た。明日の準備があるから三時の汽車で歸ると云ふのを、用があるとて引止めて置いたのであつた。

「未だ歸つても惡るい、お父さん本當に明日の下調があるんだよ。」

東一は鉛筆で本の表紙を叩きながら又それを云ふのであつた。

「用があるんだ、家に。」

單の義務ばかりに默つて來て默つて歸らうとする長男の心持が面白くなかつた。この頃は何事にも離れて一人になりたがる。小さい時のやうに母おとくにも馴染まなくなつて、態と外々しくして居る才覺振りが顯々と見える。

「お前、病氣見舞に來て、病人の顏を見てやつたのか。」

「うん、見た。」
作太郎のあつめた目付に氣が付かぬやうな素振りして、東一は又暗誦に行つたり來たりして居た。
明るかつた窓に日が冷めた。向町の臭莢の大木が葉のゆらぎを止めると共に、急に高かく空に聳え立つて、遠い町から種々の響聲が幽かに〳〵傳つて來た。
「駄目だよ。幾らすゝめたつて昨今の作太郎と來たら、とてもお話にやならないから。」
斯う云ひながら、銘々手提や袱紗包みの書類を持つた友達どもは、心の底が饑えるやうな夕方を家々へ歸つて行つた。上草履を穿いて表玄關まで送り出した作太郎は、暫くの間立つて友達どもの後姿を見送つて居た。そして、夕暮足が家に向いた時、初めてそこに自分を待かねて居る妻子を思出して、急に疲れたやうな姿して歸つて行く友人どもを思はずに居られなかつた。
養賢堂の森へ歸る小鳥の群が空を飛んで過ぎた。
晩飯を食べて歸つて行く時、東一は思出したやうに戸口まで小戻りして來て、
「それから、昨日叔父さんが來て然う云うから、文庫藏の長持から革羽織を出してやりましたよ。何うせ俺のものだから、後て云へば好いつて、然う云つて行きました。最うソロ〳〵獵期になるから、今の内に洋服屋へやつて洋服に仕立直すんだつて。」
「峯が來た。」斯う聞いたゞけでも作太郎の色が變るほどであつた。
「長持ごと皆遣つてしまへ。あんな奴の品など預かつて置くことがあるものか。」

作太郎は激した聲で斯う云つて、東一の顔まで睨み付けるやうな目付をした。
東一は默つて出て行つた。

三

「では、お近かいうちに是非一度被來ッて下さいまし、おやうもそりや大きくなりましたよ。」
以前知つて居る女で、今新町通に待合を出してるお紋に斯う云はれて別れた。そして、丁度出るところの下り汽車へ乘つた。客と一緒に飯坂の温泉へ行く所だと云つて、キッソリした姿に輕るさうな薄靑いセルのコートを着て居た。今話に出たおやうは作太郎の兒と云ふ噂さへ立つて、當分は月々の手當もして居た。
實り時の田圃は明るく遠く續いて、山から下つて來た懸巣の啼聲がそこここに高く榛の木の枝から聞かれた。田と云ふ田の水はスッカリ落して、小川も溝も流れが道傍へ溢れるほどあつた。
村口の土橋まで來ると、カラリとした秋晴の空に響いて、普請場の手斧の音が聞えて來た。
通路にはこれも矢張昨年普請した弟の家があつた。その前を通るのさへ氣が置けた。暗らい竹蔀を下した片側の百姓家を覗き込んで聲を掛けながら何時も通り過るやうにして居た。自分がそのやうにして居るのに、背の高かい峯次郎は咳拂ひなぞしながら大きな顔して通るのが、いかにも面憎かつた。

近所から病氣聞きに來る者が爐傍に集つた。土藏隣の分家の叔父は長がい煙管を揭げて、裏口から入つて來た。この叔父は如何な時にも是非の口を利く事がなく、作太郎の遊び揚句、仙臺で借りた借錢の爲めに、執達吏が土藏の鍵を峯次郎と奪ひ合つて爭ふ場合でも、默つて爐傍に煙草を喫かして居てそこへ顏も出さなかつた。繼母が齒痒がつて膝を突いても、俺は非力でと云つて相手にならなかつた。本家から分いて貰つた身代を增しもせず減しもせずソックリその儘伜へ讓つて、農閑の時は小禽擊ちか畔乾しを樂しみに事なく日を暮らして居る。

「醫者にも未だ判からないか、何しろ錢遣ひな事だな。」

と斯う云つた限り、庭先に俵編みして居る淺藏を相手に取つて、鹿笛の吹き口傳を話し初めた。獵話になると不思議に魂が吹込まれたやうに勢付いて來るのである。山神講の先鐵砲に出て、宮歸りの狐を的ひ擊して擊ち損ねた話が何時も出て人を笑はせる。

「叔父さん、峯の話聞いたから。門前ぢや酷く憤つてると云ふ事だ。」

「然うださうだ。」

「また、あのお秋に何んて未練あるんだ。大抵目の覺める時にや目を覺まさなくちや。ありや、何う見ても俺に面當てしてるとしきア見えない。」

「そんな譯てもあるまいが、未だあれも若いからな。」

「若かい、若かいて赦される事なら好いが困つた奴だ。あんな所まで行つて來ても未だ懲りやがらぬ。」と

云ふ様に聲が聲に激して顫えて來る。

叔父は閾へ腰掛けた兩膝を日和に抱いて、今の話のつゞきを淺薇にしかけて居た。縮れたやうな秋の明るい日は、苦勞を求めた事のない老人の、皮膚の厚い額に落ちた。

今住んで居る家は、濶達な父が相撲上りの源助を家番に大弓の休み所に建てたのである。それに建増して十二年前の火事以來こゝに住むことになつた。

約しい繼母は何うせ本宅は新築するのに見得は要ないとて、松島から古家を買つて來て、それを寒中曹達水で洗つて建直した。先のおきくに東一の妹が生れた年であつた。身上の事より外に何も悲しくない嫁と姑は、その曹達水にあたつて指の爪が拔け落ちるのをも厭はなかつた。柱にも板の間にも、稼が好きの女どもの勞苦のさまが顯然と跡を殘して居た。

火事の日には仙臺に居て家のことなど忘れて居た。丁度監獄に工事用の竹を一手に引受けたその祝ひに、二三日醉ひつゞきの身體を新町通りの或る家の二階に投出して居た。弟の峯次郎はその頃仙臺に下宿して中學校に通つて居た。教場で電報を受取つた渠は燒けてる家を見る前に放埒な兄の居所を探がさねばならなかつた。上草履を抱いたまゝに學校の制帽を懷にかくして、體裁の惡るい思ひしながらこゝと思はれる家を一軒〳〵尋ねて歩るいた。

「嘘なもんか。」

斯う云つて電報を前に投出された時には作太郎はたゞ顫えて口も利けなかつた。

弟に引立てられるやうにして家に歸つて見ると、鹽釜松島の遠い村から駈付けた消防夫が抑え水の役を果して引上げるところであつた。男まさりの噂のあつた繼母の顔は、眞蒼に痼立つて居て、唇を嚙締めて燒跡を眺めて居た。

「作太郎、此方へお出で。」

斯う云つて自分が先に立つて裏田圃、路を、默つて下町の親戚の家へ逃れて行かれた。

「世間へ遠慮と云ふ事があります。火の落ちるまでは。」と云つて繼母は蒼褪めた頰に淚を傳はらせて居た。

それから後女どては唯もとの家を二度見たいばかりに烈しく働いたと云つて好い。諸事儉約、物貰ひ遊藝人無用の木札を門前に貼出して、臺所の用事を出來るだけ縮めた。繼母が何よりの心樂みにして居る春秋の湯治さへ、一度は必らず止める事にした。夜の寒く長い冬になると母は夜深けまで絲繰臺を爐傍へ持出して、作男どもの夜業を見ながら絲車を唸らせて居た。この身上て、村の麴屋と云はれた家で、然うまで覺悟する事はあるまいと、誰でも好く然う云つたけれど、繼母は始終蒼い顔して家の事ばかり案じて居た。「人の家の潰れる前には、土臺が燒けると云ひます。」と斯う云つて、今までになく神佛を信ずるやうになつた。

作太郎は思ひ詰めた女の信心と云ふものを恐ろしいと思つて見て居た。

四

昨夜の酒の疲が頭の髓に殘つて居て、却つて朝早く目覺めた。仙臺に遊んで居る時でも朝は早く、冷たい水で洗はなければ氣分がサツパリしなかつた。雨戶を繰明けると塀の偶、植込の陰には昨夜の闇が薄く殘つて居て、空が蒼く光つて居た。

朝仕事の無いこの頃は男部屋にも起きた聲は聞えなかつた。

長い田舍町は掃淨めたやうにシツトリ落付いて、出入り不揃な藁屋根は夜露に濡れて寢て居た。遠くの町角に黑い物が轉つたり、走つたりして居る。走る時スタ〳〵と、犬の足音が思ひの外近かく聞えた。

作太郞は昨夜の酒の上を考へながら、素足では冷たいやうな道を步いて、鎭守八幡の境內にも入つて見た。そして久し振りに堂の正面に揭げてある、八つの時に書いて納めた懸額なぞを透しても見た。その額の字を習はせる爲めに、父は態々仙臺から書家の石森先生を招いて、暫くの間うちに滯在させて置いた。朝から酒にひたつて居る人で、雪菜びたしの小鉢を机の傍から離した事の無い人であつた。

「お早う御在ます、旦那。」と聲を掛けて、霞網を張りに谷地へ下りて行く農夫が通り過ぎた。

「未だ早くはないか、百舌の聲が聞えないやうだ。」

「根ツから不可ませんや。」

餘程行つてから返事が聞えた。

見限りの無い田圃には朝靄が深く下りて、館山の裾を半分かくして居る。その靄の中から昨夜の聲て吠える犬の聲が遠くに聞えた。

さほど考へても居ない言葉が、偶と口を衝いて出た。昨夜校長の家の酒に醉つて歸つて例の事から東一と爭つた。何んの爲め——學校を退して家の爲めに働けと動かぬ伜に云ひ張つた。伜は母親に似て大きな沈んだ目を自分に据えて、好く自分の事を考へろど云つた。成程、油屋金持ち麴屋地持ちと子守唄にまで唄はれた身上を、あらかた失したのは自分の代てある。遊びもした、相場にも手を出した、人にも騙された。

然し、と自分の事だけに然う云へない。これだけの身上なれば、斯う僅か六七年の間に、一人の人の放蕩に消えて了ふものとは思はなかつた。呆氣ないと云つてもこれは餘りに呆氣ない有樣であつた。氣が付いて踏み止つた時には、僅に七八町の田地と家屋敷の他は何も殘つて居なかつな。使つた時の金は減らないで、身上をもとに回復さうと急り出してからの金が見る〳〵家を傷けて行つたやうにも見える。監獄の竹の請負、東名濱の鯨漁、石卷通ひの馬車會社、乳牛預かりの牧場、他に聞いて好いと云はれた事業は一つも成功しなかつた。

酒の助勢もあつたけれど、昨夜はその底の底まで割つた話をして聞かせて、息子の心を自分に引付けやうとしたのである。あゝ、百姓の兒は矢張り百姓。堅實に土を守つて生きるより外はない。これを以前の麴屋として先祖へ返すまでは、父の私も子のお前も家の爲めに働くより外に仕方がない。終には自

分の過去を悔む涙まで流だして云ひ張つた。

東一も同じく泣いて居たけれど、何うしても自分に從ふとは云はなかつた。自分の踏んで來た道の間違を話して聞かせても、外の方ばかり見て居る息子の耳へは何んの響もなかつた。

振返つて見ると、村の家々はもう靄の中から目醒めて、藁屋根の片側が薄白い光を持つて來た。寺裏を通り拔けて往還へ出ると、炭を擔げて城下へ出る馬がゾロ／＼つゞいて通る。女どもはもう前の小川に蹲んで、涼しい朝蟬を聞きながら米を磨いで居た。弟の門の前を通ると、門も戸も未だ閉つて居るけれど、臺所の戸口の前に朝冷むに唇の色を變いて弟の子が立つて居た。

「何うした、お母さんは。」妙に聲を掛けて見たくなつて斯う云つた。

「お母さんか。」小兒は萎けたやうな目付して、額の隅から血統の伯父の顔を見上げて居た。

普請場には木しらべの掛聲が勇ましく聞えた。

五

二日の天氣に續いて、また濕つぽい雨が來た。土の綠を絕やさうとするやうに、執念く降り通ほす雨に居ると、急に病院の方が氣になつて來る。

おとくは氣難かしい小兒の持扱ひに困り拔いて、一人途方にくれて居るところであつた。あん／＼泣

き立てる小兒を放下して置いて、向むきに火鉢の灰をならして居た。そして、とても私の手にをへる兒てはありませんからと、突き離してしまつたところを云つて居た。常は素直でも一旦云張つたとなると、おとくにも隨分執拗なところがあつた。

「馬鹿な事を云つて、お前幾つになる兒だと思つて居る。」

斯う云つて女房をなだめながらも、濡れたインバネスの裾をまくり上げて、片手に小兒の頭を撫でゝやつて居る。小兒はシクシク悲しさうに啜り上げながら、物勘定するやうに父の顏色をばかりうかゞつて居た。

「貴方が然うあまやかすから、尙つと私になんか寄りもしない。」

「おい、大抵にしないか、病人なんだよ。」

「病人だつて、何んだつて。私があんなに乳を腫らして寝て居るのに、醫者の藥一度飲めと云つた事はない癖にして。」

「まあ好い、俺が惡るかつたんだよ。」

「惡るかつたも無い。」と、おとくは赤くなつて憤つて居た。

作太郎は笑つて居た。

小兒は少し痩せた。醫局へ行つて尋ねると、昨今少し腸を傷めて居ると醫者から聞いた。

「へえ、御面倒樣でも、お暇の時些いとお調べを願ひます。」と云つて、引籠ッて四代目の書いた野帳

を讀んで居る坐敷の緣側へ棟梁の善吉が割り帳を投げ込んで行つた。

灰色の雲が空に重つて、野分らしい風が吹く日であつた。もう十四日かと指で日を繰り立てながら、この普請と云つても大抵な事ではないと思つた。月に二度づゝ仕切留金の中には隨分急がしい金も入つて居た。

四代目の野帳。これの寫本は嘗つて藩侯樂山公に奉つてお賞詞を頂いたと云はれて居る。役人がおすがり申せと傍からすゝめても、百姓に刀は入らぬものと云ひ張つて、帶刀のお許を幾十緡かの錢と換へた。この勸儉なる老農の隨筆の中には、草鎌一挺の磨ぎ方まで細かい文字で親切に書きつけてある。多少の學問はあつた人と見えて、勸農百首と云つたやうな和歌の巻もあつた。江州から百姓を呼んで、馬耕の傳授を受けた人もこの人である。初め 梨子畑も試みた。八十幾つにもなつて、毎朝の拂曉に、「登れば下る、登れば下る箱根山。」と、藁草履を穿いて村中の家々をそれとなく警めて歩るいたと云ふ話も殘つて居る。

死際に作太郎の祖父にあたる五代目を枕もとに呼んで、「家を忘れて働け。」と斯う遺言したとも傳ひられて居る。

今の新しく生きやうと急せる作太郎には、この半紙綴りの野帳が幾冊かゞ魂の點火であつた。特にその頃の家は微祿しきつて居て、四代目自身は鹽釜歸りの駄賃馬まで曳いて身上を殖したと云ふのに何時も酷く力を得て居る。それは野帳の中にも回想して書いてある。

「夕方、野をあがりて門前の七橋の上にて馬に据湯をつけさす時、疲れてもあらんが家のためなり、今日も御苦勞願はれまじやと云ふ。馬は右または左の足をあぐ。右は承知、左は所存無しとかねて定め置けば、右足の日にはそれより二里の松原を引きて原の町口に客を待つ。鹽釜の遊女屋まで四里を問屋の掟通りに乗せ送り、それより近道一里を家に歸れば多分は初更を過ぎたり。鷄の鳴聲を聞く時もありたり。」

普請場の傍に、疊一枚ほどの鎮め石があつた。燒跡の地ならしの時にも、邪魔にしながらこの石だけは取除けずに居た。舊るい家の大柱はこの石に据えられてあつた。作太郎は日に幾度となく來て、この石の上に踞んでは大工どもの作事振りを眺めた。

「私どもの方は却つて結構です、もの丶判つた人に見て貰はなくちや働き甲斐がない。」

大工どもはこんなに云つて居るけれど、餘り煩さく口を出されると棟梁初め時々は面白くない顔を見せた。

「何んだ、枘穴(ほぞあな)の見やうもまるで知らない癖に。」

「切つて貼る家ぢやない。上げ鉋なざあ無駄な事つた。」

こんな陰口が事實になつて、職人ども相手に取つ摑かむやうな騷ぎも二三度あつた。

「ぢや揚げてくれ。金は手間に割つて拂ふ。大工なんか鹽釜でも岩切でも今が今にも呼んで見せるんだ。」

「然う願ひます。オイ。皆、鉋の尻を叩くんだ。」

極く些細な云つた云はぬの小兒のやうな口論から初めて、氣早な總勢に道具箱を擔ぎ出されたこともあつた。この時は分家の叔父の仲裁で兎に角事は濟んだ、氣の毒なほど悄け込んで居るのをツケメに幾らかの酒を買はせられた。それでも矢張り、何彼につけての指圖口はやまなかつた。

「駄目だ、一度やつて了ひ。」若かい血氣な職人どもはこんな事を陰ては云つて居た。

けれども又、別な人のやうに機嫌の好い事もあつた。大抵、そんな事は酒に醉つて居る時に多かつた。職人どもの見て居るところでは、奉公人どもなぞへも然うだが、少しの物をやつて人の喜ぶ顏を見ると、更らに大きなものを約束してより以上に喜ぶ顏が見たいと云ふ風であつた。角な鐵錢の仙臺通寶を貰つて提げ煙草入の裏座にすると云ふと、

「好し、ぢや今夜土藏を明けたら、海鼠銀を表飾りに上げやう。」

萬事が斯う云つた調子であつた。奉公人どもは「旦那の約束。」と嘲つて、誰も本當に禮云ふ者は無かつた。

六

話は濟んだ。そして、酒となつた。

話は濟んだと云ふもの丶、作太郎は唯弟の不埒を憤るのであつた。例令、どんな事があらうと、この話の片付くまでは渠奴に好い日はないと、勢込んで居た。

言出した校長の方が却つて面喰つて、「まあ君、穩便が好い。然う君のやうに一圖に激したつて」。と云つて慰めるほどであつた。

「時に。」と斯う云つて校長はあらかた喰べ荒らした膳の上を見た。そして宿直室の廊下へ首をのべて、小使に下の家から蒜を貰つて來るやうに云付けた。鎌を持つて行け、庖丁で刈つた蒜は不味いと然う云ひ付けた。斯く醉ふまでに小使老爺は徳利を下げて田圃向ふの酒屋まで二度も走つたのである。

「私ァ始終あれで遣るんですが、時に又好いもんですよ。」と云つて、醉ふほどおしやべりになる校長は然も可笑しい事でも拾つたやうに反り返つて笑つた。

「然し、貴方は然うは行くまい。始終仙臺や何かで贅澤なものばかり喰べて居るんだから。」

「そんな事があるもんて、全く、近頃は家の酒ほど旨いものは無いと思つて居ますんです――。」

「何うだかな。」

「いや、全くですよ。もとの友達どもが驚いて居る位なんです。」

作太郎は案外眞面目になつて近頃の實直を云ひ立てた。

例を引いても、人を較べに出しても、それを信じ込ませずには置かないと云つた風であつた。頭の長い、額の禿げた校長は笑ひながら云ふ通りに聞いて居た。作太郎には今の自分を信じられないのが涙の

出るほど口惜しかつた。
作太郎は酒を飲めば飲むほど蒼くなつた。煩さく目を瞬いた。
「時に今の話てすがな。」
「まア好いぢやないか、兎に角、君の考にまかせるとしたんだから。」
「てすけれど、何うもこのまゝに承知出來ない。そんな沒義道な事をしては、第一は村方の人だちに合はせる顏がない。家の恥だ。」
「そこはあるよ、善い惡いは二の次だ。人に惡るく云はれては人間活きて行けるものてないからな。」
「然うてす、大きに然うてす。」と、目の色が光つて來た。
「然し又、考へて見るとお秋さんも氣の毒さ。あゝして一生懸命に黑くなつて働いてるものを、追出すと云ふのは。こりや君、我々の方が無理だぜ。」
「無理、何所が無理だ。渠等の爲めに正當の事をするんだ。無理と云ふのが面白くない。誰に聞かれたつて恥かしいとは思はない。」
「まア、君。君の心は誰でも好く知つて居るよ。」
校長は激昻する作太郎を抑へるために、空を泳ぐやうな手付をした。
この校長の細君の妹は寡婦になつて裁縫の私塾を開いて居た。峯次郎と間違のあつたのはその總領娘てある。生れた子は藁の上から引取つて子の無い女房が自分の子として秘密に育てゝ居る。當人はもと

よりその氣、校長などの考でもその娘を峯次郎に納れたかつたのであつた。然し今のそのお秋は峯次郎に捨てられない義理があつた。お秋はもと仙臺に藝者してゐた。あの嚴しい繼母――峯次郎の母でさへこれには不用意ながら目を瞑つて來たのであつた。

「兎に角、これから行く、行つて峯の奴、嚴しく云つてやる。」

作太郎はもう酒も飮めなくなつて力味出した。

「あ、危ない。」斯う云つて後から校長に抱留められるまでには、二度も三度も跟けて戸障子に突きあたつたりした。

田圃路はもう露に濡れて居た。虫の聲は雨の降るやうにさかつて、低く眞ッ暗な空は頭の上までに垂れ下つて居た。

二人はもたれ合ひながら、寢鎭つた田舍町をよろけて歩いた。弟の家の門はもう閉つて、家の中はヒツソリして居た。

「野郎、開けないか、おい。」

作太郎は門の戸が破れるほど下駄で叩いた。初めゴト〱と何か囁くやうな聲が聞えたが、それ限りで靜かになつた。

「何んだ、おい、開けろ。貴樣は何んだ、何んだ。俺の目から見ると丕るで足の下の飯粒のやうなものだ。何んだ。」

「明日に願ひます。」短氣さうな弟の聲が唯一言家の中から聞えた。

作太郎は弟を罵つて、そしてその母の繼母まで高聲に罵つて居る。父に別れて當代になつた幼ない頭に、家、財產、分限、斯う云ふ事を切りと吹込む者があつた。特に實の子と云ふので、この咨次郎と自分の間に樣々の事が云はれた。繼母は死ぬまでその蒼白い顏に辛棒好く耐へ辿したが、作太郎にはそれが出來なかつた。醉つて云ふのはその事に外ならなかつた。

七

醫者は單に腸ばかりのことに云ふが、それが作太郎には氣にかゝつた。瘦せやうが變つて居る。何所か底に秘んで居る病氣を見付けずに居るやうにも思ふ。すぐ上の兒の時も然うであつた。それと確かな病名が定まらぬうちに死んで了つた。

然う思ふ心のうちには、若かい時に放縱な遊びからうけた自分の疾患が、血を傳つて小兒の脆弱な內臟にうつりはせぬかと云ふ恐怖もあつた。生れる兒も〳〵癇性が强くて、臆病さうに長泣きする、それも氣にしなければならない。

「私の身體だ。」

斯う思つて自分の身體を持出して見たが、院長は診察した上て、それほどの症候も認めないと云つた。

例令あつたにしても、今の身體には痕跡も無いと云ふ。

「けれども、貴方それを請合ふことが出來ますか。」

「それア誰にだつて請合ふ事は出來ないさ、然しまアそんな心配は無いと思ふよ。」と如才なく慰められて戻つて來た。

おとくは臨月に二月と間の無い身體を持餘して、暇さへあると壁にもたれて烟るさうに眠つて居る。額が光つて、小鼻が立つて、醜い顏になつた。生れては死に、生れては死に、それが三人も續いても、格別思ひ煩ふ模樣もなく、今度生れる兒をまた初手から手こごして育てなほす氣になつて居る。その魂の拔出たやうな寢顏まで淺間しかつた。

「俺ア最う來ない。お前の子だ。お前の勝手にしろ。」

斯う云ふことを云つて不快さうに病院を出た。出るには出たが、と云つて滯つたやうな心持の村へも歸りたくはなかつた。

門松のある町を通ると、何所とも無く木犀の香が通つて來る日であつた。偶と思出して、細い井内石を敲きつゝげたお紋の家の門口から顏を出した。物乾臺の並んだ、亂雜な水口を見せた二階長屋の何の家からか、皮の濕つたやうた鼓の音が響いた。

「俺だよ。」と、斯う云ひながら、秋田蕗を摺つた茶の間の襖を開けた。

「まア貴方、默つて上つて來るから、私誰だと思つた。」

火鉢の傍に寢轉んで貸本を讀んで居たお紋は、腹の下に敷いてあつたサントメ模樣の蒲團を裏返しにして出した。眉の剃あとが氣味の好いほど蒼く、結立ての毛筋が荒いほど美しく波打つて居た。

「あれは。今日はあれを見に來たんだ。」

「何所かそこらに居るでせう、お稽古かしら、未だそんな時間でもないのね。」とお紋は煙管を啣いたまゝ、頸をひねるやうにして柱の上の時計を見上げた。

木目が立つほど拭き込んだ、小さく乾いた臺所口から、隣りの家の竹垣が見えた。明るい秋の日はものゝ上をくるめきながら地に落ちて、その照返しが庇の裏まで明るく見せた。尻尾の赤かい蜻蛉がスイと來て、又スイと飛んで行つた。

作太郎はやゝ日の傾くまでそこに寢轉んで取り留の無い話をして居た。話して居る中にも色々の人が出入りして、色々の話をして歸つて行つた。新聞に出た續き小說の話、芝居の話、糶り呉服屋の話、新規店の喰物の話、六軒町の易占の話、總べて斯う云つた聞いても話しても面白さうな話であつた。笑ふ時には皆一緒して笑ふことの出來るやうな話であつた。

出されたビールを少し飲み〳〵して居るうちに、輕るい醉が頰へ出た。

「ぢやこの次に、乾度よ。忘れちや聞かないことよ。」

引緊めた銀杏返しに結つて、博多帶を貝の口に結んだ十二のおやうは、利發さうな目を動かして念を押した。

「大丈夫。忘れるもんか。」

「屹度ですね、本當だわね。」と袖の後から追掛けて來て云ふ。

「當にならないよ、おやうちやん、何うして昔つから好く物忘れする人なんだから。」お紋は染めた齒並を美しく見せて、笑ひながら送つて來た。

町にはもうチラ〳〵灯が入つた。夜芝居の打込みが一次り寂しいほど靜かなこの町を鳴りとゞろいた。

「では、然やうなら。」

「然やうなら。」

斯う云つて棕梠繩編のしやれた小門の外で別れた。濡れた舖石の上にカタコト鳴るおやうの足音がしばらく聞えた。

八

無花果の垂れた葉が風に鳴つた。土から顫えを吸上げるやうにしめやかに降る秋の雨にもユサ〳〵と搖れて鳴つた。忘れてしまふほど月を見ない夜が長くつゞいた。

小兒は日に〳〵痩せるばかりてこれと云ふ目に立つほどの變徵も無かつた。院長は鐵分の舍利別を處

方に書くより外に仕方は無つた。無力性に大きな、この頃特に蒼味の深くなつた目を据えて、夜深けた外の音を聞いて居ることがある。目から入るものより耳から入るものに沈んだ注意が振向けられるやうであつた。餘程遠い物音にでも心を奪られて居るやうにも見えた。

死近かい繼母の樣子を思出して、作太郎は心が畏えさせられた。

明後日死ぬといふ今日、作太郎は仙臺の或る家から歸つた。その前の晩、夥しく胃から吐血したのでそれ迄義絶になつて居た弟が初めて石巻から驅け付けて居た。お秋が良人の家の閾をまたいだのもその時が初めてゞあつた。ヂロ／＼と見据えるガサツな諸親類の目を耻ぢながら、小さくなつて人と應待する素振の中に何所か未だなまめかしい職業の名殘が殘つて居た。

「作太郎、お前なにか私に云ふことがある筈だ。」

枕元に人の居ないのを好く見定めて、繼母は斯う云ッた。蠟燭の灯が顫えて居た。

繼母は死ぬ四五年この方身上のことは最う何も云はなくなつた。散々紛擾のあつた上に、分けてやつた財産を資本に、實子の峯次郎が町に牛乳屋を出したり、西洋食料品の廢れ店を買つたり、終ひには他に高かい利子の金を借れながら茶屋遊びをしたり、その又藝者を勝手に家に入れたりした時でさへ、母は多く默つて見て居た。貰ふとも、棄てるとも好きにするが好いと云ふ風であつた。加へて、作太郎の家のことも然う苦にはしなかつた。おかげて作太郎は戸主と云つても自儘に手を付けることの出來なかつ

た身代を自由にすることが出來、年來身一つに苦しめられて居た莫大な負債を大束に洗ふことを得たのである。

遊び友達の伊上辯護士、江戸文の主人、代書人役場の守屋、こんな連中が毎日〳〵集つて酒を飲み合ひながら負債の整理の方法をあれこれと方策(てだて)を講じて狡猾な協議して居る時でも、繼母は時々そこの唐紙を開けて、

「歷手(れつき)としたお方達が集まつて居なさるんだから、田舍婆の私などの口を出す所ではないが、借りたものは未練なくお渡しなさいよ。借金を返すのはサッパリした心持になりたいからでせう。」とさも思詰めたらしく潔白に云つて居た。これが後妻に來て三十年この方、剛情で短氣で勝負好きで、血を吐き〳〵大酒に若死した作太郎の父と、偏執(ひがみ)深かくて氣のさばけないその子の作太郎の二代を通して、唯々チリ〳〵と身代ばかりに悲しがつた人とは見えなかつた。

身上に離れてからの繼母は、氣が拔けたやうに一次ボンヤリ力無かつたが、それでも心持は涼しく輕々しくなつたやうであつた。冬の前は大根の漬込み、なめ茸、小海老の鹽入れ、酢に貯へる菊の花摘み野菜の切り乾し、そんな事に日の短かい一日を暮らし、夏の前は私得(ほまち)蠶の世話にかまけて、その出來繭を伊達から來る繭買ひに賣つてはその金で氣長がなそして約しい秋湯治の半月を暮らすのを喜んで居た。

繼母は死ぬその今日まで弟とは口を利かずに死んだ。話も用も作太郎とおとくにばかり云ふやうにし

て居た。血を分けた現在の子に手を握られたその時は、もう下顎の邊は固く冷たくなつて居た。

弟の峯次郎は怨のある目で、兄の顔を見詰めて居た。

死んで葬式を濟してから、作太郎は家に生れて家に死ぬ女の一生をシミ〴〵と思はせられたこともあつた。

「何んの爲めに母を憎んだ。又弟を憎んだ。」

斯う云ふ事もッと考へずには居られなくなつた。そしてその以前父の遺言通り弟に家を分けてやる時、弟に付く親類と分れて、毎日〴〵紛め合つた醜い爭も思ひ出された。登記制度前の習慣から殘つて居る地劵箱を眞中に置いて、その中から一枚二枚を淺間しく爭ひ合ふ姿が思ひ出された。

勝氣の強い弟は涙を膝頭へこぼして口惜しがつた。

「面倒臭い。財産なんか要るもんか、今更ら惜しくなつたんだ。」

と一度は足を投出して兄を罵つた。その言葉は弟の口から出て居ながら、長い間繼母の心に溜つて居た僻した心持を聞かせられるやうな心持がした。弟に分けてやつた財産は町ならびの荒れ屋敷と、畑地と田地一町幾らと、外には三年植込の梨子畑とてあつた。

「馬鹿、家を考へて見ろ。本家を潰してまで自分が欲しいか。貴樣の父の生れた家なんだぞ。」

作太郎は斯う云つて父の遺言も反古にすることが出來たのであつた。

九

長男の東一は好く峯次郎叔父のところへ入込んで居た。夜話しに深けて遲く男部屋から歸つて來ることもあつた。自分に仕送りする責任のない叔父は、父が若い時からの放埒をならべ立てゝ、何所までも思詰めた目的を爲遂げるが好いと、若かい者の氣をそゝるやうな話ばかりを聞かせた。東一は初めから航海者になるのが志望であつた。

「靜屋の總領孫ぢやないか、無いと云つたつて身上を御前の身にかけるやうな氣ならば、洋行ぐらゐまでは何でもなく出來るんだ。些たア、自分の若かい時の馬鹿を考へて見るが好い。今ごろ村方の馬鹿者に堅くなつたの辛棒だのと賞められたいばかりに、憶病者、忰の仕込も出來ないと云ふことがあるか。全體小兒の時からさう云つた人だッた。そこが俺とは合はなかつた。」

貧にして氣の濶い叔父の云ふ斯うした言葉を正直に信じる東一は、矢張りその位の心持ちで父へも向つて來る。外へ〳〵と離れたがる長男の心を捉へやうと、急れば急るほど段々遠ざかつて行く。この頃は東京へ出たいとさへ時々云出すやうになつた。

始終心にかゝつて居るだけに、酒さへ飲むと好くこの事が話に出た。

「今日は喧嘩ぢやないぞ。何時までも決めずに置かれないことだ。好く心持が判かるやうに話合はうぢやないか。」自分より背も伸びた忰を前に坐らせて、初めは斯う打解けて話し出すのであつた。それて

も、離れ〳〵の兩人の心持は何うしても相互に汲取ることが出來なかつた。作太郎は口惜しまぎれに弟を罵つては好く泣いた。

仙臺の友人の家へ泊つて、二日も三日も東一が家に寄り付かないこともあつた。家に居ても一向面白くない顏して居て、親子して睦しく話すると云つたやうなことは段々少なくなつた。父はその弟への面當てにもその子を引付けて見せやうとするのであつた。

雨は寒むさを呼んて來た。北國の急に激しい夏に疲れた人だちは、野を、山を色づけながら次第に近いて來る秋の深かさの中に立つて、爽快てはあるが偖て心寂しい心持を染々と味ふ時が來た。朝起きると先づ山々の寂びれに目を引かれた。

病兒の容態は少しも變らなかつた。一二度ものに驚いて痙攣けたことはあるが、それも醫者の來るまてには事なく治つた。作太郎にはその症狀の動かないのが心配てならなかつた。

或る日、小作人の女房に連れられて、作太郎は暗らい杉垣に圍まれた巫なぎの門をくゞつた。米一升、蠟燭四本、線香、これだけが定めの口寄せ料てあつた。

「先づ死に口を願ひます。」

「斯う云つて繼母を呼び出した。次ぎに父、次ぎに四代目の先祖を呼んだ。

「次ぎは生き口を願ひます。」

それは弟の峯次郎と、離別した東一の母親とてあつた。

弓弦をピン／＼鳴らしながら、顫々る蔭を長く引いた巫女の聲が、雨に暗らい家の中を搖ふて消えた。作太郎は兩肱の間に頭を埋めるやうにしてうづくまつて居たが、「これよ、家の長。」と自分を呼び掛けられる毎に涙が胸元へ突き上げて來た。

その翌日、作太郎は自身出向いて、小兒を初めの公立病院へ移した。砂利石が頭に響いて好くあるまいと云ふ院長の注意から、車夫に雨傘をさしかけさせて、自分の腕にそこまで抱いて行つた。

十

明るい日であつた。普請場では切り組みが終つて、今日いよ／＼土臺を据えると云ふ日になつた。臺所には小作人の娘、近所の女房どもが寄り集つて、酒振舞ひの用意に賑かであつた。東一が何か勝れない顏して二時の汽車で學校から退つて來た。學校包を上り段へ投げ出して、自分の部屋と決めた暗らい北口の六疊へ引込んで行つた。

「東一、これを斯う包むんだ。三文づゝが二百と、五文づゝが三百。」

斯う云つて作太郎は緡錢と白紙を兩手に抱へて入つて來た。自分はこれから村の法院と一緒に地固めの宣命を稱へねばならない。又臺所の世話も見なければならなかつた。

「あゝ、今。」

東一は肱枕して仰向けに引くり返つて居た。

「今直ぐだぜ、職人の方ぢや手を明けて待つてる位なんだから。」

「あゝ、今。」と云つて制服を着たまゝ寢て居る。

作太郎は眺めるやうに伜の我儘な寢姿を見下して居たが、それでも何んとも云はずに出て行つた。

燒殘つた土臺と土臺との間に、榊を立てた祭り壇が飾られて、その前には尾頭付の生魚、果物、供餅、神酒、斯う云ふものが三寶の上に乘せられてあつた。その周圍を村の小兒どもがゾロ／＼取巻いて居た。竹垣の外にも撒き錢を拾ひに集つて居る年寄や女どもが覗いて見て居た。

入山形に作と云ふ字を染抜いた、新しい藍の香のする半纒を着た職人どもは、土臺に据える角材を唄かけて勇ましく普請小屋から擔ひ出して居る。棟梁の掛け聲に拍子を合はせて、轆轤の麻綱はギリ／＼と緊板の上を辷つた。

音頭取りは斯う唄つた。

振れや振れ／＼五尺の袖を、今宵振らいで何んとする。

又斯う唄つた。

これさ目出度い、今日この座敷、鶴が出て舞ふ龜も來る。

竹笊に盛つた包み錢を抱いて、東一もこの普請場へ出て來た。土臺の傍に背ばかり高かい柿の木の幹にもたれて、凝つと遠くからそれを眺めて居た。そして、暫くして何所かへ出て行つた。

その晩、作太郎は手足も動かないほど祝ひ酒に醉つた。そして、例の泣き上戸の癖が出て、誰と云ふことなく人をつかまひては泣いた。

「判つてますよ、旦那の心持は誰だつて能く判つてますよ。」

斯う云つて大工どもまで醉ひ頽れた作太郎を慰めて居た。

早稻の田に刈入は初つた。試に今手から手作して見た作太郎の田にも作男が總出に出て行つた。廣々と遠い山の裾までひろがる田圃は秋日を受けて明るく光つた。その間に振り撒いたやうな農夫の姿が、所々に小さく黑く動いて居た。百舌の鳴き聲に驚かされて、中空を渡る雀の群が突刺さるやうに稻の中へ下りた。

作太郎は靜かに搖れる稻のそよぎを聞きがらも、未だ家が繁昌した頃の賑かな持ち田の刈り上げを思ひ出さずには居られなかつた。

田圃から外れて、覆被さつた椿の下道を村道の方へ出かゝると、そこの曲り角で弟の妻のお秋に遇つた。門前の娘に出來た男の兒の手を引いて、藥瓶のやうな包を下げて居た。小サッパリした襟のかゝつた半纏を着て櫛巻きにして居るが、その頰のあたりに殺々したやつれが見えた。

「何所へ行つて來た。」

斯う聲掛けられて、弟の妻は遠慮さうに立停つて腰をかゞめた。

「些いと、あの。」と云つて手を引いて居る小兒をかゝんで覗き込んだ。

「何うしてるね。矢張り相變らずのことを云つて居るかね。」

「え、何んですか。時々仙臺へは參るやうです。」

「然うか、百姓が町へばかり出てるやうぢや何うせロクな用事ぢやないだらう。が。」と云ひかけて、「まアこれも好いにして置くさなア。」と笑つて別れた。

弟の女房は道を別れて行つた。そして寂びれた田舍町の方へ歸つて行く兄の後姿を幾度も〳〵振返つて見て居た。

普請場には白い柱が立つた。その柱が秋の日に光つて見えた。

（完）

此広告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

百草競艶千華闘妍

文藝倶楽部

拾月號

- 活社會
- 忙中閑
- 懸賞俳句
- 演藝界
- 小品文
- 情歌
- 廣長舌
- 句相撲
- 端歌

■小説 霧積　小山内薫

■小説 性癖　武田櫻桃

■小説 濱田の日記　三津木春影

■講談 阿漕物語　一龍齋貞山

- 一口噺
- 滑稽問答
- 雑題

本誌實價

一冊	金貳拾五錢
八冊	金壹圓八拾錢
十六冊	參圓五拾錢
(郵税)	一册二錢五厘

東京本町 博文館

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す